

佐倉市松向作遺跡

—佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書IX—

1992

千葉県土地開発公社

財團法人 千葉県文化財センター

佐倉市松向作遺跡

—佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書IX—

1992

千葉県土地開発公社
財団法人 千葉県文化財センター



松向作遺跡周辺の航空写真



序 文

千葉県北部に位置する印旛沼の周辺は、豊かな水と肥沃な土地を背景に古代から現代にいたるまですぐれた文化を育んできました。佐倉市は印旛沼の南に位置し、ここに注ぐ大小の河川が市内を流れしており、自然環境に恵まれた地域といえます。このため、市内では古くから多数の遺跡の存在が知られていました。

佐倉市はまた臨海工業地帯に隣接し、新東京国際空港にも近く、道路網も整備された地理的にも恵まれた地域で、工業団地の建設地としても有利な条件を備えています。このため、第一・第二の工業団地の建設が行われ、さらに千葉県土地開発公社によって第三工業団地の建設が計画されました。工事に先立ち千葉県教育委員会は予定地内の埋蔵文化財の取扱いについて千葉県土地開発公社はじめ、佐倉市教育委員会等関係機関と協議を重ねました。その結果、公園等として古墳をはじめとする埋蔵文化財をできる限り保存するよう努力しましたが、やむをえない部分については発掘調査を行って記録保存の措置を講ずることになりました。発掘調査は当文化財センターが担当することになり、昭和50年度と昭和54年度から昭和60年度にかけて実施いたしました。

この度、昭和59年度から昭和60年度に発掘調査を実施した松向作遺跡の整理作業を終了し、報告書を刊行することとなりました。松向作遺跡では旧石器時代から古墳時代にわたる遺構・遺物が発見されましたが、その中心は古墳23基と南東斜面に立地する古墳時代の集落で、この地域の古代の人々の文化や生活の解明に貴重な資料を得ることができました。本書が学術資料としてはもとより文化財の保護と理解のため広く活用されることを願ってやみません。

終わりに千葉県教育委員会、千葉県土地開発公社、佐倉市教育委員会をはじめとする関係諸機関の皆様の御指導と御協力に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査から整理作業にいたるまで御協力をいただいた調査補助員の皆様に心から感謝いたします。

平成4年3月

財団法人 千葉県文化財センター
理事長 岩瀬良三

凡　　例

1. 本書は千葉県佐倉市大作2丁目（旧地番佐倉市大辺松向作・置字立山）に所在する松向作遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は佐倉第三工業団地建設に先立ち、千葉県教育委員会の指導の下に（財）千葉県文化財センターが実施した。本調査面積は18,700m²である。また、保存区域となった11,000m²については試掘調査を行った。
3. 調査で使用した遺跡のコード番号は212-023、212-033（保存区域）である。
4. 現地の調査は昭和59（1984）年度と昭和60（1985）年度に実施した。調査の期間は昭和59（1984）年10月3日～昭和60（1985）年3月26日、昭和61（1986）年1月6日～3月28日である。
昭和59（1984）年度は調査部長鈴木道之助、調査部長補佐岡川宏道の指導の下に班長矢戸三男、調査員雨宮龍太郎、同藤淳一、同小畠巖が担当した。また昭和60（1985）年度は調査部長鈴木道之助、調査部長補佐岡川宏道の指導の下に班長矢戸三男、調査員石倉亮治が担当した。
5. 整理作業は昭和61（1986）年度、平成元（1989）年度から平成3（1991）年度にわたって行った。
整理作業及び本書の編集は調査部長船部昭夫、調査部長天野努（平成3年度）、部長補佐阪田正一、班長谷 旬の指導のもと主任技師山口典子、技師田島新が行った。作業及び執筆分担は山口（第1章、第2章第1節～第4節、第4章第1節1・2）、田島（第1章第5節～第6節・第7節1～2 b、第3章、第4章第1節3・第2節）、四柳隆（第7節2 a）である。
6. 第1図で使用した地形図は国土地理院発行の50,000分の1地形図「佐倉」「成田」「千葉」「東金」である。
7. 図版1で使用した航空写真は（株）京葉測量が撮影（1972年）したものである。
8. 発掘調査から本書の作成に至るまで、千葉県土地開発公社、千葉県教育庁生涯学習部文化課、佐倉市教育委員会の関係各位の御指導と御協力を得た。ここに謝意を表します。

目 次

序 文

凡 例

第1章 調査の概要	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 松向作遺跡の立地と周辺の環境	1
第3節 調査の概要	5
第2章 上層の遺構と遺物	7
第1節 はじめに	7
第2節 古 墳	8
1. 遺 構	8
2. 遺 物	28
第3節 土壙墓	36
1. 遺 構	36
2. 遺 物	39
第4節 竪穴住居	40
1. 遺 構	40
2. 遺 物	63
第5節 溝状遺構	91
第6節 陥し穴・土坑・炭窯	94
1. 陥し穴	94
2. 土 坑	99
3. 炭 窯	102
第7節 遺構外出土の遺物	102
1. 縄文時代以降	102
2. 縄文時代	103
a. 上 器	103

b. 石 器	113
第3章 下層の遺構と遺物	121
第1節 A地点・B地点・地点外	121
第4章 まとめ	132
第1節 上層の遺構と遺物	132
1. 古墳・土壙墓	132
2. 穫穴住居	135
3. 溝状遺構・陥し穴等	137
第2節 下層の遺構と遺物	137

挿 図 目 次

第 1 図 松向作遺跡位置図	2	第 30 図 竪穴住居002.....	41
第 2 図 遺跡周辺の地形	4	第 31 図 竪穴住居003.....	43
第 3 図 グリッド分割図	5	第 32 図 竪穴住居004.....	44
第 4 図 遺構配置図	6	第 33 図 竪穴住居005.....	45
第 5 図 凡例	7	第 34 図 竪穴住居006.....	47
第 6 図 古墳001.....	9	第 35 図 竪穴住居007.....	48
第 7 図 古墳022・024・030.....	11	第 36 図 竪穴住居008竈.....	49
第 8 図 古墳031・033	13	第 37 図 竪穴住居008.....	50
第 9 図 占墳032・038・039.....	15	第 38 図 竪穴住居009遺物出土状態.....	51
第 10 図 占墳040・041・050.....	16	第 39 図 竪穴住居009.....	52
第 11 図 古墳051・052	18	第 40 図 竪穴住居011.....	53
第 12 図 古墳054・055・056.....	19	第 41 図 竪穴住居012遺物出土状態.....	54
第 13 図 古墳060.....	21	第 42 図 竪穴住居012竈.....	54
第 14 図 古墳060遺物出土状態.....	22	第 43 図 竪穴住居012.....	55
第 15 図 古墳060埋葬施設.....	23	第 44 図 竪穴住居017遺物出土状態.....	56
第 16 図 古墳060遺物出土状態.....	24	第 45 図 竪穴住居015.....	57
第 17 図 保存区域遠景	25	第 46 図 竪穴住居017.....	58
第 18 図 001号墳近景.....	25	第 47 図 竪穴住居018.....	60
第 19 図 001・002号墳	26	第 48 図 竪穴住居019.....	61
第 20 図 003・004・005号墳.....	27	第 49 図 竪穴住居023.....	62
第 21 図 古墳001・022・024・031・032 出土遺物	29	第 50 図 竪穴住居002出土遺物(1).....	63
第 22 図 古墳033・038・039・050・051・054 出土遺物	31	第 51 図 竪穴住居002出土遺物(2).....	64
第 23 図 古墳060出土土器.....	33	第 52 図 竪穴住居003遺物出土状態.....	65
第 24 図 古墳060出土鉄製品・青銅製品.....	34	第 53 図 竪穴住居003出土遺物.....	66
第 25 図 古墳060出土玉類.....	35	第 54 図 竪穴住居004遺物出土状態.....	67
第 26 図 土壙基028・035	37	第 55 図 竪穴住居004出土遺物(1).....	68
第 27 図 土壙基057・058	38	第 56 図 竪穴住居004出土遺物(2).....	69
第 28 図 土壙基028・035出土遺物	39	第 57 図 竪穴住居005出土遺物(1).....	71
第 29 図 竪穴住居002遺物出土状態.....	40	第 58 図 竪穴住居005出土遺物(2).....	72
		第 59 図 竪穴住居006出土遺物.....	74
		第 60 図 竪穴住居006・007出土遺物	75

第 61 図	竪穴住居008遺物出土状態	76	第 93 図	縄文土器拓影図(6)	112
第 62 図	竪穴住居008出土遺物(1)	77	第 94 図	縄文土器拓影図(7)	113
第 63 図	竪穴住居008・009出土遺物	78	第 95 図	縄文時代石器分布	114
第 64 図	竪穴住居011・012出土遺物	79	第 96 図	縄文時代中グリッド出土遺物(1)	115
第 65 図	竪穴住居012出土遺物	80	第 97 図	縄文時代中グリッド出土遺物(2)	116
第 66 図	竪穴住居015出土遺物(1)	82	第 98 図	縄文時代中グリッド出土遺物(3)	117
第 67 図	竪穴住居015出土遺物(2)	83	第 99 図	縄文時代大グリッド出土遺物(1)	117
第 68 図	竪穴住居015出土遺物(3)	84	第100図	縄文時代大グリッド出土遺物(2)	118
第 69 図	竪穴住居017出土遺物(1)	86	第101図	縄文時代大グリッド出土遺物(3)	119
第 70 図	竪穴住居017出土遺物(2)	87	第102図	縄文時代大グリッド出土遺物(4)	120
第 71 図	竪穴住居018出土遺物(1)	88	第103図	旧石器時代A地点遺物出土状況	122
第 72 図	竪穴住居018出土遺物(2)	89	第104図	旧石器時代B地点遺物出土状況	122
第 73 図	竪穴住居019・023出土遺物	90	第105図	旧石器時代A地点出土遺物(1)	123
第 74 図	溝状遺構010・013・020	92	第106図	旧石器時代A地点出土遺物(2)	124
第 75 図	溝状遺構010・020出土遺物	93	第107図	旧石器時代B地点出土遺物(1)	124
第 76 図	長・幅・長幅比による陥し穴の比較	95	第108図	旧石器時代B地点出土遺物(2)	125
第 77 図	佐倉第三工業団地内遺跡群の陥し 穴分布	95	第109図	旧石器時代地点外出土遺物	125
第 78 図	陥し穴の検出された主な遺跡	96	第110図	佐倉第三工業団地周辺地形及び遺 跡分布	126
第 79 図	陥し穴の長幅分布	96	第111図	佐倉第三工業団地内遺跡群出土有 舌尖頭器及び関連遺物	126
第 80 図	陥し穴044A・021・016	97	第112図	佐倉第三工業団地内遺跡群出土尖 頭器(1)	127
第 81 図	陥し穴043	98	第113図	佐倉第三工業団地内遺跡群出土尖 頭器(2)	128
第 82 図	土坑026・027・029・034・036	100	第114図	佐倉第三工業団地内遺跡群出土ナ イフ形石器(1)	129
第 83 図	土坑042・059A・061・062、 炭窯025・044B・059B	101	第115図	佐倉第三工業団地内遺跡群出土ナ イフ形石器(2)	130
第 84 図	遺構外出土土器	102	第116図	佐倉第三工業団地内遺跡群出土ナ イフ形石器(3)	131
第 85 図	縄文土器分布状況(1)	104	第117図	佐倉第三工業団地内の古墳・土塙基	133
第 86 図	縄文土器拓影図(1)	105			
第 87 図	縄文土器拓影図(2)	106			
第 88 図	縄文土器拓影図(3)	107			
第 89 図	縄文土器分布状況(2)	108			
第 90 図	縄文土器拓影図(4)	109			
第 91 図	縄文土器拓影図(5)	110			
第 92 図	縄文土器分布状況(3)	111			

表 目 次

第 1 表 検出遺構一覧	140	176
第 2 表 遺構計測表	140	第 11 表 繩文時代大グリッド出土遺物属性
第 3 表 古墳060金属製品計測表	142	177
第 4 表 土壙革035鉄錠計測表	143	第 12 表 旧石器時代A地点出土遺物属性	178
第 5 表 玉類計測表	144	第 13 表 旧石器時代B地点出土遺物属性	178
第 6 表 土器観察表	145	第 14 表 旧石器時代地点外出土遺物属性	178
第 7 表 出土土器破片数一覧	172	第 15 表 佐倉第三工業団地内遺跡群出土尖頭器
第 8 表 佐倉第三工業団地内遺跡及び関連遺跡の陥し穴	174	179
第 9 表 陥し穴の長幅比分布	175	第 16 表 佐倉第三工業団地内遺跡群出土ナイフ形石器
第 10 表 繩文時代中グリッド出土遺物属性	179
		第 17 表 佐倉第三工業団地内検出古墳	180

図 版 目 次

卷首図版	1. 松向作遺跡周辺の航空写真 2. 松向作遺跡全景	図版 10	1. 土壙基035 2. 上壙基057 3. 土壙基058
図版 1	松向作遺跡周辺の航空写真	図版 11	1. 竪穴住居002 2. 竪穴住居002 3. 竪穴住居003
図版 2	松向作遺跡全景	図版 12	1. 竪穴住居004 2. 竪穴住居004 3. 竪穴住居005
図版 3	1. 遠景 2. 近景 3. 近景	図版 13	1. 竪穴住居006 2. 竪穴住居006 3. 竪穴住居007
図版 4	1. 古墳001 2. 古墳001 3. 古墳001	図版 14	1. 竪穴住居008 2. 竪穴住居009 3. 竪穴住居015
図版 5	1. 古墳022 2. 古墳032 3. 古墳033	図版 15	1. 竪穴住居011 2. 竪穴住居018 3. 竪穴住居019
図版 6	1. 古墳038・039 2. 古墳040 3. 古墳041	図版 16	1. 陥し穴016 2. 陥し穴021 3. 陥し穴043
図版 7	1. 古墳050 2. 古墳051 3. 古墳052	図版 17	1. 陥し穴044A・土坑044B 2. 炭窯025 3. 土坑026
図版 8	1. 古墳054 2. 古墳055 3. 古墳056	図版 18	1. 土坑027 2. 土坑029
図版 9	1. 古墳060 2. 古墳060 3. 古墳060		

	3. 土坑034	図版 43 壺穴住居015出土土器
図版 19	1. 土坑036 2. 土坑042	図版 44 壺穴住居017出土土器(1)
	3. 土坑059A・炭窯059B	図版 45 壺穴住居017出土土器(2)
図版 20	1. 土坑062 2. 旧石器時代A地点	図版 46 壺穴住居017・018出土土器
	3. 旧石器時代B地点	図版 47 壺穴住居018・023、溝状遺構020、 遺構外出土土器
図版 21	1. 古墳出土土器 2. 古墳060出土土器	図版 48 壺穴住居018・019、溝状遺構010出 土土器
図版 22	1. 壺穴住居002出土遺物 2. 壺穴住居003出土遺物	図版 49 古墳039・060・051、土壤墓028、 壺穴住居002出土玉類・石製品
図版 23	1. 壺穴住居004出土遺物 2. 壺穴住居005出土遺物	図版 50 古墳060出土金属製品
図版 24	1. 壺穴住居006出土遺物 2. 壺穴住居008出土遺物	図版 51 1. 古墳032、土壤墓035、壺穴住居 008・015出土鉄製品
図版 25	1. 壺穴住居015出土遺物 2. 壺穴住居017出土遺物	2. 壺穴住居004・009・015、溝状 遺構010出土土器類
図版 26	古墳022・031・032・033・039・054 出土土器	図版 52 繩文土器(1)
図版 27	古墳038・051・060出土土器	図版 53 繩文土器(2)
図版 28	壺穴住居002出土土器	図版 54 繩文土器(3)
図版 29	壺穴住居002出土遺物	図版 55 繩文土器(4)
図版 30	壺穴住居003出土土器	図版 56 繩文土器(5)
図版 31	壺穴住居004出土土器(1)	図版 57 1. 旧石器時代A地点出土遺物 2. 旧石器時代B地点出土遺物
図版 32	壺穴住居004出土土器(2)	図版 58 1. 旧石器時代B地点出土遺物
図版 33	壺穴住居004・005出土土器	2. 繩文時代中グリッド出土遺物(1)
図版 34	壺穴住居005出土遺物	図版 59 1. 繩文時代中グリッド出土遺物(2) 2. 繩文時代大グリッド出土遺物(1)
図版 35	壺穴住居005出土土器	図版 60 1. 繩文時代大グリッド出土遺物(2)
図版 36	壺穴住居006出土土器(1)	
図版 37	壺穴住居006出土土器(2)	
図版 38	壺穴住居007・008出土土器	
図版 39	壺穴住居008出土土器	
図版 40	壺穴住居009・011・012出土土器	
図版 41	壺穴住居012・015出土土器(1)	
図版 42	壺穴住居012・015出土土器(2)	

第1章 調査の概要

第1節 調査にいたる経緯

松向作遺跡の発掘調査は千葉県土地開発公社による佐倉第三工業団地建設に伴い実施したものである。工事に先立ち、千葉県教育委員会は事業予定地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県土地開発公社、佐倉市教育委員会と慎重に協議を行い、公園用地として遺跡を現状で保存する一方、やむを得ない部分は発掘調査による記録保存の措置を講ずることにした。発掘調査は千葉県教育委員会の指導のもとに当文化財センターが実施することになった。

発掘調査は昭和50(1975)年度の星谷津遺跡の調査に始まり、一時中断した後昭和54(1979)年度から昭和60(1985)年度まで継続して行われた。発掘作業に並行して整理作業も行い、昭和53(1978)年度に刊行した『佐倉市星谷津遺跡』を1冊目として平成2(1990)年度に刊行した『佐倉市栗野Ⅰ・Ⅱ遺跡』まで、12遺跡について8冊の発掘調査報告書にまとめ、刊行している。

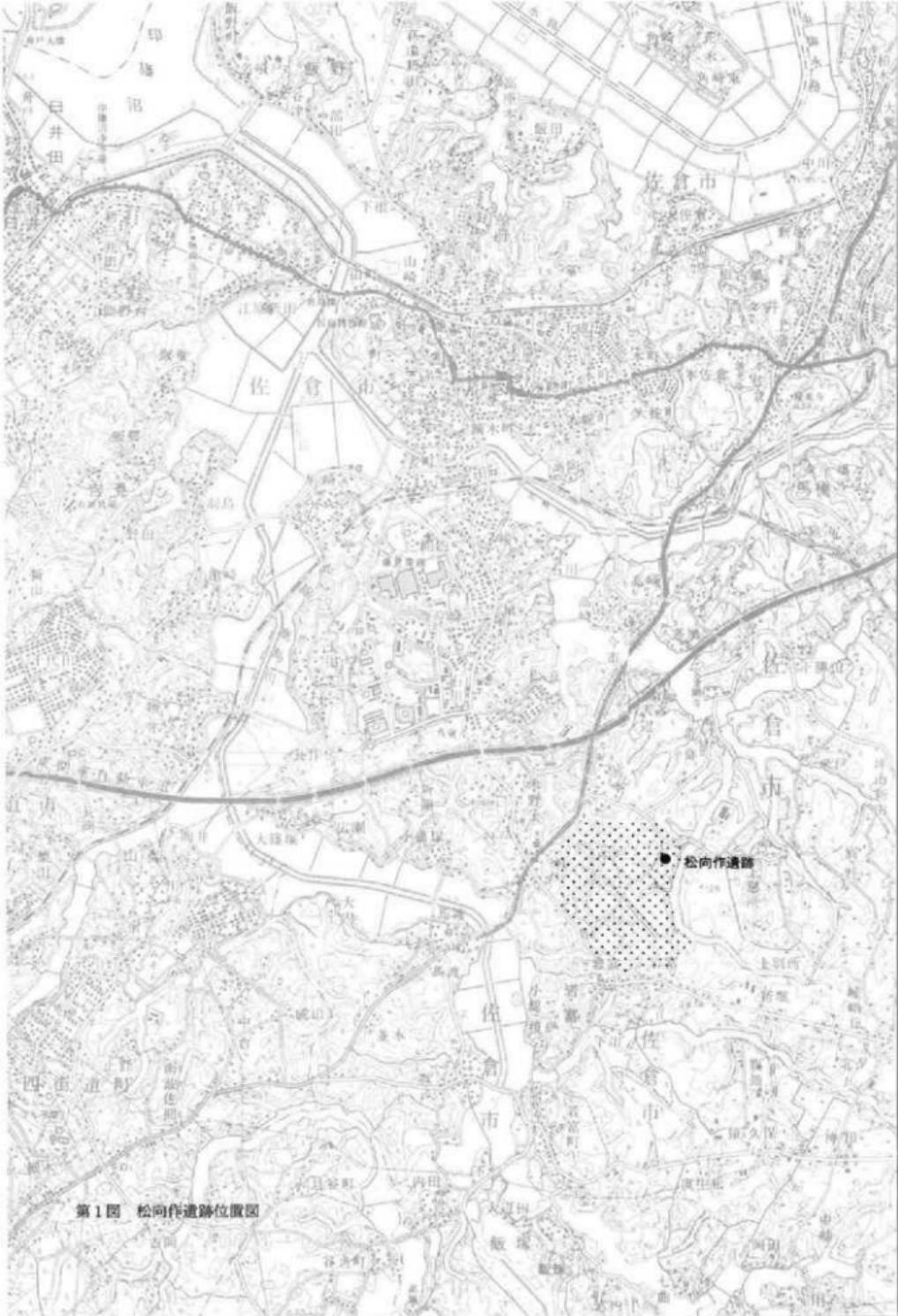
第2節 松向作遺跡の立地と周辺の環境(第1・2図、巻首図版1)

千葉県北部には下総台地という標高20~30mの起伏の緩やかな広大な台地が広がり、その北には印旛沼や手賀沼、霞ヶ浦等の湖沼が存在する。印旛沼は千葉県内最大の湖沼で、周辺には各時代にわたる多数の遺跡が存在し、特徴ある文化圏を作っている。

佐倉市はこの印旛沼の南岸に位置する。市内を貫流する鹿島川・手縫川といった大小の河川は下総台地を樹枝状に開析しながら印旛沼に注いでいる。そして印旛沼に直接面した台地上にはもちろんのこと、これら河川や支流によって開析された谷に面した台地の上には数多くの遺跡の存在が確認されている。鹿島川はなかでも最大の河川で、水源の千葉市の土気付近から佐倉市内を北上し、富里町を水源とし市内を東から西に流れてきた高崎川と佐倉市街で合流して印旛沼へと注ぐ。鹿島川は水源付近が分水嶺にあたり、東京湾へ注ぐ都川などと接し、東京湾岸と印旛沼周辺地域を結ぶ古代の交通路として重要な位置を占めていたと考えられる。下流には江原台遺跡、吉見台遺跡、大崎台遺跡といった各時代の著名な遺跡が多数存在する。

松向作遺跡は印旛沼から約8.5km南の鹿島川中流の右岸の台地上にある。ここは鹿島川の支流に南を分断され、高崎川の支流によって東西を囲まれた大きな台地の一角にあたる。台地は小支谷によってさらにいくつかの独立した台地に分かれ、旧石器時代から中世に至るまでの各時代の遺跡が確認されて台地ごとに特色ある遺跡を検出している。周辺では現在のところ、鹿島川下流や印旛沼周辺に大集落を形成した時期である弥生時代から古墳時代の前期の遺跡については分布が稀薄である。

松向作遺跡は南北に細長い台地で、南側は立山遺跡である。立山遺跡の西が大作遺跡、大作遺跡の南東、立山遺跡と小支谷をはさんだ台地上が池向遺跡である。また小支谷をはさんだ西



第1図 松向作遺跡位置図

側は栗野Ⅰ遺跡で、東西に長い半島状の台地に立地する。このようにこの地域一帯は佐倉第三工業団地建設に伴う発掘調査により、旧石器時代から歴史時代の各時代の遺構・遺物が多数検出され、それぞれの台地ごとに特色ある遺跡が存在することが明らかとなった。これら周辺の遺跡については既に刊行された発掘調査報告書に詳しいが、松向作遺跡で主体となる古墳時代を中心に周辺の調査された遺跡について概要を記しておく。

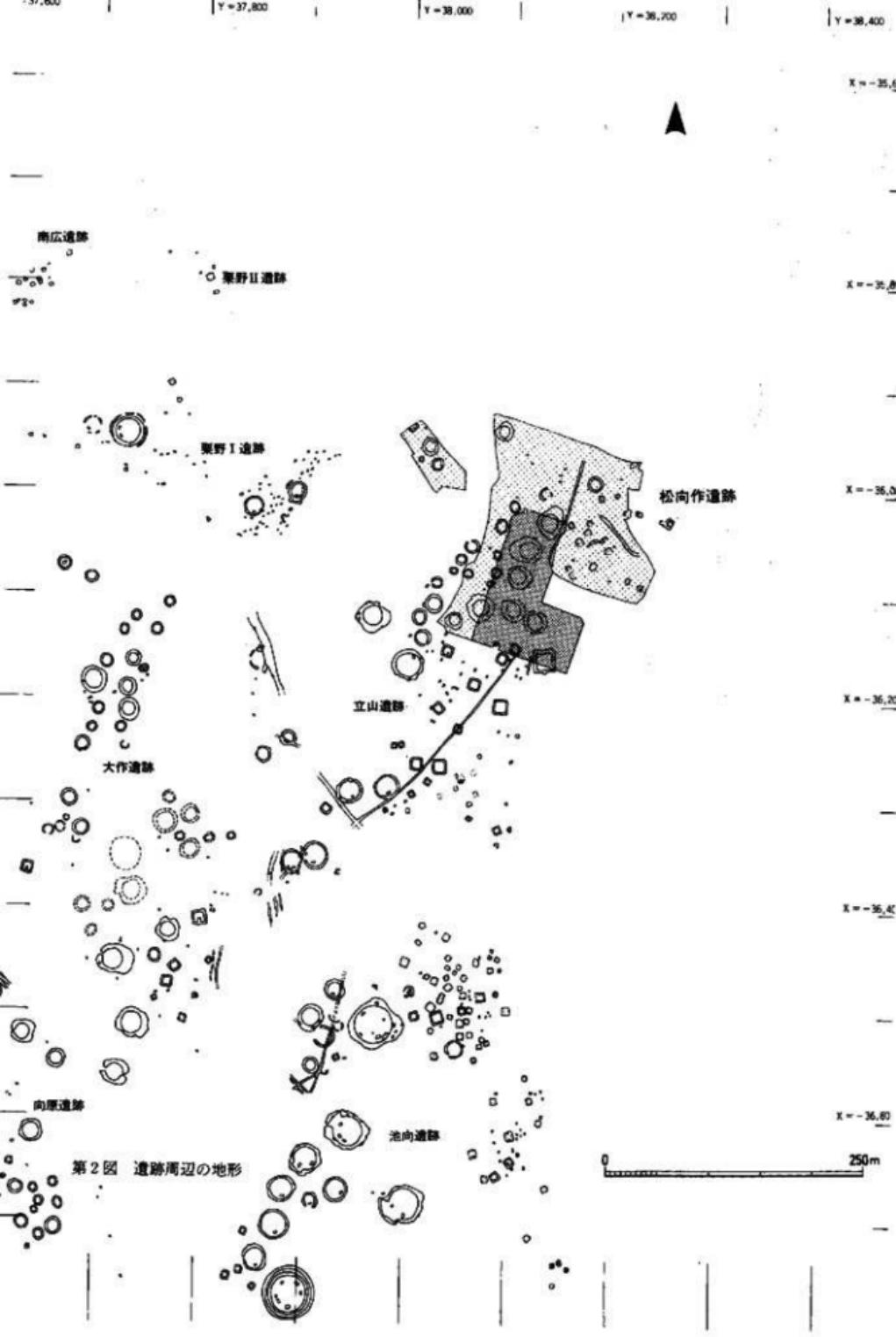
立山遺跡 松向作遺跡の南に位置する。円墳14基と方墳18基、土壙墓11基を検出した。古墳時代の竪穴住居は検出していない。南北に並ぶ円墳と方墳はそれぞれまとまりをもち、底面に長軸と直交する溝をもつ土壙墓4基、長軸の一方を横穴状に掘り込む土壙墓7基がこの間に点在する。6世紀以降の古墳が中心で、埋葬施設を複数検出したものが多い。埋葬施設は土壙墓が中心で墳丘裾に位置するもののほか周溝外壁を掘り込むものがある。また切石積みの箱形石棺をもつものが1基ある。

大作遺跡 立山遺跡の西に広がる。円墳45基、方墳8基、土壙墓8基を検出した。古墳時代の竪穴住居は検出していない。古墳は台地の中央を南北に並ぶ。6世紀以降の古墳が中心であるが5世紀に満るものも數基ある。土壙墓は直刀・鉄鎌・玉類を出土したもの1基のほかに、横穴状に掘り込むものが7基ある。

栗野Ⅰ遺跡 古墳5基と土壙墓60基を検出した。古墳は円墳3基と方墳1基、帆立貝形前方後円墳1基である。古墳時代の竪穴住居は2軒検出した。古墳は6世紀末から7世紀の古墳を中心で複数の埋葬施設をもつものが多く、墳丘裾のほかに周溝に内接または外接する土壙が多い。帆立貝形前方後円墳の埋葬施設は雲母片岩の板石を使用した箱形石棺である。土壙墓は形態と内容から大きく3種類に分けられる。大作遺跡で検出した古墳の主体部と内容的には変わらないが外部施設がないもの(3基)、長方形に掘り込み底面に長軸と直交する溝が数条掘られるもの(2基)、横穴状に掘り込むもの(55基)がある。周辺の遺跡では土壙墓は古墳の間に点在するが本遺跡では台地の縁辺部に多数がまとまっていたのが特徴である。

参考文献

- 『佐倉市里谷津遺跡』 (財) 千葉県文化財センター 1978
- 『佐倉市立山遺跡』 (財) 千葉県文化財センター 1983
- 『佐倉市タルカ作遺跡』 (財) 千葉県文化財センター 1985
- 『佐倉市向山谷津・明代台・木戸場・古内遺跡』 (財) 千葉県文化財センター 1987
- 『佐倉市腰巻遺跡』 (財) 千葉県文化財センター 1987
- 『佐倉市向原遺跡』 (財) 千葉県文化財センター 1989
- 『佐倉市人作遺跡』 (財) 千葉県文化財センター 1990
- 『佐倉市栗野Ⅰ・Ⅱ遺跡』 (財) 千葉県文化財センター 1991



第3節 調査の概要（第3図）

松向作遺跡は佐倉市大作2丁目（旧地番天辺字松向作・直弥字立山）に所在する。発掘調査は昭和59(1984)年度（昭和59年10月3日～昭和60年3月26日）と昭和60(1985)年度（昭和61年1月6日～3月28日）の2年度にわたって行われた。本調査面積は18,700m²である（昭和59年度14,700m²、昭和60年度4,000m²）。また、南東の11,000m²は保存区域で、試掘調査を実施した。調査は北側と南側、保存区域の大きく3つに分けて行われた。

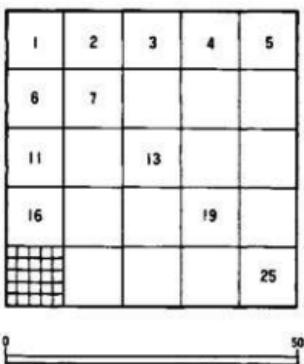
昭和59年度はまず北側の30,800m²について確認調査を実施した。確認調査では2m×8mのトレンチを設定し、上層10%の確認調査と当初から存在のわかっていた古墳001の本調査を実施した。また下層については2m×2mのグリッドを設定して4%の確認調査を行った。この確認調査の結果に基づき、上層は14,700m²の本調査をひき続き行い、この結果古墳11基、土壙墓2基、竪穴住居15軒、陥し穴4基、溝状遺構3条、上坑7基、炭窯3基を検出した。また、上層の本調査終了後、旧石器時代についても確認調査で遺物を出土したグリッドを拡張して本調査を行った。この結果、遺物集中箇所2地点を検出した。

翌年度は南側の4,000m²の本調査を実施し、古墳8基（このうち2基は一部を前年度に調査）、土壙墓2基を検出した。下層は確認調査を実施したが遺構・遺物は発見されなかった。

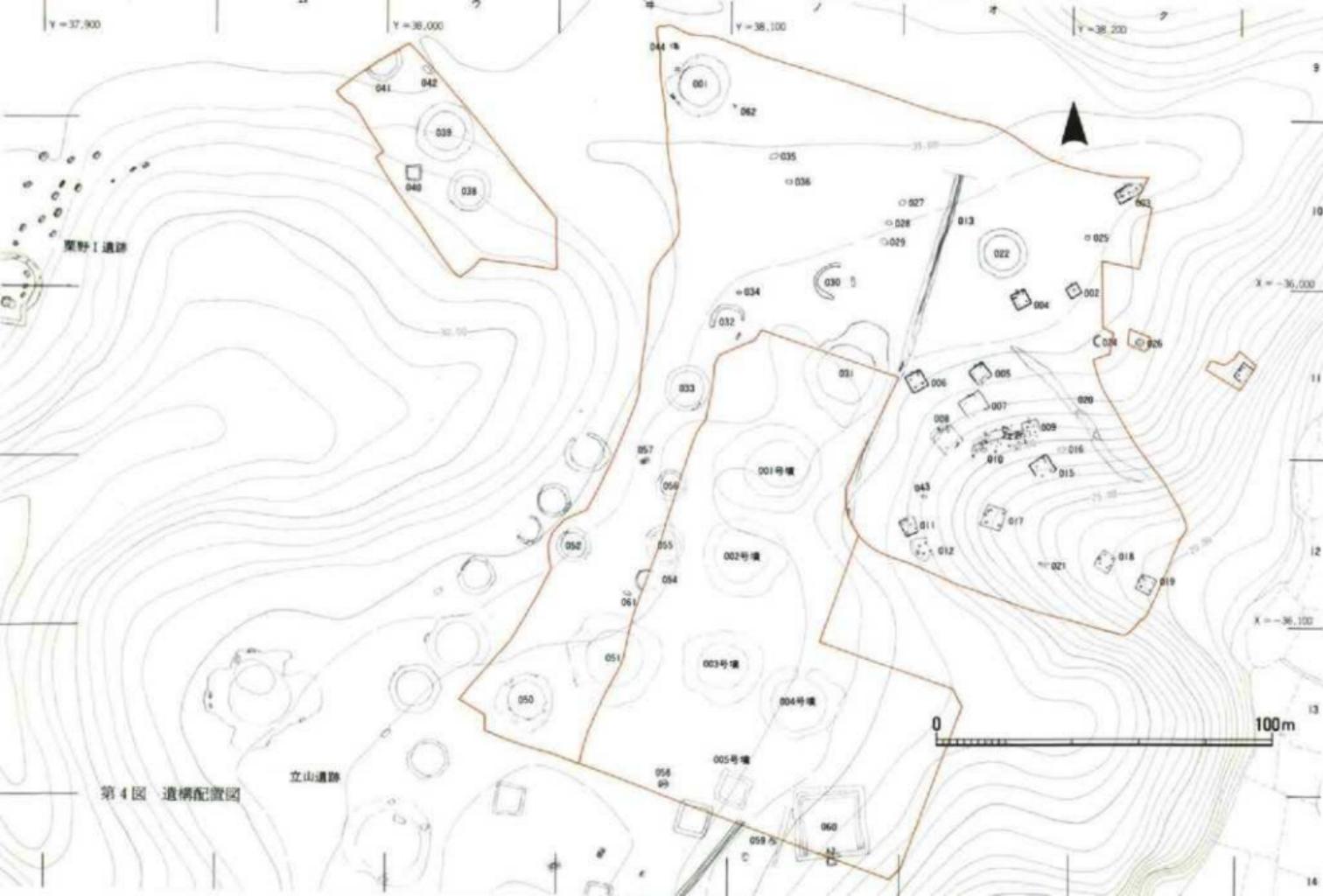
またこの調査と並行して東側の保存区域11,000m²について試掘調査を実施した。この結果、古墳6基の存在を確認した。

現地の調査にあたっては、遺構・遺物の位置を記録するために国土地理国家標を使用した50m×50mの方眼の地区割りを使用した。これは昭和54年度に基準点測量をもとにしてX=-35,500、Y=+36,850を起点に事業地全体を覆うように設定したものである。この50m×50m方眼を大グリッドとし、名称は西から東にイ・ロ・ハ…、北から南に1・2・3…とし、これを組み合わせてイ1・ロ1・ハ1…と呼称することとした。この大グリッドをさらに10m×10mの25個に分割し、西から東に1～25の番号を付して中グリッドとし、これをさらに2m×2mの25個の小グリッドに分割してやはり西から東に1～25の番号を付した（第3図）。中グリッドと小グリッドの名称は大グリッドの名称と組み合わせてイ1-2-3、ロ2-3-4…とした。

整理作業は昭和61(1986)年度に遺物の水洗・注記等の基礎整理、平成元(1989)年度に図面整理の一部と遺物の復元作業、平成2(1990)年度に原稿執筆までの残りの作業を行い、平成3(1991)年度に報告書刊行までの作業を終了した。



第3図 グリッド分割図



第2章 上層の遺構と遺物

第1節 はじめに (第4・5図、巻首図版2、図版2・3)

検出した上層の遺構は古墳23基、土壙墓4基、竪穴住居15軒、陥し穴4基、溝状遺構3条、土坑7基、炭窯3基である。古墳は台地平坦部に南北に並んで占地し、南の立山遺跡へと続く。竪穴住居はいずれも古墳時代後期に属し、東側の台地肩部から斜面にまとまっている。

南東部は公園として保存されるためこの範囲に位置する遺構については本調査を実施していない。したがって古墳23基のうち5基は周溝の試掘調査、また、半分が保存区域内にかかる5基は保存区域内は周溝の試掘調査、保存区域外は本調査を実施した。また調査区北端の事業区域外にかかる部分についても一部調査を行っていない遺構がある。調査コードは212-023と212-031(保存区域)を使用した。

遺構・遺物の説明は遺構の種類ごとに古墳・土壙墓・竪穴住居・溝状遺構・陥し穴・土坑・炭窯の順で行う。

遺構番号は遺構の種類に関係なく通し番号となっており、調査時に使用したものを使用することを原則としたが、調査時に遺構番号を付していないものについては新たに続きの番号を付した。また、保存区域の古墳は調査時に1号墳から5号墳の名称を北から順番に付けている。これについては検出遺構一覧(第1表)を参照されたい。

遺構の平面規模は確認面で計測したものである。古墳は周溝の内径、土壙墓・竪穴住居・土坑等は、遺構の中央で交わるよう設定した軸の長さで表した。遺構の計測値は遺構の種類ごとに計測表にまとめた(第2表)。

遺構図の縮尺は竪穴住居1/80、竪1/40、土壙墓1/40、陥し穴・土坑・炭窯1/50で土層断面図・エレベーション図も同じ縮尺である。古墳・溝状遺構は規模により1/50、1/100、1/200、1/300、1/600を用いている。また土層断面図・エレベーション図は平面図の縮尺により違う。

土層断面は黒褐色土・暗褐色土・暗黄褐色土(ローム土混入)・黄褐色土(ローム土主体)・暗赤褐色土(焼土混入)・焼土・埴輪構材の7種類に整理し、これをスクリントーンで区別した(第5図)。この他の混入物については本文中に説明を加えた。

遺物の実測図の縮尺は土器類が1/4、玉類・金属製品が1/2(直刀は1/4)、繩文土器拓影図が1/3、石器類が2/3である。土器は土器観察表、玉類・金属製品は計測表(第3・4・5・6表)を作成した。なお挿図番号は遺物の種類に関係なく遺構ごとの通し番号になっており、出土状況図中の番号、図版番号と一致する。

■ 黒褐色土 ■ 暗褐色土 • 土器

■ 暗褐色土 ■ 焼土 • 土製品

■ 暗黄褐色土 ■ カマド構築材 • 金属製品

■ 黄褐色土 • 玉類

第5図 凡例

第2節 古 墳

1. 遺 構

検出した古墳は23基である。このうち公園として保存されるものが5基、また保存区域にかかるため一部が保存されるものが5基である。保存されるもについてはトレンチによる周溝の試掘調査を実施した。

墳丘が遺存し、表土除去前にその存在が判明していたものは古墳001と保存部分の一部の古墳のみで、ほとんどが表土除去後に周溝を検出したことによって確認できたものである。しかし、調査してみると古墳001も旧表土まで削平されており遺存状態が良好な古墳はなかった。

23基のうち円墳は20基、方墳は3基である。また、埋葬施設を検出したのは古墳001(土壙墓)と古墳060(横穴式石室)の2基である。周溝から出土した遺物も僅かで時期が推定できるものは少ない。

古墳001(第6図、図版4)

[遺物P28]

調査区北端で検出した(キ9)。僅かな高まりが認められ、当初から古墳の存在は明らかであった。しかし調査した結果、これは耕作の際の二次堆積で、すでにソフトローム面まで削平され盛土は遺存していないかった。中央部と南部に東西に走る溝状の擾乱を受ける。

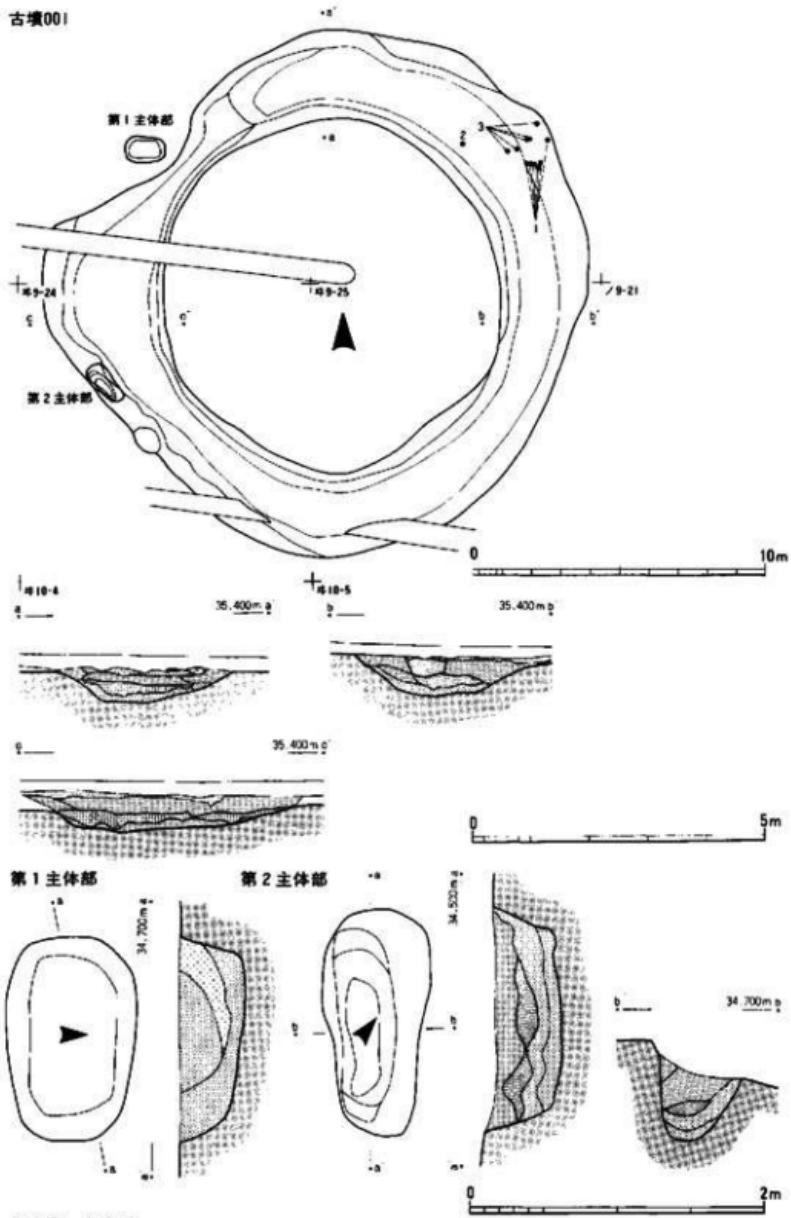
円墳で内径11.85×11.62mをはかる。周溝の内周はほぼ円形に巡るが、外周は北西部が急に狭くなり不整形である。この部分の外側に土壙墓(第1主体部)を検出し、この制約をうけたものと思われる。周溝の幅は狭いところで1.06m、広いところで4.15mを測る。深さは0.38~0.62m、断面形は高さのない逆台形を呈している。埋土は北東部では下層に暗黄褐色土(ローム粒子が多量に混じる)、その上に黒褐色土(ローム粒子が混じる)・暗褐色土(ローム粒子が混じる)が堆積し、上面に僅かに焼土がのっている。西部では暗褐色土(ローム粒子が混じる)・黒褐色土が堆積している。

遺物は周溝内埋土中より上師器等を約130点出土した。周溝北東部に集中しているが、底面より浮いており、外側から流れ込むような出土状況である。このうち図示できたのは杯1点と甕底部2点である。

埋葬施設は土壙墓2基である。第1主体部は北西部の周溝の外側にある。第2主体部は南西部の周溝内から検出した。周溝外側に接している。

第1主体部は長方形で(1.37×0.88×0.45m)、長軸は東西に向いている(N-39°-W)。埋土は暗黄褐色土と黄褐色土を主体としている。第2主体部は不整形な長方形で(1.51×0.64×0.45m)、長軸が周溝の外周に沿っている(N-102°-W)。上層に暗褐色土(ハードローム粒子・ローム粒子を多量に含む)、中層に黒褐色土(ハードローム粒子・ローム粒子を含む)、下層に暗黄褐色土(ソフトロームが主体、黒褐色土が混入)が堆積する。どちらにも木棺痕は確認できず、副葬品もなかった。

古墳001



第6図 古墳001

古墳022（第7図、図版5）

[遺物P28]

調査区北東に位置する（オ10）。すでに旧表土面まで削平され、墳丘は遺存していない。表土除去後周溝を検出し、確認できた。

円墳で内径は 10.12×10.40 mである。周溝は $1.62 \sim 2.23$ mの幅で全周する。内周は正円形に巡るが、外周は西から南西にかけて一部幅が狭くなる。深さは $0.15 \sim 0.35$ mで内側の方を僅かに深く掘り込んでいる。壁の立ち上がりは内側、外側とも底面との境が不明瞭である。底面は凹凸があるものの幅がある。上層から中層にかけて黒褐色土（ローム粒子混入、下層ほどローム粒子の割合が多くなる）が堆積し、下層には暗黄褐色土または黃褐色土（ローム粒子主体、しまりがない）が堆積する。

埋葬施設は検出されなかった。

遺物は周溝内埋土中より土師器が70点余出土した。壺の破片が主体である。いずれも埋土中層から出土しており、底面からは浮いている。このうち杯4点、壺1点、壺底部2点の7点が図示できた。

古墳024（第7図）

[遺物P28]

調査区北東端の台地脇部、古墳022の南東30mの所に位置し（ク11）、東側は谷に面している。墳丘は確認できず、周溝も、斜面にかかる東半分は遺存していない。

小規模な円墳で周溝遺存部での内径は 2.58 mである。周溝は浅く、立ち上がりが不明瞭で、幅 $0.43 \sim 0.47$ m、深さは $0.10 \sim 0.16$ mである。埋土は1層で黒褐色土（ローム粒子混入）が堆積している。

埋葬施設は検出されなかった。

周溝内から出土した遺物は2点である。1点は木葉痕を持つ底部の破片で図示した。もう1点は赤色塗彩した古墳時代後期の土師器の小破片である。どちらも埋土中層から出土し、底面からは浮いている。

古墳030（第7図）

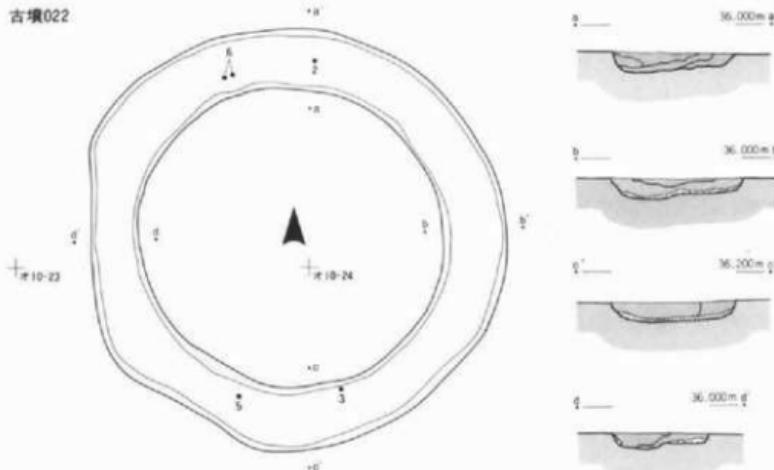
調査区北部、古墳022の南西37mに位置する（ノ10・11）。

耕作による攪乱が著しい部分で、墳丘は確認できなかった。検出した周溝は浅く、全周せざるに途切れていた。周溝の平面形態は不整形な円形を呈しているが、周溝の遺存状態が悪いため本来の形態を保っているかは検討をする。規模は確認面で内径 8.51×10.05 mを測る。周溝は立ち上がりが不明瞭で、幅は $0.86 \sim 1.10$ m、深さは $0.04 \sim 0.10$ mである。また、周溝の埋土は再堆積した耕作土である。

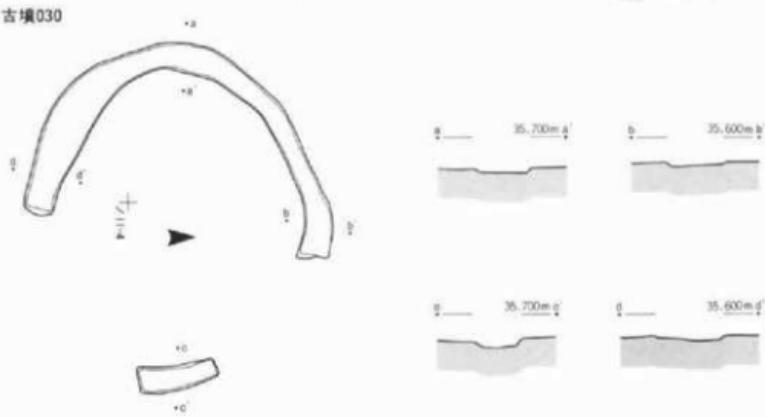
埋葬施設は検出されなかった。

周溝から出土した遺物は50点で4～5cm四方の壺の破片が主体であった。底面から浮いており、後世に流れ込んだものと思われる。図示できる遺物はなかった。

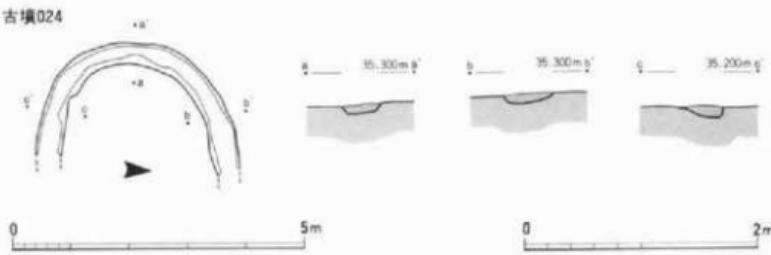
古墳022



古墳030



古墳024



第7図 古墳022・024・030

古墳031（第8図）

[遺物P28]

古墳030の南東に位置する（ノ11）。南側は保存区域となる。このため北側の周溝は全掘したが、南側は周溝を確認するトレンチをいた。

円墳で内径は16.20mである。周溝の内周は円形に巡っているが外周は不整形で、特に本調査した南側では幅が最も広いところで9.10mを測る。深さは本調査部分で0.43mである。埋土は最下層に暗黄褐色土（ローム粒子を含む）、中層に黒褐色土（ローム粒子を含む）が堆積する。上層の暗褐色土は表土である。

本調査した部分では埋葬施設は検出しなかった。

本調査部分の周溝内から出土した遺物は多数あり、瓦や陶磁器破片等も混入していた。このため古墳に伴う遺物がどれであるか判断するのは難しいが、このうち4点が図示できた。

古墳032（第9図、図版5）

[遺物P28]

古墳031の西側に位置する（ヰ11・ノ11）。南側が道路だったため古墳030と同じように遺存状況が悪く、盛土は削平され周溝も浅く、全周しない。平面形態は周溝が遺存する部分では明瞭な角がみられず、不整形な円形であるが検討を要する。規模は推定で内径が7.31mである。周溝は幅0.70～1.29m、深さ0.09～0.23mである。上層に黒褐色土（ローム粒子混入）、下層に暗黄褐色土（ローム粒子混入）が堆積する。

埋葬施設は検出されなかった。

遺物は周溝内から鉄錆のほか、須恵器杯身等3点が図示できた。遺存状態もよく底面から出土しており、古墳に伴う遺物と考えられる。この他には土師器小破片2点が出土している。

古墳033（第8図、図版5）

[遺物P30]

古墳032の南側10mの所にある（ヰ11）。墳丘は遺存しないが、周溝は全周する。円墳で、規模は内径が9.62×10.30mを測る。周溝は幅1.30～1.50m、深さ0.29～0.48mである。上層に黒褐色土（ローム粒子・若干のロームブロックが混入）、下層にローム粒子・ロームブロックが混じった黄褐色土または暗黄褐色土が堆積する。

埋葬施設は検出されなかった。

周溝内から出土した遺物は少なく4点で、すべて杯である。このうち2点が図示された。

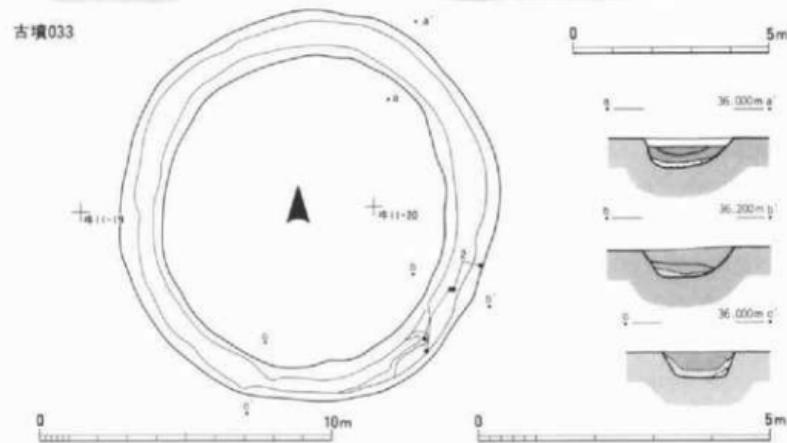
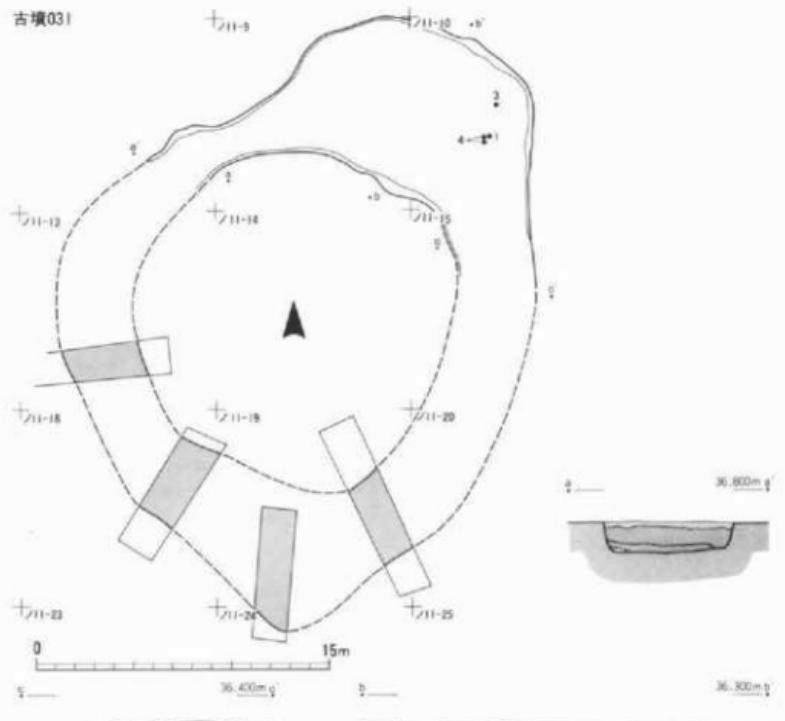
古墳038（第9図、図版6）

[遺物P30]

調査区北西で検出した（ウ10）。古墳001の南西58mの所に位置する。墳丘は遺存しない。円墳で周溝は全周する。規模は内径で8.95×8.85mである。周溝は幅1.41～1.95m、深さ0.16～0.38mで断面は高さのない逆台形を呈する。黒褐色土、暗黄褐色土、黄褐色土が堆積する。

埋葬施設は検出されなかった。

周溝南東から須恵器杯蓋、周溝北東から底部を穿孔した土師器鉢が出土した。どちらも底面からやや浮いていた。この他に出土した遺物はない。



第8図 古墳031・033

古墳039（第9図、図版6）

[遺物P30]

調査区の北西、古墳038の北3mに位置する（ウ9・ウ10）。

墳丘は遺存せず、周溝は貯水槽により一部破壊される。円墳で内径11.45×11.30mである。周溝は全周し、幅2.25～3.20m、深さ0.18～0.41mである。浅い皿状の断面形で、上層に黒褐色土（ローム粒子を若干含む、しまりがよい）、下層に暗黄褐色土（ローム粒子の細粒が混入する、しまりがよい）が堆積する。

埋葬施設は検出されなかった。

出土した遺物は少なく、図示したものが全てで、土器4点と土製玉1点である。

古墳040（第10図、図版6）

古墳038の北西、古墳039の南西で検出した（ウ10）。

小規模な方墳で、墳丘は遺存しない。4辺は直線的に巡り、正方形を呈する（3.47×3.37m）。主軸は南北を向く（N=0°-W）。周溝は幅0.55～0.62m、深さは0.11～0.19mである。断面形は高さのない逆台形を呈する。埋土は1層で黒褐色土（ローム粒子、ローム小ブロックが混入）が堆積する。

埋葬施設は検出しなかった。

また遺物も出土しなかった。

古墳041（第10図、図版6）

調査区北西端、古墳039から北西14mの所に位置する（ム9・ウ9）。北西侧は調査区域外のため、南西半分のみ調査した。

調査部分からは円墳と推定される（内径8.78m）。周溝は幅1.00～1.80m、深さ0.12～0.33mである。黒褐色土（下層へいくにしたがってローム粒子が混入する割合が増加する）が堆積する。

調査した部分からは埋葬施設は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

古墳050（第10図、図版7）

[遺物P30]

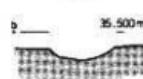
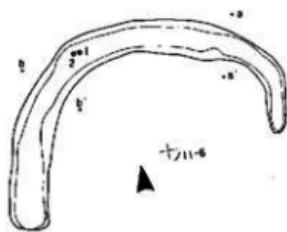
調査区南端にある（ウ13）。古墳051の南西8mの所に位置する。

墳丘は遺存しないが周溝が円形に巡る（10.94×11.10m）。周溝は幅2.05～3.72mで南西部でやや広くなり、この部分は高く掘り残してブリッジとしている。内周は円形に巡るが外周はブリッジを意識している。周溝の深さは0.45～1.37mで、上から暗褐色土（ハードローム粒子・ソフトローム粒子混入）、黒褐色土（ハードローム粒子・ソフトローム粒子混入）、暗黄褐色土（ローム粒子が混入、ソフトローム土が多量に混入）が堆積する。

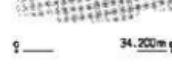
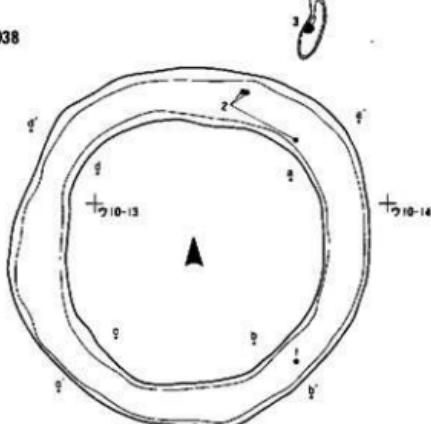
埋葬施設は検出されなかった。

遺物は図示した杯1点のみである。

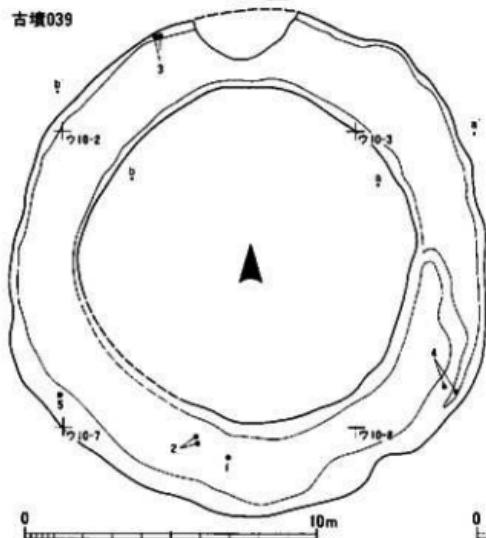
古墳032



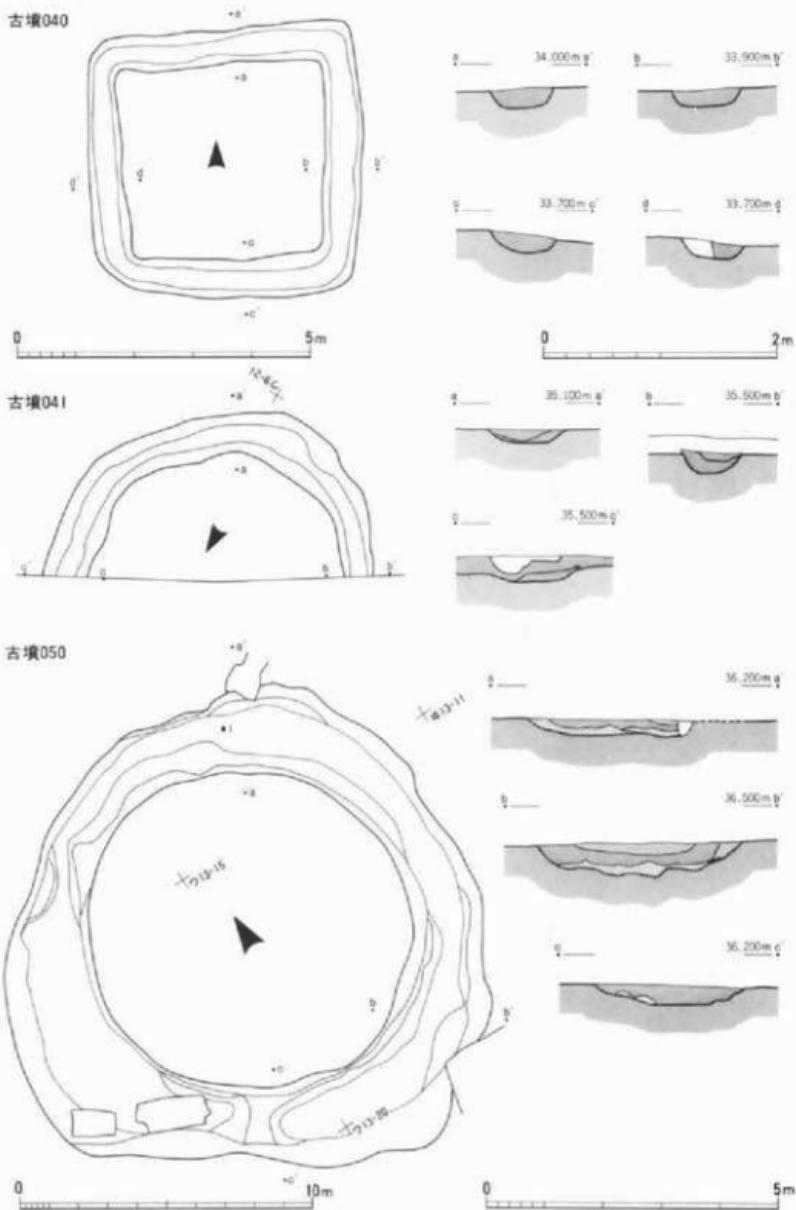
古墳038



古墳039



第9図 古墳032・038・039



第10図 古墳040・041・050

古墳051（第11図、図版7）

[遺物P30]

古墳050の北東にある（ヰ12・ヰ13）。西側は保存区域となるため、東側の半分のみ調査し、西側は、トレンチにより周溝の存在を確認した。調査前に0.40m程の高まりがみられたが墳丘は遺存していなかった。円墳で、検出部分での規模は内径16.52mである。周溝は幅3.60～6.14mで西側で幅広になり、この部分は高く掘り残してブリッジとしている。

調査部分から埋葬施設は検出されなかった。

遺物は周溝から40点余り出土し、このうち2点が図示できた。

古墳052（第11図、図版7）

古墳054・古墳055の西側に位置する（ヰ12）。これより西側は立山遺跡である。

墳丘は遺存していない。円墳である（内径7.10×7.40m）。周溝は全周せず南西部を狭いブリッジ状に掘り残している。周溝の幅は1.05～1.20m、深さ0.24～0.53mである。埋土は上から暗黄褐色土（ハードローム粒子を含む）、黒褐色土（ハードローム粒子を含む）、暗褐色土（ソフトロームを主体とし、ハードローム粒子を多量に含む）である。

埋葬施設は検出しなかった。

周溝内から土師器破片26点を出土した。ほとんどが同一個体と思われるが、接合できなかつた。外面を赤色塗彩した小型の壺と思われる。

古墳054（第12図、図版8）

[遺物P30]

古墳051の北に位置する（ヰ12）。耕作による擾乱が著しかった。調査時点では墳丘は遺存しない。東側は保存区域となるため西側のみ本調査し、保存部分はトレンチによる周溝の確認調査を行った。円墳で調査部分での規模は内径5.50mである。周溝は幅0.38～0.58m、深さ0.09～0.19mである。北側の保存区域との境界付近では周溝は徐々に浅くなっていく。黒褐色土上（ハードローム粒子、ソフトローム土を含む）が堆積する。

本調査範囲内では埋葬施設は遺存しなかった。

遺物は図示した高杯脚部1点のみである。

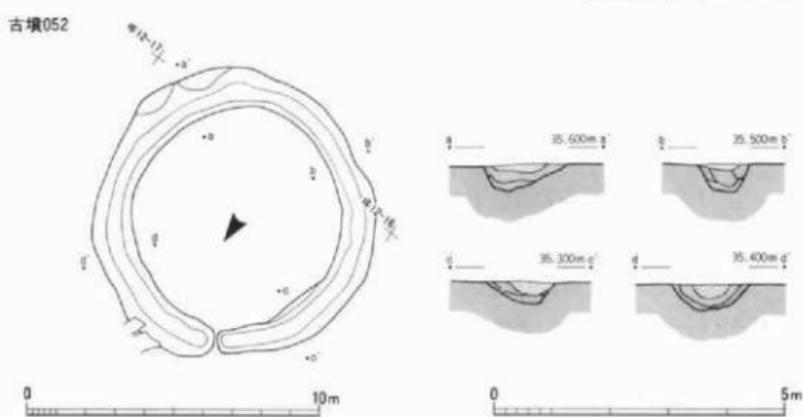
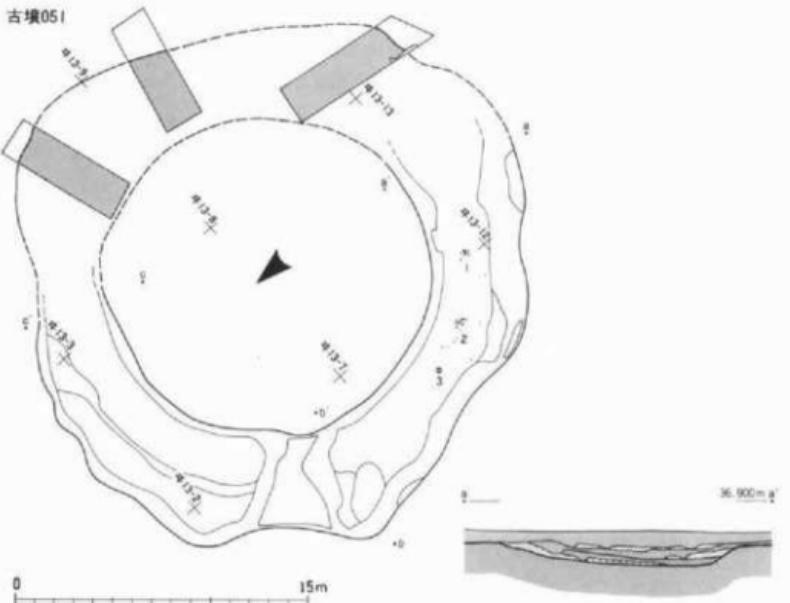
古墳055（第12図、図版8）

古墳054の北に位置する（ヰ12）。西側は保存区域となるため東側のみ本調査し、保存部分はトレンチによる周溝の確認調査を行った。

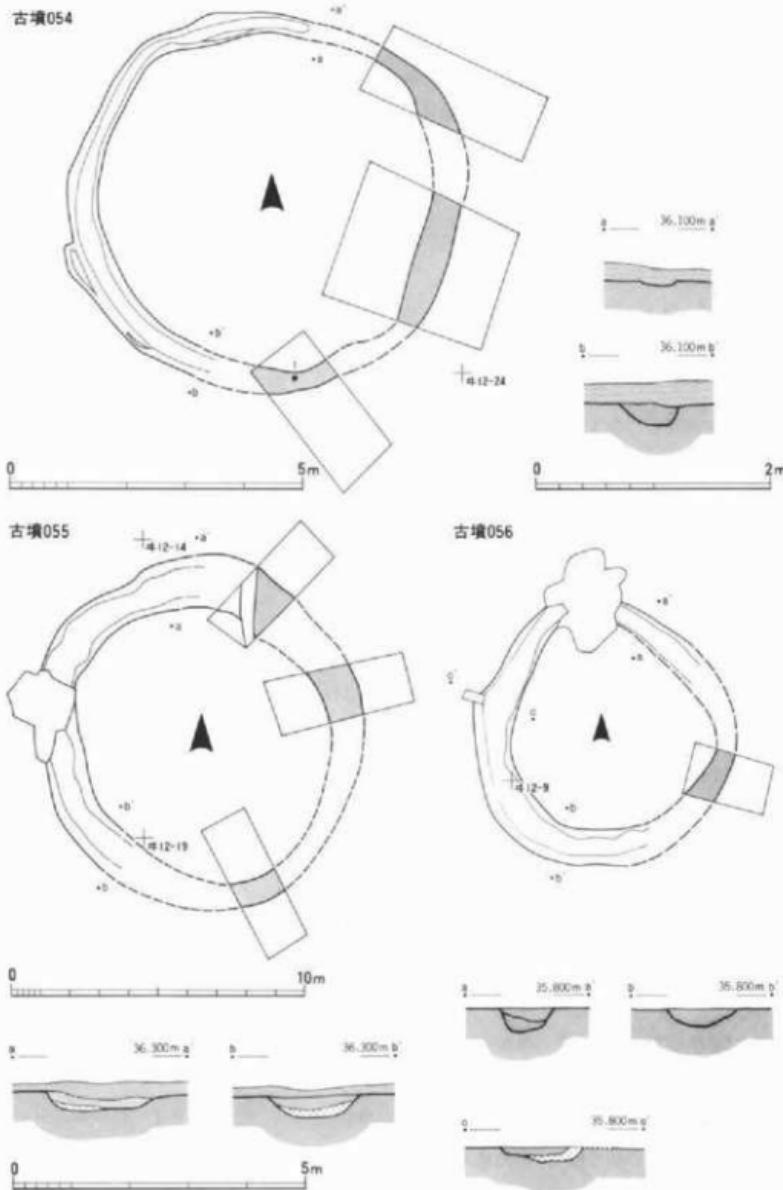
円墳で推定内径9.45mである。周溝は幅1.35～1.50m、深さ0.18～0.28mである。埋土は上層から黒褐色土（耕作土、黒色土粒子・ローム粒子・小ロームブロックを含む）・暗黄褐色土（黒色土粒子・ローム粒子を含む）・黄褐色土（ローム粒子・ロームブロック・黒色土粒子が混入）が堆積する。

本調査範囲内では埋葬施設は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。



第11図 古墳051・052



第12図 古墳054・055・056

古墳056（第12図、図版8）

古墳055の北に位置する（キ12）。東側は保存区域となるため西側のみ本調査し、保存部分はトレンチによる周溝の確認調査を行った。北側は木の根により大きく擾乱され、不整形であるが円墳であると思われる。調査部分での規模は内径6.90mである。周溝は幅0.72～1.23m、深さ0.17～0.24mである。黒褐色土（黒色土粒子・ローム粒子・ロームブロック等が混入する）、黄褐色土（黒色土・ロームブロック混入）が堆積する。

本調査範囲内では埋葬施設は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

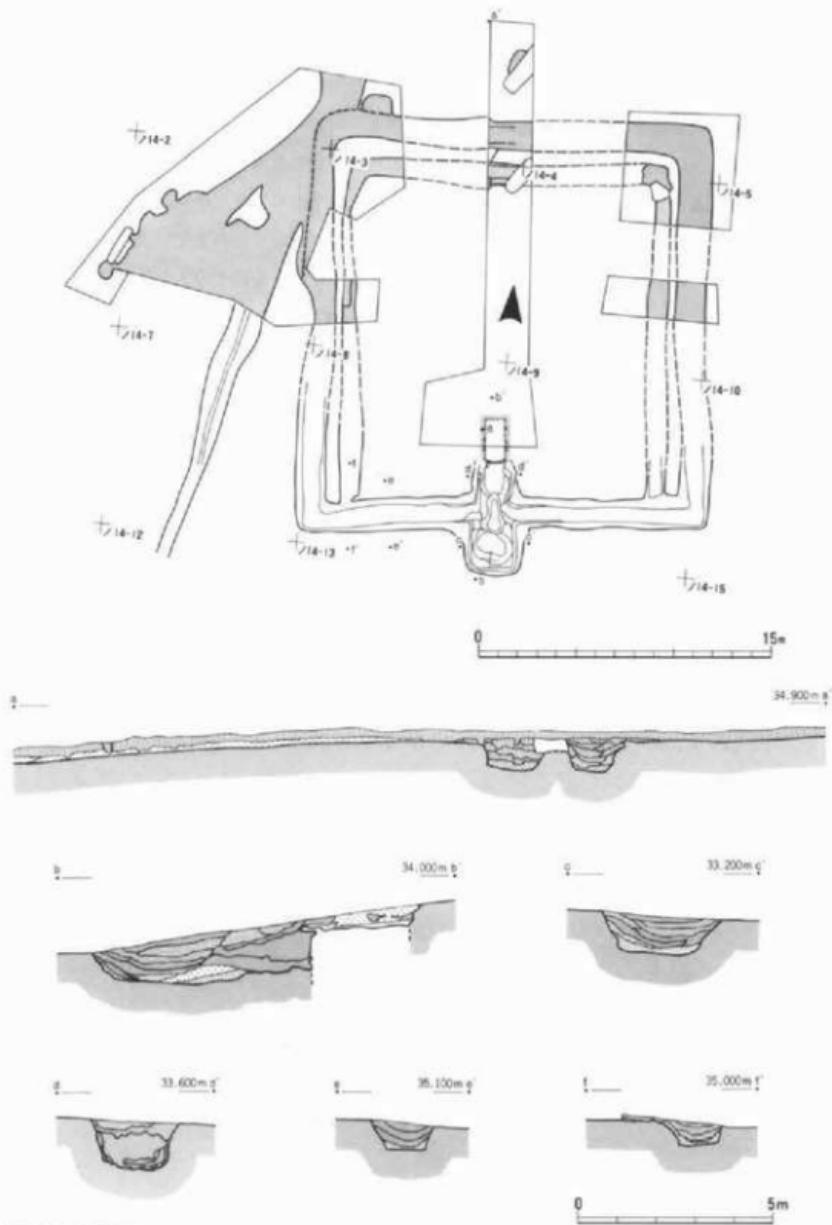
古墳060（第13・14・15・16図、図版9）

[遺物 P 32]

南側に開口する横穴式石室をもつ方墳である。保存区域の南東端の台地縁辺部に位置する（ノ13・ノ14）。東側が谷に面し、東辺は等高線と平行になる。北側は石室部分を含めて保存区域となるため本調査したのは周溝南辺のみで、この他の石室内の精査とトレンチによる周溝の試掘調査を行った。15m西には小規模な方墳である005号墳（保存区域内）があり、さらに14m西に土塚墓058がある。またこれより南の台地東縁辺に沿って方墳が並んでいる（立山遺跡）。

墳丘・周溝 墳丘の盛土も旧表土も遺存していない。試掘トレンチは周溝のコーナー部分とそれぞれの辺の中央が確認できるよう設定した。この結果、周溝は4辺が直線的で、4隅が直角の方形で、南辺をのぞく3辺が二重に巡っていることがわかった。また、石室が開口する南辺中央部では周溝は外側に方形に張り出している。墳丘の南北の軸はN-5°-Wを指す。また周溝の北西隅は溝状遺構などと切り合う。周溝の内径は15.15～15.55mを測り正方形を呈する。また周溝の外径も20.70×20.25mでやはり正方形を呈している。

周溝の規模は、内側の周溝が幅1.10～1.15m、深さ0.29m、外側の周溝が幅1.15～1.60m、深さ0.53mである（深さはいずれも本調査した南西隅の北側のもの）。南側中央の方形の張り出し部分は幅3.20mで、1.72～2.26m外へ張り出す。周溝の断面は逆台形で掘り込みは内側の周溝の壁の方が垂直である。内側の周溝には下から黄褐色土（ロームブロック・ローム土が主体）、黒褐色土（ローム粒子が僅かに混入）、暗褐色土（ローム粒子・黒色粒子が僅かに混入）、暗黄褐色土（ローム土と暗褐色土が混入）が堆積する。外側の周溝には下から黄褐色土（ロームブロック・ローム土が主体）、暗褐色土、（ローム粒子を若干含む）、黒褐色土（ローム粒子を若干含む）が堆積していた。内側の周溝は南側では浅くなる（f-f'）。また石室前の墓道から周溝にかけて設定した土層の断面観察によると石室前の周溝から墓道の部分の下層には暗黄褐色土、黄褐色土（ローム粒子・ロームブロック主体）が堆積し、この上に黒褐色土（ローム粒子・ロームブロック・白色粘土粒子・白色粘土ブロックを含む）、その上に暗褐色土（ローム粒子・ロームブロックが混入）が堆積していた（b-b'・d-d'）。最下層の暗黄褐色土と黄褐色土は周溝底を埋め戻した土と考えられる。また張り出した部分は墓道や周溝より後から埋まつた堆



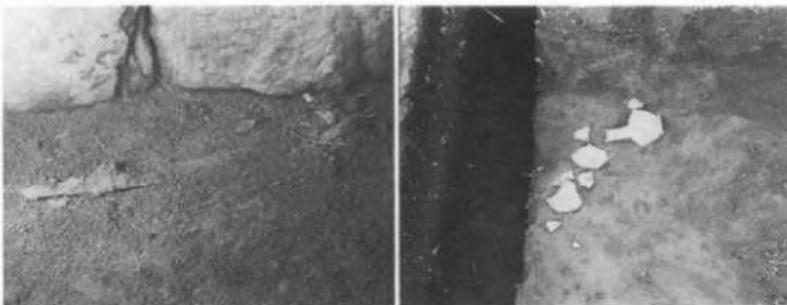
第13図 古墳060

積状態を示しており（b-b'・c-c'）、下から暗黄褐色土（黒色土・ローム粒子・ロームブロックを含む）、黒色土（ローム粒子混入）、暗褐色土（ローム粒子・黒色土粒子を含む）、黒褐色土（ローム粒子混入）が堆積する。

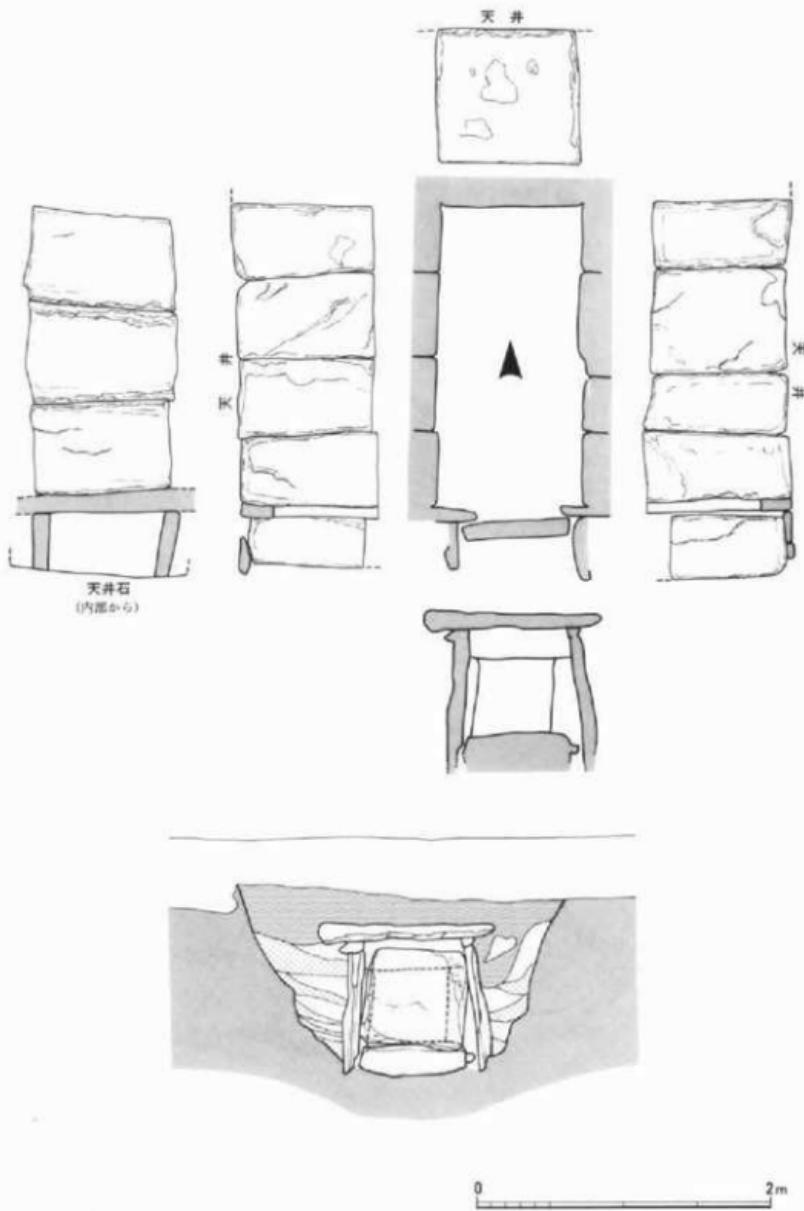
埋葬施設 南向きに開口した单室の横穴式石室である。南辺中央の周溝から0.70m、幅0.85mの墓道を設け、墳丘の地山を掘り込み、雲母片岩の板石を立て並べて構築する。遺存状態は良好で入口は閉塞石で閉じられていた。保存区域のため、石室内の精査だけで掘方は検出していないが、入口脇の土層の観察では裏込に白色粘土とブロック状のローム土をつき固めたものを交互に充填している。天井石の上はまず灰白色粘土で被覆し、さらにその上を黄褐色土（ローム粒子・ロームブロック・白色粘土粒子・白色粘土ブロック混入）で埋め戻していた（b-b'）。

玄室の床面は長方形で規模は $2.35 \times 0.98\text{m}$ 、天井部も長方形で $1.83 \times 1.02\text{m}$ を測る。長軸はN-5°-Wで、墳丘の南北の軸と同じである。玄室は天井石3枚、奥壁1枚、側壁は4枚ずつで8枚、合計12枚で構築される。床面と天井部の幅はほぼ同じであるため側壁は垂直に近い角度で立っていたと考えられる。また南側小口には左右に1枚ずつ側壁と直交するように板石を立て、その上に細長い板石を渡し、また足下には樋石を置いて玄門を構成している。玄門入口の規模は $0.51 \times 0.54\text{m}$ である。閉塞石は樋石の上にのっていた。玄門の外側には左右に1枚ずつ向かい合わせに板石を立てて、天井石を1枚架している。ちょうど箱形石棺の外側に狭道部を取り付けたような形態である。石室を解体していないため壁を構成する板石の本来の大きさは不明であるが、露出した部分では奥壁 $0.94 \times 0.98\text{m}$ 、側壁 $0.40 \sim 0.69 \times 0.91 \sim 1.00\text{m}$ 、天井石 $0.62 \sim 0.64 \times 0.92 \sim 1.20\text{m}$ である。樋石は床面からの高さが 0.25m 、厚さ 0.10m を測る。閉塞石は $0.64 \times 0.70\text{m}$ で開口部より一回り大きい。壁石の規模からみて石室の高さは $0.98 \sim 1.20\text{m}$ 程度であろう。

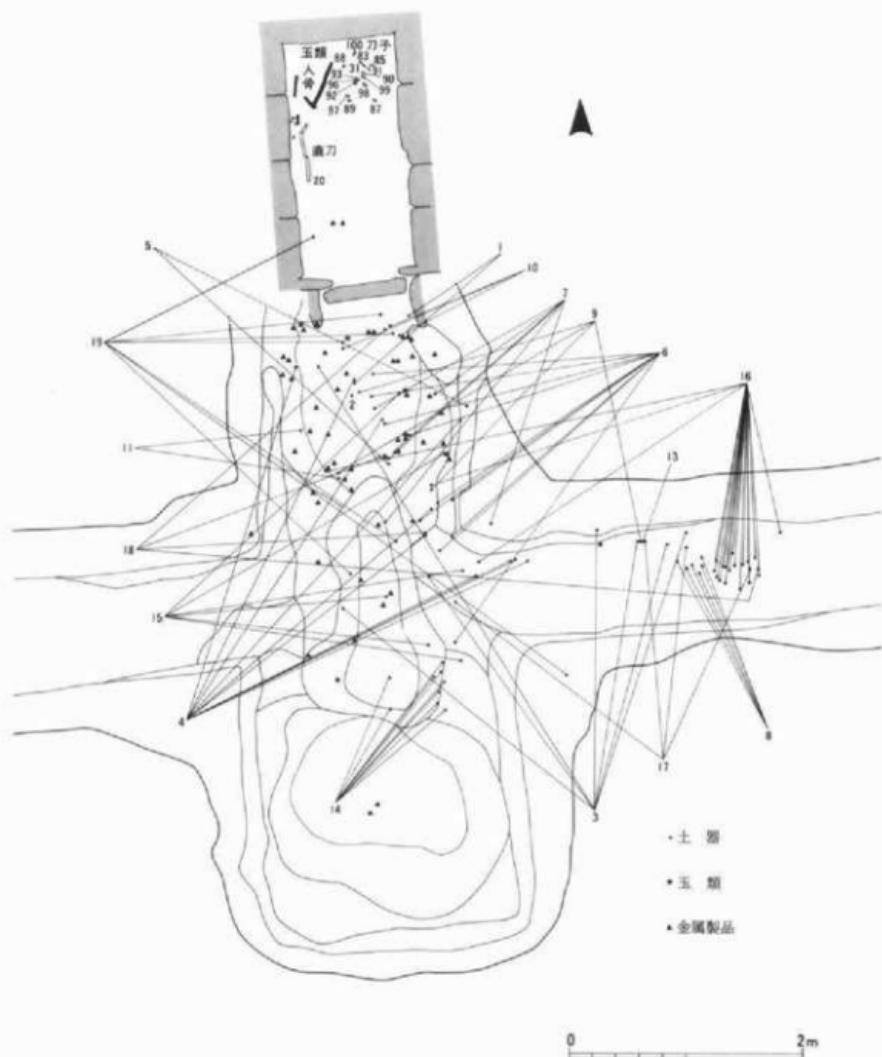
玄室北西隅付近には人骨片が数点あった。遺物は玄室内と墓道、石室前の周溝から出土した。玄室の遺物と外の遺物が接合する。



第14図 古墳060遺物出土状態



第15図 古墳060埋葬施設



第16図 古墳060遺物出土状態

これから記述する5基の古墳は公園として残される保存区域の中央部に位置する。調査は周溝部分の試掘調査のみで、これにより墳形と規模の概要を把握した。いずれも表面観察でその存在は確認されてはいたが、001号古墳以外は墳丘は僅かに膨らみが認められる程度のものであった（第17図）。

001号墳（第18・19図）

保存区域の北部、古墳031の南に位置する（キ11・キ12・ノ11・ノ12）。保存区域の中では墳丘の遺存状態が良好な古墳で、裾部は削平されるが墳丘が僅かに遺存している。円墳で規模は内径17.10～18.20mである。周溝の幅は一定ではなく、東側で広くなる。狭いところで4.10m、広いところで8.12mを測る。

002号墳（第19図）

001号墳の南に位置する（キ12・ノ12）。調査前にわずかな高まりが認められた。東側の周溝内壁を確認できなかったが円墳であると思われ、内径は推定で15.30mである。周溝の幅は一定ではなく北側から西側では3.25～3.70mを測るが、東側ではこれよりさらに幅があるようである。

003号墳（第20図）

002号墳の南、古墳051の東に位置する（キ13・ノ13）。円墳であると思われ、内径での規模は14.15～14.65mである。周溝の幅は2.85～5.50mである。

004号墳（第20図）

003号墳の東に隣接する（ノ13）。やはり円墳であるが周溝は全周せず、北側をブリッジ状に掘り残している。規模は内径で15.60～15.74m、周溝の幅は2.00～5.93mである。ブリッジは、内側で幅1m、外側で5mである。

005号墳（第20図）

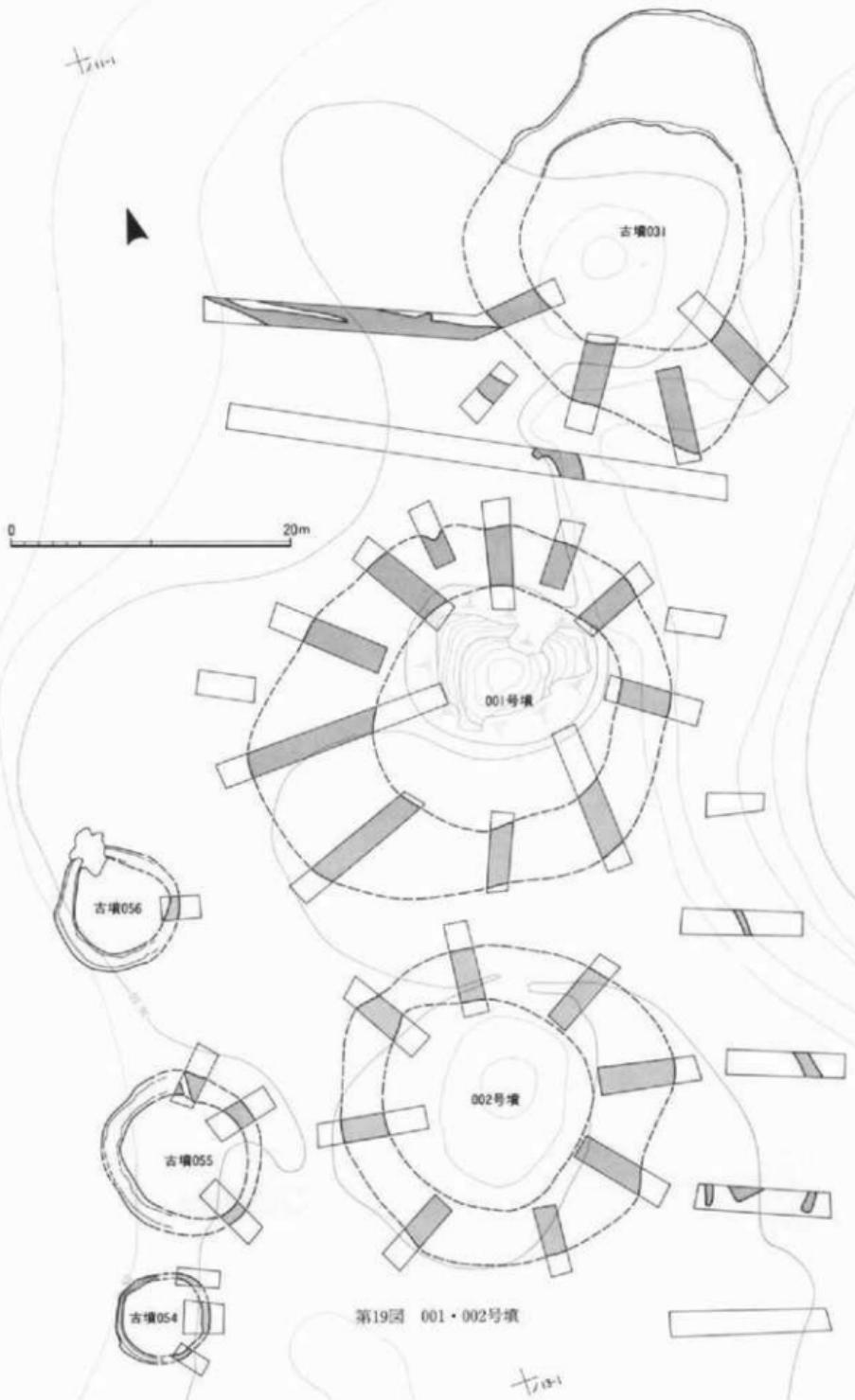
古墳060（方墳）の西側に位置する小規模な方墳である（キ13・キ14・ノ13・ノ14）。規模は6.86～6.95mでほぼ正方形である。周溝の幅は0.78～1.33mを測る。



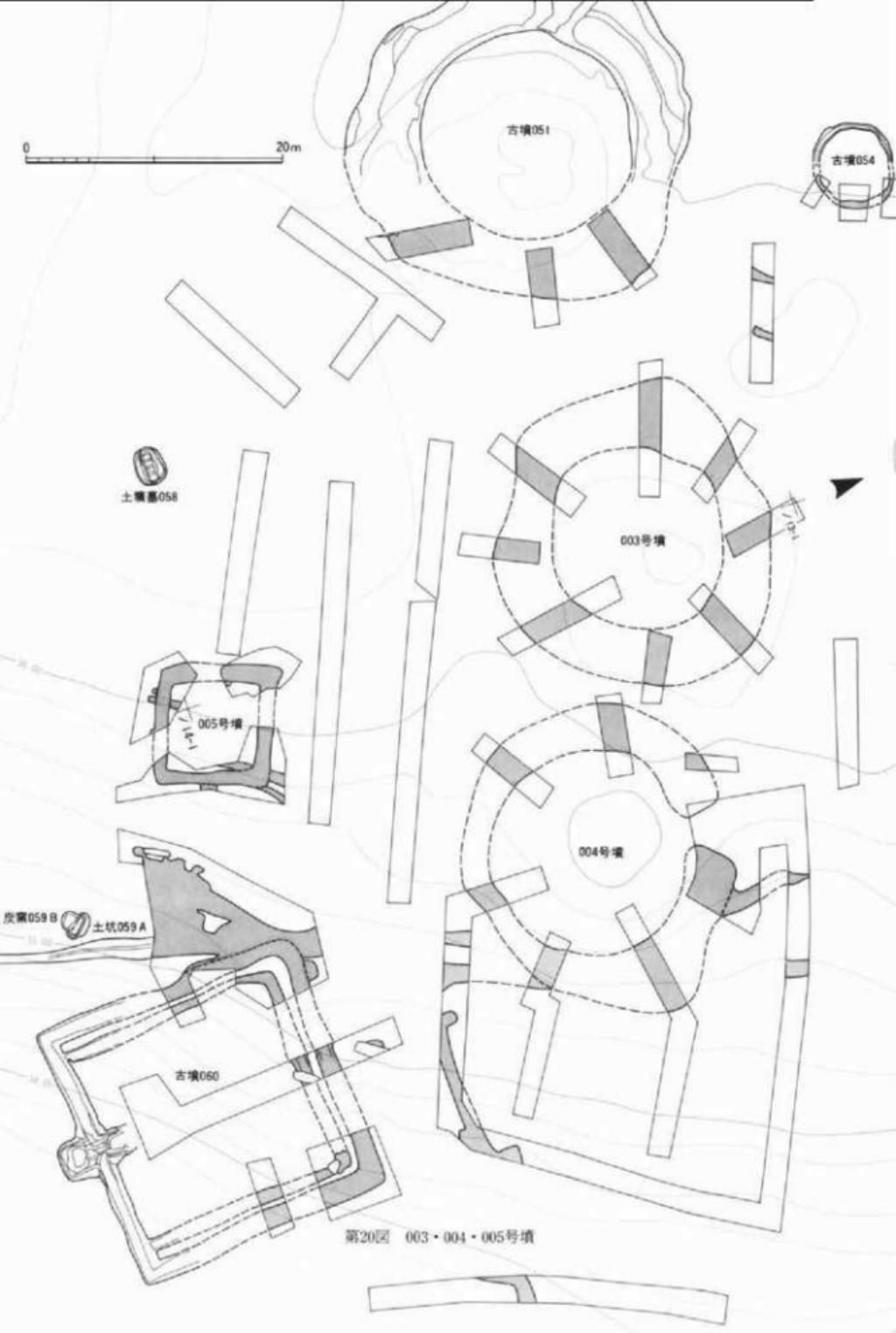
第17図 保存区域遠景



第18図 001号墳近景



第19図 001・002号墳



第20図 003・004・005号墳

2. 遺物 (図版21)

古墳から出土した遺物には土器類のほか土製品・石製品・金属製品・玉類がある。流れ込みと考えられる遺物が多く、確実に古墳に伴うと考えられるのは僅かである。

古墳001 (第21図)

[土器観察表 P145]

周溝埋土中から土器等を約130点出土した。周溝北東部に特に集中していたが、周溝底面からは0.10~0.15m浮いている。周溝の外側から流れ込むような出土状態で、古墳に伴うものかどうかは断定できない。このうち杯1点、甕底部2点を図示した。3点とも周溝北東部から出土したものである。床面から浮いており、1と3は周溝外縁の壁際から出土した。遺存状態は良くない。この他の破片120点は杯と甕が主体で、2~5cm四方の破片である。杯の破片は古墳時代後期のものが主体で、赤色塗彩したものが多い。

古墳022 (第21図、図版26)

[土器観察表 P145]

周溝から70余点を出土した。いずれも埋土中から出土し、周溝の底面からは浮いている。このうち杯4点、甕1点、甕2点が図示できた。図示できなかった遺物のうち杯は古墳時代後期に属し、赤色塗彩したものである。甕は4~5cm四方の破片である。図示できたものも遺存状態は悪く復原実測したものが多い。2の杯と6の甕底部は周溝北部、3の杯と5の甕は周溝南部から周溝底から20~30cm浮いた所から出土した。

古墳024 (第21図)

[土器観察表 P145]

出土遺物は2点である。図示できたのは1点で木葉痕を持つ甕底部である。残りの1点は赤色塗彩した2cm程度の杯の破片である。

古墳031 (第21図、図版26)

[土器観察表 P146]

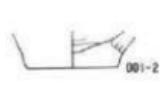
本調査したのは周溝の一部であったがここから多数の遺物を出土した。破片数は390点程になる。図示できたのは杯1点、高杯1点、甕2点である。図示できなかった杯破片のほとんどは古墳時代後期のもので赤色塗彩したものが多い。また、甕の破片は5~6cmで多数出土している。須恵器破片は歴史時代以降のもので、また近世以降の物と思われる瓦の破片も混入しており、流れ込んだ遺物を多数含んでいるようである。図示できたものも復原実測したものが多く、遺存状態は悪い。

古墳032 (第21図、図版26・51)

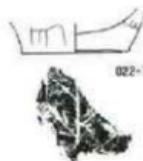
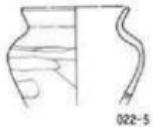
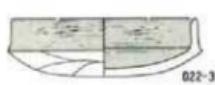
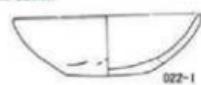
[土器観察表 P146]

出土した遺物は全部で6点と少ないが、4点が図示できた。このうち1点は鉄鎌である。遺構の遺存状態は悪いが、遺物の遺存状態は良好で、上器類は本古墳に伴う遺物と考えられる。須恵器杯身と杯は周溝の北西の床面から並んで出土した。どちらも口縁のごく一部を欠損するのみである。甕は周溝南東の床面から出土した。胴部の1/2を欠損する。図示できなかった2点は小片で赤色塗彩した杯と思われる。鉄鎌は埋土中から出土した。刃部の形状は不明である(遺存長22.0mm、幅6.0mm、厚さ5.0mm、遺存重量2.17g)。

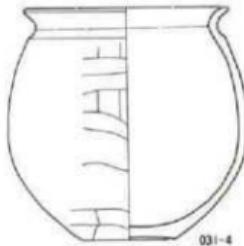
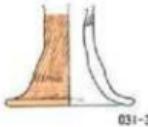
古墳001



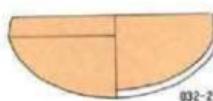
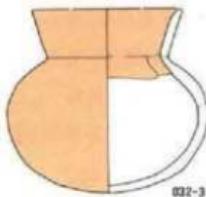
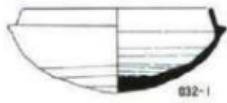
古墳022



古墳024



古墳032



0

30cm

0

5cm

第21図 古墳001・022・024・031・032出土遺物

古墳033（第22図、図版26）

[土器観察表 P146]

出土したのは4点で周溝の南東にまとまっていた。このうち杯2点が図示できた。杯は2点とも壁際または周溝底から30~50cm程浮いて出土した。どちらも遺存度は1/2~1/3で、復原実測したものである。残りの破片は杯、または鉢の一部と思われ、このうち1点は体部内面の途中まで赤色塗彩している。

古墳038（第22図、図版27）

[土器観察表 P146]

出土したのは図示した須恵器杯蓋と鉢の2点のみである。1の須恵器蓋は周溝北東部から出土した。周溝底面から20~30cm浮いている。天井部から体部にかけては一部を欠損するのみであるが、口縁部は2/3周を欠損する。鉢は周溝南東の底面から20cm程浮いた所から出土した。底部は焼成後穿孔している。

古墳039（第22図、図版26・49）

[土器観察表 P147]

出土したのは図示した杯3点・鉢1点と土製玉1点である。1の杯は周溝南部の底面から4cm浮いた所から出土した。底部は穿孔している。2の杯は1の西1mの所で底面から20cm浮いて出土した。口縁部の一部を欠くのみで完形に近い。外面の調整は雑で明瞭な粘土痕を残す。3の杯は北部の外壁際から出土した。底部の一部を欠損するが完形に近い。4の鉢も底部を穿孔している可能性があるので南東の外壁際から出土したものである。土製玉は杯（2）の西5mの外壁際から出土した。丸玉で、胎土は粒子が細かくよく精選されており、焼成も良好で光沢のある濃い茶褐色を呈する。穿孔は片側から行っている（第5表）。

古墳050（第22図）

[土器観察表 P147]

出土したのは図示した杯1点のみである。周溝北側の底面から10cm浮いた所から出土した。1/4周で遺存状態は良くない。

古墳051（第22図、図版27・49）

[土器観察表 P147]

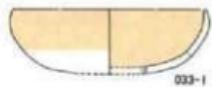
土器類は40点余り出土した。このうち杯と須恵器壺が図示出来た。この他石製円板が出土している。ほとんどの遺物がブリッジ南の周溝南西部から出土している。杯と須恵器壺は細かく破碎した状態で底面から30cm浮いた所から出土した。どちらも遺存状態はよくない。須恵器壺は胴下半部の1/4周である。石製円板は須恵器壺の北側から出土した。やはり底面からは50cm程浮いている。滑石製で、光沢のある白っぽい灰色を呈する。直径は15.5×15.5mm、厚さ4.0mm、重さ1.79gである。周縁の整形は雑で磨いた面が面取りしたように残り、横方向の擦痕が見られる。図示出来なかった杯の破片は赤色塗彩した古墳時代後期のもので、壺は2~3cm程の小破片である。須恵器破片は後世の混入品と思われる。

古墳054（第22図、図版26）

[土器観察表 P147]

出土したのは図示した高杯脚部のみであるが、破損するところはない。トレーナによる確認の際、検出面から出土した。

古墳033



古墳038

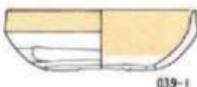


038-1

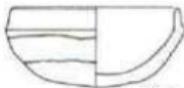


038-2

古墳039



039-1

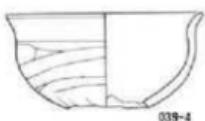


039-2



039-3

古墳050



039-4



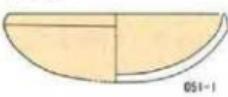
0

5cm

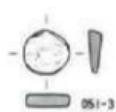


050-1

古墳051



051-1



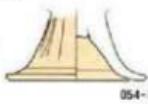
0

5cm



051-2

古墳054



054-1



30cm

第22図 古墳033・038・039・050・051・054出土遺物

遺物は精査した石室内と本調査した周溝の南辺から出土した。土器類のほか金属製品、玉類、人骨などである。遺物の多くは周溝から出土し、石室内から出土したのは玉類のほか直刀と鉄鎌などの一部である。人骨は北西隅から出土したが僅かな破片で遺存状態は良くない。直刀は石室の西壁中央に石室の長軸に沿って出土した。鋒は南を向く。玉類と刀子は石室の北東隅にまとまっていた。また、羨道部や周溝から出土した土器や鉄鎌等はかなり細かい破片となっており、接合したものもまとまっておらず散っていた。原位置から移動している可能性が高い。

土器は110点余り出土し、そのほとんどが石室の前の周溝から出土したものである。須恵器杯蓋3点、須恵器杯身5点、須恵器長頸壺4点、土師器杯5点、合計17点が図示できたが残った破片もこれと同種のものである。かなり細かい破片で出土したものが多く一部を除き遺存状態はあまりよくない。

1～8は須恵器杯である。胎土は類似しており白色粒子や雲母を含んだ砂粒を多量に含む。1～3は須恵器杯蓋である。つまみのある形態である。つまみは高さがなく偏平である。口縁部が遺存するのは3だけで、返りが僅かに突出する。天井部はいずれも回転ヘラ削りする。4～8の杯身は体部が外傾して立ち上がり、器高が低く偏平な形態である。底部と体部下端を回転ヘラ削りする。

9～13は土師器杯である。平底だが底部と立ち上がりの境は丸みをおび明瞭ではない。やはり器高が低く偏平な形態である。胎土は細砂粒を含み粒子が細かく精選されている。外面を横方向に丁寧に磨いておりいずれも器面に光沢をもつ。器壁が薄く焼成も良好である。

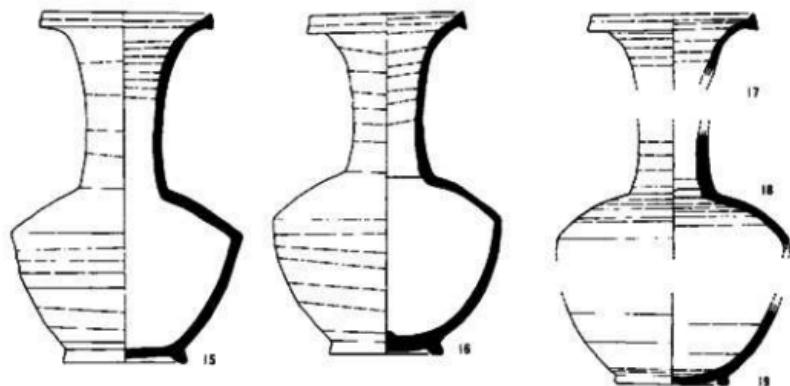
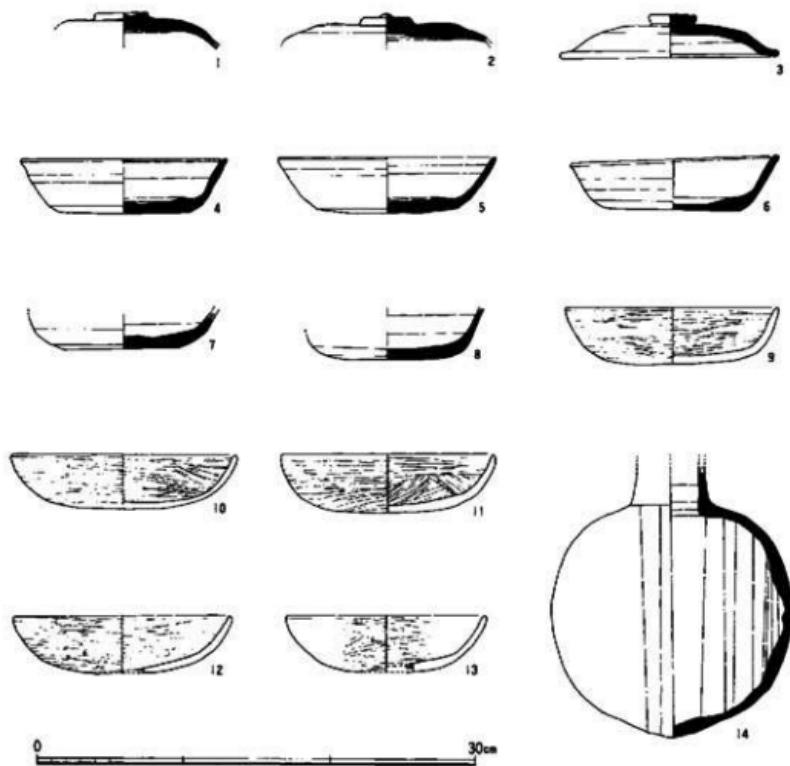
14～19は須恵器長頸壺である。14は丸底で球形の胴部をもつ。復原実測している。口縁部と胴部を別々に作り接合している。15～19は底部に高台をつけ、また肩部が張って稜がある。口縁部はラッパ状に開き口端部は2段になっている。15は口端部の一部を欠損するのみで完形に近い。17・18・19は直接接合しなかったが同一個体である可能性がある。

20～84は金属製品である（第3表）。22は青銅製品でこれ以外はすべて鉄製品である。

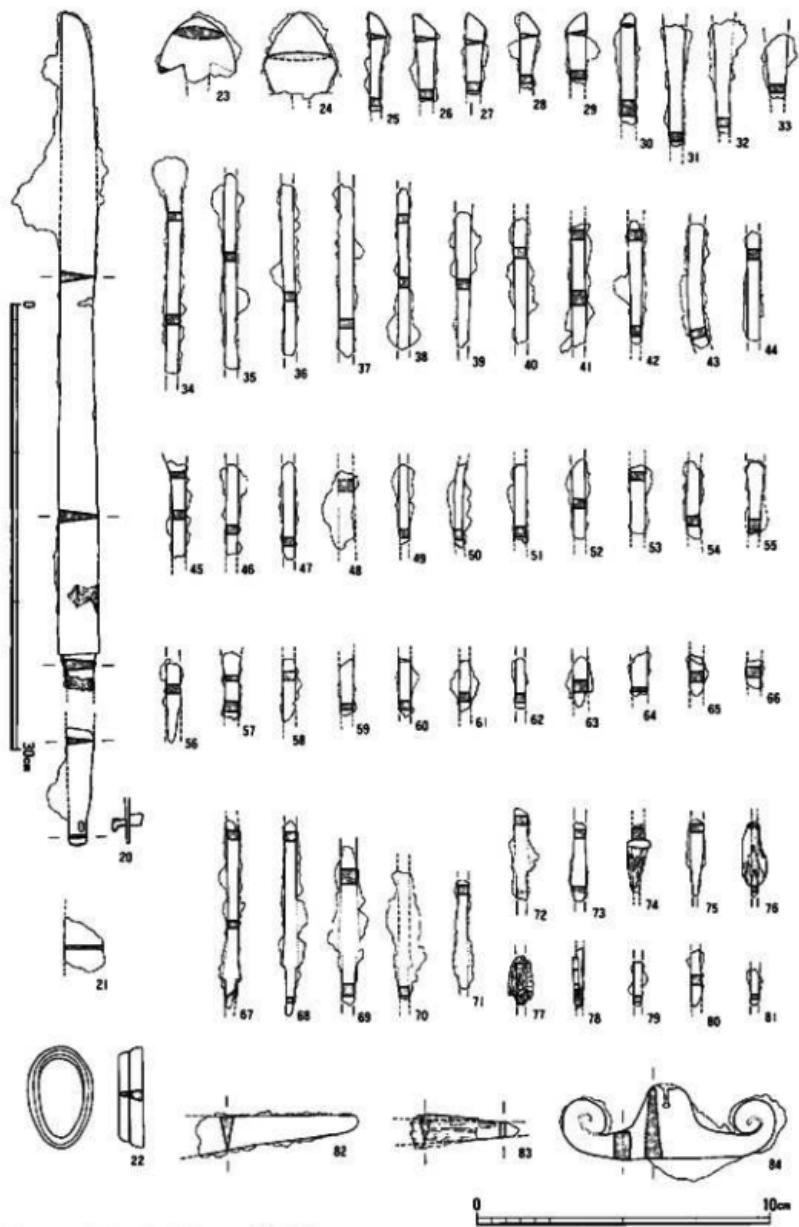
20は直刀で、石室内から出土した。3片に割れて出土し、刃部と茎部は直接接合しない。一部鎌彫れが著しいものの遺存状態が良好である。鋒はふくらがかれ、先端を斜めに切り落としたような形態である。両側で、どちらも直角に切り込んでいる。茎部には目釘穴が1孔あり目釘が残っている。刃部の一部と茎部の一部に木質が付着していた。

21は薄い板状の製品である。内面に木質が付着するため、鍼の可能性がある。

22は青銅製の資金具で完形である。一部に鍍金した痕跡が残る。また内側には木質が付着する。外面が丸みを帯びた卵形の環状品を二段に重ねているが、接合痕はなく、内面と底面は平坦で、鋳型で作製していると思われる。この他青銅製品としては図示できなかったがはと目金具2点が出土している。やはり刀装具の一部であろう。



第23図 古墳060出土土器



第24図 古墳060出土鉄製品・青銅製品

23~81は鉄鎌である。表道部や石室前の周溝から出土した。全体の形状をうかがえるものではなく、遺存状態はよくない。31~66は断面が方形の棒状品であるがこれらも鉄鎌の頭部であろう。刃部が遺存するものは8本(23~30)である。

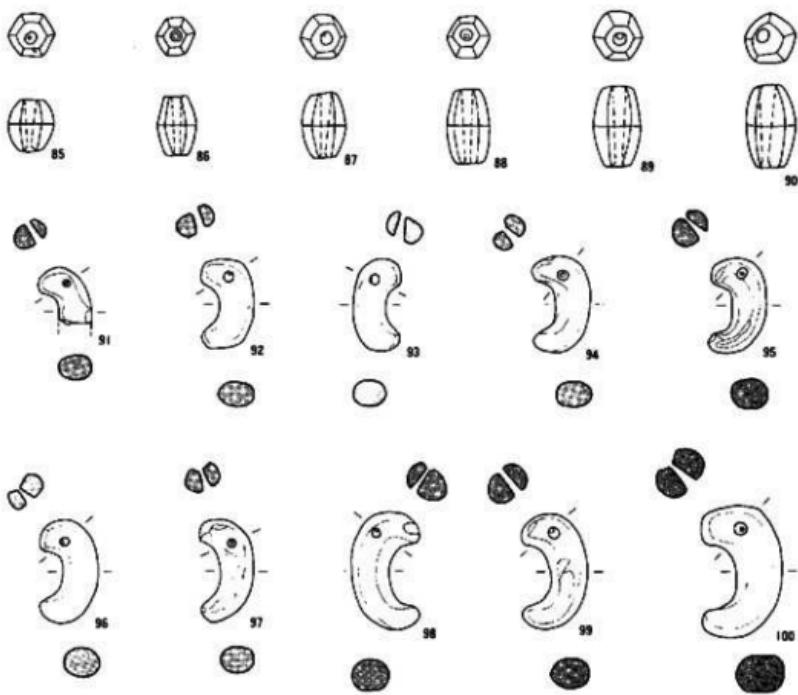
82・83は刀子である。どちらも茎部で刃部は欠損する。83は石室内の北東隅から玉類と共に出土した。また木質が遺存する。

84は燧鉄である。両端が渦巻き状にまるめてあり、中央部には穴があく。遺存状態は良い。

85~100は玉類である(第5表)。切子玉が6点、勾玉が10点ある。このうち86・94・95の3点は周溝から、残りの13点は石室北東隅の床面にまとまっていた。

85~90は水晶製の切子玉である。棱が摩耗しているものもあるがいずれも完形である。横断面が六角形、白色の半透明で穿孔は片面から行われている。

91~100は勾玉である。99は緑色凝灰岩製、この他はメノウ製である。91が2分の1を欠損し、94が頭部のごく一部を欠損するほかは完形である。片面の穿孔部分を浅く窪めた後、反対側から穿孔している。



第25図 古墳060出土玉類

第3節 土壙墓

土壙墓は4基検出した。形態と内容で2種類に分類できる。一つは調査区北部で検出した2基(028・035)である。これらは横円形に掘り込み、玉類、鐵錐等の副葬品を伴い内容は古墳の主体部と差がないが、外部施設をもたない。もう一種類は長方形に2段に掘り込み、底面に長軸と直交する浅い溝を数条掘ったものである。副葬品等の遺物は出土しない。やはり2基を調査区南部で検出した(057・058)。

1. 遺構

土壙墓028(第26図)

[遺物P39]

古墳022の西、古墳030の北東の台地の平坦部に位置する(ノ10)。平面形態は縦長の横円形を呈し($1.93 \times 1.10 \times 0.21m$)、主軸は東西を向く(N-90°-W)。埋土は黒褐色土(ローム粒子・ロームブロックが混入、しまりがよい)1層で、木棺痕は平面でも、断面観察でも検出しなかった。

遺物は東側の底面から管玉・棗玉がまとまって出土した。

土壙墓035(第26図、図版10)

[遺物P39]

古墳001の南東に位置する(ノ10)。土壙墓028の約37m北西になる。縦長の横円形で($2.56 \times 1.53 \times 0.52m$)、主軸は東西を向く(N-73°-E)。埋土は黒褐色土(ローム粒子・ロームブロック混入、しまりがない)と黄褐色土(ローム粒子・ローム混入、しまっている)が交互に堆積する。木棺痕は平面でも断面でも検出しなかった。

遺物は西側の底面から鐵錐を出土した。鐵錐は刃を西に向けていた。

土壙墓057(第27図、図版10)

古墳056の北西に位置する(キ12)。縦長の長方形で($2.92 \times 1.56 \times 0.46m$)、底面に長軸と直交した3条の溝がある。溝は底面から $0.07 \sim 0.10m$ の深さである。埋土は黒褐色土であるが、下層ほどローム粒子、ロームブロックの混入量が多くなり、色調が明るい。

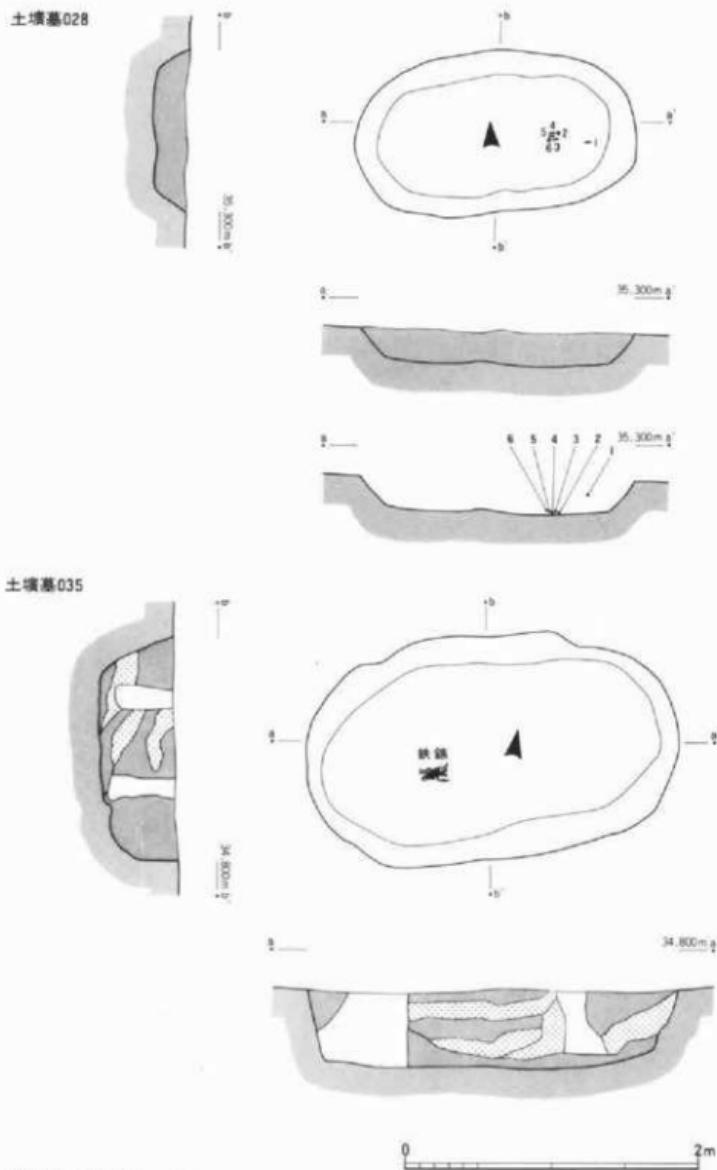
出土した遺物はない。

土壙墓058(第27図、図版10)

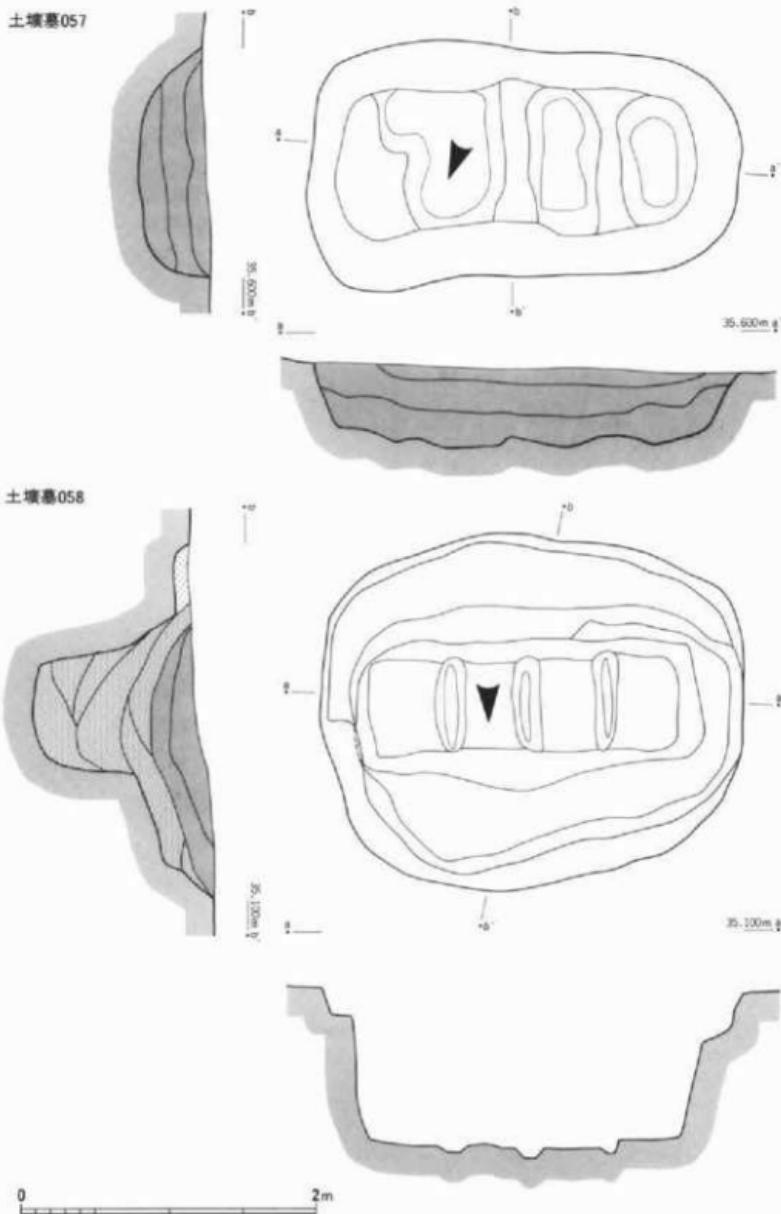
調査区南端にある(キ13)。005号墳(方墳)の西に位置する。南は立山遺跡となり、立山2号方形周溝が南東にある。また、南25mには同じ形態の2・6号土壙が存在する。

2段に落込み、上段は不整形な長横円形($2.90 \times 2.35m$)、中段は長方形($2.35m \times 1.00m$)で、底面に3条の溝を持つ。深さは確認面から $1.04m$ 、中段からは $0.80m$ である。また溝の深さは底面から $0.03 \sim 0.06m$ である。長軸は東西を向く(N-90°-W)。上層には黒褐色土(ローム粒子を混入する)、中層から下層にかけては暗褐色土(ローム粒子・ローム土を混入する)が堆積する。中段から下の層は特に混入物が多い。

出土した遺物はない。



第26図 土壤基028・035



第27図 土壌基057・058

2. 遺物

土壙墓028 (第28図、図版49)

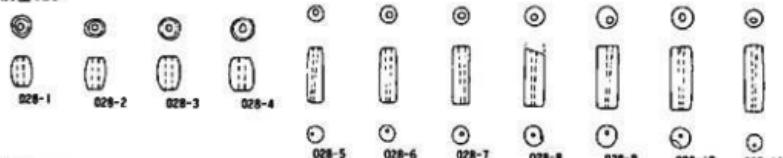
東玉4点、管玉7点が中央よりやや東によった所からまとまって出土した。この他には図示しなかったが2cm四方の壺胴部破片1点が出土している。

東玉は埋木で作られていると思われる。僅かにひびが入るものがあり、断面に繊維状の筋が観察できる。色調は黒褐色で光沢をもち、遺存状態は良好である。孔径はどちらも同じで片面穿孔か両面穿孔か不明である。管玉は、緑色凝灰岩で作られ、光沢のある淡緑色を呈している。丁寧に研磨され研磨痕はほとんど残らない。横断面径は中央部が僅かに大きい。いずれも一方の孔径が大きく、穿孔は片面から行われている(第5表)。

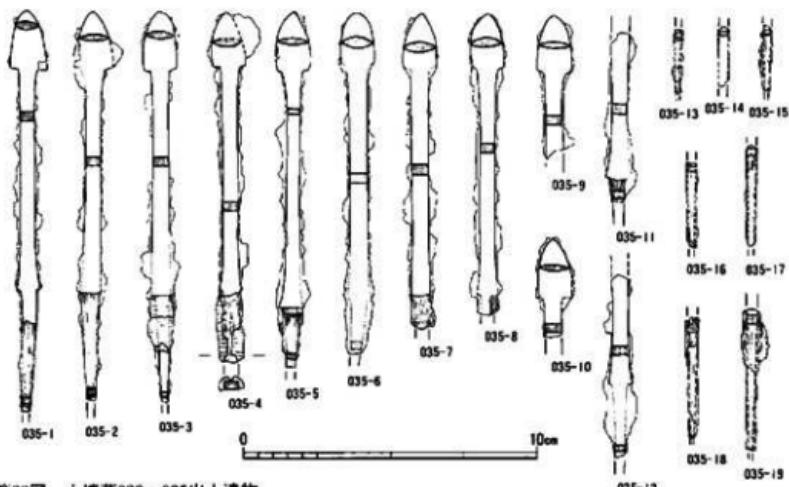
土壙墓035 (第28図、図版51)

鉄鏃は中央よりやや西によった所からまとめて出土した。刃は西に向ける。19点を実測したが、刃部が遺存したものは10本である。いずれも小形三角形式で、笠被と茎との境はハの字状に広がる(第4表)。

土壙墓028



土壙墓035



第28図 土壙墓028・035出土遺物

第4節 壺穴住居

1. 遺構

検出した壺穴住居は15軒である。調査区東側は南北にのびる谷に面しているが、所々に台地が浅くU字形にえぐられた部分があり、この部分の台地肩部から斜面を中心とまとめて立地している。台地平坦部の標高は35.00m、現在の水田面の標高は18.00m程であり、壺穴住居が立地するのは35.00mから19.00mの間で16m程の比高差がある。主軸は等高線に直交するものが多い。

斜面に立地するものが多いため、遺構の遺存状態は良好とはいえない。しかし、出土した遺物の量は多く、実測できた土器は15軒で308点を数える。また15軒中6軒が焼失住居であった。いずれも壺を持つ壺穴住居で古墳時代後期に属する。

壺穴住居002（第29・30図、図版11）

〔遺物P63〕

調査区北東の台地肩部に立地する（オ10・ク10・オ11・ク11）。西12mの所に壺穴住居004、北西14mの所に古墳022がある。

4辺が直線的で垂みのない正方形（3.47×3.77×0.50m）を呈する。壺が北壁中央よりやや東に寄った所に位置し、主軸は北西（N-32°-W）である。柱穴ではなく、南壁寄り中央に遺構中心に向かって斜めに掘り込んだ出入口施設と思われるP1（0.26×0.25×1.38m）を検出した。この他、中央と北西寄りに性格不明なP2（0.19×0.18×0.17m）・P3（0.67×0.71×0.17m）の2本のピットを検出した。壁溝は壺部分を除いて全周する。

埋土は中央部に堆積する黒褐色土（下層ではローム粒子を含む）が主体で、このほか壁際に暗黄褐色土（微細なローム粒子を含む）、壁溝に黄褐色土（微細なローム粒子多量と焼土粒子を少量含む）が堆積する。

壺は北壁の中央よりやや東に寄って構築される。北壁を外側に0.40m掘り込んで煙道としている。上層に暗褐色土（焼土粒子を含む）、その下に焼土、下層に暗赤褐色土（焼土粒子・ロームブロックを多量に含む）が堆積する。火床部は床面より僅かに座んでいる。



第29図 壺穴住居002遺物出土状態

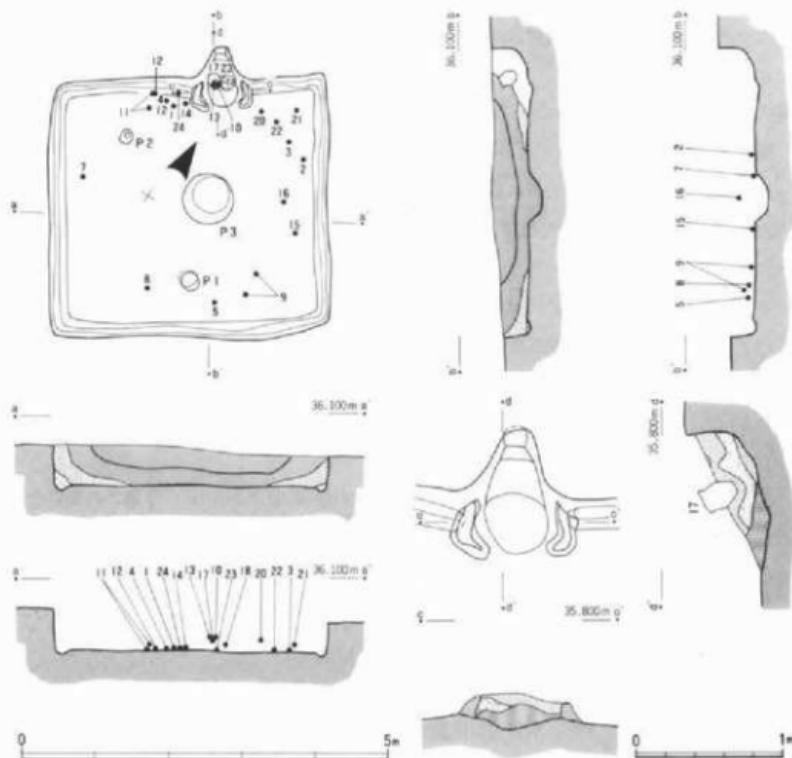
遺物は遺存状態が良好なものが多く、主として竪周辺から出土している。杯13点、鉢1点、小型土器2点、甕5点、壺1点の他土製玉、土製支脚が図示できた。竪には甕が2個体かかつたままの状態で出土し、竪脇から甕が出土している。

竪穴住居003（第31図、図版11）

[遺物P65]

調査区北東端に位置する（ク10）。竪穴住居002から台地縁辺部に沿って北東に約25mの所である。

横長の長方形を呈する。北東隅は調査区外のため調査していない。規模は4.17×8.03×0.40mで、横軸の長さが主軸の長さのほぼ倍になる。竪は北西壁中央より東によって構築される。主軸（N-31°W）と直交する中軸線上に3本のビットがほぼ等間隔に並び（P1とP2が2m、P2とP3が1.8m離れている）、これが柱穴になると思われる。両脇のP1（0.36×0.37×0.76m）、P3（0.36×0.47×0.83m）が深く、中央のP2（0.46×0.44×0.49m）はやや浅い。西隅のP4（0.36×0.39×0.17m）は貯蔵穴と思われるが一部破壊される。この他に小ビット



第30図 竪穴住居002

を多数検出した。直径は大きいもので0.13mだが0.10m以下のものが多く、深さは0.13~0.42mである。縦軸上や横軸上に並んでいるもの、北西隅を囲うように並ぶものがある。間仕切りまたは床板等の施設に付随するピットである可能性も考えられる。壁溝は北西から南西にかけて巡る。床面から焼土・炭化材を検出した。焼土は西半分に多く堆積していた。焼失住居である。

埋土は上層中央部に暗褐色土、壁際に黒褐色土、下層に暗黄褐色土（ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を含む）が堆積する。暗黄褐色土は竪穴住居全体に同じ厚さで均一に堆積しており、埋め戻し土である可能性がある。

竈は北西壁の中央より東に寄った所に壁を掘り込んで構築される。焼失住居のためか袖部は外側も赤褐色に変色し硬くしまっている。上層にかぶった粘土層は天井部が流れたものと思われ、燃焼部には上層にローム粒子が混入した黄褐色土、下層には炭化粒子が混入した黒色土が堆積していた。またここからは3点の小型土器が出土した。

遺物は須恵器杯2点、杯1点、小型土器15点、甕1点、瓶1点が図示できた。小型土器が多いのが特徴である。また、須恵器杯2点は完形品である。竈内、竈周辺の床面から出土したものが多い。

竪穴住居004（第32図、図版12）

[遺物 P67]

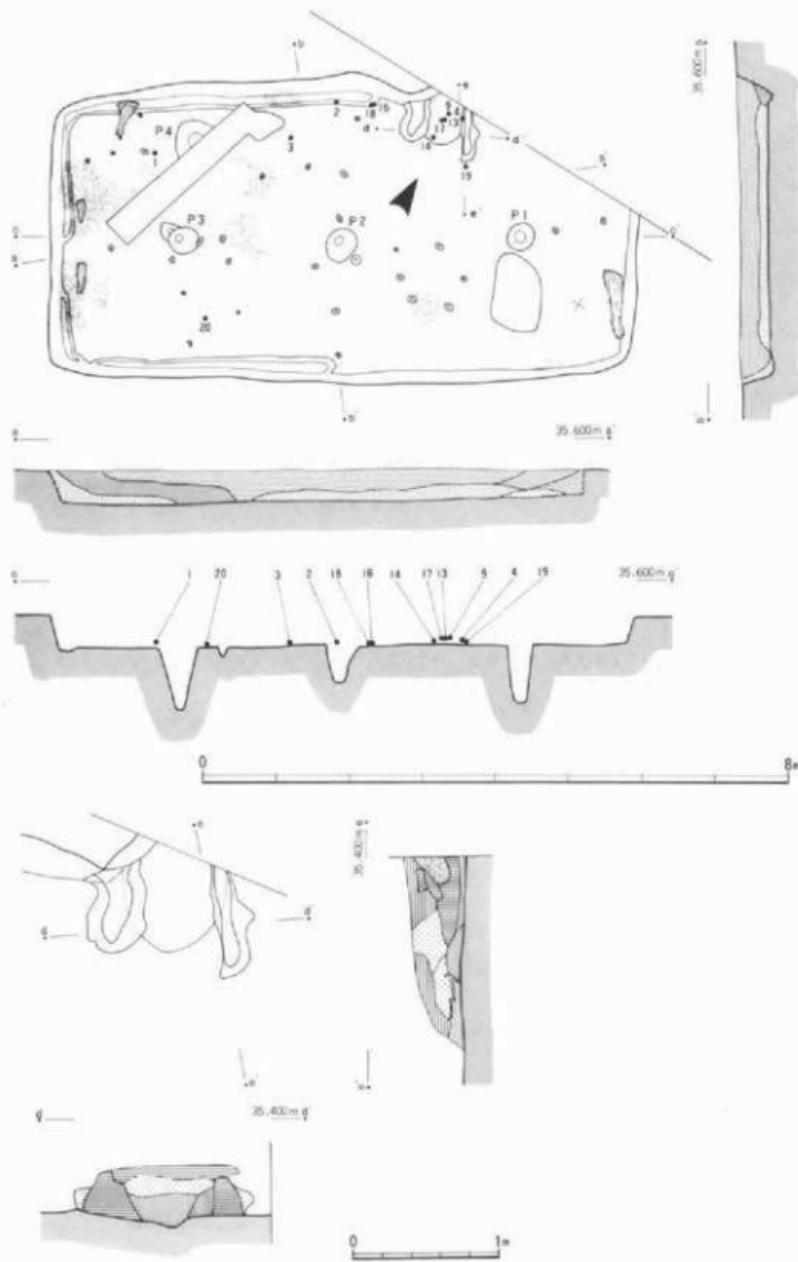
調査区東、古墳022の南東の台地肩部に位置する（オ10・オ11）。

4隅が直角で歪みのない正方形を呈している（4.88×4.85×0.50m）。竈は北壁中央に位置し（主軸N-28°-W）、4隅の対角線上に柱穴を配する。柱穴と柱穴の間隔は2.00~2.20mである。柱穴の規模は0.28~0.32×0.29~0.34×0.67~0.76mで4本に大きな差はない。このうちP2は2段に掘り込む。竈右側の北東隅に横長方形の貯蔵穴がある（0.56×0.74×0.54m）。また、柱穴P4の西側に東西にのびる高さ0.03m程の土手状の施設がある。壁溝は竈部分を除き巡っている。焼失住居で床面から焼土・炭化材を検出した。炭化材は壁際を中心に残っていた。遺存のよいものの中には直径0.10m、長さ0.80mの丸太状のものが何本かあり、いずれも長軸を中心部に向ける。

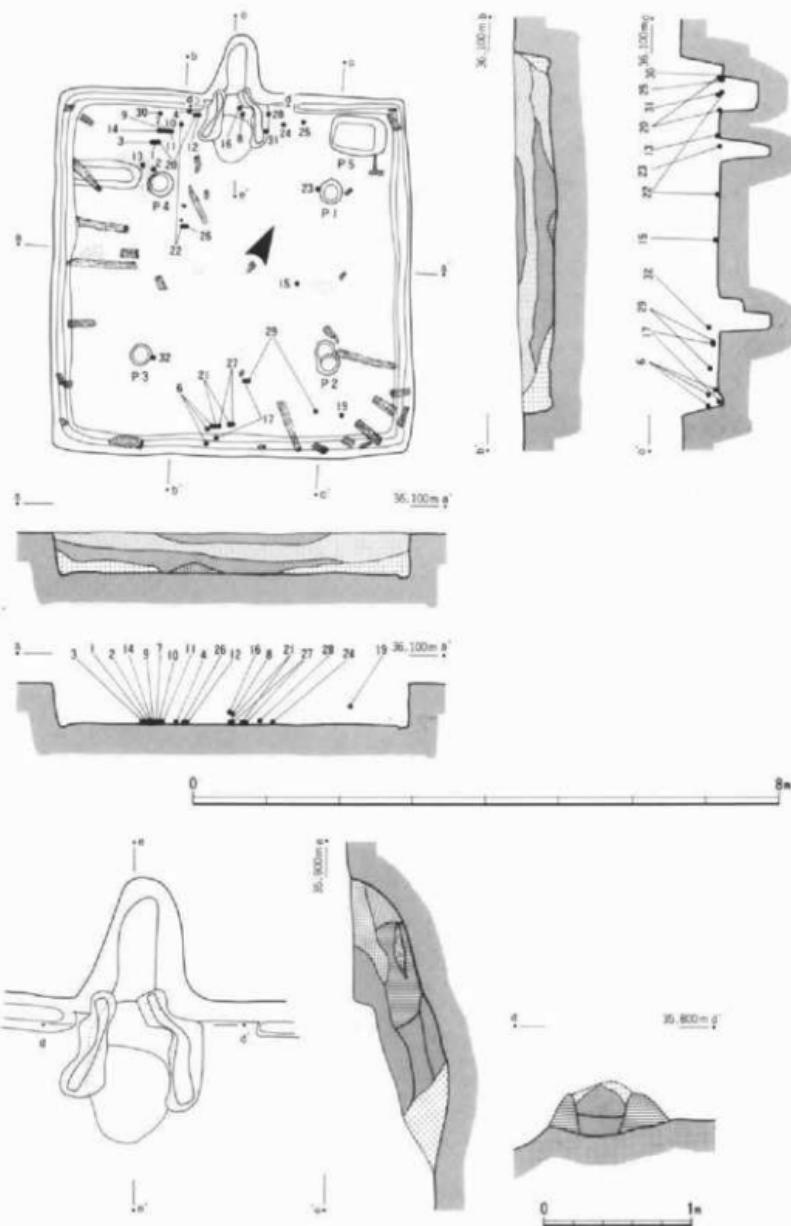
上層中央に黒褐色土、その下に暗黄褐色土（微細なローム粒子を含む）、下層に黒褐色土（粒の粗いローム粒子を含む）、下層から壁際にかけて黄褐色土（ローム土）が堆積する。また所々に焼土ブロックがある。

竈は北壁中央を0.85m外側に掘り込んで構築している。燃焼部には黒褐色土（微細なローム粒子・焼土粒子）が堆積する。竈内からは杯と鉢を出土した。

出土した遺物の量は多くしかも完形品が多い。杯17点、高杯1点、鉢6点、甕5点、瓶1点、土製支脚1点が図示できた。竈周辺の床面から出土したものがほとんどである。竈脇に杯や鉢類が数点重ねてあり、その脇に甕が伏せて置いてあった。



第31図 横穴住居003

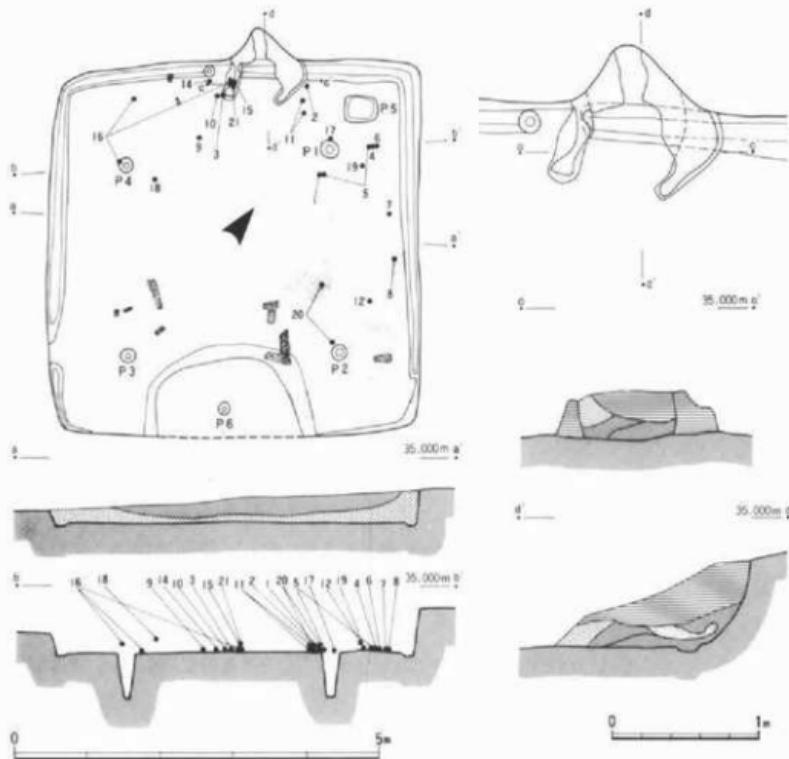


第32図 空穴住居004

竪穴住居005 (第33図、図版12)

[遺物 P70]

調査区西の谷に面した台地肩部に位置する（オ11）。竪穴住居004の南西20mの所である。南壁中央は遺存しないが4隅を検出した。正方形で(5.06×5.07×0.45m)、竈が北壁中央にあり、主軸 (N-41°-W) は等高線に直交する。柱穴は4隅の対角線上に配する。規模は0.19~0.25×0.21~0.25×0.60~0.74mで、大きな差はない。柱穴の間隔は2.45~2.60mである。貯蔵穴は横長の方形 (0.35×0.54×0.40m) で竈右側の北東隅にある。この他竈の左脇に性格が不明の小ピットが1本ある (0.15×0.16×0.47m)。また竈の反対側の壁際（南壁）の中央に馬蹄形 (1.25×2.35m) の高まりがあり、この中にピットがある (0.17×0.15×0.42m)。壁溝は一部を除き巡っている。焼失住居で焼土・炭化材を検出した。埋土は上層に黒色土、下層に暗褐色土（ローム小ブロック混入）が堆積する。竈は北壁中央を0.35m掘り込んで構築する。上層に流れた天井部と思われる粘性のある山砂が堆積し、その下に黒色土（下層ほど焼土粒子が多く混入する）が堆積する。遺存状態がよい遺物が多い。



第33図 竪穴住居005

竪穴住居006（第34図、図版13）

〔遺物 P73〕

竪穴住居005の西13mに位置する（オ11）。古墳031の西5mの所で、間に溝状構造013が南北にはしる。

4隅が直角のやや縦長の方形（5.47×5.24m）である。竈は北壁中央に位置し、やはり等高線に主軸（N-29°-W）を直交させている。柱穴4本は4隅の対角線上にある。柱穴の形態は不整形で規模は0.40～0.68×0.47～0.64×0.54～0.82mである。平面の規模に大きさはないが、P1が最も浅く、P3が最も深い。P2（0.68m）・P4（0.70m）はほぼ同じ深さである。P3内から完形に近い鉢が出土しており、抜柱していたものと思われる。柱穴平面形態が不整形なのはこのためであろう。貯蔵穴は横長の方形（0.50×0.71×0.70m）で、竈右側の北東の隅にある。また南壁際中央に小規模なP6（0.16×0.20×0.16m）がある。出入口施設と考えられる。壁溝は竈部分を除いて巡る。

埋土は上層から黒褐色土（粒の粗いローム粒子を含む）、暗黄褐色土（粒の粗いローム粒子を含む）が交互に堆積している。

竈は北壁中央を0.50m掘り込んで構築する。火床部は僅かに窪み、煙道部の傾斜は緩やかである。暗褐色土・黒褐色土（下層は焼土粒子が混入する）・暗黄褐色土が堆積する。

遺物は杯9点、鉢3点、甕3点、瓶1点、支脚1点を図示した。竈や貯蔵穴周辺を中心に出土している。一通りの器種は揃っており、遺存状態が良好なものが多い。

竪穴住居007（第35図、図版13）

〔遺物 P73〕

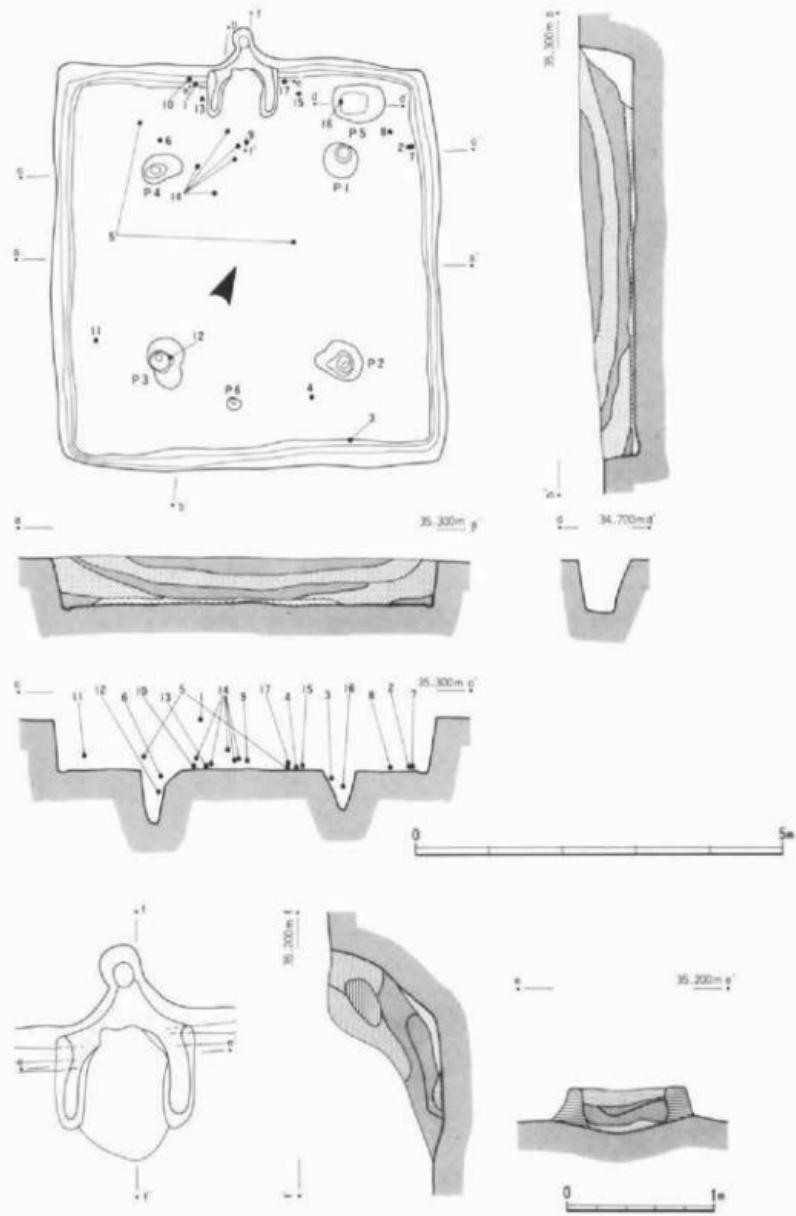
竪穴住居005の2m南西に位置する（オ11）。等高線に沿って南西5mの所は竪穴住居008である。

斜面に立地するため南壁中央は遺存が良くない。4隅が直角の横長の方形（5.70×7.00×0.70m）で4隅の対角線上に柱穴、竈の東側に横長の方形の貯蔵穴（0.35×0.46×0.47m）がある。柱穴の規模は0.18～0.27×0.19～0.30×0.44～0.60mである。P4が浅いがこの他は規模に大きな差がない。柱穴の間隔は3.35～3.85mである。壁溝はなく、壁の立ち上がりは垂直に近い。焼失住居で焼土・炭化材を検出した。特に北半部に多く検出されたが、南側のものは流れてしまった可能性がある。

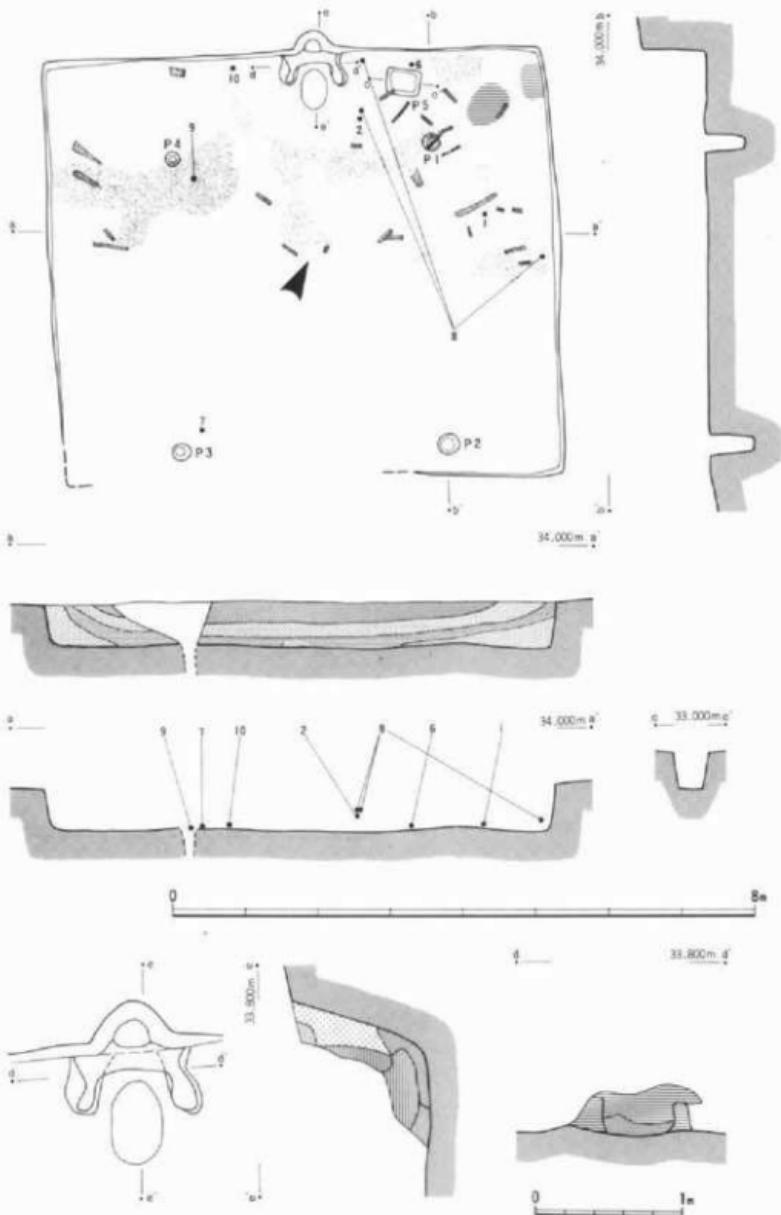
埋土は上層から黒褐色土、暗黄褐色土（ローム粒子を多量に混入）、暗褐色土（ローム粒子を少量混入）である。また壁際には中層と同じ暗黄褐色土が堆積している。

竈は北壁中央を0.25m掘り込んで構築している。火床部は僅かに窪んでいる。また、煙道部の傾斜は急である。崩落した天井構築材の下には焼土が混入した黒褐色土が堆積し、煙道部分には黄褐色土（ローム粒子主体）が堆積する。

遺物は杯6点、鉢2点、甕1点、土製支脚1点が実測できた。他の竪穴住居と比べると数が少なく、遺存状態が良好な物も少ない。



第34図 穂穴住居006



第35圖 整穴住居007

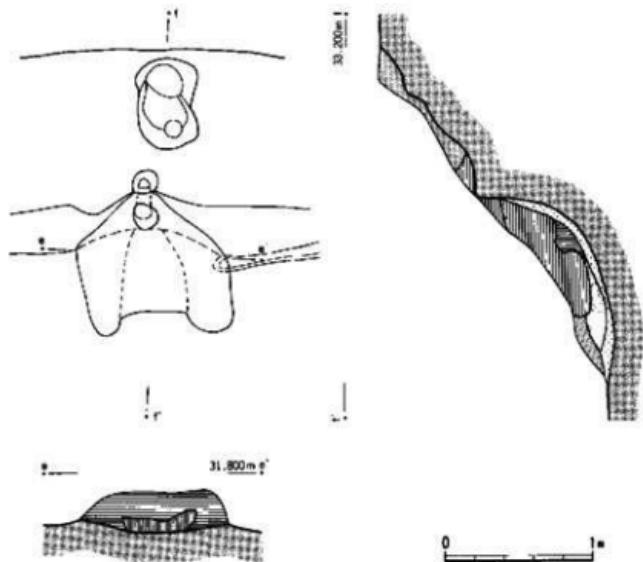
竪穴住居007の南西5mの所に位置する（オ11）。

上層中央部は大きく搅乱を受け、また斜面のため南壁の遺存がよくないが壁溝が残っていたので規模は推定できる。北壁は2段に立ち上がっており、下部は垂直に近い角度で立ち上がるが、上部の立ち上がりの角度が大きいので縦長の長方形（7.77×6.74×1.25m）に見える。しかし、床の平面形態を見るに正方形である（下場6.10×6.10m）。北壁中央に竈を設けている。主軸（N-40°-W）はやはり斜面に直交する。柱穴は対角線上に4本配し、竈右側の北東隅に貯蔵穴がある。柱穴は0.13~0.31×0.15~0.29×0.50~0.73mで直径が小さい。貯蔵穴は不整形な円形である（0.94×0.91×0.61m）。P2の南側の壁際に性格が不明なピットが1本ある（0.55×0.53×0.41m）。焼失住居で焼土・炭化材を検出した。竪穴住居全体に散っている。

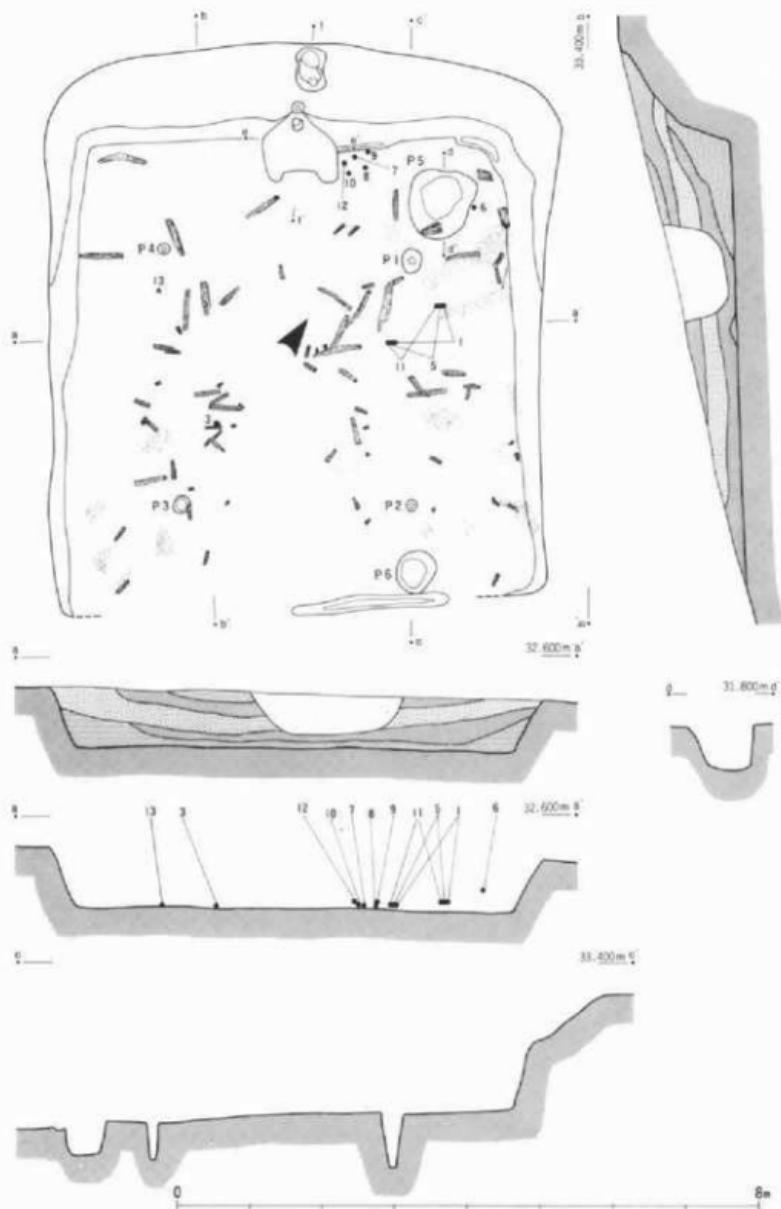
埋土は上層から暗褐色土（ローム粒子混入）、黒褐色土、暗黄褐色土（ローム粒子主体）、黒褐色土、暗褐色土（ローム粒子混入上層より多い）の順で北から流れ込むような堆積状況を示している。

竈は天井部が流れている。上部の窓には暗褐色土が堆積していたが竈に伴う施設かどうかは不明である。

遺物は杯2点、小型土器1点、鉢2点、甕5点、瓶1点、土製支脚1点の他、鉄製刀子が図示できた。



第36図 竪穴住居008竈



第37図 竖穴住居008

竪穴住居009（第38・39図、図版14）

[遺物 P76]

竪穴住居007の南東に位置する（オ11）。南に7mの所に竪穴住居015がある。

南西は溝状遺構010に破壊され、また南壁は斜面のため遺存しない。遺存する壁は直線で、隅は直角に曲がり、方形を呈している。東西は5.07mを測る。壁の高さは遺存のよいところで0.50mである。竈は北壁中央にあり、主軸（N-14°-W）は等高線に直交する。柱穴は3本検出した（0.36～0.41×0.36～0.40×0.14～0.28m）。平面規模には大きな差はないがP2は深さ0.14mで浅い。この他柱穴P2の南にP4（0.36×0.36×0.14m）があるが、性格は不明である。

南側の埋土は流れているが、北側では上層に暗褐色土、下層に黒褐色土が堆積する。

竈は北壁中央を0.30m掘り込んで構築している。そこからさらに外側に0.35mの所に煙道口を検出した。燃焼部には焼土が堆積し、煙道部には黄褐色土（ローム粒子を主体とし焼土粒子が混入）が堆積する。

遺物は杯3点、高杯1点、小型土器1点、鉢3点、壺4点の他、土器片を利用した砥石を図示した。土製支脚破片も多数出土したが遺存状態が悪く図示できない。



第38図 竪穴住居009遺物出土状態

[遺物 P79]

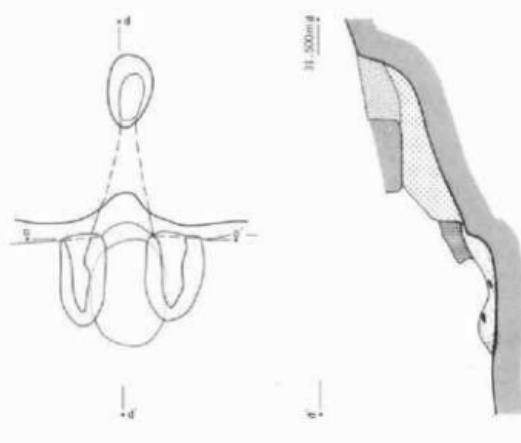
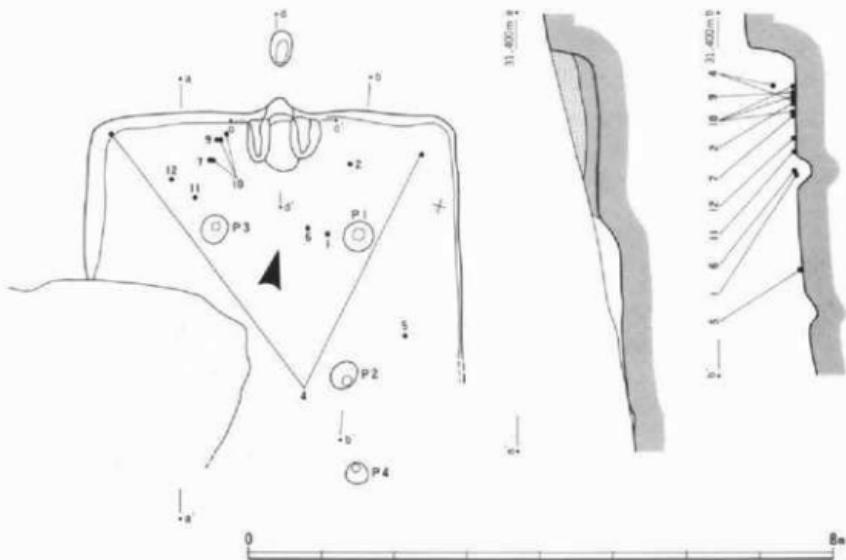
竪穴住居011（第40図、図版15）

調査区中央部の斜面に竪穴住居012と並んで立地する（オ12）。竪穴住居008の22m南西になる。僅かに縦が長い方形（5.22×4.82×0.40m）で、主軸（N-24.5°-W）は等高線にほぼ平行している。このため西側の壁は1.30mを測るが、東側は0.20mしか遺存しない。柱穴と思われるピットを4本検出した（0.34～0.47×0.34～0.51×0.56～0.61m）。このうちP1を除く3本は対角線上に位置し、それぞれの中心を結ぶと遺構と相似形の方形になるが、P1はこれらより中心に寄った所に位置する。P4が僅かに平面規模が大きいが、深さなどには大きな差はない。壁溝は西壁と南壁に巡る。竈脇と西壁際の床面から焼土を検出した。

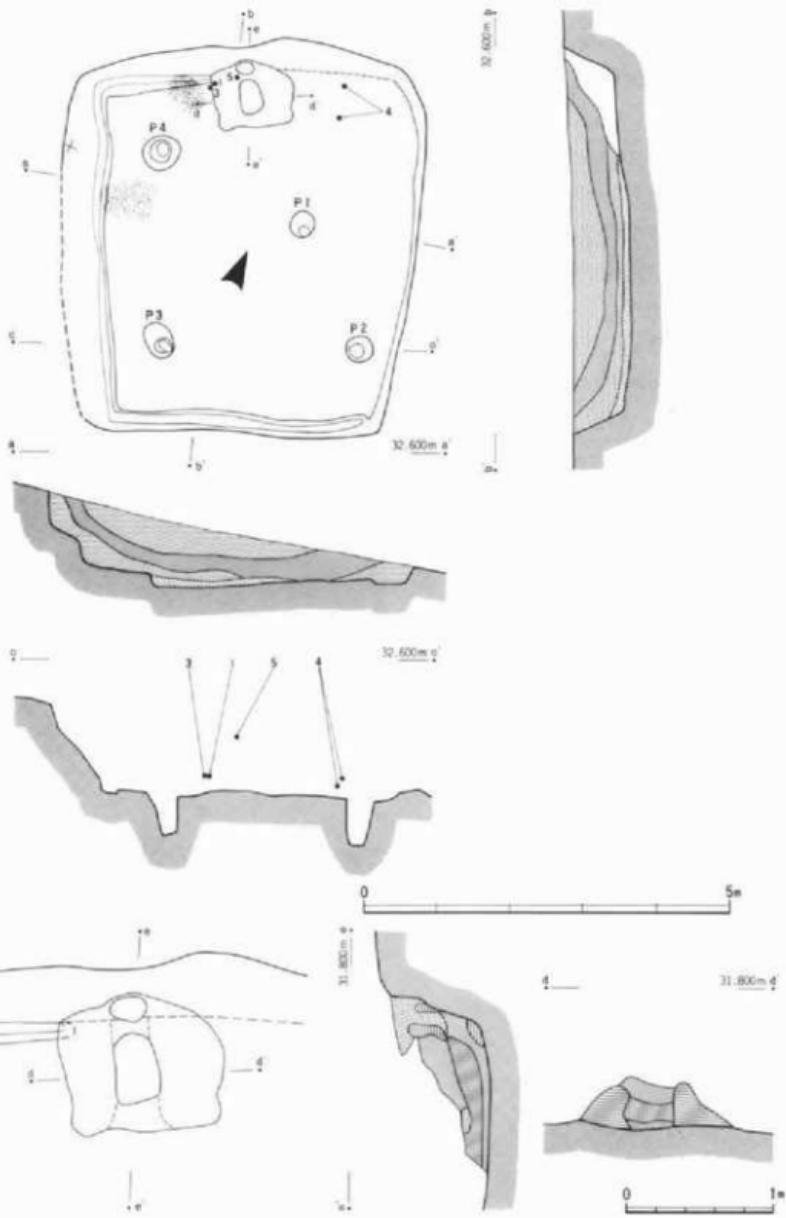
埋土は上層から暗褐色土（ローム粒子混入）、黒褐色土、暗褐色土（漸移層）、暗黄褐色土（ローム粒子が主体）、黄褐色土である。

竈は北壁中央に構築される。遺存状態が良好で掛け口、煙道口が残る。燃焼部には上層に黒色土、中層に暗赤褐色土（焼土粒子が混入）が堆積する。

図示できる遺物は杯5点、壺2点である。いずれも竈周辺から出土している。他の竪穴住居と比べ、混入する遺物は140点余で必ずしも少くないが遺存状態が良いものは少なかった。また、器種がそろっていない。



第39図 穂穴住居009



第40図 穂穴住居011

竪穴住居012（第41・42・43図）

[遺物 P 79]

竪穴住居011の1.70m南に並んで位置する（オ12）。主軸（N-122°-W）は等高線と直交しており、主軸が等高線と平行になる竪穴住居011とは主軸を90°異なる。

東壁は遺存しないが、4本の柱穴の配置から推定すると僅かに横長の方形を呈していたと思われる。南北の軸は6.44m（床面では5.24m）を測る。柱穴の規模は $0.52 \sim 0.60 \times 0.47 \sim 0.60 \times 0.15 \sim 0.55$ mである。平面規模には大きな差はないがP 1が0.27m、P 2が深さ0.15mと浅く、P 3・P 4はそれぞれ0.53mと0.54mである。壁はなだらかに傾斜して立ち上がり、壁溝はなく、壁高は遺存の良い西壁で1.00mである。

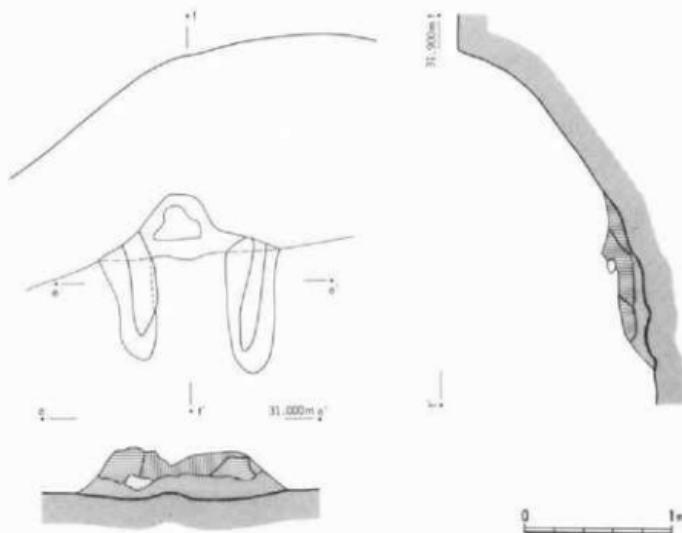
中央部には黒褐色土（ローム粒子が混入）が堆積し、壁際には暗黄褐色土（ローム粒子が多量に混入）が堆積する。

窓は西壁中央を掘り込んで構築している。床面の上に黒褐色土（しまりが良い）を敷き、床より一段高くして袖を構築している。煙道の立ち上がりは緩やかである。窓内には暗赤褐色土が堆積する。

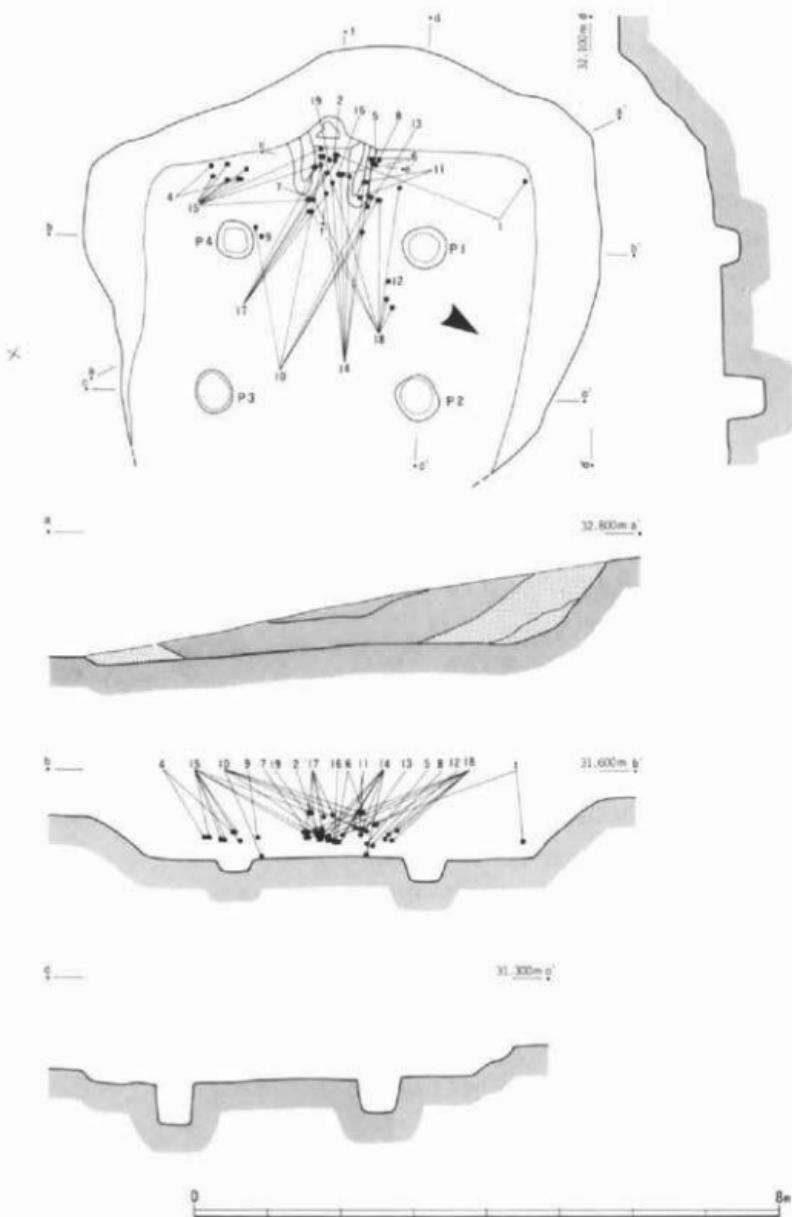
遺物は杯7点、高杯2点、鉢1点、甕6点、懶2点、支脚1点が図示できた。窓内と窓周辺を中心出土する。



第41図 竪穴住居012遺物出土状態



第42図 竪穴住居012窓



第43図 穂穴住居012

竪穴住居015（第45図、図版14）

[遺物 P81]

竪穴住居009の南6mの所に位置する（オ12）。

斜面に位置するため南隅付近は壁が遺存しない。しかし3隅を確認できたので規模は推定できる（ $5.75 \times 6.05 \times 1.00\text{m}$ ）。竪は北壁中央部に有り、主軸（N-33°-W）は等高線と直交する。対角線上に4本の柱穴を配し、竪右側に横長方形の貯蔵穴P5（ $0.52 \times 0.75 \times 0.67\text{m}$ ）がある。柱穴の規模は $0.48 \sim 0.77 \times 0.41 \sim 0.45 \times 0.35 \sim 0.48\text{m}$ である。北西側の2本（P1・P4）が $0.45\text{m} \times 0.48\text{m}$ とやや深いが、南東側の2本（P2・P3どちらも深さ 0.35m ）は 0.10m ほど浅い。柱穴P1の底面から鉢（47）が出土しているため抜柱している可能性がある。壁は垂直に立ち上がり、壁溝は壁が遺存する部分では竪を除いて全周している。北西隅の床面には焼土が多量に堆積しており、焼失住居であったと思われる。

埋土は上層から黒褐色土、暗褐色土（粘性がある）、暗黄褐色土（焼土粒子・粘土粒子が混入）である。

竪は北壁中央を 0.20m 掘り込んで構築するが右袖は遺存しない。

出土した遺物の量は竪穴住居017について多く破片数は831点を数える。また、実測可能な遺物の数は本遺跡の竪穴住居中もっとも多く、須恵器杯5点、杯33点、高杯1点、小型土器4点、鉢5点、甕20点、土製品1点、鉄製鎌1点の合計70点が図示できた。

竪穴住居017（第44・46図）

[遺物 P85]

竪穴住居012と竪穴住居015の中間にある（オ12）。

僅かに横が長い方形を呈する（ $6.08 \times 6.52 \times 0.60\text{m}$ ）。竪は西壁中央にあり、主軸（N-69°-W）は等高線に直交する。柱穴は対角線上に4本配する。規模はP1（ $0.62 \times 0.66 \times 0.32\text{m}$ ）・P2（ $0.65 \times 0.64 \times 0.27\text{m}$ ）がほぼ同じであるがP3（ $0.75 \times 0.85 \times 0.53\text{m}$ ）・P4（ $0.92 \times 0.73 \times 0.45\text{m}$ ）が大きい。P5は小型であるが貯蔵穴と思われる方形を呈している（ $0.50 \times 0.54 \times 0.62\text{m}$ ）。壁は垂直に近い角度で掘り込んでおり、壁溝はない。

埋土は黒褐色土（ローム粒子・焼土粒子・遺構材が混入）である。

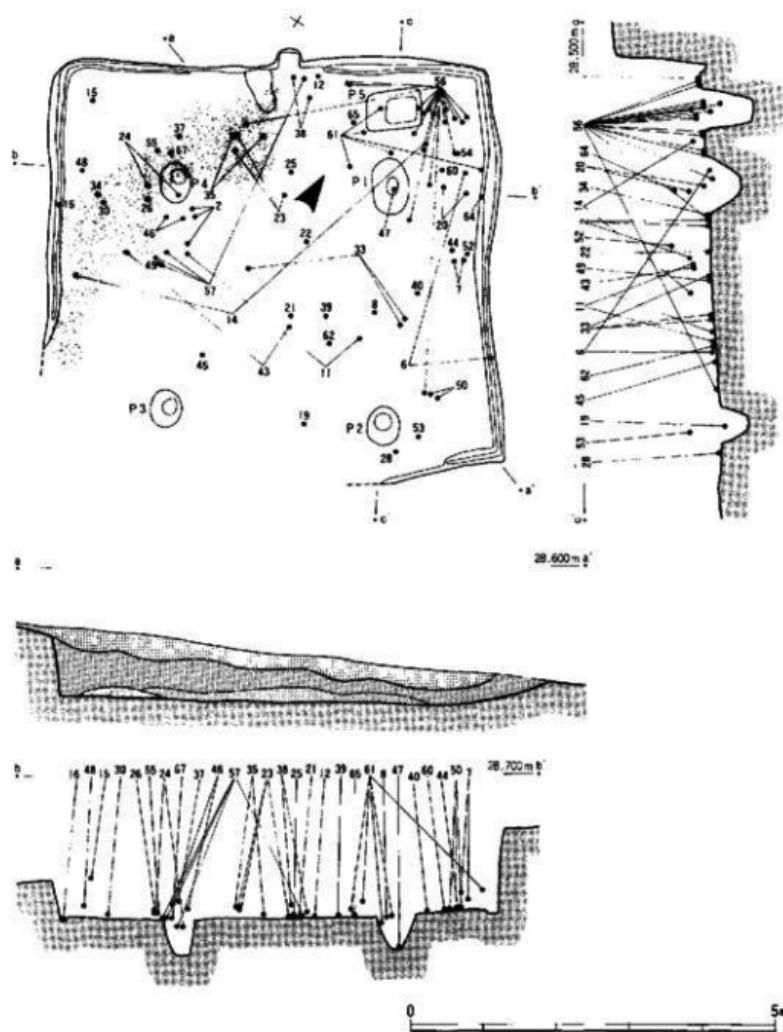
竪は、設置場所を僅かに掘り窪めて黒色土（締まりが非常によい）で埋め戻し、その上に袖を構築している。燃焼部には流れた天井部の構築材（黄褐色砂質粘土）が堆積し、その下に暗赤褐色土（黒色土・構築材・焼土粒子が混入）が堆積する。袖の内側は火熱により焼土化する。

出土した破片数は本遺跡の竪穴住居中もっとも多い。須恵器2点、杯15点、高杯・小型土器・

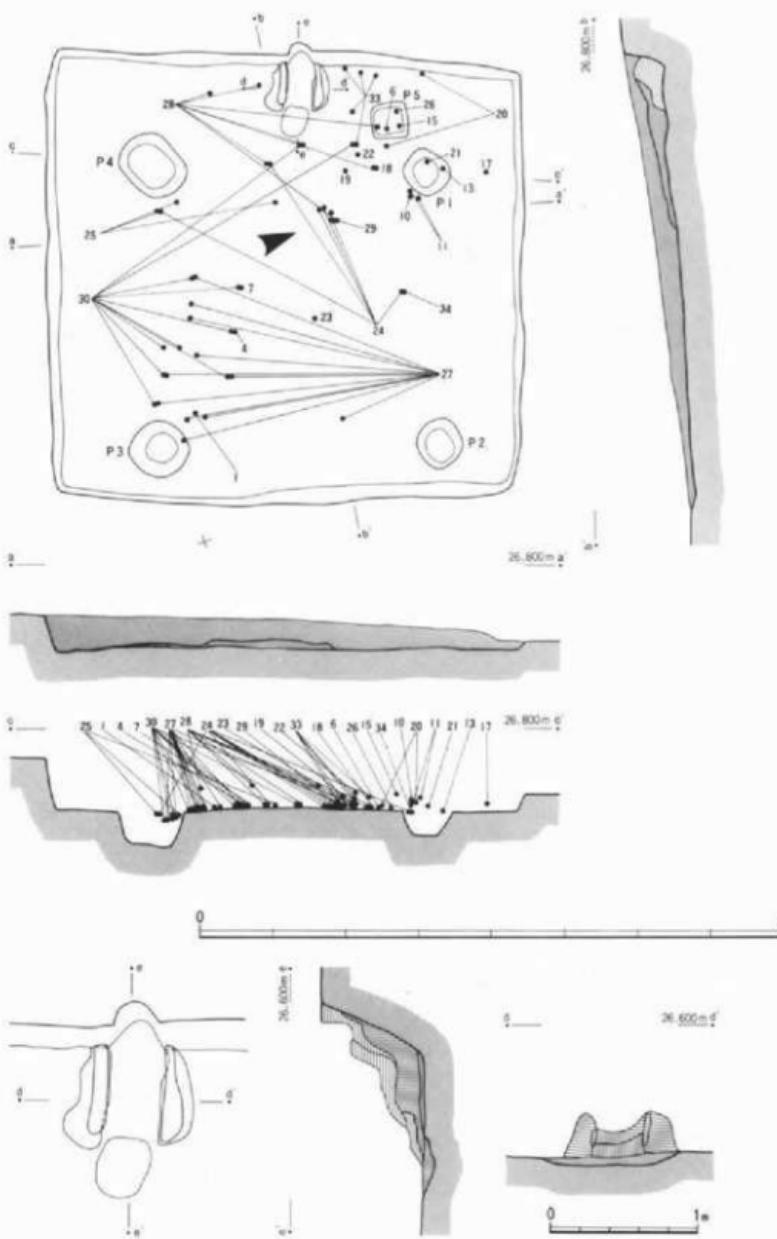
甕各1点、鉢2点、甕・壺12点を図示した。



第44図 竪穴住居017遺物出土状態



第45図 縱穴住居015



第46図 墓穴住居017

竪穴住居018（第47図、図版15）

[遺物 P 85]

竪穴住居017の30m（直線距離）東、斜面のさらに下に位置する（ク12）。

竪は西壁中央よりやや南に寄った所にあり、主軸（N-60°-W）は等高線に直交する。やや横長の方形（4.65×5.46×0.58m）を呈する。柱穴を4本配し（0.32×0.47×0.32×0.49×0.36×0.53m）、東壁の竪と向かい合う位置に出入口施設と考えられるP5（0.38×0.37×0.47m）がある。

黒褐色土・暗褐色土（焼土細粒を少量含む）が堆積する。

竪燃烧部には暗赤褐色土（焼土ブロック・粘土粒子混入）が堆積しその上に構築材がのっている。

遺物は須恵器杯蓋・高杯・小型土器が各1点、杯8点、鉢2点、甕11点が図示できた。

竪穴住居019（第48図、図版15）

[遺物 P 90]

竪穴住居018のさらに下に位置する（ク12）。標高19.50mである。

正方形を呈する（4.71×4.90×0.45m）。竪は西壁中央にあり、主軸（N-64°-W）は等高線に直交する。柱穴は4本配するが、対角線上からはずれたものもあり、特に東のP2・3は壁に近いところに位置する。このため柱と柱を結んだ線は不整形な方形となる。また規模も色々で、P1（0.37×0.35×0.66m）、P2（0.32×0.33×0.18m）が小型で、P3（0.48×0.50×0.33m）、P4（0.58×0.56×0.47m）がやや大きく、P1が最も深い。また、P1は中心に向かって斜めに掘り込む。竪右脇に方形の貯蔵穴P5（0.82×0.60×0.42m）がある。

埋土は黒褐色土で、上層には焼土が若干混入し、下層には褐色土が混じる。

竪は西壁中央を0.40m掘り込んで構築しているが、右袖は一部破壊される。燃烧部には赤褐色土（焼土粒子・焼土ブロック混入）が堆積する。

遺物は全部で6点が図示できた。他の竪穴住居に比較すると少ない。

竪穴住居023（第49図）

[遺物 P 90]

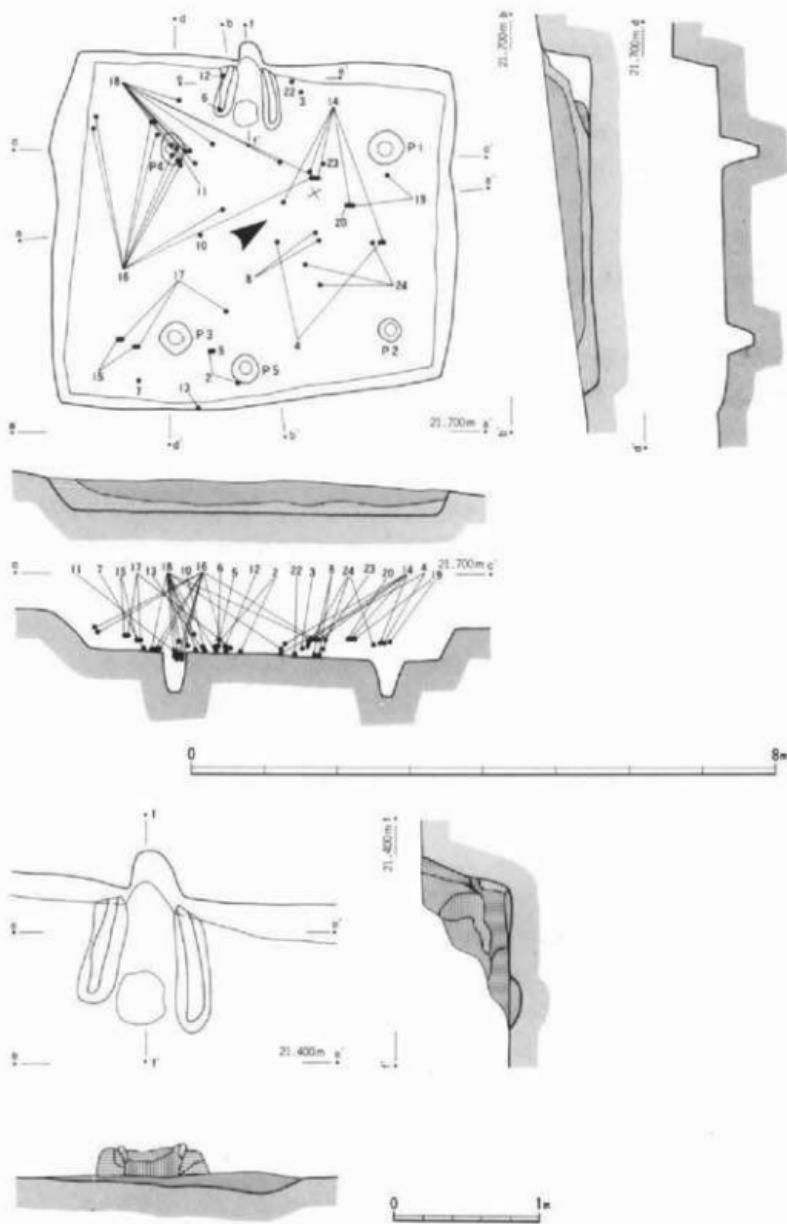
調査区東端に他の竪穴住居とは離れて位置する（ク11・ヤ11）。

竪は西壁中央にあり、主軸は等高線と直交する。東半分の壁は遺存しないが、柱穴を方形に4本検出し、正方形を呈していたと思われる。遺存する南北は5.20mである。壁高は遺存の良いところで0.70mである。柱穴の規模は色々で、P1（0.44×0.38×0.50m）が深く、P2（0.26×0.28×0.38m）・P3（0.30×0.31×0.14m）が小型で、P4（0.48×0.50×0.35m）が大型である。壁溝は西から東壁の一部を除き巡っている。

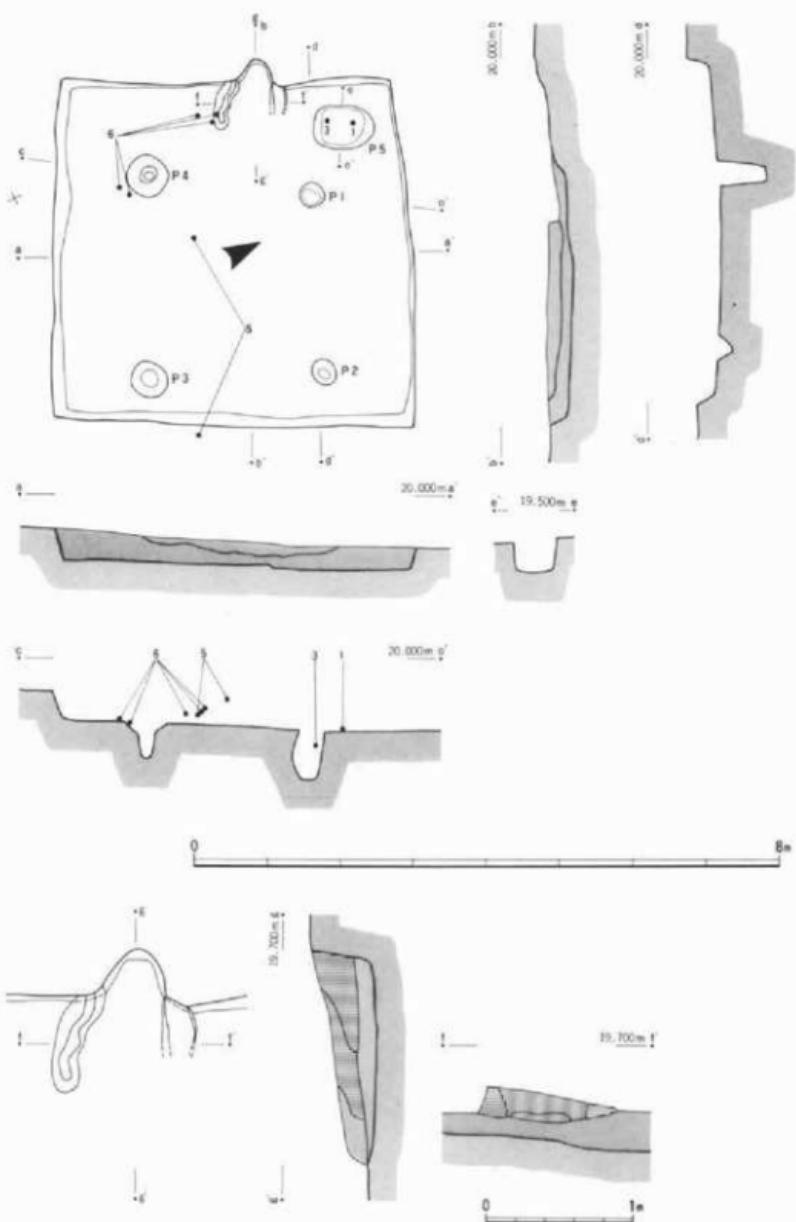
埋土は黒褐色土（ローム粒子混入）を主体とする。

竪は西壁中央を0.15m掘り込んで、構築する。暗赤褐色土（焼土ブロック・砂質粘土混入）が堆積し、その下に暗黄褐色粘土（上面は火を受け焼土ブロック化する）が堆積する。

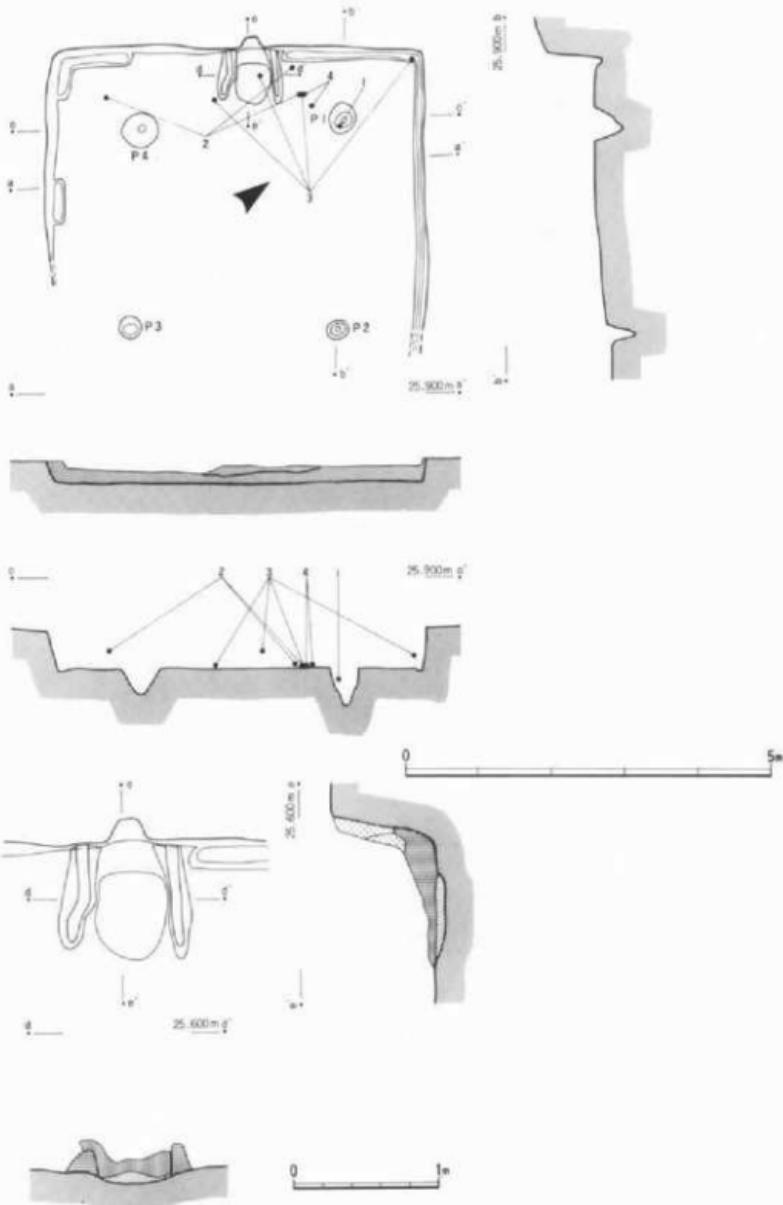
遺物は須恵器杯身、杯、鉢が図示できたが、煮沸容器がなく、他の竪穴住居に比べ少ない。



第47図 穂穴住居018



第48図 壇穴住居019



第49図 穹穴住居023

2. 遺物

竪穴住居から出土した遺物には土器類の他、土製品（支脚、玉他）、鉄製品（刀子、鎌）等がある。遺存状態の良好な遺物が多く、15軒の竪穴住居から出土した土器類のうち実測できたのは総数 308個体を数える。実測可能な土器が最も多かったのは竪穴住居015で68個体、最も少なかったのは竪穴住居023で4個体である。

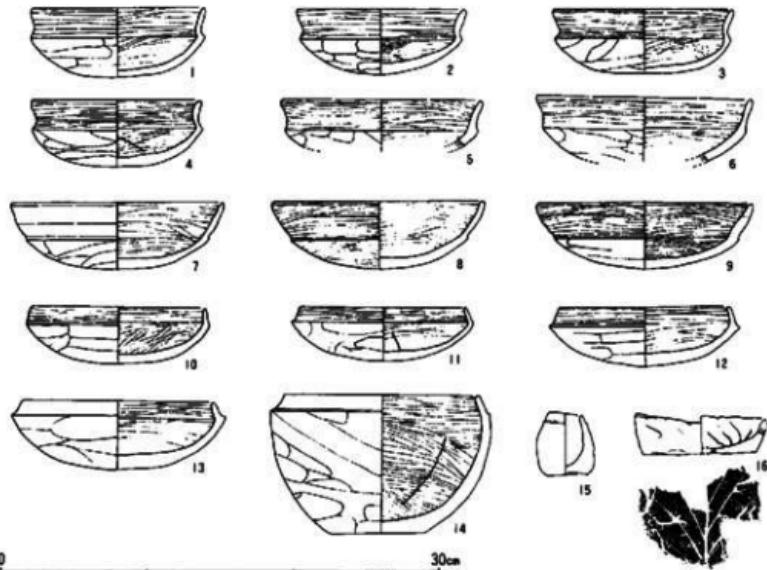
竪穴住居002（第50・51図、図版22・28・29・49）

[土器観察表 P 149]

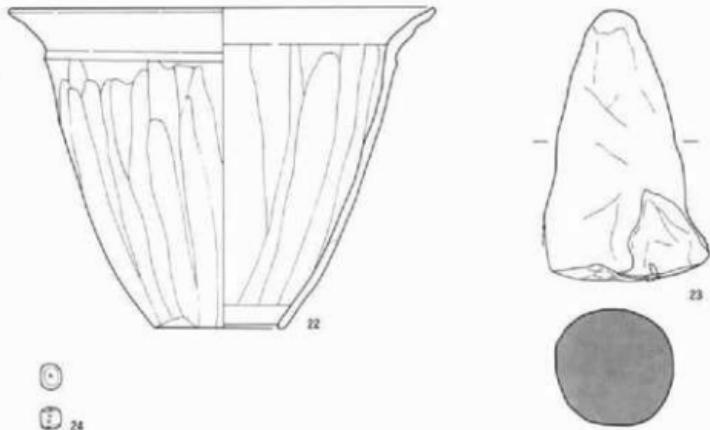
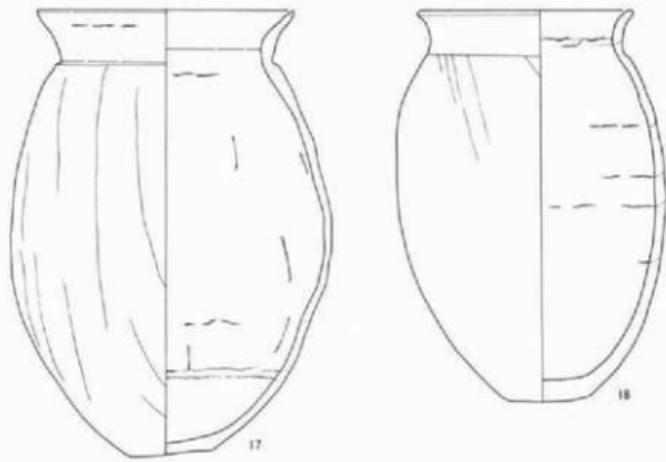
杯13点、小型土器2点、鉢1点、壺5点、櫃1点、土製支脚1点、土製玉1点が図示できた。一通りの器種が揃っている。この他の破片は120点程度杯と壺が多い。

遺物は竪周辺を中心に各壁際から出土している。床面から出土した遺存状態の良好なものが多いた。竪には壺（17・18）が2個体並んで掛かり、壺の下からは土製支脚（23）が出土した。左の壺（17）の中には杯2点（10・13）が入っており、土はほとんど入っていなかった。口径から考えて杯（10）が蓋の役割をしていたと考えられる。右の壺（18）には土が充満していた。竪の左側の床面からは櫃（22）が出土し、その周辺からは杯（2・3）、壺底部を出土した。また、竪右側には鉢（14）、杯（1・4・11・12）が並んでいた。この他の杯5・8・9は南壁周辺、7は北西の壁際にあった。小型土器（15・16）は東の壁近くから出土している。

杯1～4は丸底で体部外面に突出する明瞭な稜を作り、口縁部が強く外反する形態で口縁部と稜の部分の径がほとんど同じである。4点とも調整技法、法量とも大きな差がなく丁寧な作



第50図 竪穴住居002出土遺物（1）



0 5cm 0 30cm

第51図 積穴住居002出土遺物（2）

りである。7～9は体部中位に稜を作り、口縁部が大きく外方に開く形態である。やはり法量もほぼ同じである。10～13は稜が上半部に有り、口縁部が短く内傾する形態である。13はやや大きいが、10～12は法量にはほとんど差がない。また、図示した杯は全て内外面黒色処理をしている。しかし、ほとんどのものが倒げており、特に外面の遺存状態が悪い。この中で、2は比較的遺存が良い。

鉢(14)は完形である。15の小型土器は壺形、16は器高が低い偏平な箱形の形態で、体部には手指で成形した痕跡が残り、底部には木葉痕が残る。

壺は17のほうが火熱による器面の荒れが著しい。18の底部中央に特に付着物が多いところがあり、これは土製支脚のあたっていた痕跡である可能性がある。

土製支脚は底面の一部が剥がれ落ちているのみで、遺存状態は良い。裾が大きく広がった安定した形態のものである。径は上端部で2.0cm、下端部で11.0cmを計る。高さは18.0cmで、壺(18)の底部の床からの高さと同じである。土製玉は竈脇の床面から出土した(第5表)。

豊穴住居003(第52・53図、図版22・30)

[土器観察表P150]

須恵器杯身2点、杯1点、小型土器15点、壺と瓶がそれぞれ1点ずつが図示できた。一通りの器種は揃っているが小型土器が多いのが特徴である。これらは竈内から出土したもの以外床面から出土している。また図示できなかった破片は65点と少なく、このうち48点が小型土器であった。焼失住居ではあるが煮沸容器以外の土器に特に火熱を受けた痕跡は認められない。

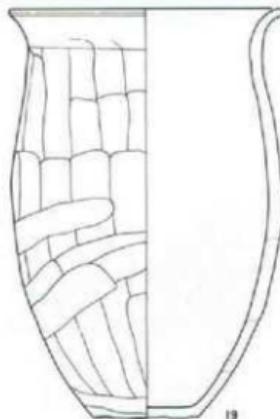
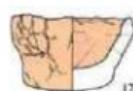
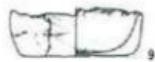
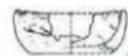
須恵器杯身2点(1・2)と杯(3)は完形である。須恵器杯身は1・2とも口縁部が短く内傾する形態で、1の底部には線を2本並べた籠書きがある。3の杯は体部外面の中位よりやや上に突出した稜を作り口縁部が内傾する形態で、丁寧な作りである。内面の黒色処理の遺存も多い。1は貯蔵穴P4脇、2は竈西側の北壁際、3はこれら2点の間から出土した。

小型土器は立ち上がりがあり傾斜せず、器高が口径の半分以下で高さがない偏平な箱形の形態のもの(4～9)と立ち上がりが内彌氣味で小型のもの(10～13)、やや大型で立ち上がりが外方へ開く形態のもの(14～18)がある。内面をナデ、外面を難なヘラ削りで仕上げているものが多い。このうち4・9・13・14・17の5点が竈内から出土した。また16・18は竈左側の壁際から18に16を重ねた状態で出土した。外面を赤色塗彩しているものもあるが4と13を除くと遺存状態が悪い。

壺(19)は竈右袖前に横倒しの状態で、瓶(20)は南壁際西寄りの所から出土した。どちらも遺存状態は良い。土製支脚は図示できなかったが破片は出土している。



第52図 豊穴住居003遺物出土状態



0 30cm

第53圖 堅穴住居003出土遺物

杯17点、高杯1点、鉢6点、甕5点、壺1点のほか土製支脚、土製品を出土した。土器は豊富で、器種も揃っている。完形品、また完形に近いものなど遺存状態が良好なものが多い。遺物は竪周辺と南壁際中央に集中し、ほとんどが床面から出土している。特に竪左側には壺(30)が伏せて置かれ、この脇に杯類が5枚（上から14・9・7・10・11）と杯（1・3）・鉢（20）が重ねて置かれ、この他にも杯（4・12）、鉢（22）が並んでいた。また竪右袖脇には甕（25）と鉢（24）が並べて置かれていた。この他竪内からも杯（8・16）が出土している。

1～17は杯である。1～4・7～11・13～15は口端部の一部などを欠損するが完形に近い。すべて外面に稜をもつタイプであるが、稜の高さや口縁部の形態で何種類かに分けられる。1～7は稜が中位にあり、口縁部が外反する。この中でも1～4は稜が横方向に突出している。また、8～11も稜が中位にあるが口縁がやや外傾しており、底面も偏平で器高が低い。13・14は稜が中位よりやや上にあり、口縁部が短く外反する。底部は偏平で器高が低い。15も稜が中位よりやや上にあり、口縁部は真っ直ぐ立ち上がって深さがある。16・17は口縁部が短く内傾する形態である。ほとんどが内面から口縁部外面をヘラ磨きし、外面体部から底部はヘラ削りで整形する。15のみ体部外面もヘラ磨きし、底部には金属を使用したような細い溝状の擦痕が残っている。1～7、10・11・13・14・17は内外面を黒色処理し、15は内面のみ黒色処理している。また、8・9・12は内外面赤色塗彩し、16は外面のみ赤色塗彩する。2・13はP4脇の焼土下の床面、15は中央の床面から、6・17は南壁際から出土した。

19～24は鉢である。口端部の一部などを欠損するのみで遺存状態は良好である。23はP1脇、19・21は南壁際から、20は竪の左脇から出土した。

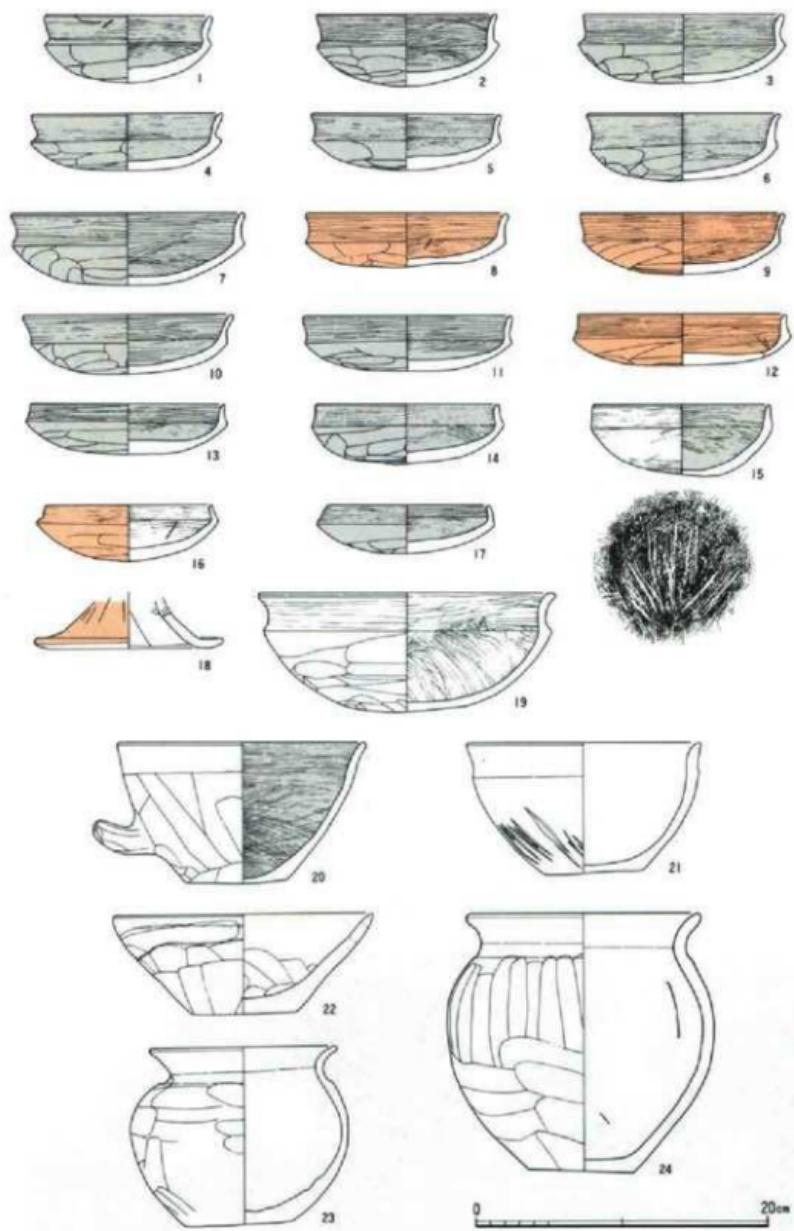
25～29は甕である。25以外は遺存状態がよくない。壺（30）は口縁部の一部を欠損する。

土製支脚は竪右袖脇から出土した。下端部を欠損する（遺存長14.7cm、径7.5cm）。胎土には砂粒・小石を含む。

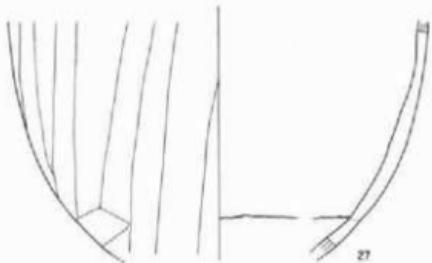
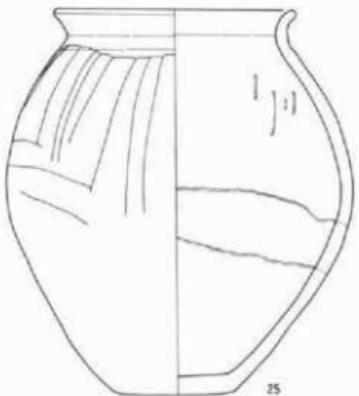
32は弓なりに曲がった棒状の土製品である。遺存長15.5mm、径4.5mm、重さ0.43gである。



第54図 竪穴住居004遺物出土状態



第55図 穂穴住居004出土遺物（1）



0 30cm



0 5cm

第56図 穂穴住居004出土遺物 (2)

出土した遺物は杯・小型土器・鉢・甕・土製支脚で、このうち杯7点、小型土器1点、鉢5点、甕7点、土製支脚1点を図示した。一通りの器種は揃っており、鉢と甕の割合が多いのが特徴である。これらは竪周辺の床面から多く出土している。とくに竪左袖脇には甕(14・15)が並んでおり、更にその隣には土製支脚(21)が置かれていた。またその前には杯(3)と鉢(10)が重ねて伏せてあった。焼失住居であるが甕などの煮沸容器以外で火熱を受けた痕跡が認められるのは11の鉢のみである。復原できなかった破片は甕胴部の大型の破片が多い。

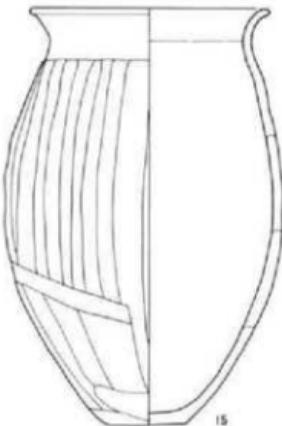
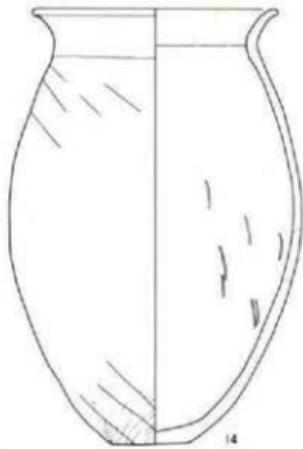
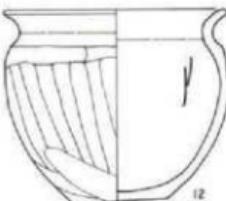
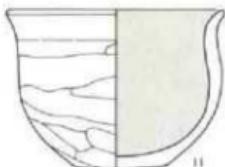
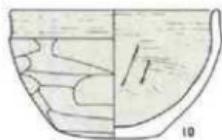
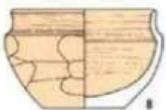
1~7は杯である。3と7は完形に近く、4・5は2分の1程度遺存する。また1・2・6は破片による復原実測である。鉢に比べると遺存状態が良好なものはない。いずれも丸底で口縁部と体部の境に明瞭な稜をもつ形態であるが、口縁部が強く外反し、稜が突出するもの(1~3)、口縁部が緩やかに外反し、底面が偏平で器高が低いもの(4~5)、小型で口縁が緩やかに外反するもの(7)がある。1~6は内外面を黒色処理し、いずれも黒色処理の遺存状態がよい。7は内外面を赤色塗装している。2は竪右袖脇から、3は竪左袖脇に伏せて置いてありその上に鉢がやはり伏せて重ねてあった。1・4~6はP1周辺、7は東壁中央部から出土した。

8~12は鉢である。口縁部や胴部の一部を欠損するのみで遺存状態がよく、焼成も良好である。8・9が小型で、形態は5個体それぞれ違う。8~10は、胴部が内凹して立ち上がり、外面に明瞭な稜をもつ形態だが口縁部の形態が違う。8は口縁部が強く外反し、9は内傾する。10は直立して立ち上がる。また、11は稜がない形態で口縁部が外反する。鉢のうち9・10は外面を黒色処理しいずれも黒色処理の遺存状態はよい。11も内面は黒色処理している。外面にも行っていた可能性はあるが火熱により器面が荒れ不明瞭である。9~11は竪の周辺の床から、8と12は東壁中央部付近から出土した。12は床面からやや浮いており、8は焼土の下から出土している。

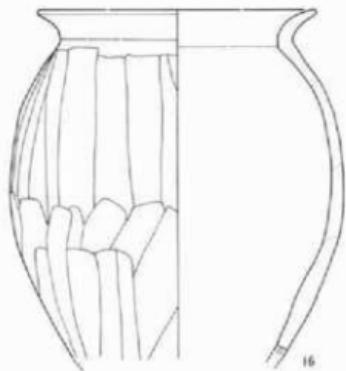
13は小型土器の破片と思われる。底部外面に木葉痕が残る。埋土中から出土した。

14~20は甕である。14~17・19は長胴形、20は球胴形である。このうち竪脇から並んで出土した14・15は比較的遺存状態が良いが、16~19は口縁部または胴下半部を欠損し、16と20は復原実測している。いずれも火熱を受けて煤が付着したり色調が変色したりする。14は内面をなでて仕上げ、外面もヘラ削り後なでており、内外面に工具痕が観察される。15~17・19は内面をなでて、外面をヘラ削りする。20は火熱による器面の荒れが著しく調整は不明瞭である。16はP4から竪周辺にかけて、17はP1脇、18はP4脇、20はP2脇からそれぞれ出土した。

土製支脚(21)は竪脇から出土した。そのすぐ隣には甕(15)が置かれていた。上端部の一部と下端部を欠損する(遺存長18.20cm)。上端径(6.60cm)と下端部径(8.00cm)の差が少ない円筒形を呈しており、胎土には砂粒を多量に含む。色調は橙色で焼成は良好である。



第57圖 整穴住居005出土遺物（1）



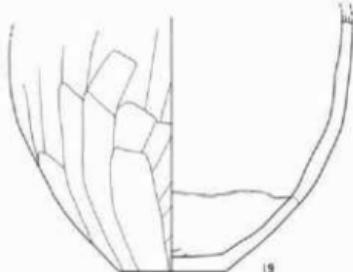
16



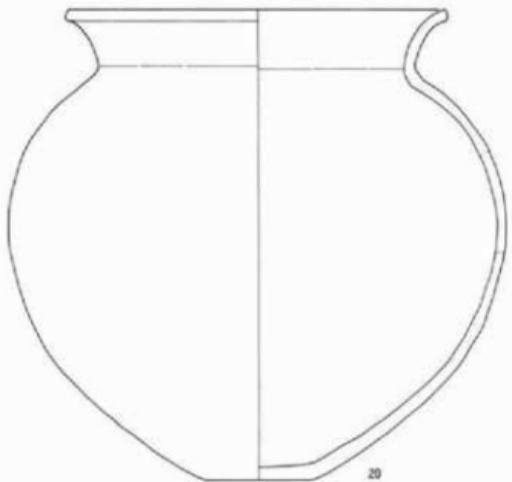
17



18



19



20



21



第58図 穹穴住居005出土遺物（2）

竪穴住居006 (第59・60図、図版24・36・37)

[土器観察表P155]

杯9点、鉢3点、甕3点、瓶1点、土製支脚1点が図示できた。遺存状態が良好なものが多い。竪左袖脇に杯(1)・鉢(10)・甕(13)が並んで出土し、右袖脇には土製支脚(17)と甕(15)が並んでいた。また瓶(16)は貯蔵穴P5から、鉢(12)は柱穴P3から出土した。

1~9は杯である。1は口縁部と体部の境に稜がない形態で、口端部が厚くなる。2~9は外面に稜をもつものである。これらは稜の位置、口縁部の形態でさらに幾つかに分類できる。2~6は中位に稜がある。このうち2~4は口縁部が外反し、5・6は外方に広がって立ち上がる。7は稜が上位にあり短い口縁が外反する。8・9は稜が上位にあり、口縁部が短く内傾する。9点の杯のうち4以外はすべて外面を黒色処理する。4は内面は黒色処理するが、外面は赤色塗装している。2・7・8は貯蔵穴P5周辺、3は南壁際、4は柱穴P2の周辺、6は柱穴P4のそばから出土した。

10~12は鉢である。10・11は口縁部と胴部の境が不明瞭で、12は口縁部が強く外反する。10・12は遺存状態が良好である。

13~15は甕である。13は完形に近く、底部中央部には直径1.5cm程の範囲で火を受けていない部分があり、この周囲は黒褐色に変色している。支脚があたっていた痕跡であるかもしれない。13・15は竪の袖の脇から、14は竪の前から出土した。

16の瓶は口端部を欠損するが完形に近い。

土製支脚(17)は上端部の一部と下端部を欠損する(遺存長14.0cm、径7.5cm)。

竪穴住居007 (第60図、図版38)

[土器観察表P156]

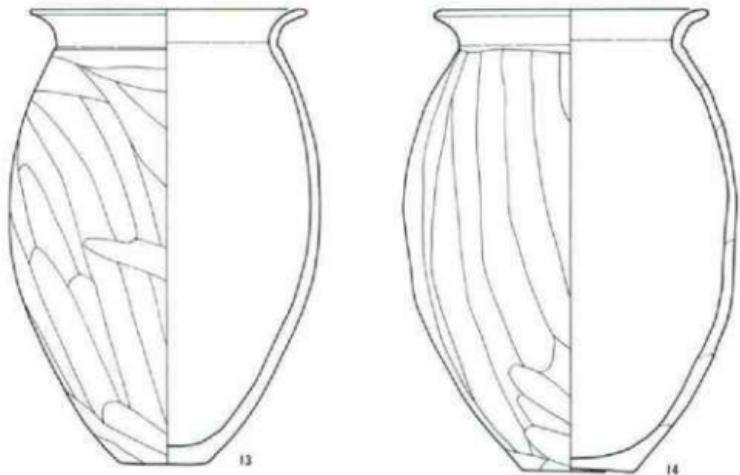
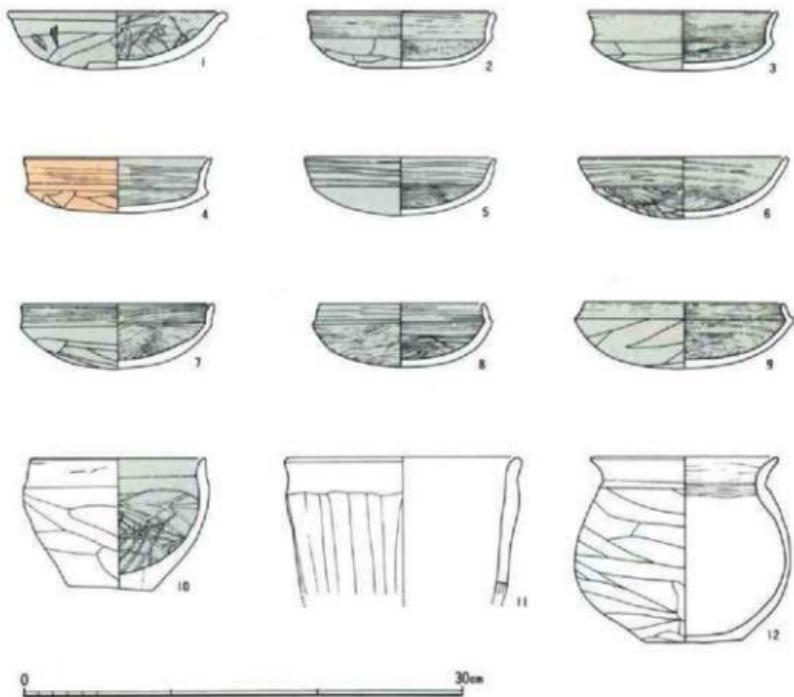
杯6点、鉢2点、甕1点、土製支脚1点が図示できた。他の竪穴住居の状態と比べると遺存状態はあまりよくない。また床面ではなく、埋土中から出土したものも多い。

杯は1・2が口端部の一部を欠損するのみで完形に近いが、3~5は復原実測している。外面に明瞭な稜がないもの(1~3)と外面に稜をもつもの(4~6)の大きく二つの形態がある。前者のうち1・2はそのまま口縁部が弧状に開くが、3は口縁部が短く直立する。後者のうち4・5は口縁部が強く外反し、6は外方に開く形態である。2・4~6は外面を黒色処理し、3は内面のみ黒色処理している。4・6は床面から出土したが、これ以外は埋土中から出土した。

鉢は口縁部と胴部の境が明瞭でないもの(7)と、口縁部が強く外反する形態(8)がある。7は柱穴P3脇、8は埋土中から出土した。

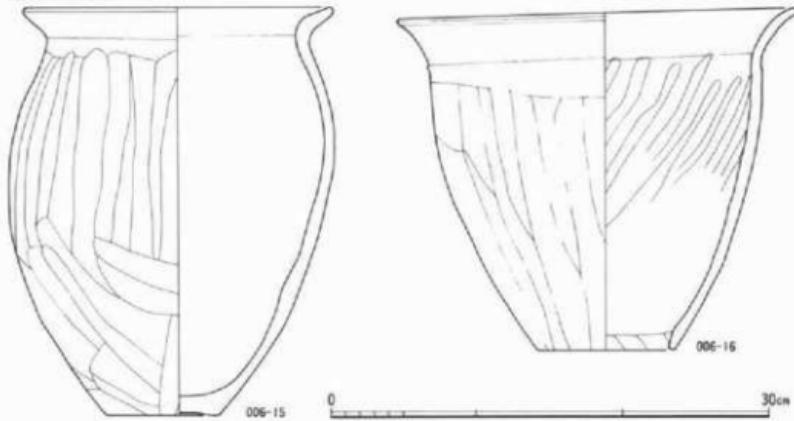
甕(9)はP4周辺に堆積した焼土の下から出土した。火熱を受け器面の荒れが著しく遺存状態も良くない。

土製支脚は上端部と下端部を欠損する(遺存長18.0cm、径9.6cm)。橙色で砂粒を多量に含む。竪の左脇から出土した。

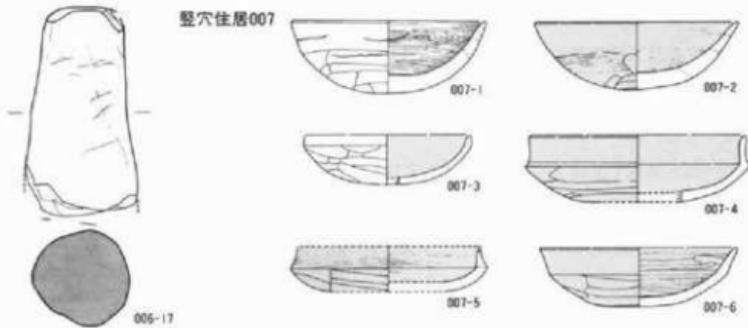


第59圖 整穴住居006出土遺物

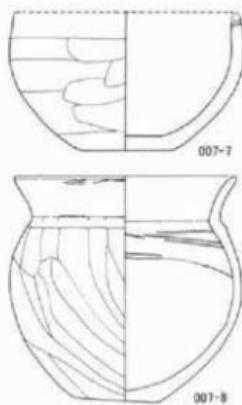
豎穴住居006



豎穴住居007



007-7



第60図 豊穴住居006・007出土遺物

竪穴住居008（第61・62・63図、図版24・38・39・51）

[土器観察表P157]

杯2点、小型土器1点、鉢2点、甕5点、甑1点、土製支脚1点、鉄製刀子1点が図示できた。甕右縁の床面には土製支脚(12)、甕3点(7~9)、甑1点(10)が伏せて並べてあった。また、P1とP2の間の床面から多数の土器片を出土し、この中から鉢(5)、甕(11)などが復原できた。これらの破片の一部は炭化材や焼土の下から出土した。焼失住居であるため、煮沸容器ほど明瞭ではないものの遺物はどれも火熱を受けている。

杯は2点とも外面に稜がある形態である。1は外表面、2は内面の底部以外を赤色塗装する。小型土器(3)は完形でP3とP4の間の床面から出土した。明瞭ではないが赤色塗装する。

4・5は鉢で、どちらも遺存状態が悪い。5は内面を黒色処理して丁寧に磨いている。外面も黒色処理している可能性はあるが器面が荒れ明瞭ではない。

甕7~9は長胴形である。火熱により器面が荒れたり付着物が多くなりするが遺存状態はよい。11は大型の甕であったと思われる。同一個体と思われる破片は周辺から多数出土したが、口縁部と上半部の一部しか復原できなかった。

土製支脚は下端部を欠損する(遺存長16.3cm、径8.5cm)。橙色で砂粒を多量に含んでいる。

刀子(13)はP4脇の床面から出土した。刃部の一部と茎尻を欠損する。遺存刃長112.0mm、刃幅20.0mm、背厚3.6mm、遺存茎長25.0mm、茎幅12.0mm、遺存重量18.76gである。欠損面は新しい。鋒は斜めに切り落としたような形態で、両開である。



第61図 竪穴住居008遺物出土状態

竪穴住居009（第63図、図版40・51）

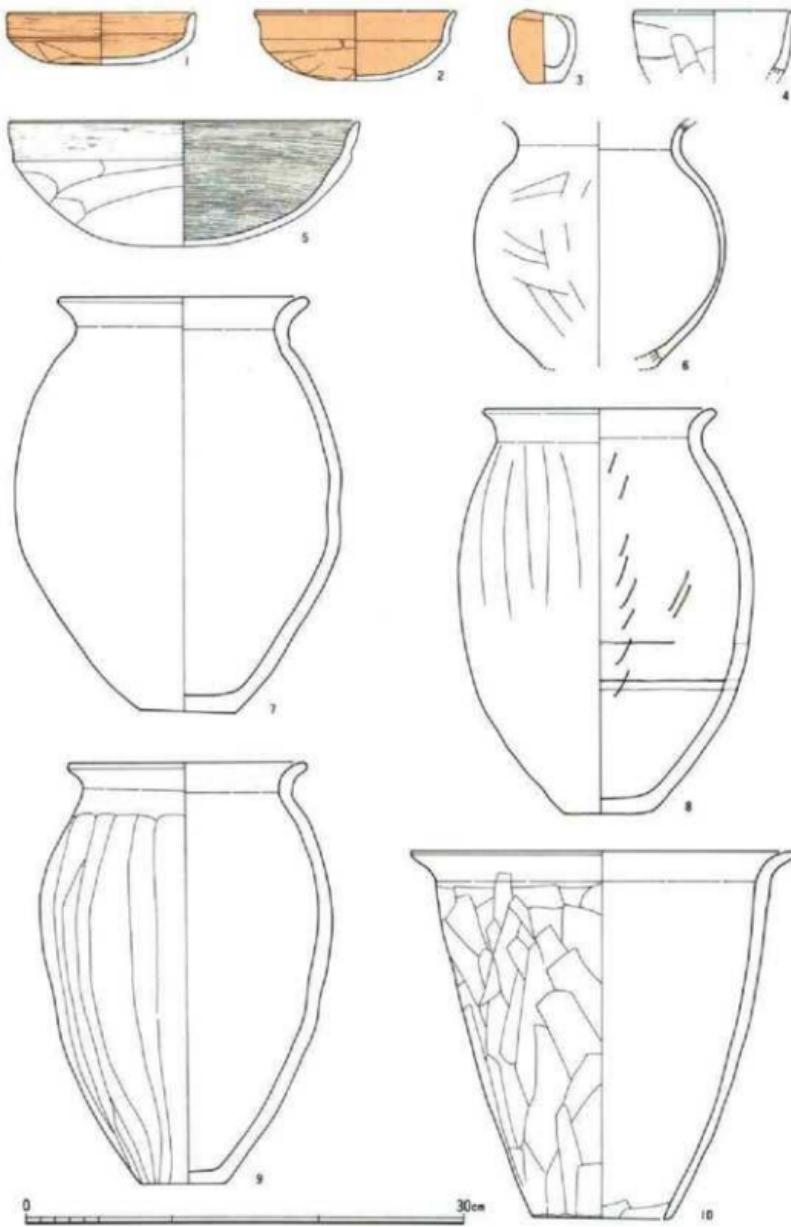
[土器観察表P158]

杯3点、高杯1点、小型土器1点、鉢3点、甕4点のほか土器転用砥石(13~15)を図示したが、いずれも遺存状態はよくない。

杯は3点とも復原実測した。外面に稜を持つ形態で、1・2は口縁部が外傾するが、3は短く内傾する。2・3は内外面赤色塗装する。高杯(4)は北東隅と北西隅から出土した。杯部の遺存が悪く、杯部は復原実測した。5~7は鉢である。5は口縁部の一部を欠損するのみで完形に近い。P2脇から出土した。小型土器(8)は埋土中から出土した。

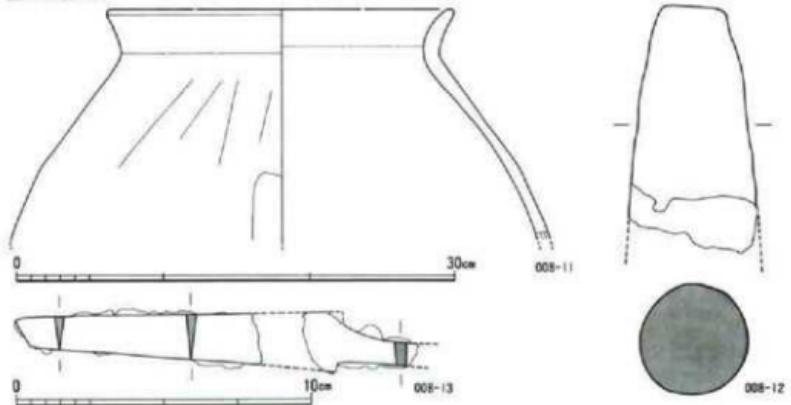
10は長胴形の甕である。上半部と下半部は直接接合しないが同一個体であろう。

13~15は土器を転用した砥石で外面に溝状の擦痕がある。埋土中から出土した。13・14は同一個体である。鉢を利用したものであろう。深く明瞭な溝がみられる。砂粒を多量に含み、橙色である。15は甕胴部を転用したものである。細く浅い擦痕が多数残っている。砂粒を含んだ胎土で内面は黒褐色、外面は赤褐色を呈する。

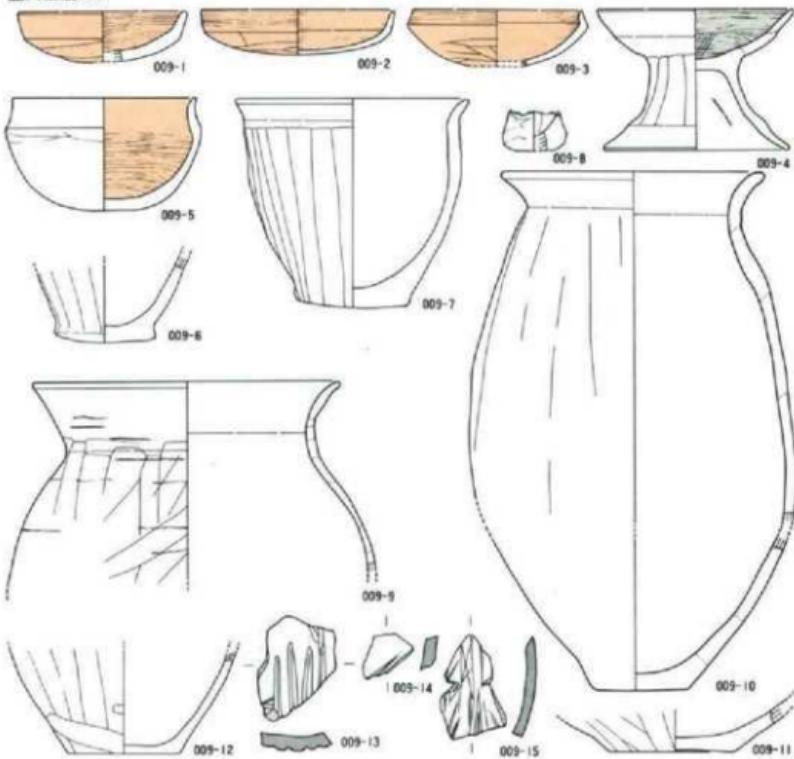


第62図 壁穴住居008出土遺物（1）

堅穴住居008



堅穴住居009



第63図 堅穴住居008・009出土遺物

竪穴住居011 (第64図、図版40)

[土器観察表 P159]

図示できたのは杯5点と甌2点である。甌は口縁部と底部でどちらも復原実測したものである。煮沸容器の遺存が悪い。

杯は外面に稜がないもの(1)と稜を持つ形態のもの(2~5)がある。稜をもつ形態でも口縁部の形態により3種類に分けられる。火熱により器面が荒れているものが多い。1・3・5は甌左袖上から出土し、4は甌右側から出土した。

竪穴住居012 (第64・65図、図版40・41・42)

[土器観察表 P159]

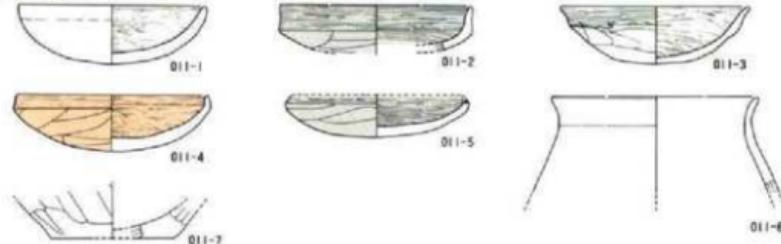
出土した遺物は多いが遺存状態はよくなない。割れて甌周辺の埋土中に散って出土したものが多い。実測できたものは杯7点、高杯2点、鉢1点、甌6点、甌2点と土製支脚1点である。

杯は外面に稜を持つ形態である。1・2は口縁部が外反気味に内傾し、3は外反する。4・5は直立する。6・7も内傾するが内彎気味で、また1・2より口径が大きく器高が低い偏平な形態である。1・4は遺存状態がよいほうで、残りは復原実測している。

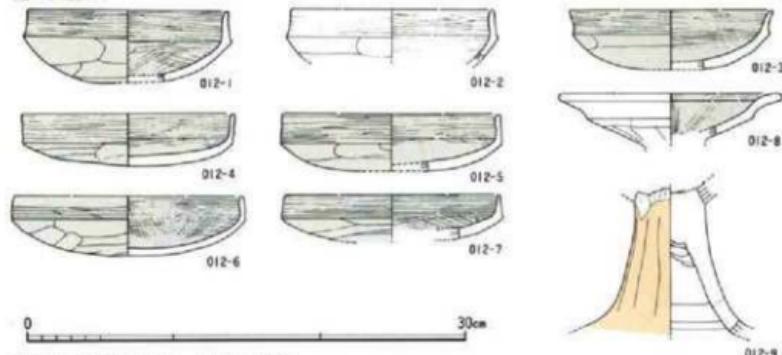
甌は口縁部の一部、底部の一部がほとんどで比較的の遺存状態のよい15も復原実測した。

土製支脚は頭部の一部と下半部を欠損する(遺存長10.4cm、径6.3cm)。芯を作り、その上に平らな板状に延ばした粘土を巻き付けて作っている。甌内中央の火床部から出土した。

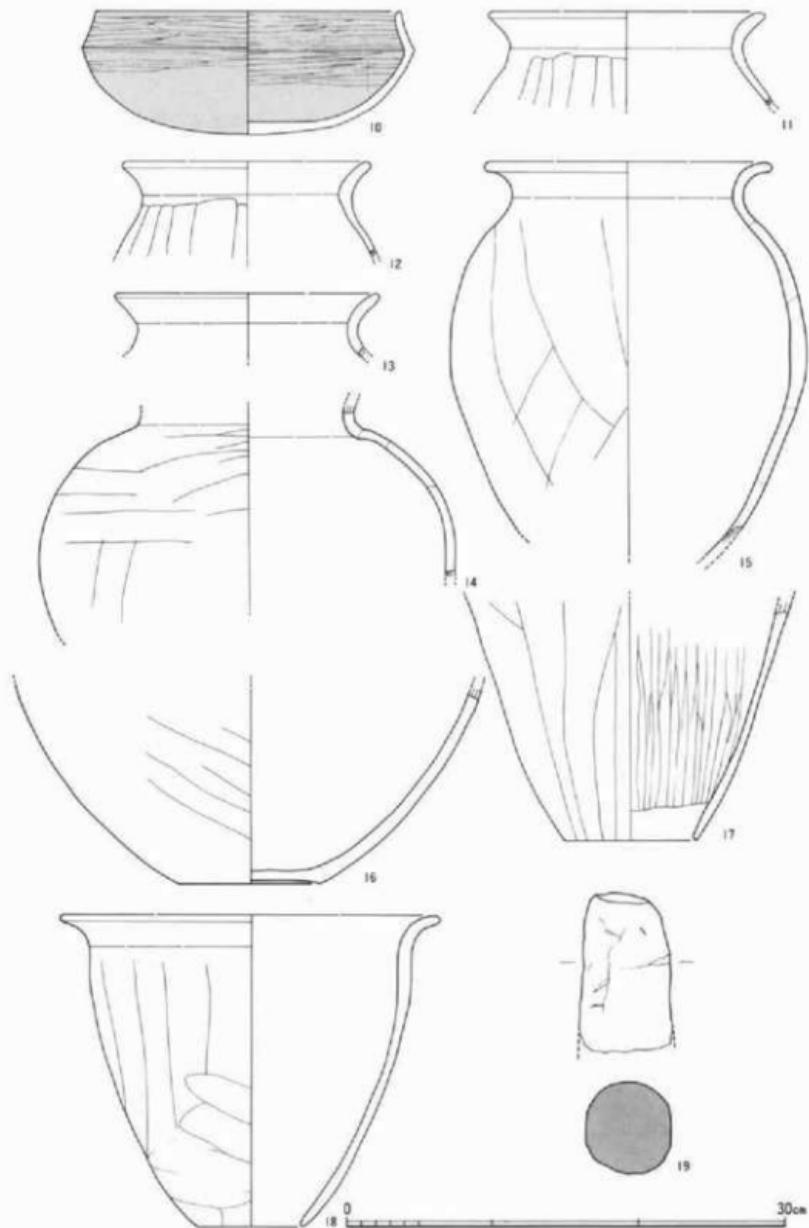
竪穴住居011



竪穴住居012



第64図 竪穴住居011・012出土遺物



第65図 塵穴住居012出土遺物

実測できた遺物が最も多い竪穴住居で全部で70点を数える。混入していた破片の数も多く831点ある。実測できたのは土器類の他、土製品1点、鉄製鎌1点である。土器類は須恵器杯蓋1点、須恵器杯身4点、杯33点、高杯1点、小型土器4点、鉢5点、甕20点である。器種は一応揃っており、杯・甕の量が多い。しかし遺存状態が良好なものは少なく、杯の半分以上は復原実測したものであり、甕も胴上半部や底部しか遺存していないものが多い。

遺物が特に集中して出土した所ではなく竪穴住居全体に散っている。床面や床面から僅かに浮いた最下層の暗黄褐色土層から出土した遺物が多い。復原した遺物も破片がまとめておらず、各所に散っている。このなかで鉢(47)は口縁部を欠損するが完形に近く、柱穴P1の底面から出土し注目される。焼失住居であるために煮沸容器以外でも火熱を受けており、器面が荒れたものが多い。また焼土周辺で出土した遺物は焼土中または焼土下の床面から出土している。したがって使用時からは移動しているものの、遺物のほとんどが焼失前から竪穴住居内にあつたことになる。

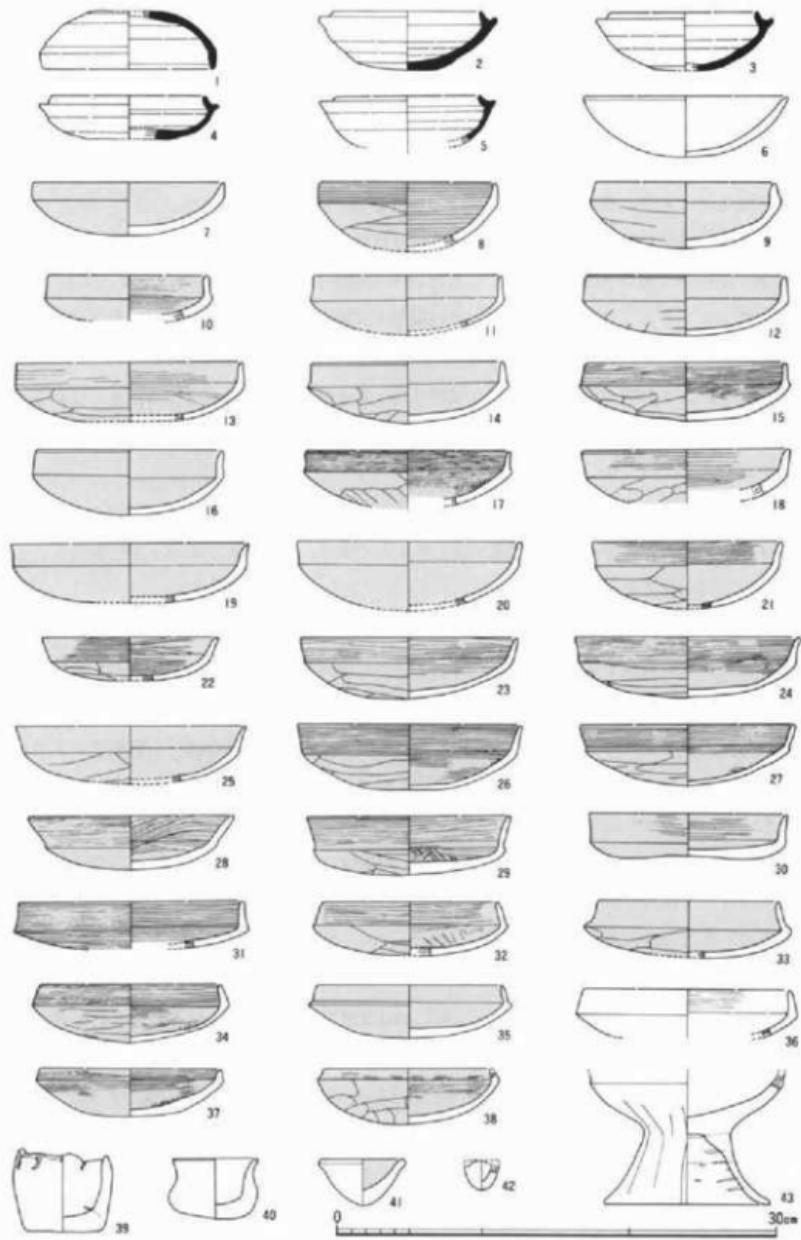
須恵器は杯蓋1点(1)、杯身4点(2~5)である。点数は多いが2以外は4分の1から3分の1の破片で遺存状態が悪く、復原実測したものである。身は受部が斜め上方に突出し、口縁部が短く内傾する形態のものである。

杯は先述したように3分の1周や4分の1周を復原実測したものが多く、これらのほとんどは割れ口が古く摩耗している。このなかで14・16が口端部を欠損するが比較的遺存状態が良好である。また、割れ口だけでなく口端部が摩耗しているものも多く見られる。6と36以外は内外面黒色処理しているが、36も内外面を黒色処理していた可能性が高い。形態は6・7が外面に稜を持たない形態で、この他は外面に稜を持つ。稜の位置が中位にあるもの、下位にあるもの、上位にあるものがあり、また口縁部が直立するもの、外傾するもの、内傾するものがある。整形・調整は火熱で器面が荒れているため不明瞭なものが多いが、内面から口縁部外面をヘラ磨きし、体部外面をヘラ削りしているものが主体である。体部外面をさらに磨いて仕上げたものもある(31・35・37)。

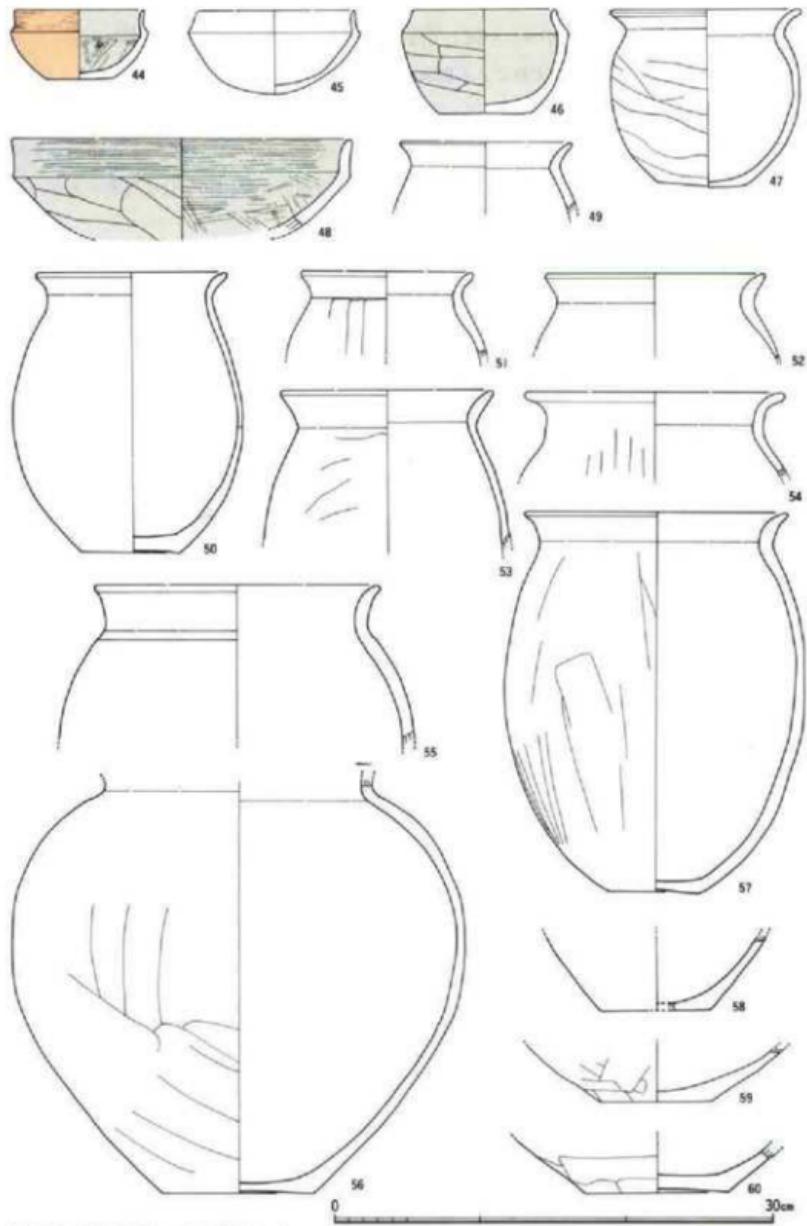
小型土器は4点出土した。39は完形で、平底で体部が直立する。手指で成形した痕跡が残っている。竪穴住居中央部の床面から出土した。40は丸底で口頸部が僅かにくびれ、41・42は底部が尖り外方に広がって立ち上がる形態である。

高杯(43)は1点のみで口縁部を欠損する。竪穴住居中央部と西壁付近の床面から出土した。火熱を受けている。

鉢類は他の器種に比べて遺存状態が良好なものが多い。47以外は外面に稜をもつ形態で口縁部が外反または内傾している。47は柱穴P1底面から出土した。口端部の2分の1を欠損するのみで遺存が良好である。44は外面を赤色塗装、内面を黒色処理する。46・48は内外面を黒色



第66図 整穴住居015出土遺物（1）



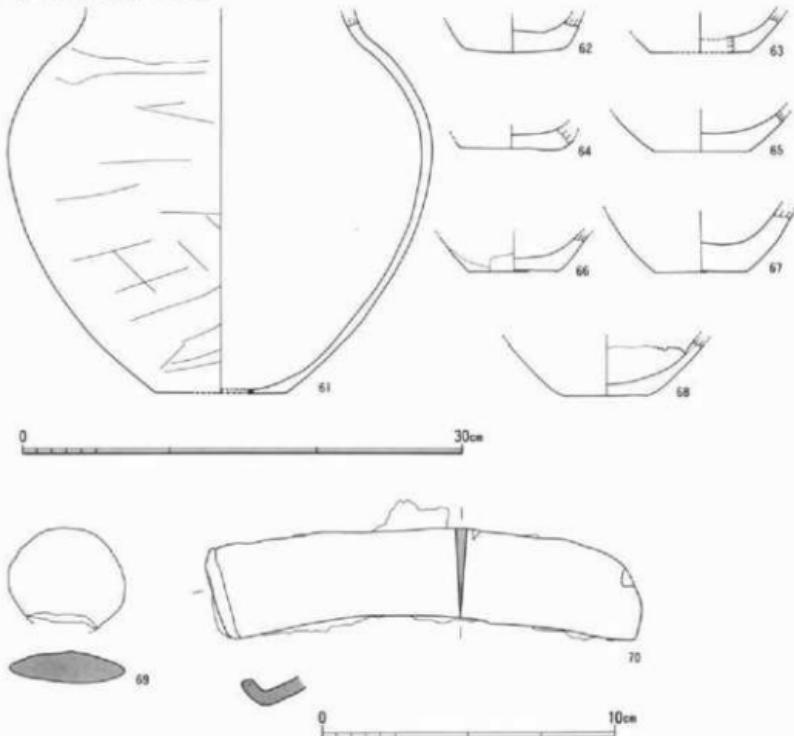
第67図 堅穴住居015出土遺物（2）

処理する。48の内面の黒色処理の遺存は良好で器面に光沢がある。

甕は多数出土したが、20点中6点が胴上半部の一部、10点が胴下半部から底部の一部でいずれも遺存状態が良くない。また火熱による器面の荒れが著しく調整などが不明瞭なものが多い。このうち比較的遺存状態が良好なのは50・57である。50は南東隅付近の床面から出土し、57は床面から割れて出土したが破片は散らばりまとまっていなかった。56は貯蔵穴P5の周辺を中心割れて出土した。49~51は比較的小型の甕で、57は長胴形の甕、56と61は肩部が大きく膨らむ大型の甕である。

69は偏平な円形の土製品で用途は不明である。橙色を呈し、胎土には砂粒を多量に含む。火熱を受けたためか焼成があまく器表面がざらつく。直径39.5mm、厚さ11.0mm、重さ11.02gである。

70は鉄製鎌で、東壁付近の床面よりやや浮いた所から出土した。緩やかなカーブをもつ曲刃鎌である。先端部のごく一部を欠損するのみで遺存状態は良好である。刃を下、基部を左にして置いた場合、基部は手前に折り曲げている。全長150.0mm、刃幅28.0~32.0mm、背厚3.9~5.0mm、重さ80.96gである。



第68図 横穴住居015出土遺物（3）

出土した破片の数は本遺跡の竪穴住居の中で最も多い。実測できた遺物も須恵器高杯1点、須恵器壺1点、杯15点、高杯1点、小型土器1点、鉢2点、壺1点、甕10点、瓶2点の合計34点と竪穴住居015について多い。煮沸容器が比較的多いのが特徴である。しかし、復原実測したものが多く、遺存状況が良好なものは少ない。出土状態は特に集中する所ではなく、竪穴住居全体に散っており、竪穴住居015の状況と似ている。また復原した大型の甕類等の破片もまとまっておらず、竪穴住居内に散っている。

1は須恵器高杯の杯部の破片である。埋土中から出土した。

2～16は杯である。2～4は器高があり、球形を半截したような形態のもので、2・3は内外面を赤色塗彩する。5～8は外面に明瞭な稜を作らない形態で、口縁部と体部の境が丸みをおびて緩やかである。口縁部が直立または内彎する。9～16は外面に明瞭な稜を作る形態である。12は内面のみ、5～11、12～16は内外面を黒色処理する。器面が荒れて調整が不明瞭なものもあるが、ほとんどが内面から口縁部外面をヘラ磨きし、外面をヘラ削りしている。

21は壺で、口縁部を欠損するが胴部は破損していない。柱穴P1の上面から出土した。外面の赤色塗彩は僅かに痕跡が残るのみでほとんど剝げている。

22～31は甕である。25・30は比較的の遺存状況が良好である。25は柱穴P4の脇から出土し、30はその東側を中心に破片が竪穴住居内各所に散っていた。

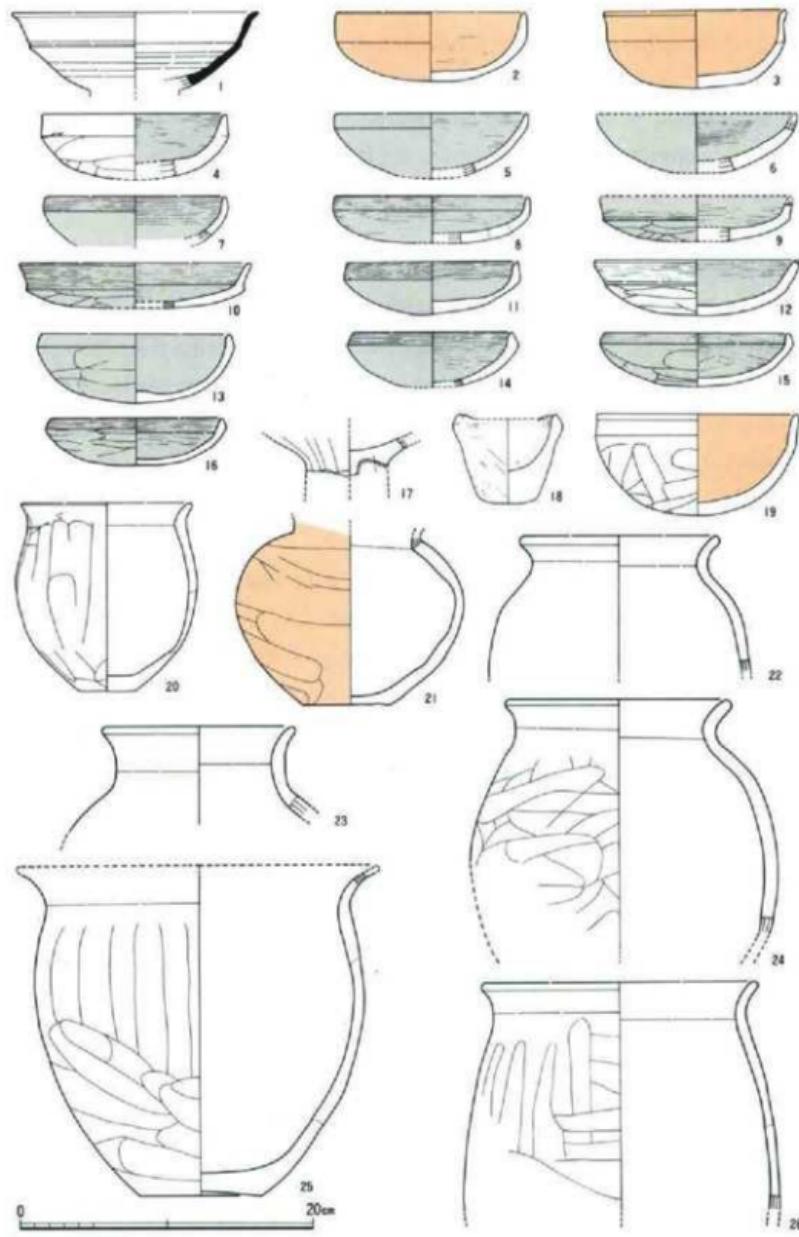
瓶は大型(33)のものと小型(34)のものがある。どちらも比較的の遺存状況がよい。大型の33は電右袖脇、小型の34は柱穴P1とP2の間の床面から出土した。

須恵器杯蓋1点、杯8点、高杯脚部1点、小型土器1点、鉢2点、甕11点の合計24点を図示した。煮沸容器が多いが遺存状態はあまりよくない。瓶は出土しなかった。図示できなかった破片は400点余りを数える。特に集中して出土する所ではなく、竪穴住居全体に散っており、床面から下層にかけて出土した。

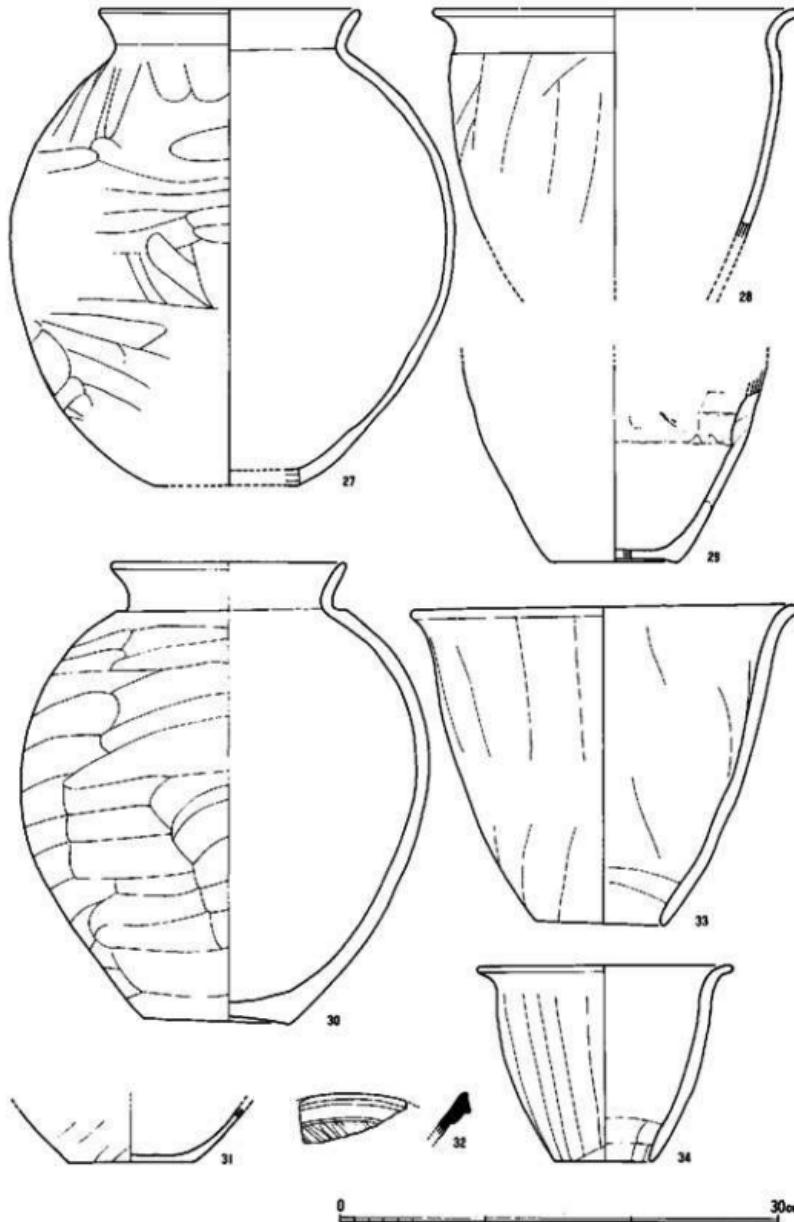
須恵器杯蓋は6分の1周ほどの破片である。埋土中から出土した。

2～9は杯である。2～6は口縁部と体部の境が丸みをおびて緩やかである。口縁部の形態は3種類ある。2は内傾し、3・4は直立、5・6は外傾する。7～9は外面に明瞭な稜をもつ。口縁部は7は外傾し、8は外反し、9は短く内傾する。6・7・8は内外面を黒色処理している。8は内面を黒色処理しているが外面は不明瞭である。これらのうち3・6・7は口縁部の一部を欠損するのみで、遺存状況が良好である。この他は復原実測した。3は電右袖脇の床面からやや浮いた所から出土し、6は電左袖の上から出土した。また7は南東隅付近の床面から出土した。

高杯(11)は脚部の破片である。埋土中から出土した。



第69圖 整穴住居017出土遺物（1）

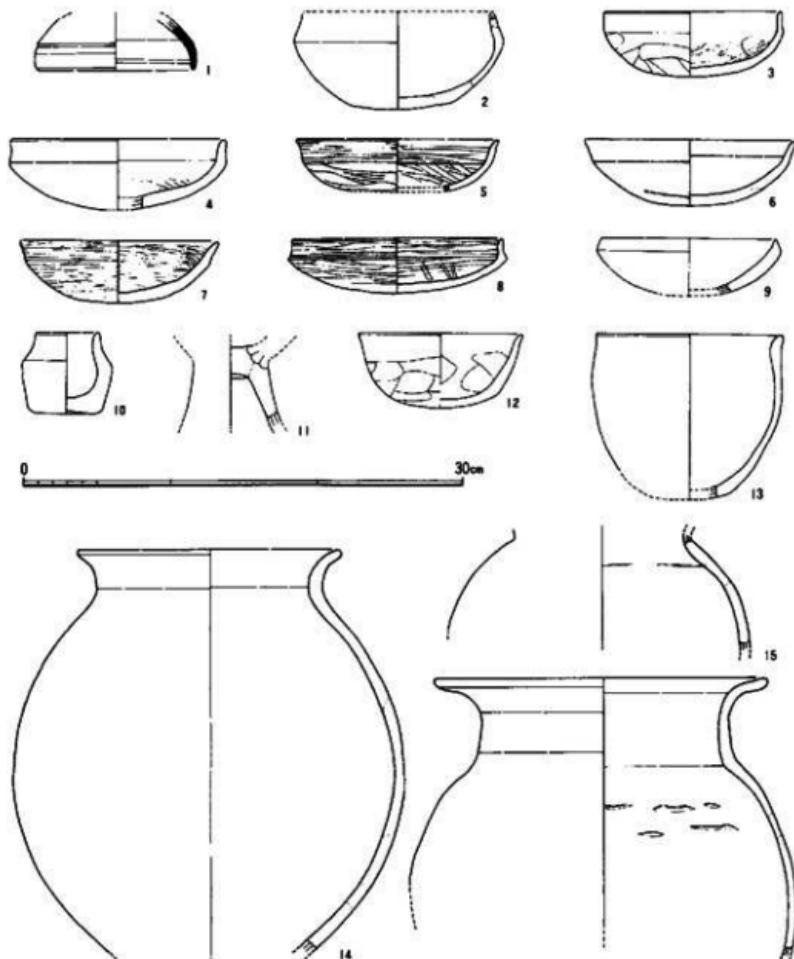


第70図 堅穴住居017出土遺物（2）

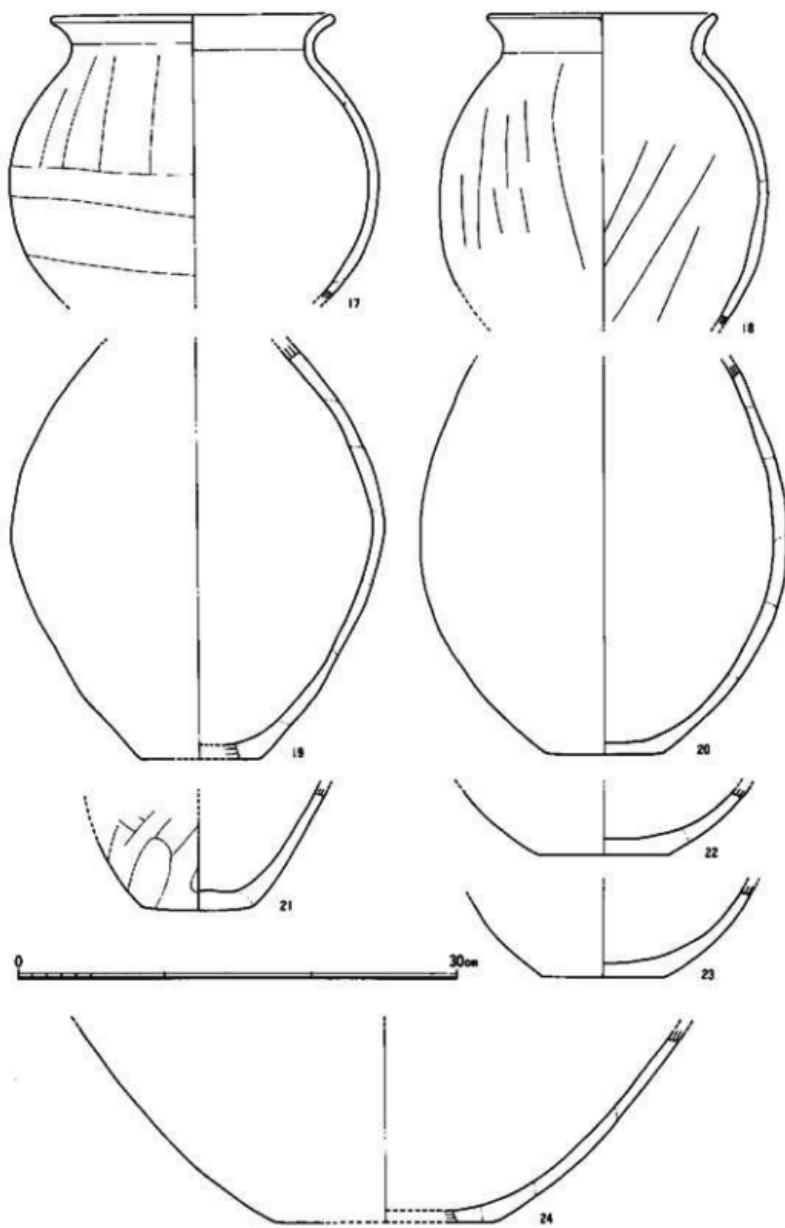
小型土器（10）は竪穴住居のほぼ中央、床面からやや浮いた所から出土した。

鉢は2点出土した。小型のもの（12）は完形で、竪左袖上に杯（6）と並んでいた。中型で寸胴な形態の鉢（13）も遺存状態は比較的良好で南東壁際の床面から出土した。

甕はいずれも遺存状態が悪く上半部または下半部しか遺存していない。最大径が胴部中位にある、長胴気味の形態のものが多いようである。24は底部付近のみしか遺存しないが復原によるとかなり大型の甕になると思われる。16・18等は細かく割れて出土し、破片が各所に散っていた。どれも器面が著しく荒れ、調整などは不明瞭である。



第71図 竪穴住居018出土遺物（1）



第72図 穹穴住居018出土遺物（2）

竪穴住居019 (第73図、図版48)

[土器観察表 P 169]

出土した遺物は少なくないが、図示できた遺物は 6 点である。杯 2 点、高杯 1 点、鉢 1 点、甕 1 点、瓶 1 点で、一通りの器種は揃ってはいるが遺存状態が悪い。

杯は 2 点で、1 は貯蔵穴中位から出土した。どちらも内外面を黒色処理している。

鉢は埋土中から出土した。内外面を黒色処理しており、内面は器面に光沢がある。

竪穴住居023 (第73図、図版47)

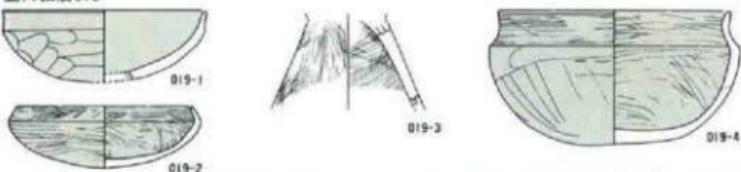
[土器観察表 P 170]

出土した遺物は比較的少ない。図示できた遺物も 4 点で、本遺跡の竪穴住居の中で最も少ない。杯のうち 1 点 (2) が完形に近いが、他の遺物の遺存状態はよくない。

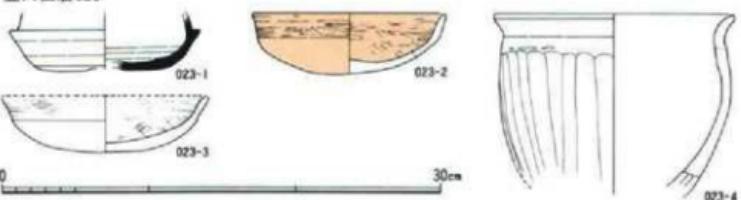
1 は須恵器杯身で 5 分の 1 周の破片である。胎土に黒色粒子を多量に含むのが特徴である。柱穴 P 1 の埋土中位から出土した。

杯は 2 点とも火熱により器面が荒れる。2 は完形だが割れて出土し、破片は散っていた。

竪穴住居019



竪穴住居023



第73図 竪穴住居019・023出土遺物

第5節 溝状遺構

松向作遺跡では3条(010・013・020)の溝状遺構を検出した。このうち、いわゆる溝としては013が相当するようである。また、調査時の所見によれば、010は古道跡、020は道路状遺構となつており、それぞれ遺物を伴出している。

溝状遺構010(第74・75図、図版48・51)

[土器観察表P170]

長さ17m、幅2.3mの北東から南西にのびる古道跡か。南に若干傾斜しており、深さは0.2mほどで底面は平坦ではないが、鍋底状を呈する。また、直徑0.5mから1mの小ビットあるいは落込み部を伴うようであるが、性格は不明である。

土層の堆積状況は、2層に分層される。上層が風化ローム主体の褐色土層で、下層が微細なローム粒の混じる暗褐色土層となっている。

伴出した遺物は、第75図にのせた。

溝状遺構013(第74図)

長さ115m、幅2~3mのほぼ南北にのびる溝である。深さは、深いところで0.7m、浅いところでは0.2mほどである。基本的に2ないし3のU字状あるいはV字状の底面を有し、平坦ではないようである。

土層の堆積状況は、2層に分層される。上層が風化ロームが粒状に混じる暗褐色土層で、下層がローム粒が多く混じる暗黄褐色土層となっている。

遺物は出土しなかった。

なお、溝状遺構013は隣接する立山遺跡の1号溝(015)に相当する可能性がある。第2図参照のこと。

溝状遺構020(第74・75図、図版47)

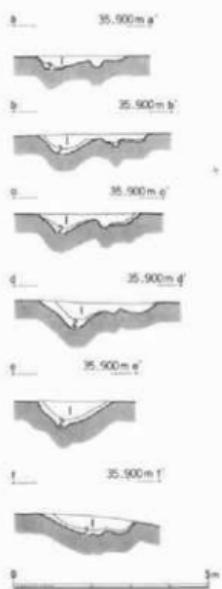
[土器観察表P170]

長さ53m、幅3mの北西から南東にのびる道路状遺構か。南に若干傾斜しているようである。深さは0.3m~0.5mほどである。底面はほぼ平坦で、鍋底状ないしは緩いU字状を呈する。

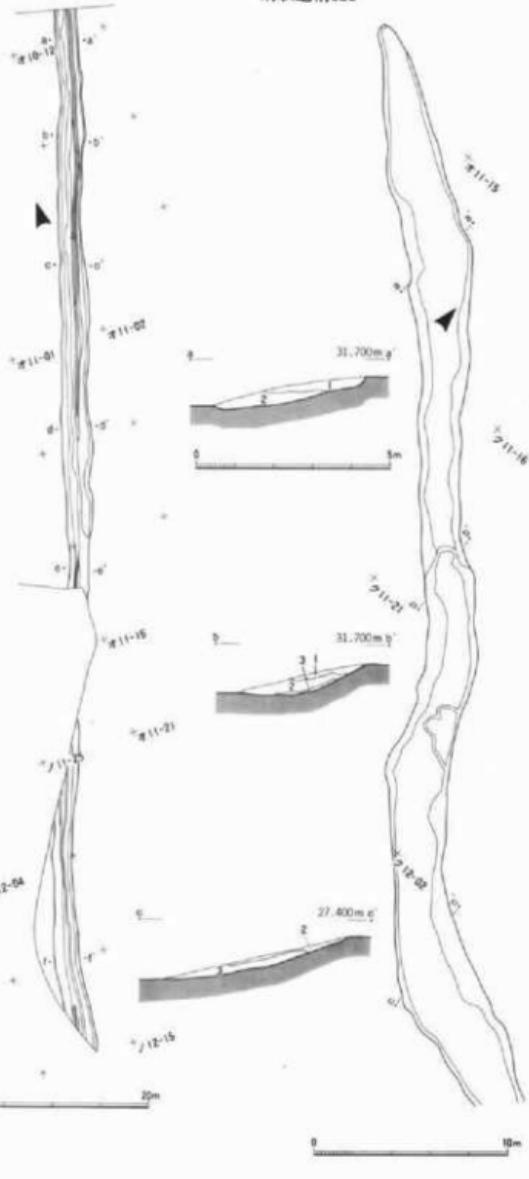
土層の堆積状況は、2層ないし3層に分層される。1層がしまりのやや良い黒色土層で、2層がローム粒の混じる黒褐色土層、3層が粘土を若干含むしまりの良い暗黄褐色ローム層となつてている。

伴出した遺物は、第75図にのせた。

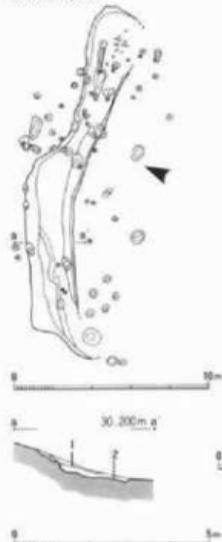
溝状遺構013



溝状遺構020

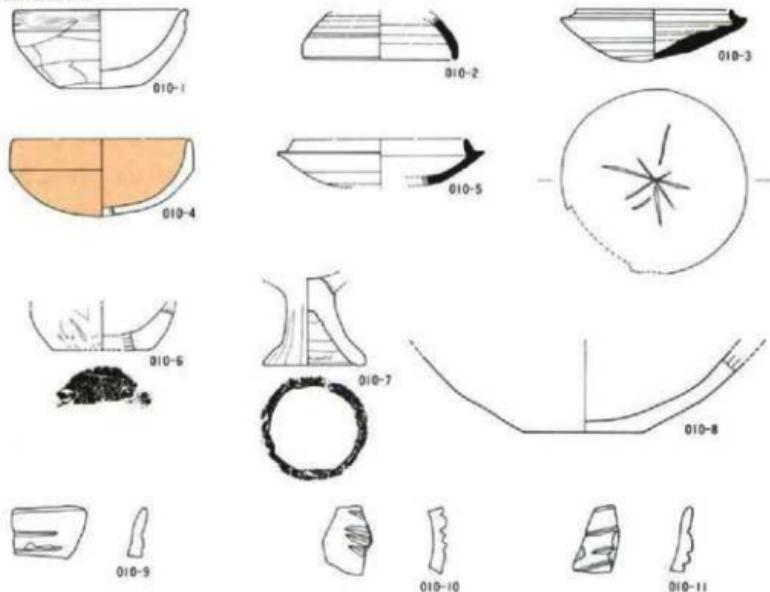


溝状遺構010

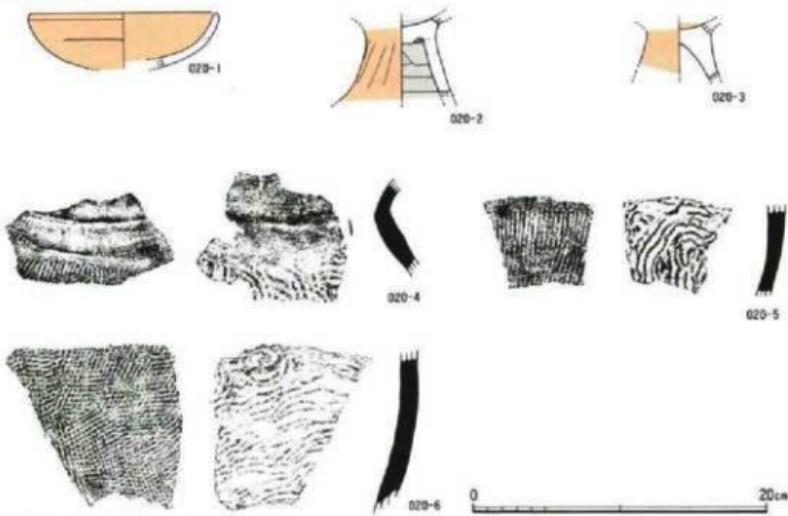


第74図 溝状遺構010・013・020

溝状遺構010



溝状遺構020



第75図 溝状遺構010・020出土遺物

第6節 陥し穴・土坑・炭窯

松向作遺跡では4基(016・021・043・044A)の陥し穴、9基(026・027・029・034・036・042・059A・061・062)の土坑、3基(025・044B・059B)の炭窯を検出している。これらの遺構の性格の決定については、調査時の所見等から判断した。陥し穴は小ピット等の下部施設を持つもの、あるいは検出面からの深さ(ここでは検出面からの深さが1m以上あるものとした)があり、長楕円形ないし長方形を呈すものとした。また、土層の堆積状況もいわゆる自然堆積と呼ばれる状態を示すもので、図面上からは土坑、炭窯、土壙墓とは異なる堆積状況を示していることが読み取れる。ところで、平面形態および検出面からの深さからすると059Aなどは陥し穴のはんちゅうに入るものと考えられるが、調査時の土層の堆積状況に関する所見では、人為的な流入が考慮されていることから、土坑とした。あるいは陥し穴を埋め戻したものか、土壙墓かもしれない。また、土坑061についても、上部ではあるが覆土に白色粘土粒を含むことから、土壙墓の可能性もあるかもしれない。炭窯は近年の炭焼き窯の跡で炭・焼土などを多量に含むほぼ正方形の遺構で、深さも浅い。一見して分かるものである。土坑はこれら陥し穴、炭窯、土壙墓以外の明確な掘込みを有するものとした。調査時には遺物は検出されていない。

1. 陥し穴

陥し穴については先に触れたが、これらはさらに大きく2種類に分けられるようである。楕円形を呈し、2ないし3の小ピット等の下部施設をもつもの(044A・021)と長楕円形ないし長方形で検出面からの深さがあるもの(016・043)である。後者の場合、検出面からの深さは1mを大きく超える。

陥し穴044A(第80図、図版17)

長さ2m、推定幅1m、深さ0.7mの楕円形の陥し穴である。直径0.3m、深さ0.2~0.4mほどの小ピットを2つ底面に有する。底面はほぼ平坦なようである。

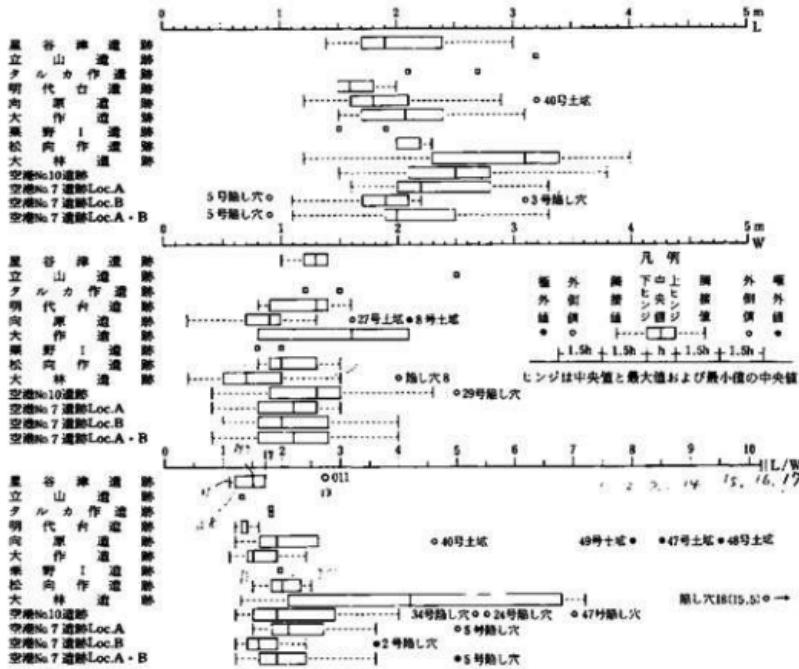
土層は4層に分れるが、あらい網のスクリーントーンで示した軟質のローム主体のピットに充満する土層および同じくあらい網で示した側面に残る汚れていないソフトロームにハードロームがブロック状に混じる黄色土層を除くと、大きくは3層に分層されるようである。上層が褐色土層、中層が褐色土がシミ状に混じる暗褐色土層、下層が汚れていないソフトロームを主体とする暗黄褐色土となっている。

遺物は出土していない。

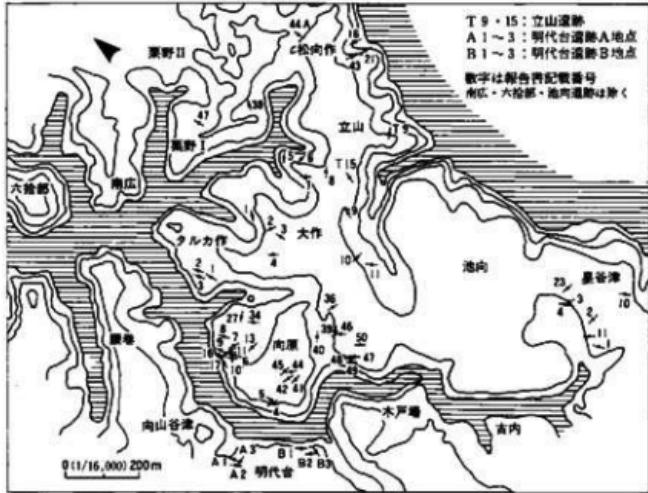
陥し穴021(第80図、図版16)

長さ2.5m、幅1m、深さ0.7mの楕円形の陥し穴である。直径0.15m、深さ0.1mほどの小ピットを3つ底面に有する。底面はほぼ平坦なようである。

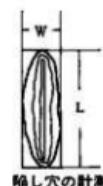
遺物は出土していない。



第76図 長・幅・長幅比による陥し穴の比較

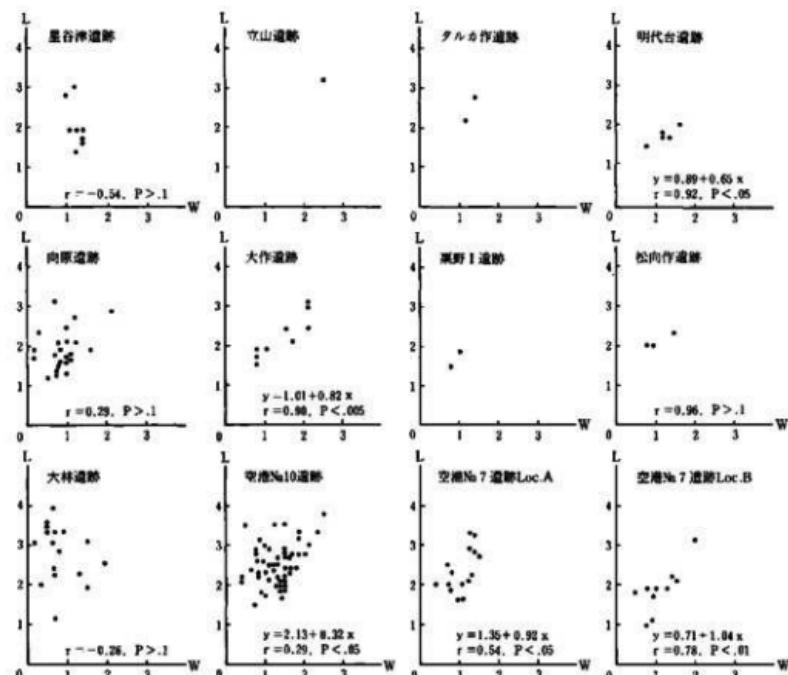


第77図 佐倉第三工業団地内遺跡群の陥し穴分布 既報告分完形以外も含む



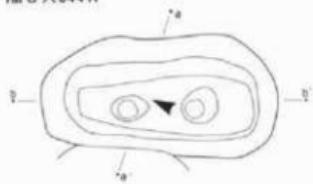
陥し穴の計測は検出面での開口部で行った。なお、計測に用いた資料は光影のみである。しかし、当然のことながら開口部の形態は原形をとどめていない。

第78図 陥し穴の検出された主な道路

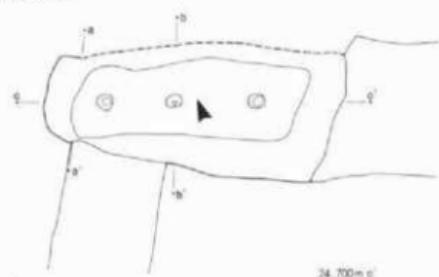


第79図 陥し穴の長幅分布 単位はm

陥し穴044 A



陥し穴021



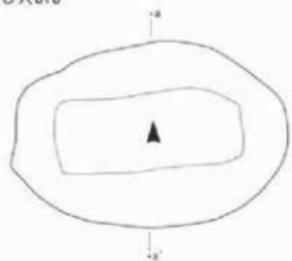
24.700m



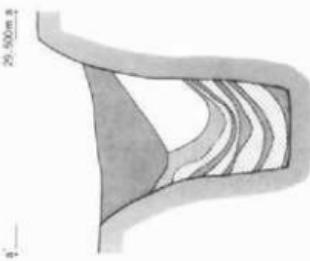
24.700m



陥し穴016



25.500m



0 2m

第80図 陥し穴044 A・021・016

陥し穴016（第80図、図版16）

長さ2.3m幅1.6m、深さ1.7mの楕円形の陥し穴である。底面はほぼ平坦で、下部施設は検出されていない。底面はほぼ平坦なようである。

土層は細かくは11層に分かれるが、大きくは4層に分かれそうである。上から順に、粘土粒が混じる黒色土層、粘土粒が多く混じる灰色土層、少量の粘土粒を含む暗色土層が堆積し、さらに下に、やや厚めの粘土主体の黄色土層と黒味が強く柔らかい黒色土層が交互に堆積している。

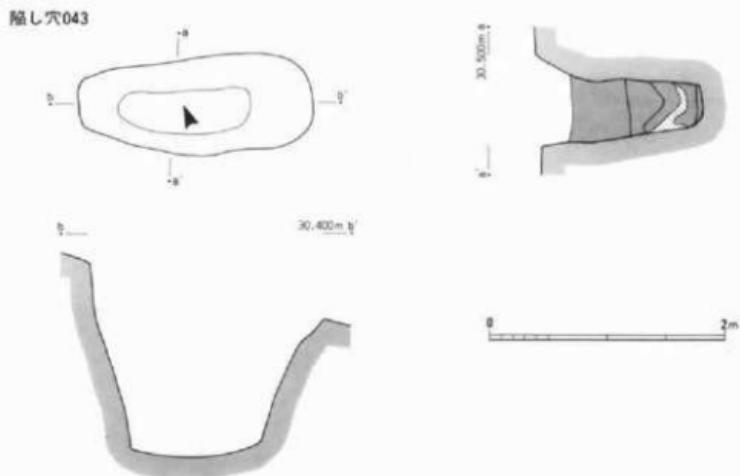
遺物は出土していない。

陥し穴043（第81図、図版16）

長さ2m、幅0.8m、深さ1.4mのほぼ長方形の陥し穴である。底面はほぼ平坦で、下部施設は検出されていない。

土層は6層に分かれるようである。上から順に、黒色土層、上層よりもしまりの悪い黒色土層、ローム粒・ロームブロックを含むしまりのあまり良くない黒褐色土層、ロームブロックを含む黄褐色土層、上層の黒褐色土層よりロームブロックの少ないしまりのあまり良くない黒褐色土層、若干ローム粒を含む黒色土層が堆積している。

遺物は出土していない。



第81図 陥し穴043

2. 土 坑

形態等については表を参照してもらうこととし、ここでは主に土層の堆積状況にふれておくことにする。大体において単純な堆積状況を示しているようである。遺物は出土していないようである。

土坑026 (第82図、図版17)

本来1つの土坑であったものが、埋没後、断面図上右側の土坑が掘り込まれ、再度埋没したものである。断面図左側の土層(つまり026本来の土層堆積)はソフトロームを主体としたもので、後から掘り込まれた土坑の土層はローム粒や焼土粒を混入する黒褐色土を主体とするものである。

土坑027 (第82図、図版18)

ローム粒を若干含むしまりの良い黒色土層の均一な堆積状況を示している。

土坑029 (第82図、図版18)

断面図上右側の白ぬき部分の攪乱を除く3層から構成される。基本的には左側から混入する黄褐色土層を除くとロームブロックの多寡およびしまり等から区別される暗黄褐色土層を主体とする。

土坑034 (第82図、図版18)

細粒のロームが混入するしまりの良い黒褐色土層と上層よりもローム粒の混入の多いしまりの良い暗黄褐色土層からなる。

土坑036 (第82図、図版19)

ゴボウのトレンチャーにより攪乱を受けているよう、ローム粒を含むしまりの悪い黒褐色土層の単一層である。

土坑042 (第83図、図版19)

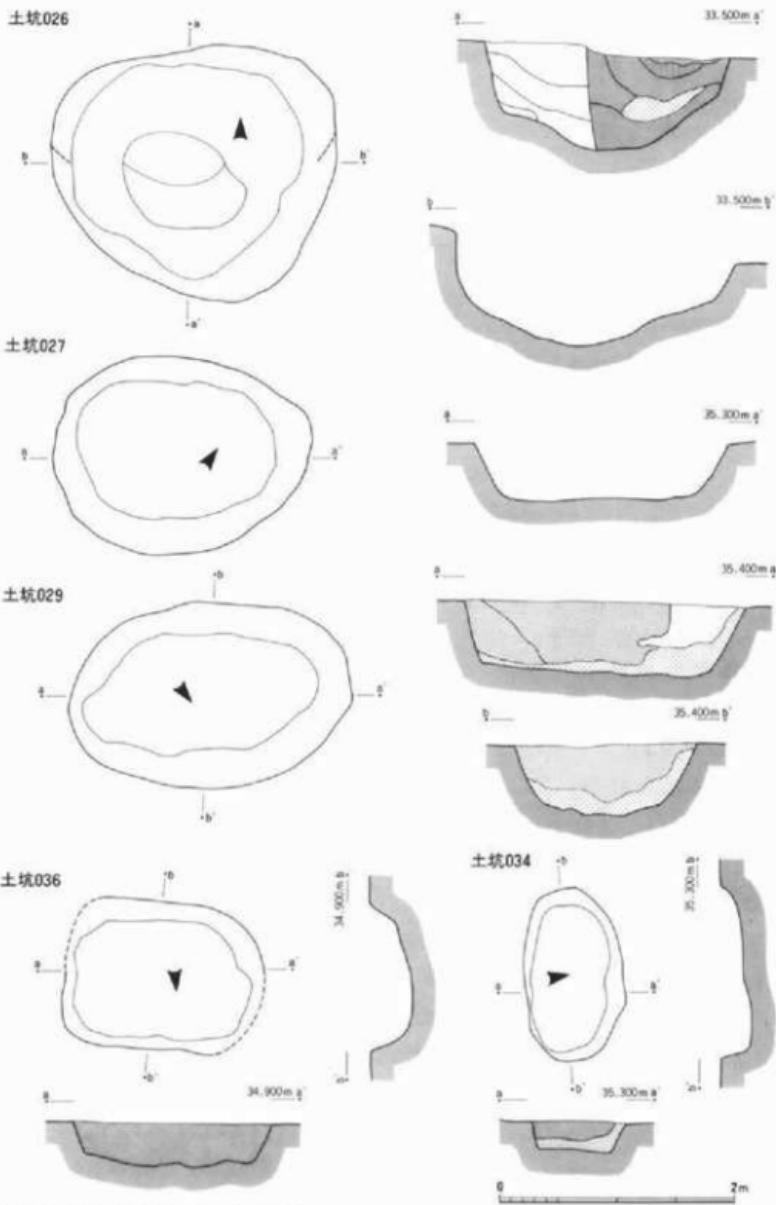
ローム粒を含むしまりの良い黒褐色土層を主体とし、焼土粒を多量に含むしまりの良い暗赤褐色土がレンズ状に堆積する。下部に混入する層はロームを主体にした層である。

土坑059A (第83図、図版19)

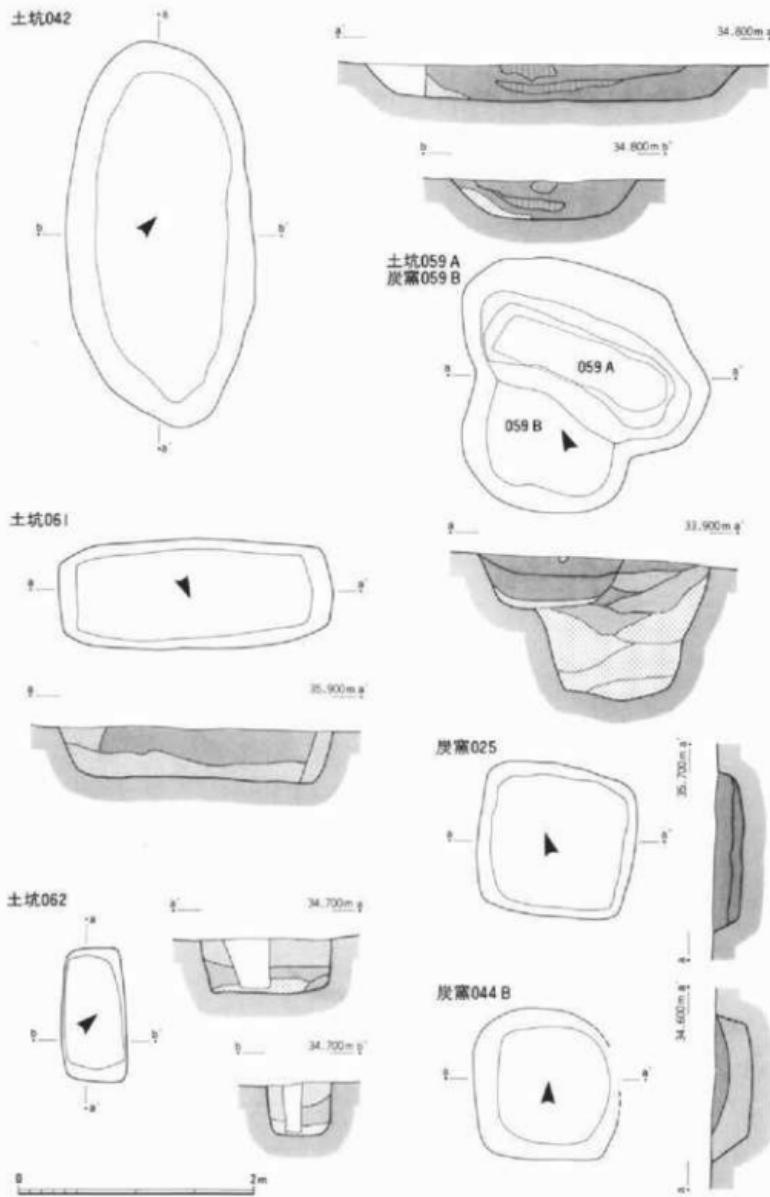
先にも述べたように、南の炭窯(059B)に切られている。大きく3層に分けられそうである。断面図上、最上部の黒色土層、こまかい網のスクリーントーンで示したローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土層、同じくあらい網の暗褐色土を含む黄褐色のローム主体層の3層である。調査時の所見によれば「各層とも混人物の混合度がやや不自然であり、人為的な流入土かと思われる」とあり、形態からは陥し穴とも考えられるが、ここでは土坑として扱った。

土坑061 (第83図)

壁際に流入する層を含めて、おおきく2層に分けられるようである。上層は黒色土・ローム粒・小ロームブロック・白色粘土粒を含む黒褐色土層、下層は黒色土・ローム粒・ロームブロ



第82回 土坑026・027・029・034・036



第83图 土坑042·059A·061·062、炭窑025·044B·059B

ックを含む暗黄褐色土層である。上層ではあるが白色粘土粒を含むことから土壤墓の可能性もあるかもしれない。

土坑062（第83図、図版20）

おおきく3層に分けられるようである。それぞれハードロームブロック・ローム粒等を含むが、上層に褐色土層、中層に暗褐色土層、下層に黄色土層が堆積している。土坑061に比べ、土坑062は一回りほど小さいが、平面形態・土層堆積状況とも共通性が多い。

3. 炭窯

炭窯025・044B・059B（第83図、図版17・19）

059Bも含めてほぼ正方形を呈し、おびただしい量の炭・焼土を含んでいる。

なお、炭窯044Bは陥し穴044Aを切っている。

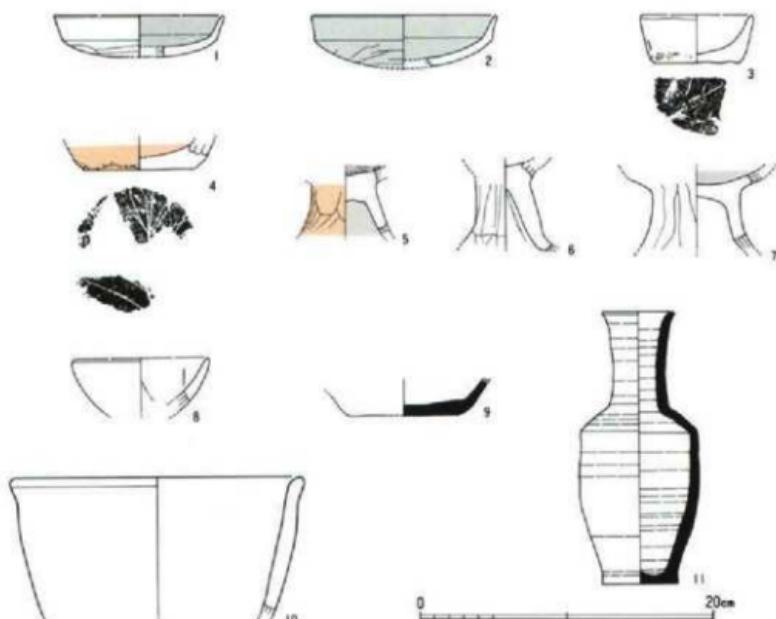
第7節 遺構外出土の遺物

1. 繩文時代以降（第84図、図版47）

[土器観察表P171]

縄文時代以降の遺物で、遺構外から出土したものを集めた。3、4の杯の底部には木の葉の文様の跡が見られる。

なお、遺構外出土の遺物としては鉄製品もあったが、破片のため図示しなかった。



第84図 遺構外出土土器

2. 繩文時代

a. 土器

松尚作遺跡では、縄文時代に帰属する遺構としては陥し穴が4基確認されたのみにとどまっているが、その他に土器包含層が存在する。比較的出土量が多く、明確に包含層と認められる範囲のみを調査の対象とし(第95図)、小グリッド単位で一括して取り上げることとした。なお、調査区のほぼ全域にわたって古墳の封上下や新しい時代の遺構覆上中からも少量ながら縄文土器の出土が認められる。これら全てを含めて包含層出土の土器として扱ったが、後者の遺構中出土のものについては遺構の存在する小グリッドの一括遺物とし、複数グリッドにまたがる遺構については最も面積の広いグリッドに帰属するものとした。便宜上次の5群に大別して紹介する。

第I群 早期初頭の燃系文系土器	1300点
第II群 早期後葉の条痕文系土器	151点
第III群 前期の土器	67点
第IV群 中期の土器	224点
第V群 後期の土器	434点

第I群 (第85・86・87図、図版51・52)

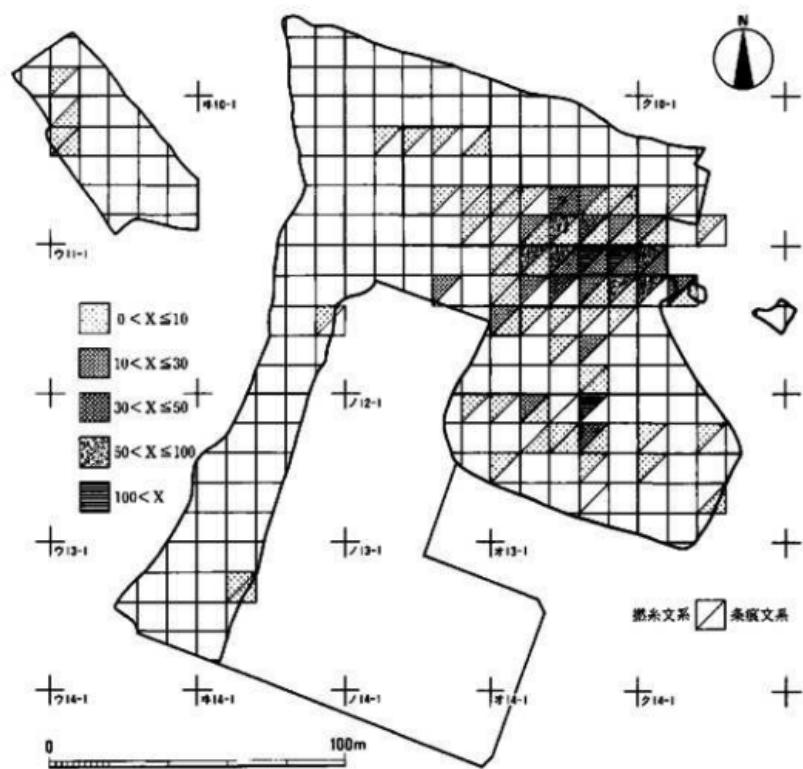
早期初頭の燃系文系土器群を一括した。破片総数は1300点で全体の約60%を占め、当包含層の主体をなす。施文手法や口縁部形態により4類に細別することができる。なお文様の比率は、燃系施文34%、縄文施文57%、無文9%となっており、従来言われてきた「北緯地方では縄文施文の比率が高い」という点と合致する。

第1類 (1・2) 1個体分の破片を持つ。口縁部はやや肥厚しながら外反し、縦位の細かい燃系文が密に施される。色調は灰褐色を呈し、焼成は良い。口縁部形態から従来大丸式と呼ばれているものに比定したい。

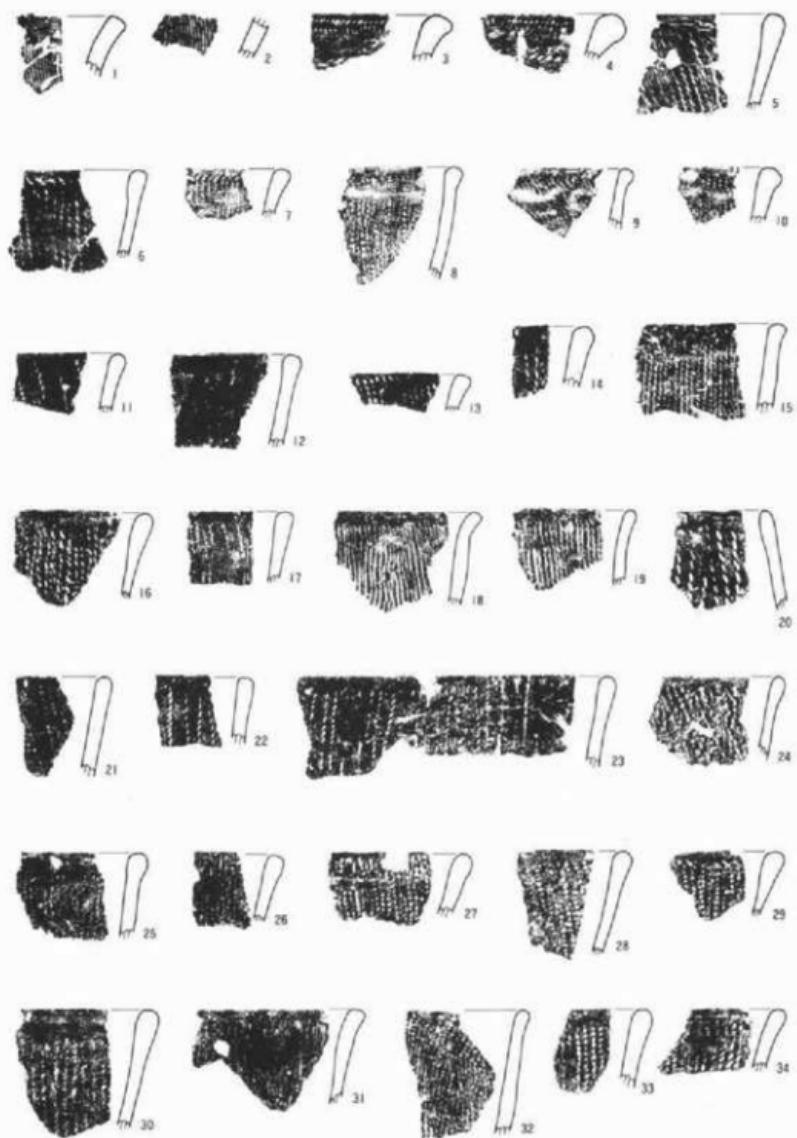
第2類 (3~10) 口縁部形態は極端に肥厚して外反するもの(3・4)、緩やかに肥厚するもの(5~7)、外折するように肥厚するもの(8~10)の変化があるが、口縁部文様帶と胴部文様帶に分けられる点で共通する。胴部文様帶は縦位の燃系文が縄文で共通するが、口縁部文様帶は縄文原体の押捺によるもの(3~5)、縄文原体の横位回転圧痕によるもの(6・7)、口縁部から縦位の施文を行った後に口縁部直下をナデすることによって無文帯を作出するもの(8~10)等のバラエティがある。8のように細く深くナデられ、沈線のようになるものもある。口縁部が外折するように見えるのは、このナデが深く入っているためかと思われる。従来の井草II式に比定されよう。

第3類（11～44） 口縁部文様帯と胴部文様帯の区別が消滅し、口唇部から胴部全体にわたって縞位の施文がなされるものを一括した。撚糸施文と縄文施文の比率はほぼ1:1である。撚糸文はR（13・14・15・16・19・20等）・L（22・23・34等）とも存在するが、Rのほうがやや多い。縄文はRL単節縄文（27・28・29等）が大半を占めるが、LR単節縄文（26）や無節縄文（57）も少量ながら出土している。口縁部形態は緩やかに肥厚するもの（11・12・16・25・27・29・30等）、外反するもの（18・19・24・32・38等）、直立するもの（21・22・23・35・36・37等）のほかに20のような内傾する例もある。焼成は概して良好である。

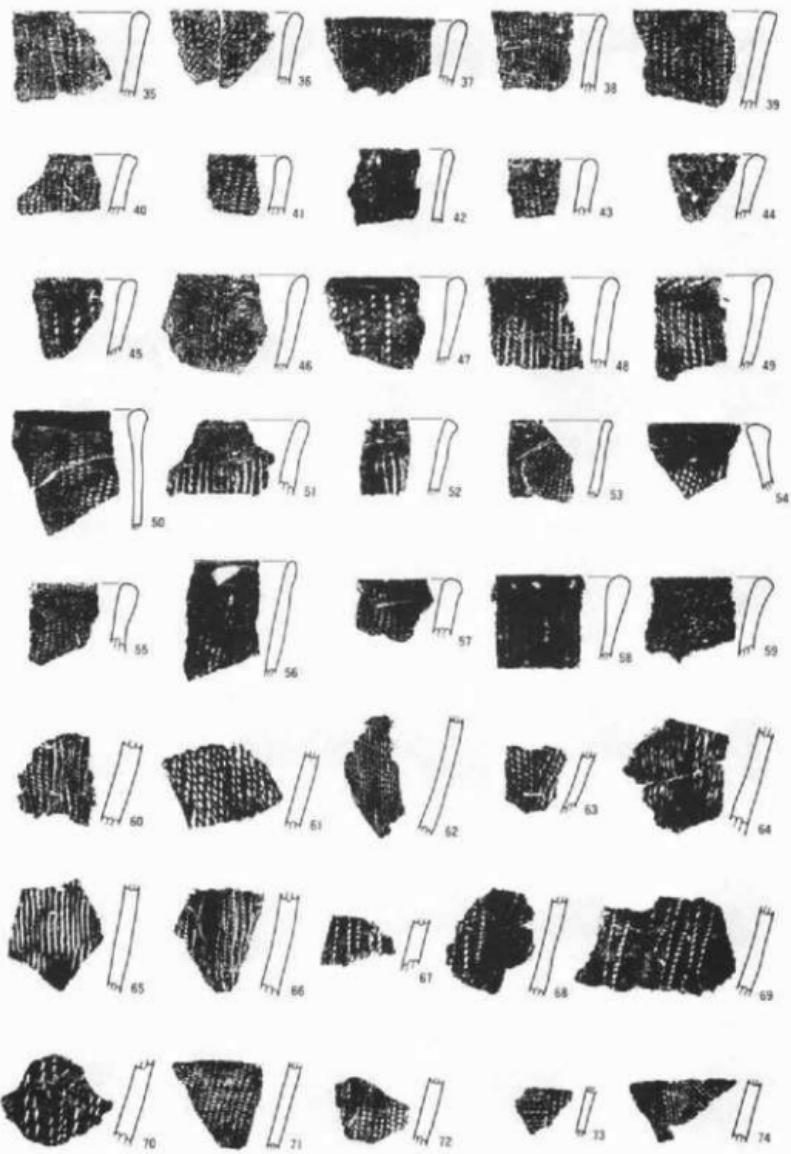
第4類（45～59） 文様構成は第3類に類似するが、口縁部に丁寧なナデ整形を施すことによって無文帯を作出するものを一括した。胴部の文様や口縁部形態は第3類と変わることはない。当類の特徴である口縁部のナデ整形は口縁部内面から口唇部、口縁部外面まで及んでおり、中には光沢を持つほどにナデ（ミガキというべきか）られているものもある。



第85図 縄文土器分布状況（1）



第86図 縄文土器拓影図（1）



第87図 繩文土器拓影図（2）

0 15cm

一応第3類を夏島式、第4類を稻荷台式と考えたいが、22や23（同一個体）のように稻荷台式の特徴である条間の広いものや、52や53のように第2類的な様相を持つものもあり、一概に比定することはできない。量的には第3類と第4類が圧倒的多数を占める。

胸部破片 (60~74) 62のように古い様相を持つもの、68や69のように新しい様相を持つものという程度の分類ができるに過ぎず、帰属ははっきりしない。大多数はごく一般的な撚糸文や繩文が施されたものであるが、73や74のように格子目状や鋸歯状に施文されたものも存在したようである。

第II群 (第85・88図、図版55)

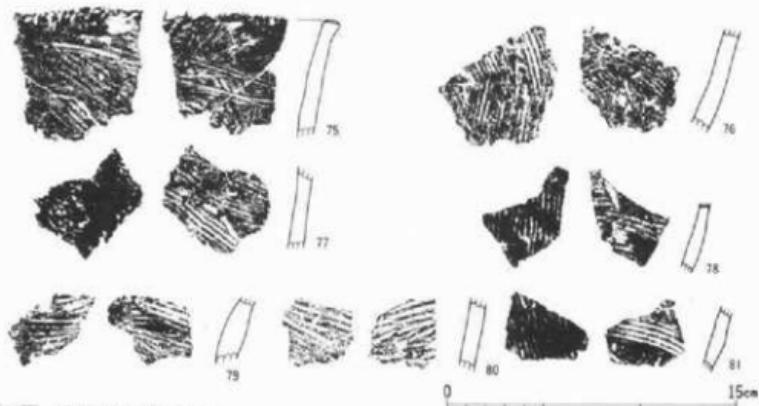
早期後葉の条痕文系土器を一括した。総数は151点あるがいずれも表裏条痕文土器の細片であり帰属型式はわからない。口縁部破片1点を含む7点を図示したが、いずれも条痕文以外の主文様は見られない。胎土は非常に脆く、大量に纖維を混入する。

第III群 (第89・90図、図版53)

前期に属する土器を一括した。総数は67点と少ないが、ほぼ全型式が存在したようである。以下の4類に細別できる。

第1類 (82~84) 黒褐色の胎土中に大量の纖維を混入し、焼成は悪く非常に脆い。胸部の文様にはアナグラ属の貝殻腹縁の押捺が見られるのみである。前期初頭の黒浜式に属する。

第2類 (85) 1点見られるのみである。胸部破片で、胎土中には大量の雲母や石英を混入する。文様としては当破片で見るかぎり全面にR (フ) 異節繩文が施される。前期初頭の関山式に属するものと思われる。

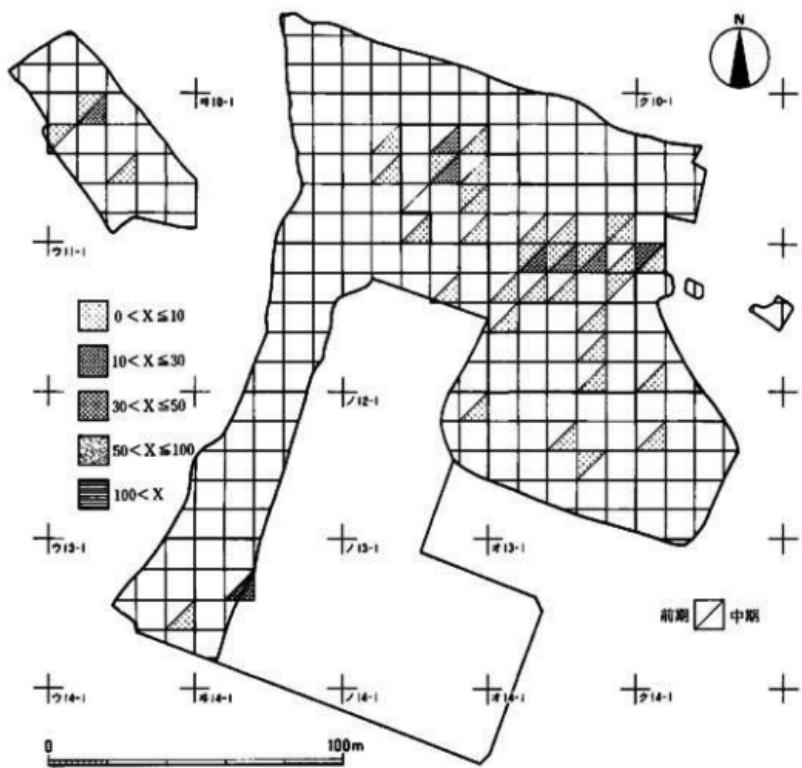


第88図 繩文土器拓影図 (3)

第3類 (86~90) 前期の最終末に見られる綾絡文を有する土器を一括した。86は口縁部破片で、口唇部には縄文原体の押捺が見られる。綾絡文は縦位のもの (86・87・88) と横位のもの (89・90) がある。胎土中には微細な砂粒を大量に含み、焼成は良好である。

第4類 (91) 1個体分の破片で細片も含めるとかなりの量があったが、とりあえず器形のわかるものをピックアップして図示した。文様帶は口縁部と胴部の2帯あり、施文具は半割竹管のみである。口唇部は背面の押捺、口縁部文様帶は平行沈線と切断面の背面側の刺突を交互に行い、胴部文様帶は縦位と横位の深い平行沈線で器面を画した後、斜位に浅い沈線を条線状に施す。焼成は良好で、内面はかなり丁寧に整形されている。前期終末の興津式に比定されるものである。

上記の4類のほかに諸磽式に属すると思われる破片も数点あったが、いずれも細片であり図示することができなかった。

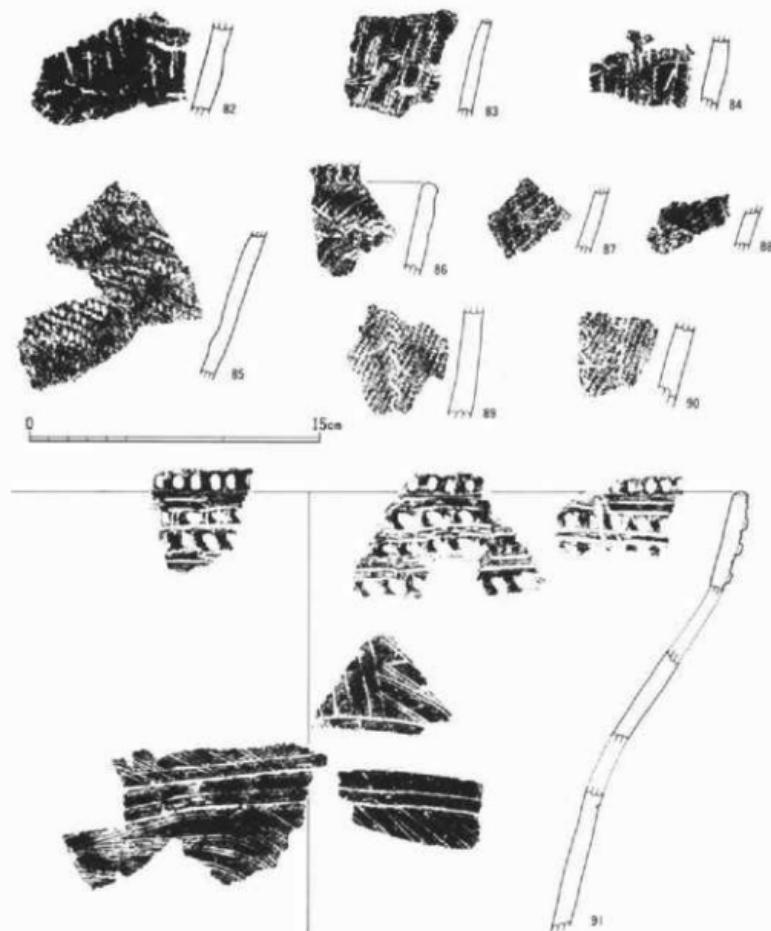


第89図 縄文土器分布状況 (2)

第IV群 (第89・91図、図版55)

中期に属する土器を一括した。总数224点としたが、縄文のみの胴部破片が多く胎土や縄文のイメージから中期としたものも多いため、実際にはもっと少ないかもしれません。4類に細分できる。

第1類 (92・93) 口縁部を包みこむように貼付を施し肥厚させる。文様はRL単節縄文のみであるが、肥厚部とはやや向きを変えて施している。胎土には雲母や砂粒を大量に含み、焼成はかなり良い。中期初頭の五領ヶ台式期のもので、一部で下小野式と呼ばれている。



第90図 縄文土器拓影図 (4)

第2類 (94) 口縁部文様帶の破片で、貼付による突起が認められる。文様は連続刺突による結節沈線を用いて、4本1単位で口縁部の区画文を構成し、その中も同様の結節沈線で充填する。中期前葉の阿玉台式の古い様相を持っている。胎土には雲母を大量に含んでいる。

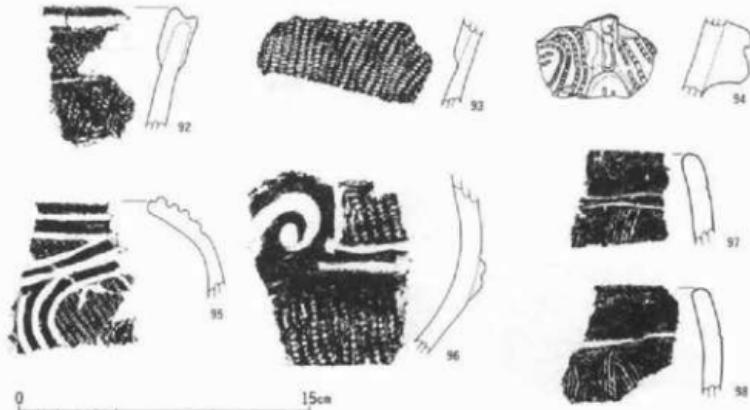
第3類 (95・96) 加曾利E式のいわゆるキャリバー形土器の破片である。95は口縁部のみの破片で、RL単節繩文を地文に2本1単位の隆帯で主文様を描く。隆帯はかなり丁寧にナデられており、また内面の整形も光沢を持つほどに念を入れている。96は口唇部を欠損する口縁部文様帶から胴部文様帶にかけての破片である。RL単節繩文を地文に隆帯によって口縁部文様帶を画し、渦巻文が見られる。加曾利E II式であろう。

第4類 (97・98) 同一個体である。やや内傾する口縁部に横位の沈線で無文帯を作出し、その下を条線で充填する。整形は丁寧であるが文様の施文は大変粗雑で、沈線は1条と2条があり、また条線も縱位のものと波状のものがある。これは文様を雑に施した結果であり、別個体ではない。加曾利E式終末期の粗製土器である。

第V群 (第92・93・94図、図版54・55)

後期の土器を一括した。総数434点である。従来の型式細分により3類に細別した。

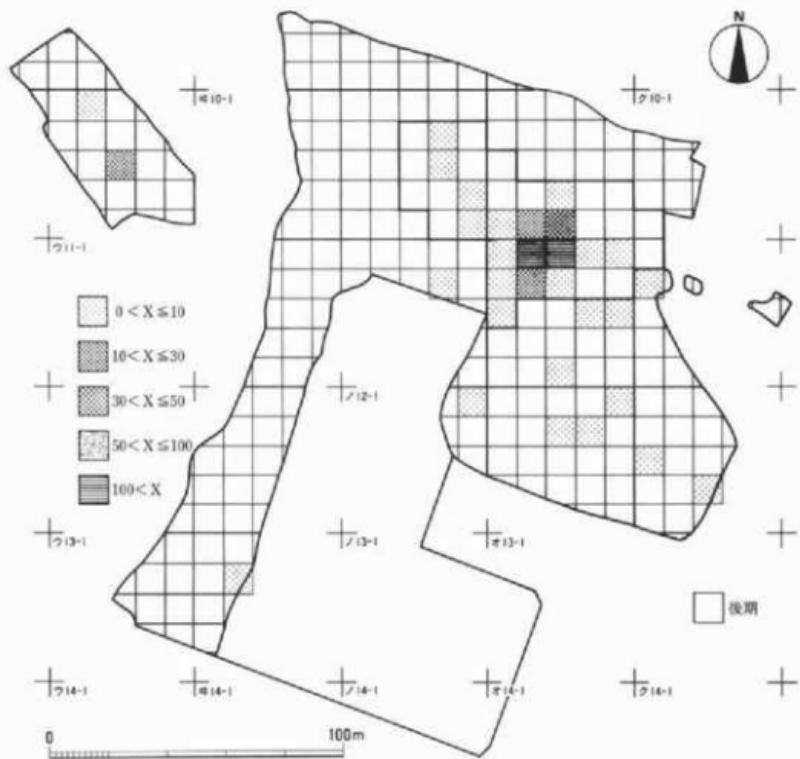
第1類 (99~109) 称名寺式土器を一括した。器面に2本の沈線で文様を描き、沈線間に刺突文を充填する例 (99~100・107~109) や、繩文を施した後に同様の手法で文様を描き、磨消する例 (103・104)、两者を併用する例 (101・102) がある。



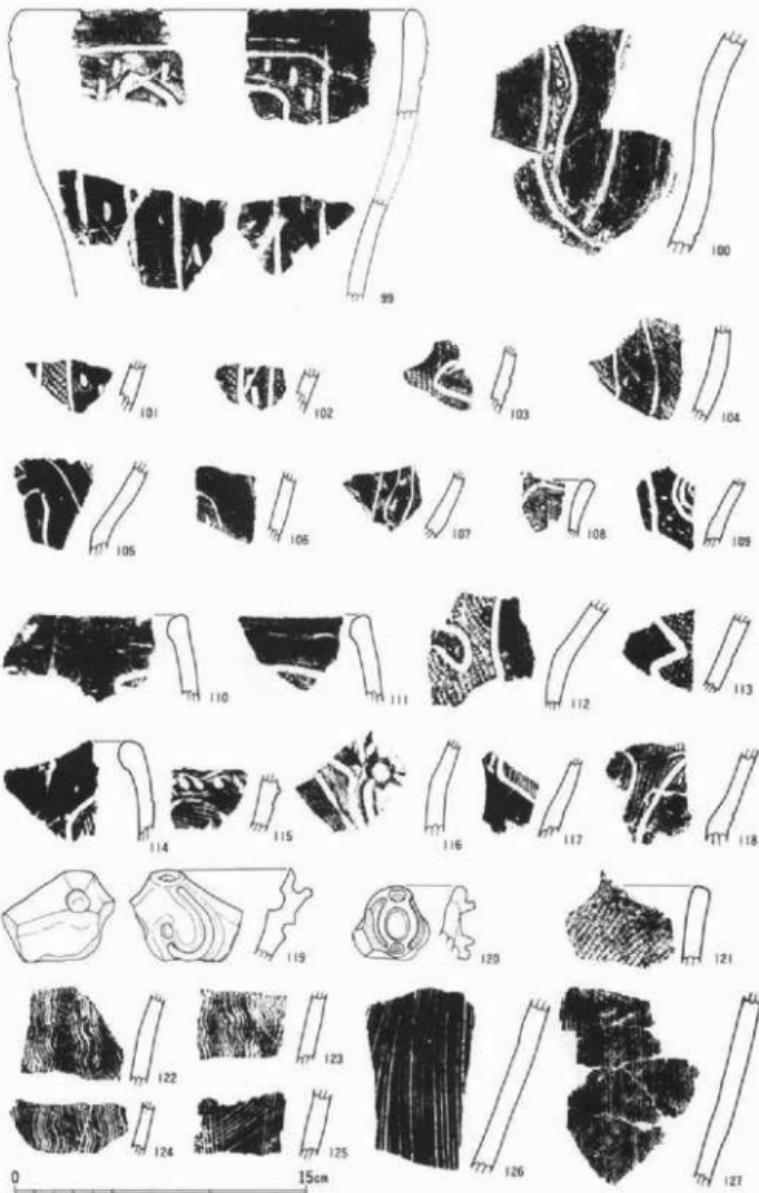
第91図 繩文土器拓影図 (5)

第2類 (110~127) 堀之内式土器を一括した。110と111は称名寺式の可能性もあるが、114と類似する個体ということで一応当類に含めた。縄文を施した後に沈線により主文様を描き、磨消している。口縁はやや内傾し、内面が肥厚する。112と113は胸部破片で、沈線による懸垂文が見られるが、やはり磨消手法が用いられている。114~118は同一個体である。沈線と隆帯を併用して幾何学的な文様を描き、非常に細かい条線を充填する。これらの他に119や120のような堀之内式に特徴的な突起も見られ、また、縄文のみを施した波状口縁の粗製土器(121)も見られる。122から127は条線を持つ胸部破片である。条線には縦位の波状のもの(122~124)、縦位で直線的なもの(126・127)の他に125のような格子目状のものが見られる。いずれも当類に属するものであろう。

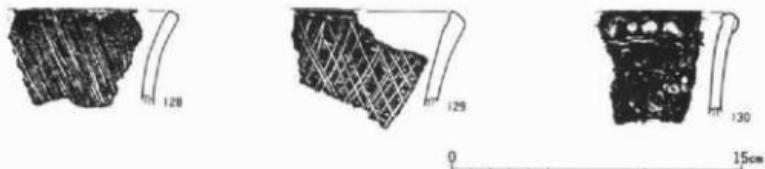
第3類 (128~130) 128と129は加曾利B2式の精製土器の口縁部である。口唇部から内面は大変丁寧に整形されている。129は口縁内面に沈線が1条巡るが、128でも沈線は施されないもののその部分が丁寧にナデられている。文様は、128では単純に斜位の沈線(条線に近い)が



第92図 縄文土器分布状況（3）



第93図 縄文土器拓影図（6）



第94図 繩文土器拓影図（7）

施されているが、129は地文に縄文を施した後に格子目状に沈線を施している。両者とも焼成が大変良く、硬質である。130は加曾利B式から安行式にかけて見られる、紐線文土器と呼ばれている粗製土器である。表面の風化が激しくはっきりしないが、口縁内面に沈線が巡り、条線の下に地文として縄文を施しているため当類に含めた。

小 結

松向作遺跡の縄文土器包含層には、早期初頭の撫糸文系土器群から後期の加曾利B式までの諸型式が、量的な差はあるもののほぼ切れ間なく含まれており、その主体を為すものは撫糸文系土器群である。松向作遺跡については、今回の調査では残念ながらこれ以上のことはわからぬ。しかし遺跡の分布を見てみると、佐倉第三工業団地造成地内だけでも松向作遺跡と腰巻遺跡は撫糸文系土器群主体、タルカ作遺跡は条痕文系土器群主体、大作遺跡では前期黒浜式主体、向原遺跡では条痕文系土器群及び前期主体の包含層を持っており興味深い。集団の移動等を考える上で良好な資料となるであろう。

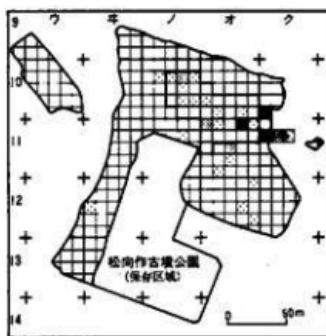
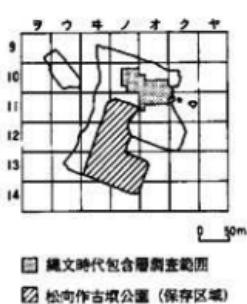
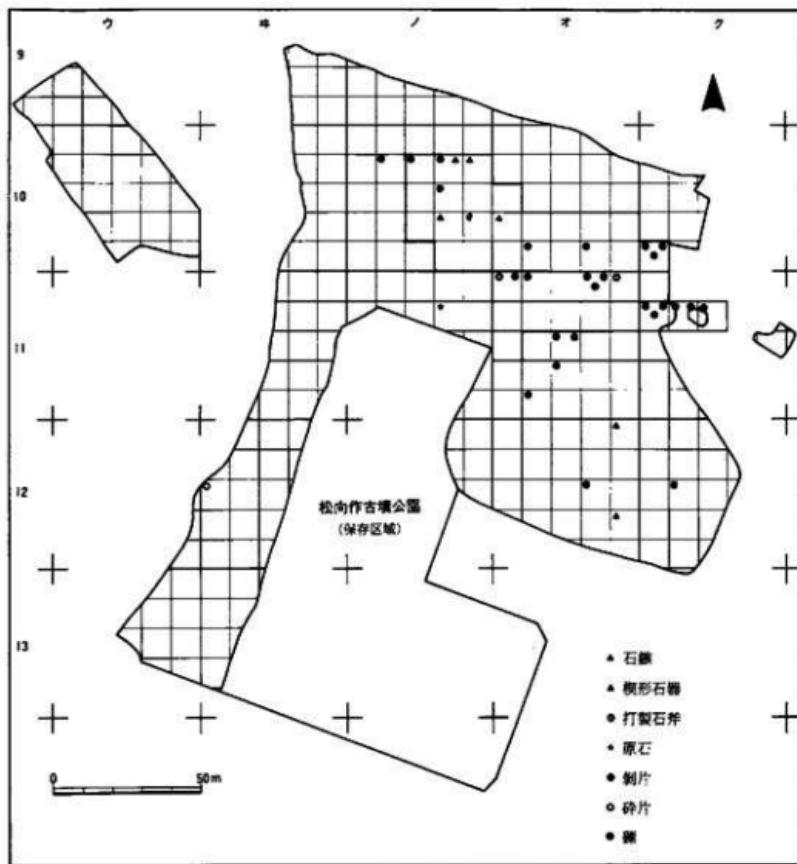
b. 石 器（第95～102図、第10・11表、図版58～60）

松向作遺跡では、縄文時代早期の土器の分布する範囲を中心に包含層の調査を行っており、土器については早期初頭の撫糸文系が主体となるようである。あるいは石器についてもほとんどがこの辺りの時期のものかもしれない。

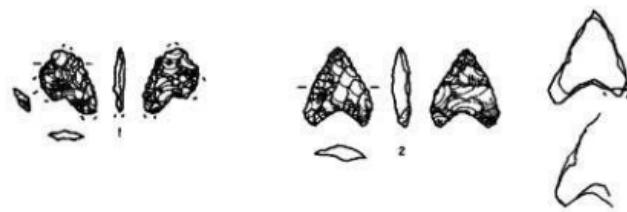
分布については、絶対量が少ないとから何とも言えないが、大体において散漫な状況を示すのであろうか。

遺物については、今回も中グリッド・大グリッド毎に碎片と礫を除く石器の実測図を載せた。また、属性表は全てについて作成している。なお、長・幅・厚の計測には勝田島製作所のカーボンファイバーノギスDIAL-15、重量の計量には島津製作所のデジタル秤LIBROR E B-330Dを使用した。

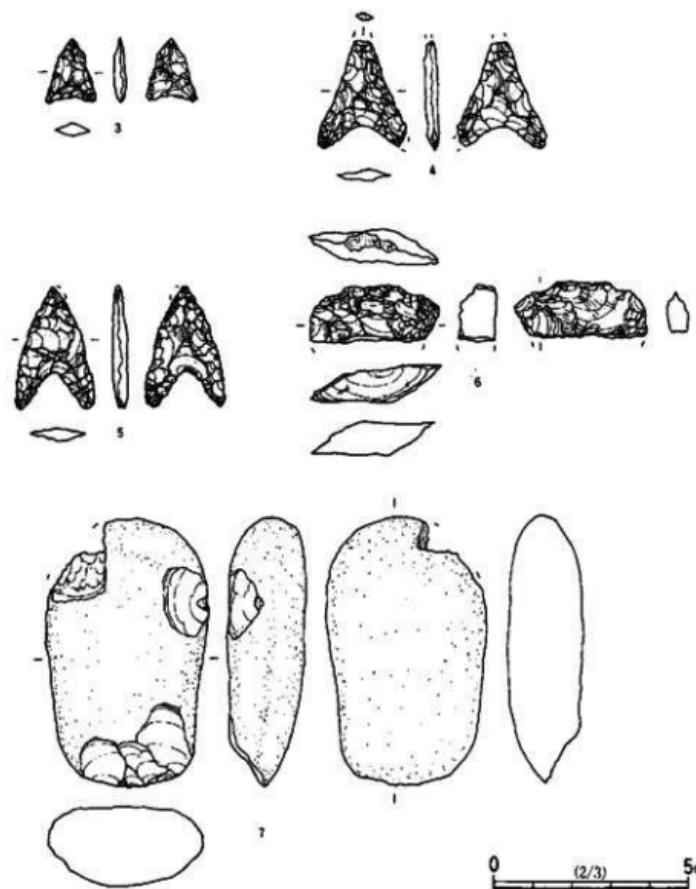
全体の石器組成は石錘12点、U-刃1点、楔形石器1点、打製石斧4点、磨製石斧1点、磨石3点、原石1点、剥片8点、碎片1点、礫24点となっている。



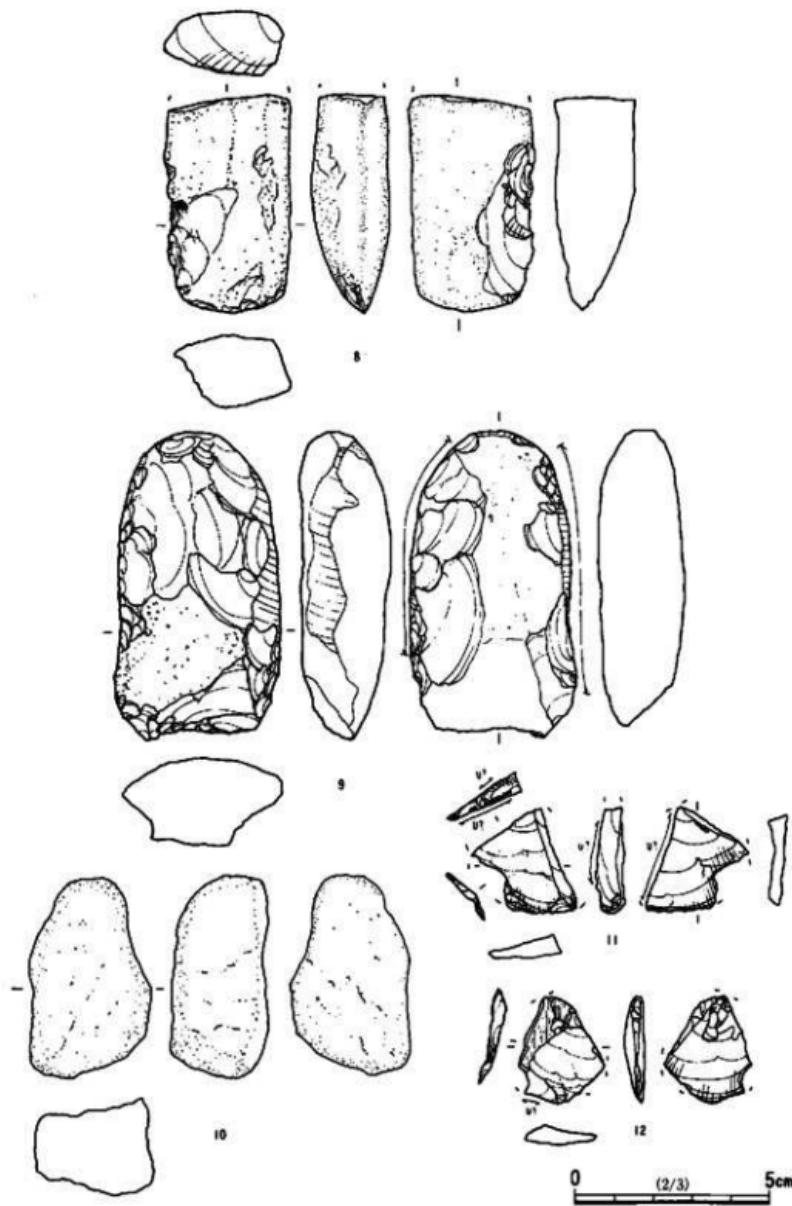
第95図 繩文時代石器分布



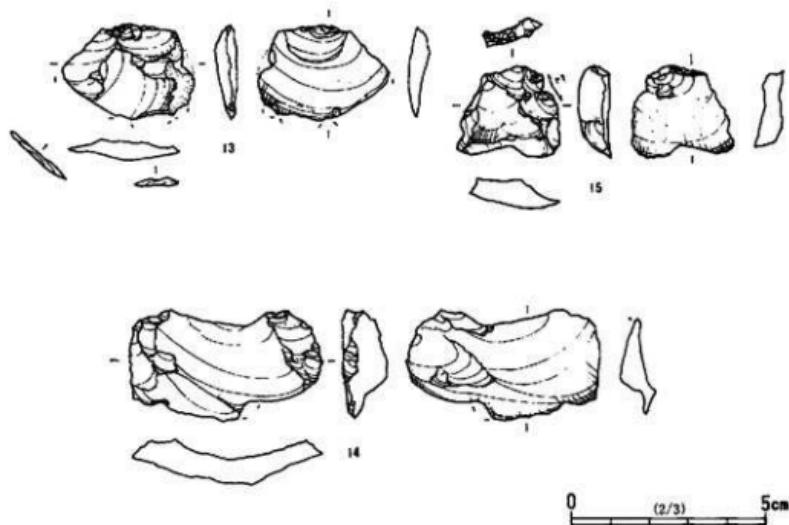
第99図3との形態比較



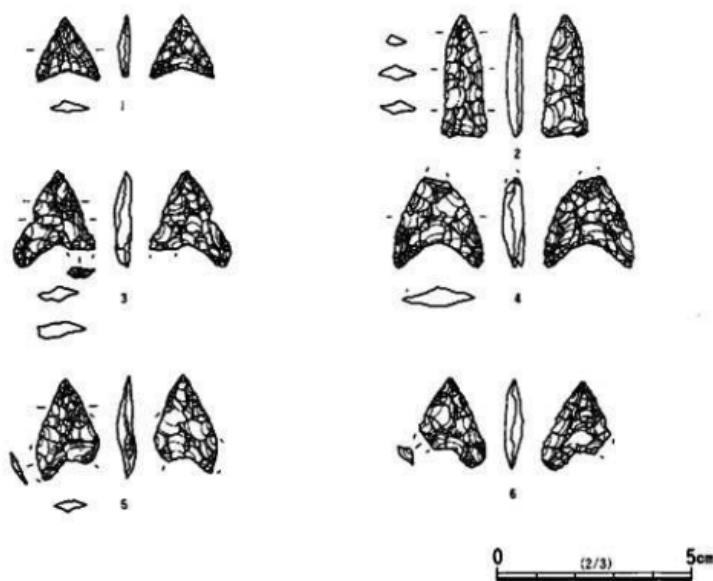
第96図 繪文時代中グリッド出土遺物（1）



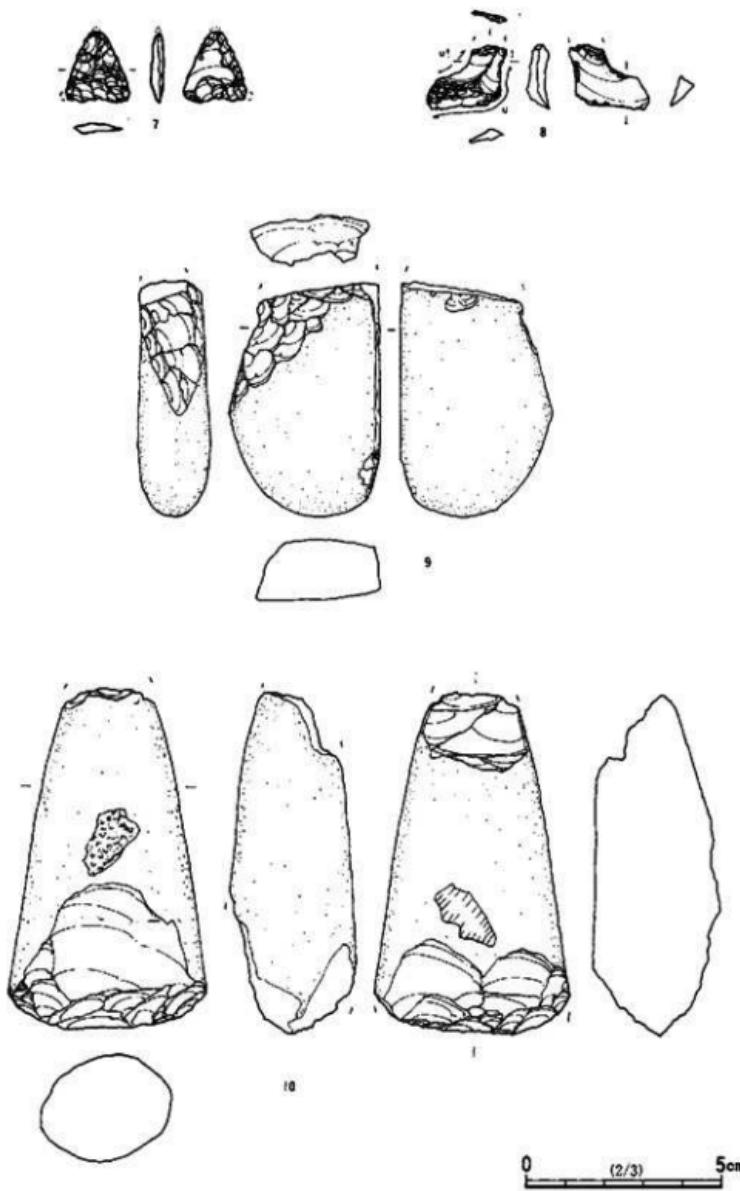
第97図 摺文時代中グリッド出土遺物（2）



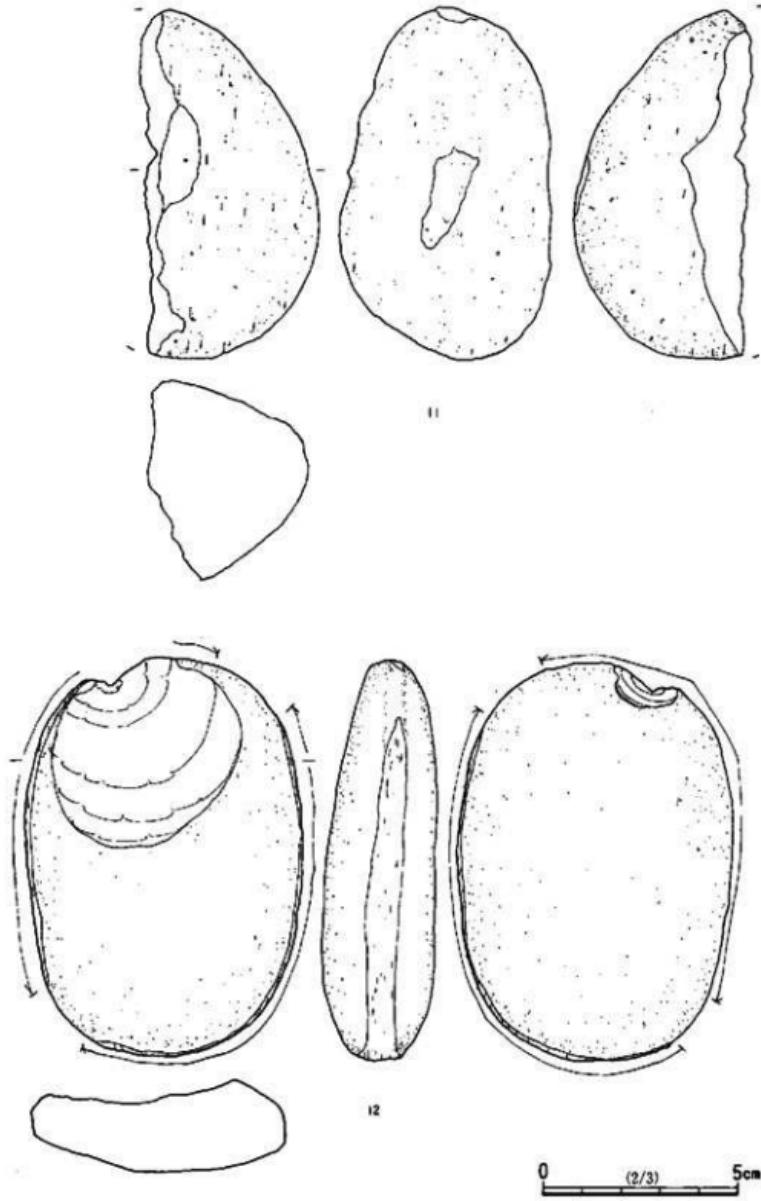
第98図 縄文時代中グリッド出土遺物（3）



第99図 縄文時代大グリッド出土遺物（1）

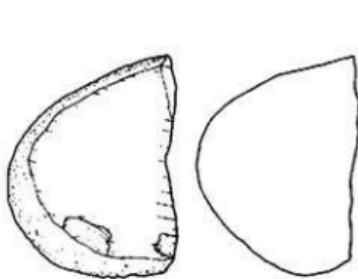
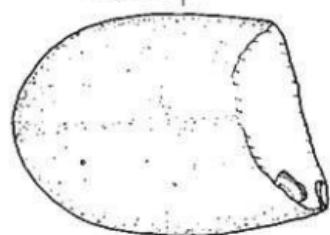
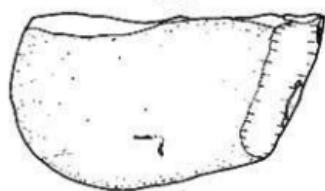
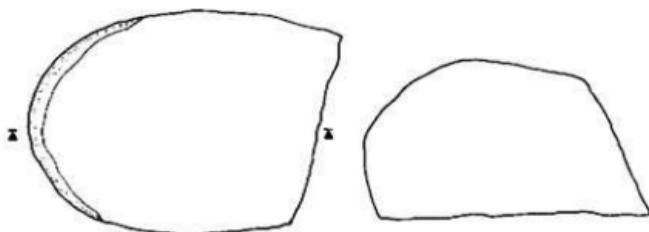
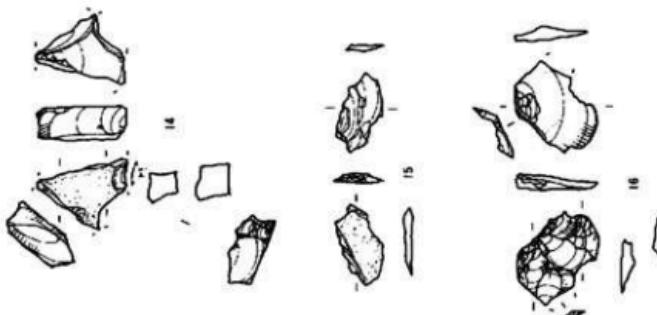


第100図 縄文時代大グリッド出土遺物（2）



第101図 純文時代大グリッド出土物 (3)

5mm
(2/3)



第102図 繩文時代大グリッド出土遺物（4）

第3章 下層の遺構と遺物

第1節 A地点・B地点・地点外

松向作遺跡では2箇所（A地点・B地点）の旧石器時代の集中地点を検出している。両地点ともU-f1や楔形石器、剝片等が主体で、明確に時期を決定する遺物を産出していない。

遺物については、今回も碎片と疊を除く石器の実測図を載せた。また、属性表は全てについて作成している。なお、長・幅・厚の計測には佛田島製作所のカーボンファイバー／ギスD I A L-15、重量の計量には島津製作所製のデジタル秤L I B R O R E B-330Dを使用した。

また、石材の鑑定については、千葉県立中央博物館高橋直樹氏の協力を得た。縄文時代の石材についても同様である。

A地点（第103・105・106図、第12表、図版57）

A地点は、かなり急な斜面部で検出されており、投影図からは黄褐色ソフトロームの最上部ないし、おそらく表土層と思われる黒色土層に分布の中心が読み取れる。ところで、仮に黄褐色ソフトロームがいわゆるソフトロームで、かつソフトローム化がそれほど深部まで及んでいない、あるいはプライマリーな状態であるとすれば、縄文時代の遺物の可能性もあるかもしれない。

また、斜面部方向への移動は多少なりともあるだろうが、上下にはそれほど移動していないようである。

黒曜石を主体にした石器群で、石器組成はU-f1 1点、楔形石器 3点、剝片 6点、碎片 1点となっている。

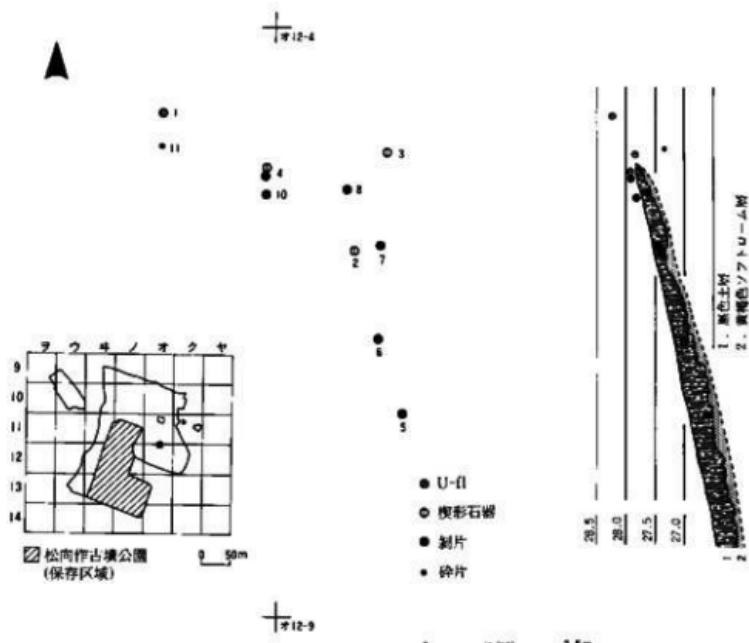
B地点（第104・107・108図、第13表、図版57）

B地点はA地点とは異なり、谷部の肩口のほぼ平坦な台地上に位置する。第2黑色帯の中部から下部にかけて遺物が集中するが、遺物から細かい時期を決定するのは困難かもしれない。

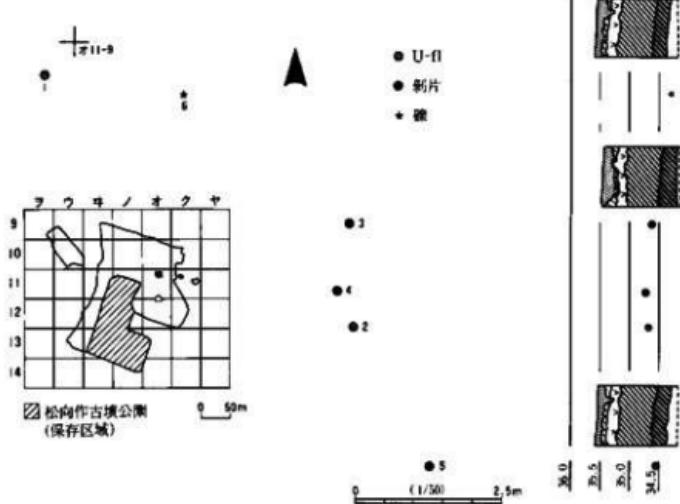
珪質頁岩を中心とした石器群で、石器組成はU-f1 2点、剝片 3点、疊 1点となっている。

地点外（第109図、第14表、図版58）

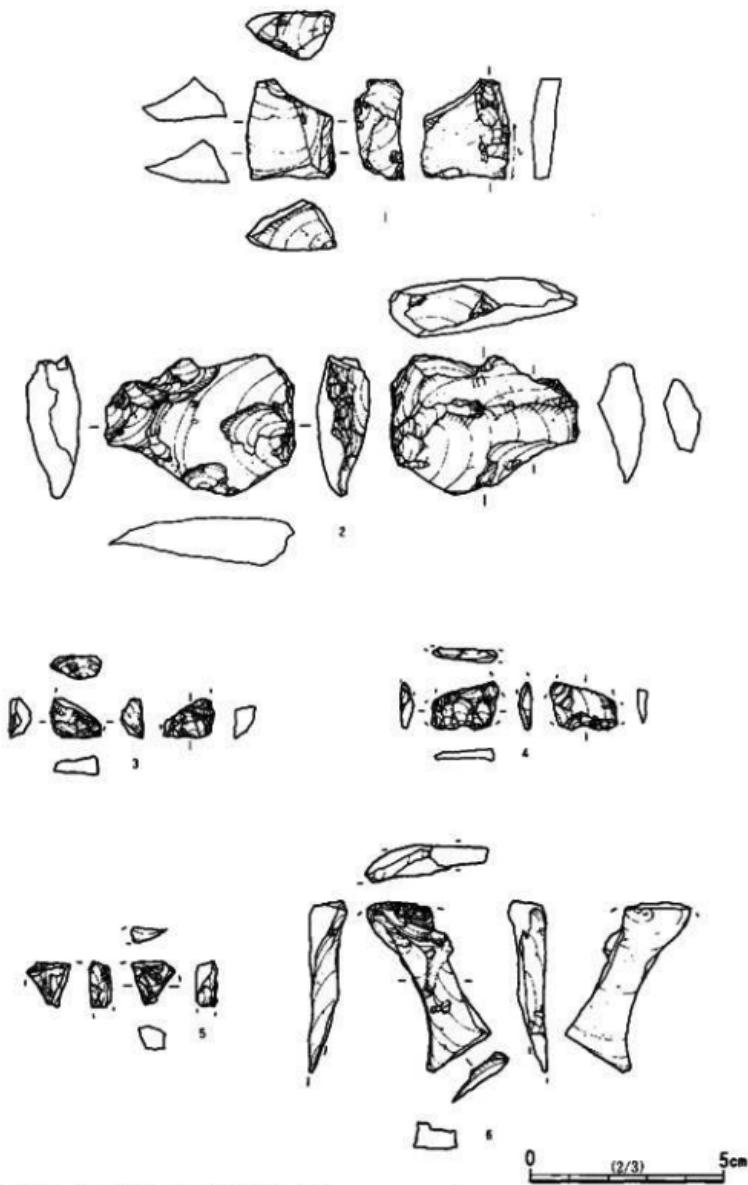
上記地点外からはナイフ形石器 2点、尖頭器 1点が出土している。



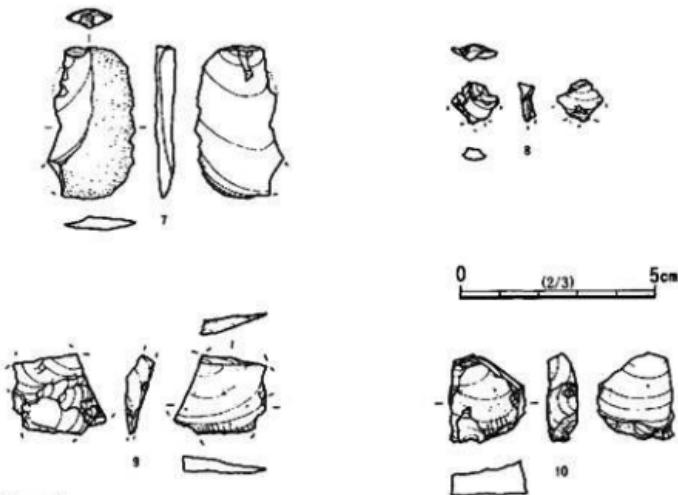
第103図 旧石器時代 A 地点遺物出土状況



第104図 旧石器時代 B 地点遺物出土状況



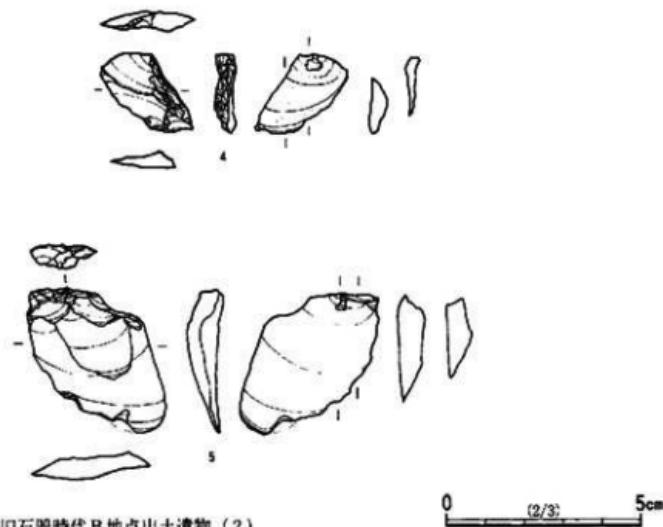
第105図 旧石器時代A地点出土遺物（1）



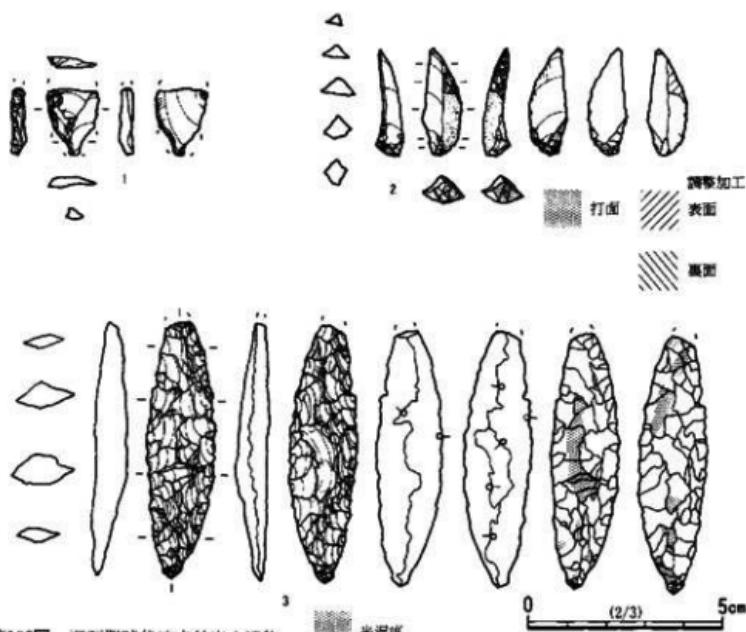
第106図 旧石器時代A地点出土遺物(2)



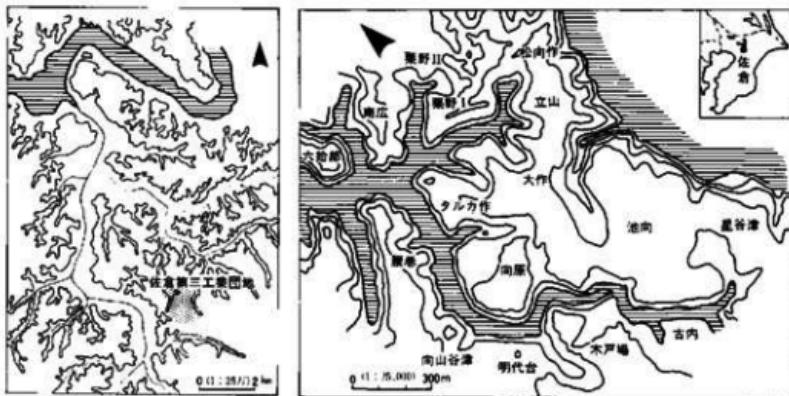
第107図 旧石器時代B地点出土遺物(1)



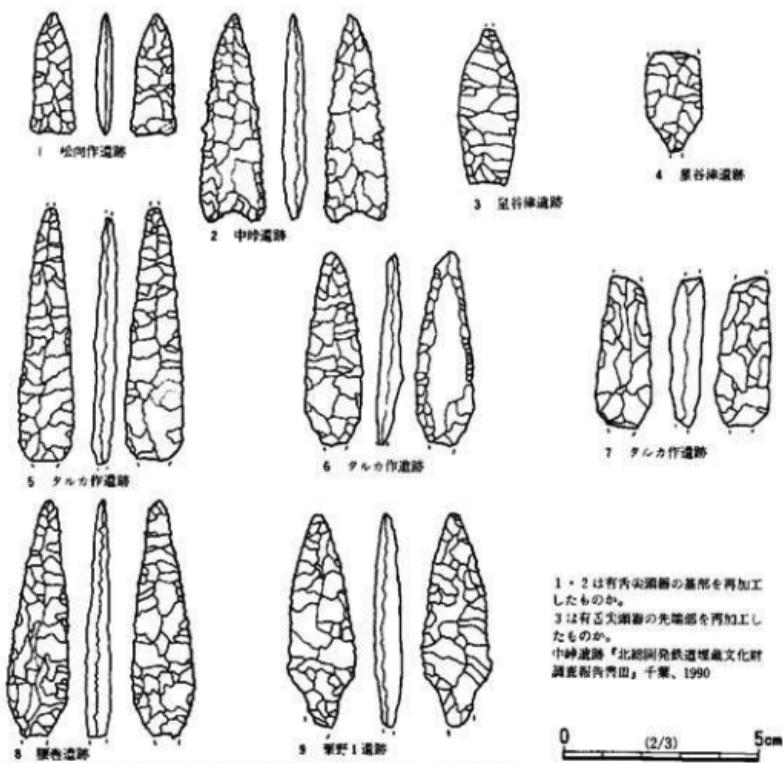
第108圖 旧石器時代B地点出土遺物（2）



第109圖 中石器時代地点外出上遺物

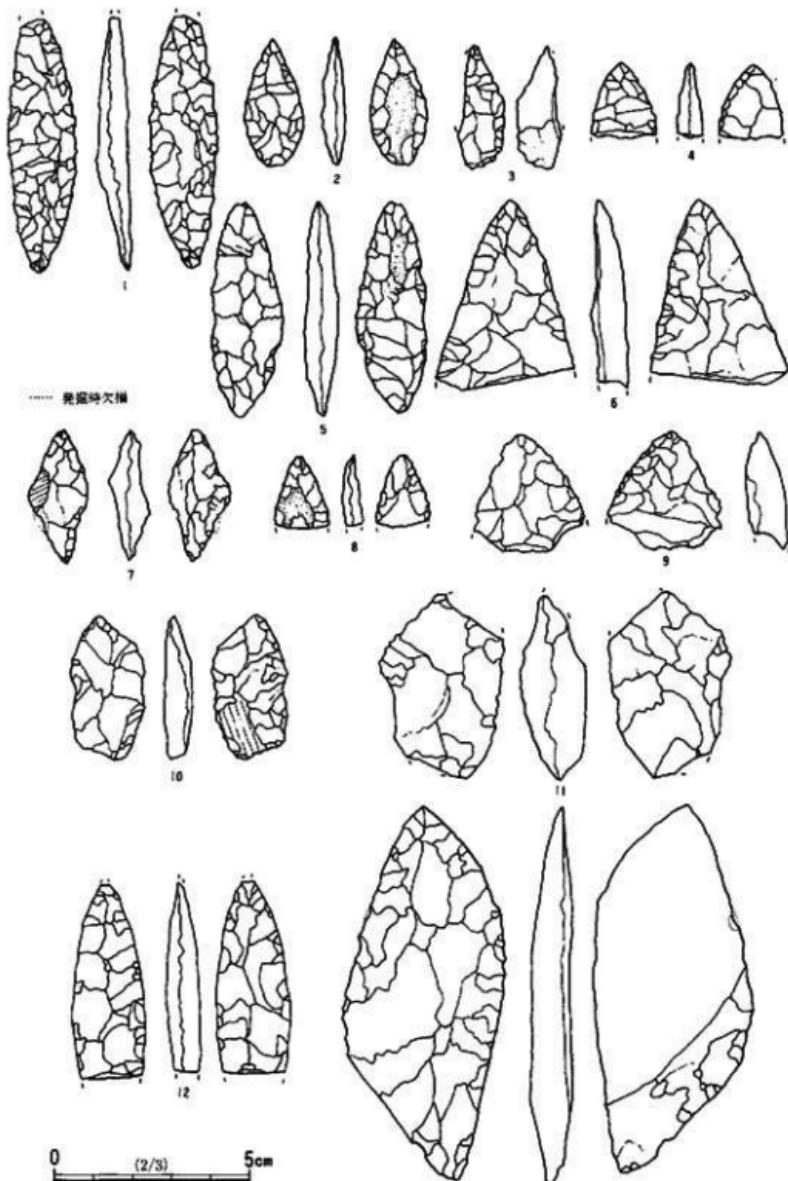


第110図 佐倉第三工業団地周辺地形及び遺跡分布

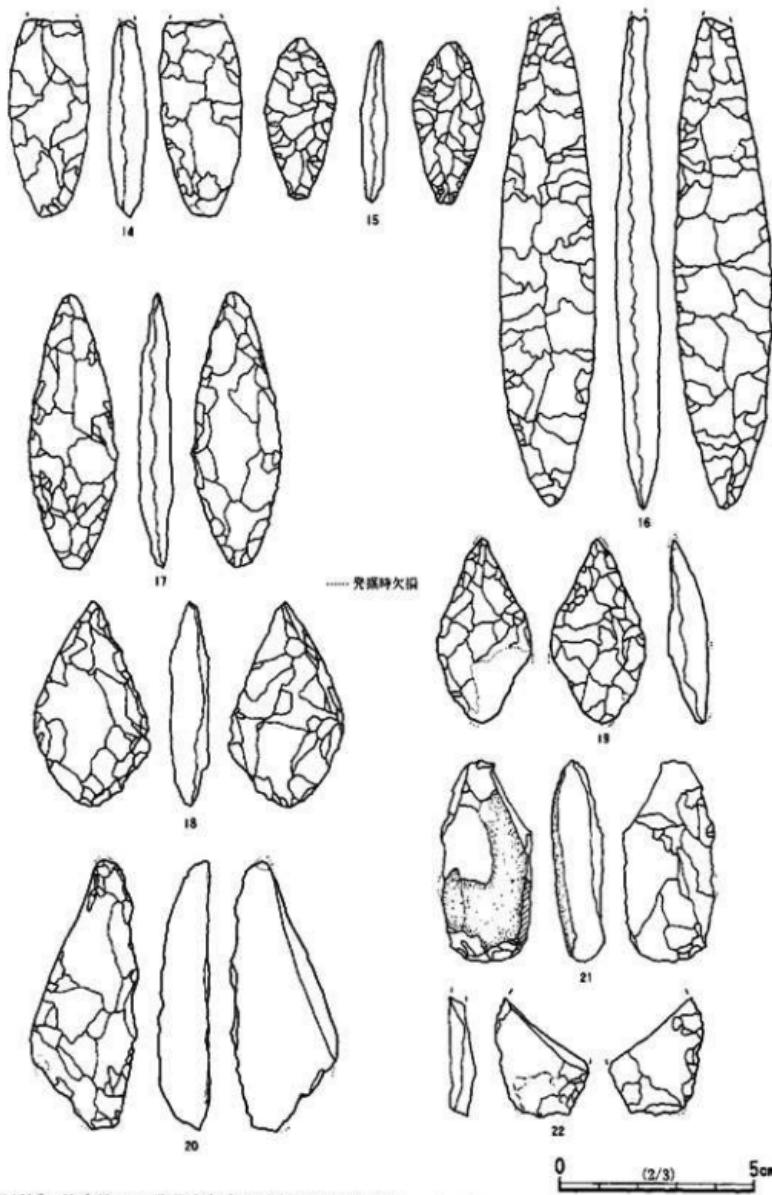


第111図 佐倉第三工業団地内遺跡群出土有舌尖頭器及び関連遺物

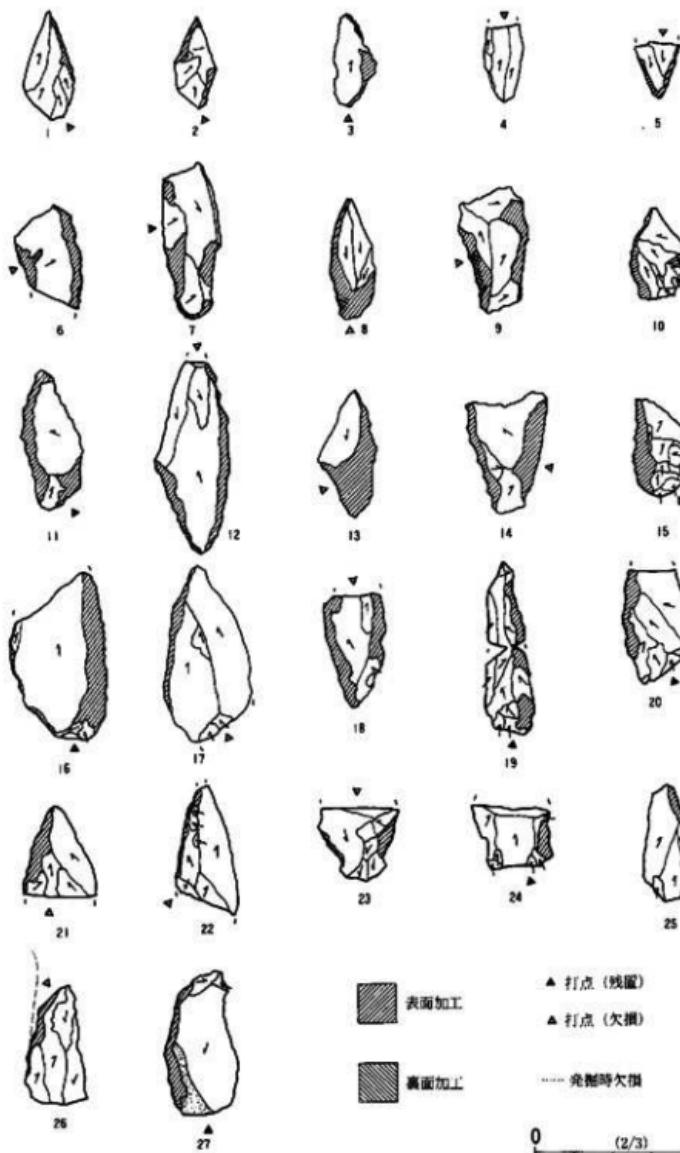
1・2は有舌尖頭器の基部を再加工したのか。
3は有舌尖頭器の先端部を再加工したのか。
小峰遺跡「北総洞發鐵道埋蔵文化財調査報告書」千葉、1990



第112図 佐倉第三工業団地内遺跡群出土尖頭器 (1) 第15表参照

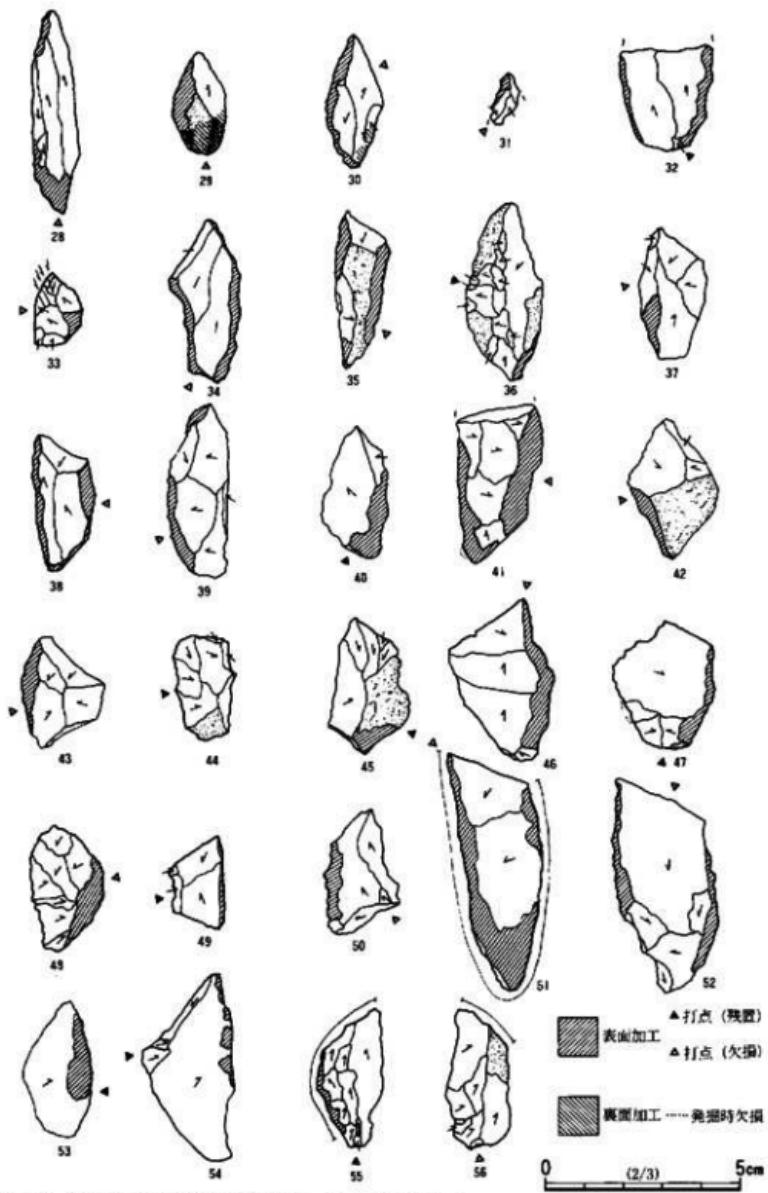


第113図 佐倉第三工業団地内遺跡群出土尖頭器（2） 第15表参照

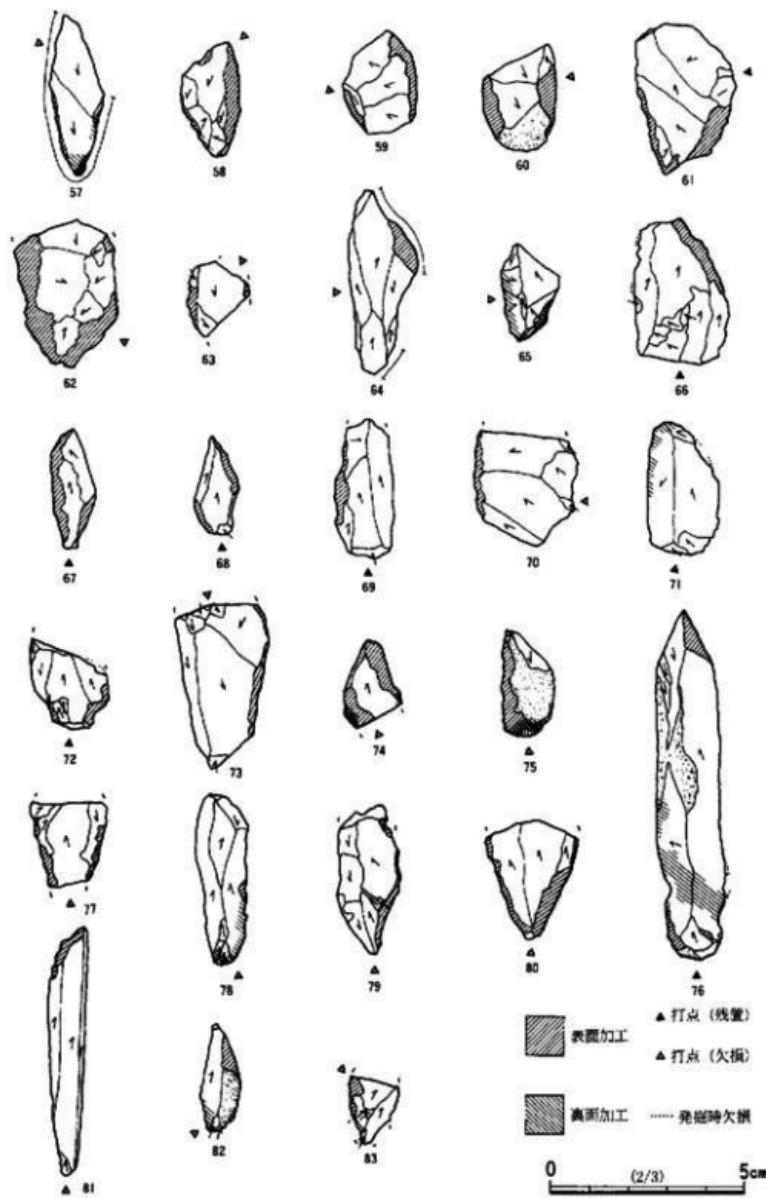


第114図 佐倉第三工業団地内遺跡群出土ナイフ形石器（1）

第16表参照



第115図 佐倉第三工業団地内遺跡群出土ナイフ形石器（2） 第16表参照



第116図 佐倉第三工業団地内遺跡群出土ナイフ形石器（3）

第16表参照

第4章 まとめ

第1節 上層の遺構と遺物

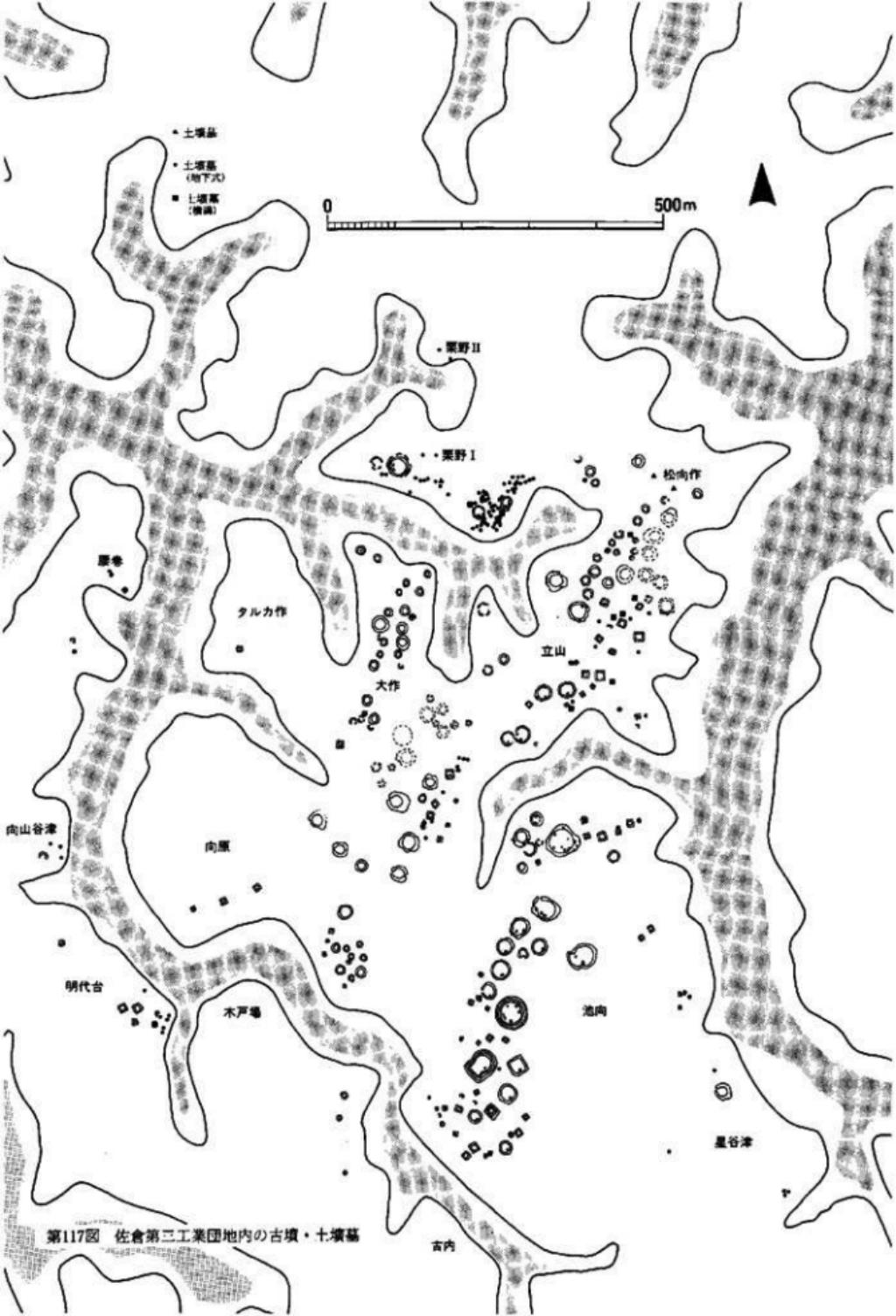
1. 古墳・土塚墓（第117図、第17表）

佐倉第三工業団地内の古墳は鹿島川中流の右岸の台地に立地する岩富古墳群に含まれる。事業地内では集落も検出されており、墓域と集落は台地ごとに明瞭に画されている。古墳時代後期の集落は西の鹿島川寄りの台地とその斜面に立地するほか（クルカ作遺跡¹・腰巻遺跡²・南広遺跡³）、東側の台地東端から斜面にかけて検出した（松向作遺跡・池向遺跡⁴）。これら集落の間の台地奥の平坦部は墓域となっており、栗野遺跡⁵・松向作遺跡・立山遺跡⁶・大作遺跡⁷・池向遺跡⁸・向原遺跡⁹等の各遺跡で方形周溝等と呼ばれる小規模なものも含め200基以上の古墳を検出した（第17表）。また古墳の間に土塚墓も100基以上検出している。調査した古墳のうち現在のところ最も早い時期に築造されたと考えられるのは5世紀末と考えられる大作1・2号墳でこの後古墳時代後期から終末期までの古墳と土塚墓が存在する。

本地域は印旛沼に注ぐ鹿島川によって印旛沼周辺の地域と関わりをもつとともに、鹿島川が水源付近で東京湾に注ぐ都川に接するために東京湾岸の文化の影響も受け、両地域の影響が混在している。本地域の古墳の埋葬施設の主体は木棺直葬土塚墓で、古墳時代後期の常続地域に特徴的に見られるように墳丘裾部に位置するものが多い。同様に常続地域に分布の中心をもつ箱形石棺を埋葬施設とする古墳もあり、これは雲母片岩の板石を使用したものと砂岩系の切石を使用したものとが見られる。また立山4号墳のように蓋石は雲母片岩、他は砂岩系の切石を使用する場合もある。この他、地山を横穴状に掘り込む地下式土塚墓や底面に溝をもつ土塚墓は現在のところ印旛沼周辺から東京湾沿岸を中心に分布していることが知られている。¹⁰

松向作遺跡では23基の古墳と4基の土塚墓を検出した。

古墳は円墳が20基、方墳3基である。墳丘の遺存状態は悪く、調査前から所在が確認されていたのは古墳001と保存区域の5基のみである。規模は20m以下の中小規模のものばかりで、円墳は内径が5m以下2基、5m以上10m以下7基、10m以上15m以下6基、15m以上20m以下5基である。また方墳は5m以下1基、5m以上10m以下1基、15m以上20m以下1基である。このようにばらつきはあるが、大きさによってそれぞれある程度のまとまりをもって占地している。10m以下の小規模な円墳は西側縁辺部に並び（北から南に古墳056・055・052・054）、並行して立山遺跡の小規模な円墳（北から南に9・8・7号円形周溝）が連なっている。また規模が15m前後の古墳は東側縁辺部を中心に占地する（北から南に古墳031、1・2・3・4号墳、古墳051）。円墳のうち050、051、052の3基はブリッジをもつ。050は周溝の一部を掘り残しており、残りの2基は周溝が全周するが一部を高く掘り残してブリッジとしている。また、試掘調査した004号墳も周溝が全周せず一部を掘り残している。方墳は二重周溝の古墳060の西側に



第117図 佐倉第三工業団地内の古墳・土塚基

005号墳、この南に立山遺跡で調査した小規模な方墳群が並び（北から南に2・4・3・1・5号方形周溝）、松向作遺跡の058をはじめ、立山遺跡で検出した土壙墓がこの間に点在している。松向作遺跡で検出した土壙墓は028・035のように玉類、鉄鎌を副葬品とし、内容は古墳の埋葬施設と変わらないが墳丘や周溝などの外部施設を伴わないと土壙墓057・058のように長方形に掘り込み、底面に長軸と直交する溝を3条掘り込むものの2種類がある。

古墳のうち埋葬施設を検出したのは古墳001（円墳）と古墳060（方墳）の2基である。古墳001は周溝内と周溝外から検出した土壙墓2基を主体部とするが副葬品は出土しなかった。古墳060は南に開口する横穴式石室をもつ。石材は雲母片岩の板石で、床面と天井部の幅に大きな差がないため側壁は垂直に近い角度で立っていたものと思われ、同じ石材を使用した箱形石棺と類似した構造である。しかし、一方（南側）の小口部分に玄門を設け、玄門の外側に板石を立てて羨道部を設ける点が箱形石棺と相違する。天井石は羨道部にも架している。床石はなかったようである。また規模（ $2.35 \times 0.98 \times 1.00$ m）は当地域で検出した箱形石棺より一回り大きく、横穴式石室より小規模である。¹¹ 本遺跡の南西に位置する大作遺跡の46号墳、47号墳は石材が抜き取られているが、遺存する掘方から雲母片岩を構築材として使用しているようで、石室の掘方は周溝の南辺中央につながっている。どちらも方墳で、埋葬施設の形態は古墳060と同じものであった可能性が高い。¹²

この様な特徴ある埋葬施設は印旛沼東岸の成田市・印旛郡栄町龍角寺古墳群中の龍角寺108号墳、やはり印旛沼東岸の成田市公津原古墳群中の瓢塚41号墳等で検出している。どちらも方墳で、石室は南中央に開口し、構築材は雲母片岩の板石である。龍角寺108号墳は1辺21mで、閉塞石だけには貝化石の切石を使用している。また羨道部には天井を架けていなかった可能性が高い。石室床面の規模は $1.90 \times 0.85 \times 0.95$ m、玄門入口は幅0.40m×高さ0.55mである。瓢塚41号墳は周溝内径で 15.5×13.5 mの規模である。やはり羨道部には天井を架けていない。石室の規模は $1.82 \times 1.13 \times 1.72$ m、玄門入口は幅0.55m×高さ0.60mである。このほか、佐原市又見古墳¹³の石室は板石を切り抜いて玄門部としているがやはり同種のものと考えられる。玄門の前に1枚、石室西側面に2枚の板石があり、これらは閉塞石、羨道の側壁の可能性がある。石室の規模は $1.85 \times 1.35 \times 1.20$ mである。玄門入口は復原すると幅0.65m×高さ0.45mとなる。これらの古墳の築造の時期については瓢塚41号墳が7世紀第2四半世紀、龍角寺108号墳が7世紀第3四半世紀、又見古墳が7世紀中葉と考えられている。

この他、茨城県つくば市山口古墳群3・4号墳、土浦市石倉山古墳群1・2号墳¹⁴は石材が遺存しないが同じ形態のものであると推察される。また石倉山古墳群9号墳や新治村武者塚古墳¹⁵は墓道を持たないが、複室構造である点に横穴式石室の影響がうかがえる。

この様な埋葬施設は時期や分布、構築材の類似、構造などから常総地域に特徴的にみられる雲母片岩を使用した箱形石棺の影響を受けたことは明らかである。これについては「形態的に

は横穴式石室であるものの、機能的には堅穴式石室と何ら異ならないもの¹⁹」と横穴式石室の機能を否定する意見もある。瓢塚41号墳の場合、掘方内の奥から半分の所までで、石室を構築しており、埋葬後埋め戻してしまえば玄門は機能しないと考えられたためである。また、龍角寺108号墳の場合は玄門入口は羨道部が周溝に接続するが、この場合も玄門入口が小規模であるため、追葬は不可能と考えられるためであろう。しかし、追葬の可能性を否定するにはこの種の埋葬施設と構造上類似する常総地域の箱形石棺から複数の人骨を検出する点を考える必要がある。横穴式石室が普及した時期に常総地域に箱形石棺が使用されたのはこれが横穴式石室の機能をもっていたからではないかと考えられる。²⁰したがって古墳060で見られたような埋葬施設についても横穴式石室の機能は必ずしも否定されないであろうし、南辺中央に開口させる点、玄門の外側に羨道壁と考えられる板石を立てる場合がある点、また、長軸を方墳の南北軸に合わせる場合が多い等の意識を考えるとそれまで伝統的に使用していた箱形石棺を横穴式石室に変形させたもの、地域色を受けた横穴式石室の一つの形態と考えるのが妥当であろう²¹。

松向作遺跡の古墳は埋葬施設や副葬品がほとんどなく、関係する出土遺物も少ないため築造時期を判断できる古墳は少ない。この中で古墳060は周溝から8世紀初頭の所産と考えられる土器が出土した。追葬や墓前祭などで使用した可能性も考慮し、方墳であること、石室を南辺中央に開口させ、古墳主軸と石室長軸を同じ方向に構築している等の終末期古墳に見られる特徴をもつ点から、羨道部に天井石を架すなどやや古い要素も見られるが、龍角寺108号墳や瓢塚41号墳と大きく変わらない時期、周溝出土の土器の時期と幅をもたせて7世紀中葉前後に築造されたと考えておきたい。これ以外に確実に古墳に伴うと判断できる遺物の出土状態を呈しているのは古墳032・038・039である。古墳032と038では周溝から須恵器杯を出土しており、いずれも6世紀前半の所産と考えられる。また古墳038と039は隣接しており、どちらからも底部を穿孔した杯や鉢を出土しており、近い時期に連続して築造された可能性が高い。埋葬施設など他の他に時期を判断する資料がないが古墳032・038・039は6世紀前半を中心とする時期に築造されたと考えておきたい。

古墳群については、最大の規模をもつ池向遺跡の整理が途中であり、この分析が進めば岩富古墳群の形成過程が明らかになろう。

2. 堅穴住居

堅穴住居は15軒で、東側台地縁辺部から斜面にかけて検出した。古墳時代後期の集落である。台地脇部に位置する堅穴住居006の確認面の標高は34.9m、最も低いところに位置する堅穴住居019の確認面の標高は19.4mで比高差は15.5m程である。また周辺の水田の現在の標高は15.0mである。等高線と平行にのびる010や等高線と直交してのびる020は道路として機能していた可能性がある。佐倉第三工業団地内では斜面に立地する集落が、腰巻遺跡で最初に発見され、当時の土地利用について問題となり、平坦部の墓域としての利用、畠としての利用等の推定がな

された。²² この後、事業地内の調査が進むにつれ、これは腰巻遺跡にのみみられる特徴ではなく、池向遺跡・松向作遺跡でもみられ、規模は小さいが立山遺跡や栗野I・II遺跡でも確認された。立山遺跡・池向遺跡・松向作遺跡・栗野I・II遺跡ではいずれも平坦部は墓域として利用されている。また腰巻遺跡を含めどれも東から南にかけての斜面に立地している。

竪穴住居は遺物の出土状態等から大きく3種類に分けられた。

1つは遺物の遺存状態が良く器種が一通り揃っている竪穴住居（002・004・005・006・008）である。台地の肩部に立地し、遺物の出土位置も竪穴住居の中心とした床面であった等という点で共通した要素をもっている。出土した土器の様相からほぼ同じ時期に営まれていたと考えられる。便宜的にこれをAタイプと呼ぶ。

2つ目は出土遺物の量は非常に多いが、遺存状態が悪く、図示できたものも復原実測したものが主体である竪穴住居（012・015・017・018）である。主として斜面中位に位置する。遺物は特に集中せず竪穴住居全体に散っており、しかも1つの個体が破損して散らばっている場合が多い。しかし、ほとんどが床面から出土し、竪穴住居の廃棄とそう隔たらない時期に混入または廃棄されたものと考えられる。これをBタイプと呼んでおく。

3つ目は出土した遺物の量が少なく、遺物の遺存状態も良くない竪穴住居（007・009・011・019・023）である。Cタイプとする。

以上3種類のどれにも属さないのが竪穴住居003である。調査区北東端にやや離れて位置する。遺物の遺存状態は良いが器種に極端な片寄りがみられる。出土遺物のほとんどが小型土器であり、小型土器以外の須恵器杯身2点と土師器杯1点は完形品であった。また実測できなかった遺物の破片65点も小型土器の破片であるという特殊な状況を呈している。遺構の形態も横長の長方形で横並びの3本の柱穴をもつ。焼失住居で下層には暗黄褐色土がほぼ同じ厚さで堆積しており、故意に埋め戻しをした可能性がある。集落の中での特殊な役割やまた古墳群と時期的に大きな差がないため古墳との関連などが考えられる。

出土した遺物は土器類を中心とする。杯は外面に明瞭な稜をもつわゆる須恵器模倣杯が主体である。須恵器の杯蓋を模倣したものと杯身を模倣したのがあり、この他に、須恵器を模倣しないものの大きく3種類に分類できる。いずれの形態も赤色塗装したものや無彩のものはわずかで、外面を黒色処理したものが主体である。杯の77.5%が外面を黒色処理し、内面のみを黒色処理したものを含めると82.2%が黒色処理を施している。黒色処理の遺存の良いものを観察すると処理は器表面のみで樹脂手法によると思われるものが多い。²³ また内面から口縁部外面を横方向にヘラ磨き調整し、体部外面はヘラ削りするというほぼ共通した技法によっている。以上のことから土師器類は黒色処理が盛行した6世紀後半から7世紀中葉ごろに位置付けられる。

須恵器杯は竪穴住居003・015・017・018・023から9点出土した。復原実測のため口縁部の形

態がはっきりしない竪穴住居023出土のもの以外は立ち上がりが短く、小型化した段階のもので
7世紀中葉前後の時期の所産と考えられる。これらは竪穴住居003以外は先にBタイプとした竪
穴住居で出土している。このほかBタイプの竪穴住居からは須恵器杯身を模倣の十師器杯中に、
縹が認められるものの受部を作り出さず不明瞭で、小型化した新しい様相を持つものが含まれ
おり、Aタイプの竪穴住居出土の土器より新しい様相をもつものが混入している。この様に先
述した立地と遺物の出土状況の差が竪穴住居の使用時期の差を表している可能性が考えられる。
また、台地上の古墳群と大きな差がない時期のものであるため、今後古墳群の分析とあわせて
検討していく必要がある。

3. 溝状遺構・陥し穴等

松向作遺跡では溝状遺構を3条検出したが、U字状ないしV字状を呈すいわゆる溝は1条で
ある。なお、この溝は、立山遺跡の1号溝につながる可能性がある。他の2条は、「道」として
の機能が考えられようか。伴出する遺物からは古期のものかもしれない。

松向作遺跡の陥し穴・土坑・炭窯については、土坑の一部に土壤墓ないし陥し穴と考えられ
るものがあるかもしれないが、特別なものはないようである。

ところで、陥し穴に関して、第8表に各遺跡の長・幅・長幅比の平均と（不偏）標準偏差の
値が出ているが、この数値はどこまで各遺跡の陥し穴の性格を反映しているのであろうか。試
みに第76図に「箱ひげ図」と「はずれ値」を載せたが、第8表の数値と通常のヒストグラムなどと比較してみるのもおもしろいかもしれない。

縄文時代の包含層についても石器については、特に触れるようなこともないが、第99図2は
剥離痕の観察が困難な石材のため断定はできないが、有舌尖頭器の基部を再加工したものかも
しれない（第111図参照）。

第2節 下層の遺構と遺物

松向作遺跡では2箇所の旧石器時代の集中地点が検出されているが、明確に時期決定できる
ような特徴的な行器はないようである。もっとも、表面採集や遺構中からナイフ形石器、尖頭
器が検出されている。

註

- 1.『佐倉市タルカ作遺跡』 (財)千葉県文化財センター 1985
- 2.『佐倉市腰巻遺跡』 (財)千葉県文化財センター 1987
3. 現在整理中。奥野遺跡の西に位置する。古墳時代後期から奈良・平安時代の集落である。
4. 現在整理中。立山遺跡の南、大作道路の南東に位置する。古墳時代以降の遺構は古墳63基、後期の竪穴住居

49軒の他土壙墓等を検出した。集落は東側の台地縁辺部から斜面にかけて占地しており、平坦部は墓域となっている。古墳は台地中央を南北に並んでおり、30m以上の規模をもつ二重周溝の円墳や帆立貝形前方後円墳を含み、佐倉第三工業団地内では最大規模の支群である。

5. 「佐倉市栗野Ⅰ・II遺跡」 (財) 千葉県文化財センター 1991
6. 「佐倉市立山遺跡」 (財) 千葉県文化財センター 1983
7. 「佐倉市大作遺跡」 (財) 千葉県文化財センター 1990
8. 「佐倉市向原遺跡」 (財) 千葉県文化財センター 1989
9. 松向作遺跡を含めた報告書刊行済の遺跡で合計96基を数える。土壙墓は陥し穴など誤認されている場合もあるので未整理の遺跡については正確な基數をつかめていない。

佐倉第三工業団地内の土壙墓の検出状況については「栗野Ⅰ・II遺跡」にまとめたので参照されたい。

10. 田中新史「古墳時代終末期の地域色－東図の地下式系土壙墓を中心として」『古代探観II』早稻田大学出版部 1985

11. 周辺の古墳の横穴式石室・箱形石棺の規模は以下の通りである。特に幅に違いが見られるようである。

立山4号墳	円	箱形石棺	2.00×0.56×0.50m	(軟質砂岩)
栗野Ⅰ遺跡古墳049	帆立貝	箱形石棺	1.90×0.95×1.00m	(雲母片岩)
池向Ⅰ遺跡野中1号墳	円	横穴式石室	2.60×1.50×1.06m	(軟質砂岩)
池向Ⅰ遺跡野中3号墳	円	箱形石棺	1.82×0.81×0.65m	(雲母片岩)
池向Ⅰ遺跡野中4号墳	方	箱形石棺	1.70×0.65×0.83m	(雲母片岩)
池向Ⅰ遺跡野中5号墳	帆立貝	箱形石棺	1.83×0.70×0.64m	(雲母片岩)
池向Ⅱ遺跡池向5号墳	帆立貝	横穴式石室	2.50×1.50×1.00m	(軟質砂岩)
池向Ⅱ遺跡池向6号墳	円	箱形石棺	1.67×0.45×0.57m	(雲母片岩)
池向Ⅱ遺跡池向11号墳	円	箱形石棺	1.65×0.56×0.75m	(雲母片岩)

池向遺跡は整理中であり、計測値は概数である。古墳の名称は調査前の分布調査によるものを使用した。

『佐倉市立山遺跡』 (財) 千葉県文化財センター 1983

『佐倉市栗野Ⅰ・II遺跡』 (財) 千葉県文化財センター 1991

12. 墳丘の規模と掘方から推定される石室の規模は以下の通りである。

46号墳 墳丘7.7×7.8m、石室2.0×1.1m

47号墳 墳丘9.6×9.8m、石室3.4×1.1m (複室構造であった可能性がある)

『佐倉市大作遺跡』 (財) 千葉県文化財センター 1990

13. 「主要地方道成田安食線道路改良工事(住宅宅地更生事業)地内埋蔵文化財発掘調査報告書」 (財) 千葉県文化財センター 1985

14. 「公津原」 千葉県企業庁 (財) 千葉県地域振興公社 1975

報告によれば瓢塚44号墳も同じタイプの石室であったらしい。

15. 安藤鴻基他「千葉県佐原市又見古墳の箱形横穴式石室」『古代房総史研究』第2号 古代房総史研究会 1983
この他小見川町御座ノ内遺跡の方墳3基、銚子市野尻遺跡第2・3号方形周溝墳等も石材が抜かれ、既に破壊されてはいるが掘方から推定すると同じ構造のものであった可能性が高い。
「御座ノ内遺跡」「事業報告Ⅰ 昭和63年度・平成元年度」（財）香取都市文化財センター 1990
「銚子市野尻遺跡発掘調査報告書」銚子市教育委員会 1978
16. 「平沢・山口占墳群」「筑波古代地域史の研究」筑波大学 1982
17. 「土浦市島山遺跡群」茨城県住宅供給公社 1975
石材が抜き取られていたが8号墳がこれと同じ形態、1・2号墳が周溝に通じる墓道をもつ形態のものであった可能性がある。3基とも方墳である。
18. 「武者塚古墳」武者塚古墳調査団・新治村教育委員会 1986
19. 「公津原」千葉県企業局（財）千葉県地域振興公社 1975
20. 常総地域の箱形石室と横穴式石室の関係については先手諸氏が指摘されている通りである。
市毛照「『変則的古墳』覚書」「古代」56号 早稲田大学考古学会 1973
「変則性をもつ必然的要素」として「追葬を主目的とする横穴式石室との関係で把えることが正しいのではないだろうか」と述べられている。
- 安藤鴻基「『変則的古墳』総考」「小台遺跡発掘調査報告書」小台遺跡調査会 1981
変則的古墳の合葬のなかに追葬ではなく改葬の疑いのあるものがかなりの事例に上ることを指摘され「変則的古墳」が、横穴式石室の普及後もなお、存続したのは、改葬を伴う合葬によって、家族墓として機能を果たし得たからであろう。」として横穴式石室との関係を述べられている。また、玄門が小規模である点は安藤氏が指摘された改葬と関係する可能性も考えられる。本例では検証できなかったのでとりあえず可能性の指摘だけであるが、今後の事例の検討を待ちたい。
- 岩崎卓也「武者塚古墳の構造をめぐって」「武者塚古墳」武者塚古墳調査団・新治村教育委員会 1986
また古墳060と同種の埋葬施設の例として本文中であげた新治郡武者塚古墳では6体が埋葬されており、「墓道を欠く構造であることから追葬を困難とするならば逆に変則的古墳が同時多葬であることを証明する必要がある。」と述べられて追葬の可能性を指摘されている。
- このほか常総型古墳の改葬については次の論文を参考にした。
- 橋本博文「古墳時代における改葬について」「常陸梶山古墳」大洋村教育委員会 1981
21. 安藤氏は横穴式石室と区別するために「箱形横穴式石室」の名称を提唱されている。
安藤鴻基他「千葉県佐原市又見古墳の箱形横穴式石室」「古代房総史研究」第2号 古代房総史研究会 1983
22. 西山太郎「台地斜面に立地する住居跡群の裏側と三つのパターン」「研究連絡誌」第9号（財）千葉県文化財センター 1984
23. 「東金市久我台遺跡」（財）千葉県文化財センター 1988
24. 穴住居015-37・38、017-14~16、018-9等である。007-3や011-5等も同じ形態の物である。

第1表 検出遺構一覧
212-023

遺構番号	遺構の種類								
001	円 墳	014	欠 番	027	土 坑	040	方 墳	052	円 墓
002	豊穴住居	015	豊穴住居	028	土 墓	041	円 土 坑	053	欠 地
003	豊穴住居	016	陷 し 穴	029	土 坑	042	土 陷 坑	054	圓 墓
004	豊穴住居	017	豊穴住居	030	円 墳	043	陷 し 穴	055	圓 墓
005	豊穴住居	018	豊穴住居	031	円 墳	044A	陷 し 穴	056	圓 墓
006	豊穴住居	019	豊穴住居	032	円 墳	044B	窯 番	057	土 墳
007	豊穴住居	020	溝状遺構	033	円 墳	045	欠 番	058	土 墓
008	豊穴住居	021	陷 し 穴	034	土 坑	046	欠 番	059A	土 墓
009	豊穴住居	022	円 墳	035	土 墓	047	欠 番	059B	炭 墓
010	溝状遺構	023	豊穴住居	036	土 坑	048	欠 番	060	方 墓
011	豊穴住居	024	円 墳	037	欠 番	049	欠 番	061	土 墓
012	豊穴住居	025	炭 墓	038	円 墳	050	円 墳	062	土 墓
013	溝状遺構	026	土 坑	039	円 墳	051	円 墳		

212-031

遺構番号	遺構の種類								
001号墳	円 墳	002号墳	円 墳	003号墳	円 墳	004号墳	円 墳	005号墳	方 墳

第2表 遺構計測表

古 墳

遺構番号	地形	規模(墳丘内径) m	埋葬施設	備 考	遺構番号	地形	規模(墳丘内径) m	埋葬施設	備 考
001	円	11.62 ~ 11.85	土師器		051	円	16.52	無	ブリッジ、石製品
022	円	10.12 ~ 10.40	無		052	円	7.10 ~ 7.40	無	ブリッジ
024	円	2.58	土師器		054	円	5.50	無	一部保存
030	円	8.51 ~ 10.05	無		055	円	8.35 ~ 9.45	無	一部保存
031	円	16.20 ~ 17.40	無		056	円	6.90	無	一部保存
032	円	(7.31) ~ 8.70	須恵器・土師器・鉄製品		060	方	15.15 ~ 15.55	石室	一部保存・鉄製品他
033	円	9.62 ~ 10.30	無		001	円	17.10 ~ 18.20	無	保存
038	円	8.85 ~ 8.95	須恵器・土師器		002	円	(15.30)	無	保存
039	円	11.30 ~ 11.45	土師器・土製玉		003	円	14.15 ~ 14.65	無	保存
040	方	3.37 ~ 3.47	無		004	円	15.60 ~ 15.74	無	保存
041	円	8.78	一部調査		005	方	6.86 ~ 6.95	無	保存
050	円	10.94 ~ 11.10	ブリッジ、土師器						

() は復原値、[] は現存値を示す。

土壤墓

遺構番号	長軸×短軸×深さ (上場) m	長軸×短軸 (中場) m	長軸の方位	副葬品
028	1.93×1.10×0.21	— × —	N-90°-W	管玉・甕玉
035	2.56×1.53×0.52	— × —	N-73°-E	鉄鎌
057	2.92×1.56×0.46	— × —	N-109°-W	なし
058	2.90×2.35×1.04	2.35×1.00	N-90°-W	なし

堅穴住居

遺構番号	平面形態	主軸×横軸 m m	主軸の方位	面積 m ²	薪置穴主柱穴	壁溝	出入口	備考
002	正方形	3.47×3.77	N-32°-W	13.17	無	無	有	有
003	横長方形	4.17×8.03	N-31°-W	31.98	有	3	有	無
004	正方形	4.88×4.85	N-28°-W	23.80	有	4	有	火災。
005	正方形	5.06×5.07	N-41°-W	25.32	有	4	有	火災。土壇。
006	縱長方形	5.47×5.24	N-29°-W	28.85	有	4	有	火災。馬蹄形の高まり。
007	横長方形	(5.70)×7.00	N-31°-W	39.90	有	4	無	火災。
008	縱長方形	7.77×6.74	N-40°-W	51.07	有	4	一部無	火災。
009	方形	[2.80]×5.07	N-14°-W [14.19]	無 [3]	無	無	無	溝状遺構010に切られる。
011	縱長方形	5.22×(4.82)	N-24.5°-W	24.25	無 [3]	有	無	焼土。
012	方形	[5.70]×6.44	N-122°-W [33.40]	無	4	無	無	一部破壊。
015	正方形	5.75×6.05	N-33°-W [35.19]	有	4	有	無	火災。一部破壊。
017	横長方形	6.08×6.52	N-69°-W	39.11	有	4	無	
018	横長方形	4.65×5.46	N-60°-W	25.20	無	4	無	
019	正方形	4.71×4.90	N-64°-W	22.80	有	4	無	
023	方形	[3.80]×5.20	N-53°-W [17.67]	無	4	有	無	一部破壊。

陷し穴

遺構番号	平面形態	長軸×短軸×深さ m	長軸の方位	遺構番号	平面形態	長軸×短軸×深さ m	長軸の方位
016	橢円形	2.34×1.56×1.65	N-90°-W	043	長方形	2.00×0.82×1.43	N-70°-W
021	橢円形	2.49×1.04×0.68	N-71°-W	044A	橢円形	2.02×(1.01)×0.74	N-21°-W

土坑

遺構番号	平面形態	長軸×短軸×深さ m	長軸の方位	遺構番号	平面形態	長軸×短軸×深さ m	長軸の方位
026	橢円形	2.41×2.10×0.83	N-90°-W	042	橢円形	3.24×1.58×0.34	N-47°-W
027	橢円形	2.19×1.66×0.47	N-53°-E	059A	長方形	2.22×—×1.20	N-35°-W
029	橢円形	2.41×1.56×0.60	N-51°-W	061	長方形	2.33×0.93×0.40	N-71°-W
034	橢円形	1.43×0.85×0.26	N-83°-W	062	長方形	0.95×0.49×0.46	N-50°-W
036	長方形	1.70×1.24×0.36	N-75°-W				

() は復原値、[] は現存値を表す。

第3表 占墳060 金属製品計測表 (第24図、図版50)

類別番号	遺物番号	種類	遺存長×幅×厚 (mm)	現存重量 (g)	接合部番号	遺物番号	種類	遺存長×幅×厚 (mm)	現存重量 (g)
20	0207	直刀	538.0 × 27.5 × 8.0	472.0	53	0019	鉄鎌	23.0 × 5.3 × 3.0	1.19
21	0121	鎌	15.0 × [13.0] × 1.2	0.66	54	0107	鉄鎌	26.2 × 4.5 × 3.7	1.32
22	0088	鍔	34.0 × 22.1 × 8.5	6.59	55	0122	鉄鎌	25.0 × 6.5 × 3.5	1.22
23	0180	鉄鎌	22.0 × [2.7] × (4.0)	4.08	56	0170	鉄鎌	27.0 × 5.0 × 3.0	0.98
24	0120	鉄鎌	30.0 × [25.0] × (2.5)	6.47	57	0187	鉄鎌	23.0 × 5.0 × 3.5	0.67
25	0190	鉄鎌	34.0 × 5.5 × 2.0	1.20	58	0112	鉄鎌	21.5 × 4.5 × (3.0)	1.02
26	0127	鉄鎌	31.0 × 7.0 × 3.6	2.10	59	0073	鉄鎌	19.0 × 4.0 × 2.0	0.79
27	0183	鉄鎌	28.0 × 6.5 × 2.0	1.51	60	0075	鉄鎌	20.0 × 4.0 × 3.0	0.95
28	0220	鉄鎌	27.0 × 6.5 × 2.0	1.22	61	0022	鉄鎌	25.5 × 4.0 × 3.0	1.21
29	0098	鉄鎌	24.5 × 6.5 × 2.0	1.60	62	0179	鉄鎌	17.0 × 3.5 × 3.0	0.49
30	0105	鉄鎌	38.0 × 5.5 × 5.0	2.28	63	0099	鉄鎌	17.0 × 5.3 × 3.8	0.87
31	0059	鉄鎌	41.2 × 4.5 × 3.0	2.64	64	0100	鉄鎌	15.0 × 5.3 × 1.8	0.36
32	0221	鉄鎌	40.0 × 5.0 × 3.0	2.48	65	0190	鉄鎌	14.0 × 5.0 × 3.5	0.49
33	0074	鉄鎌	22.0 × 5.5 × 2.9	1.44	66	0200	鉄鎌	10.0 × 5.0 × 3.5	0.39
34	0139	鉄鎌	73.5 × 5.0 × 2.8	4.41	67	0183	鉄鎌	63.0 × 4.0 × 3.5	4.41
35	0043-0045	鉄鎌	66.0 × 4.0 × 3.0	3.38	68	0126	鉄鎌	65.5 × 4.0 × 2.8	2.77
36	0169-0172	鉄鎌	58.0 × 4.0 × 3.0	3.18	69	0109	鉄鎌	53.0 × (8.5) × 5.8	4.90
37	0116	鉄鎌	59.0 × 5.5 × 3.0	3.20	70	0125	鉄鎌	43.0 × (6.5) × 3.0	5.14
38	0110	鉄鎌	54.5 × 4.2 × 3.0	2.70	71	0137	鉄鎌	36.5 × (6.5) × 2.6	1.60
39	0044	鉄鎌	46.0 × 5.0 × 3.0	2.54	72	0140	鉄鎌	36.5 × 4.5 × 3.0	1.63
40	0124	鉄鎌	42.0 × 4.5 × 3.2	2.66	73	0111	鉄鎌	27.0 × 6.0 × 3.0	1.23
41	0182	鉄鎌	41.2 × 5.0 × 5.0	3.22	74	0003	鉄鎌	23.0 × 4.8 × 4.0	0.70
42	0097-0200	鉄鎌	41.5 × 5.3 × 4.0	2.29	75	0168	鉄鎌	26.0 × 5.0 × 2.5	0.86
43	0220	鉄鎌	41.0 × 6.0 × 3.0	3.27	76	0002	鉄鎌	26.0 × 2.0 × 2.0	1.15
44	0093	鉄鎌	36.0 × 4.5 × 3.2	1.60	77	0138	鉄鎌	16.0 × 2.8 × 2.5	0.82
45	0193	鉄鎌	33.0 × 5.0 × 3.0	1.41	78	0181	鉄鎌	20.0 × 3.0 × (2.5)	0.43
46	0119	鉄鎌	30.0 × 4.5 × 3.0	1.45	79	0123	鉄鎌	15.2 × 2.5 × 2.0	0.40
47	0042	鉄鎌	32.2 × 4.0 × 3.0	1.52	80	0200	鉄鎌	19.0 × 4.0 × 3.0	0.53
48	0187	鉄鎌	27.0 × 5.5 × (4.0)	2.67	81	0161	鉄鎌	12.0 × 3.0 × 1.8	0.25
49	0046	鉄鎌	24.5 × 3.1 × 2.9	1.04	82	0090	刀子	55.0 × 13.0 × 4.5	6.55
50	0194	鉄鎌	28.0 × 3.0 × 3.2	1.37	83	0226	刀子	38.0 × 8.5 × (4.0)	2.65
51	0091	鉄鎌	26.0 × 4.3 × 3.2	1.33	84	0195	鎌鉄	73.0 × 25.0 × 6.0	29.64
52	0070	鉄鎌	27.0 × 4.5 × 3.0	1.56					

〔 〕は復原値、[]は現存値を示す。

第4表 土壌藻035 鉄錆計測表 (第28図、図版51)

捕獲番号	道物番号	遺存長 (mm)	身長 (mm)	刃部 (長×幅×厚) (mm)	頭部 (長×幅×厚) (mm)	茎部 (長×幅×厚) (mm)	現存重量 (g)
1	0001	133.5	93.0	19.5 × (13.0) × 2.5	73.5 × 8.5 × 3.3	[40.5] × 5.0 × 1.9	8.00
2	0001	130.5	93.5	19.5 × [13.0] × 2.0	75.0 × (7.3) × 2.7	[36.0] × (5.5) × 2.0	8.06
3	0001	131.0	95.0	20.0 × 11.0 × 3.0	75.0 × (7.0) × 2.9	[36.0] × (5.0) × 1.9	9.05
4	0002	118.0	92.5	18.0 × (11.0) × 3.2	76.0 × 7.0 × 3.2	[24.0] × 5.0 × 2.8	10.18
5	0001	119.0	99.0	19.5 × 11.5 × 2.0	79.5 × 8.5 × 2.0	[20.0] × (5.0) × 2.0	6.58
6	0004	114.0	—	17.5 × 11.5 × 4.0	78.5 × (8.0) × 3.3	[18.0] × (5.5) × 2.5	9.90
7	0003	106.0	—	18.5 × 11.5 × 3.6	76.0 × 7.5 × 3.6	[11.5] × 5.0 × 2.5	9.33
8	0005	101.0	—	19.0 × 10.5 × 3.3	76.0 × (7.5) × 2.8	[6.0] × (4.5) × —	8.73
9	0001	48.0	—	19.5 × 11.5 × 2.6	[28.5] × 7.0 × 2.8	— × — × —	3.29
10	0001	36.5	—	20.0 × [11.0] × 2.0	[16.5] × 5.5 × 2.8	— × — × —	2.52
11	0001	57.0	—	— × — × —	[49.0] × 9.0 × 2.9	[8.0] × 5.0 × 2.8	4.45
12	0001	62.0	—	— × — × —	[37.0] × 8.5 × 3.5	[25.0] × 3.5 × 2.5	4.65
13	0001	21.5	—	— × — × —	— × — × —	[21.5] × 2.0 × 1.2	0.35
14	0001	2.0	—	— × — × —	— × — × —	[2.0] × (3.0) × (1.8)	0.33
15	0001	22.0	—	— × — × —	— × — × —	[22.0] × (3.0) × 1.8	0.35
16	0001	39.0	—	— × — × —	— × — × —	[39.0] × (3.0) × (2.2)	0.62
17	0001	34.0	—	— × — × —	— × — × —	[34.0] × (3.0) × 2.2	0.60
18	0001	41.0	—	— × — × —	— × — × —	[41.0] × (3.5) × (2.8)	1.01
19	0001	48.0	—	— × — × —	— × — × —	[48.0] × 4.0 × (2.8)	1.61

() は復原値、[] は現存値を示す。

第5表 下類計測表
古墳039 (第22図、図版49)

挿図番号	種類	遺物番号	径(mm)	長さ(mm)	孔径(mm)	現存重量(g)	色調	材質
5	丸玉	0008	7.7	6.0	1.5	0.45	明赤褐色	土製

古墳060 (第25図、図版49)

挿図番号	種類	遺物番号	径(mm)	長さ(mm)	孔径(mm)	現存重量(g)	色調	材質
85	切子玉	0228	16.0	18.0	4.0	5.55	白・透明	水晶
86	切子玉	0101	13.0	19.8	4.0	4.25	白・透明	水晶
87	切子玉	0223	15.0	22.1	4.0	6.57	白・透明	水晶
88	切子玉	0201	15.0	25.6	4.0	8.60	白・透明	水晶
89	切子玉	0206	16.4	26.7	4.8	10.32	白・透明	水晶
90	切子玉	0222	17.0	28.2	4.2	11.04	白・透明	水晶
91	勾玉	0227	10.0	19.0	3.1	4.08	橙色・透明	瑪瑙
92	勾玉	0204	[11.8]	29.8	3.3	7.02	橙色・透明	瑪瑙
93	勾玉	0202	16.0	31.1	3.8	6.84	橙色・透明	瑪瑙
94	勾玉	0184	12.0	32.2	4.0	7.90	橙色・透明	瑪瑙
95	勾玉	0084	12.0	32.0	3.2	9.08	橙色・透明	瑪瑙
96	勾玉	0203	12.2	34.2	3.2	8.74	橙色・透明	瑪瑙
97	勾玉	0205	11.0	35.3	3.2	8.14	橙色・透明	瑪瑙
98	勾玉	0224	13.0	39.8	3.0	13.83	橙色・透明	瑪瑙
99	勾玉	0225	13.0	39.0	4.0	12.23	緑色・透明	瑪瑙
100	勾玉	0220	16.0	45.0	4.2	22.16	橙色・透明	瑪瑙

土塙墓028 (第28図、図版49)

挿図番号	種類	遺物番号	径(mm)	長さ(mm)	孔径(mm)	現存重量(g)	色調	材質
1	粟玉	0007	6.7	9.8	2.2	0.40	黒褐色	埋木
2	粟玉	0003	7.0	11.0	2.5	0.44	黒褐色	埋木
3	粟玉	0009	7.4	11.2	3.0	0.53	黒褐色	埋木
4	粟玉	0009	8.0	11.5	3.0	0.57	黒褐色	埋木
5	管玉	0008	5.7	18.0	2.8	1.07	淡緑色	緑色凝灰岩
6	管玉	0005	6.0	18.0	2.2	1.08	淡緑色	緑色凝灰岩
7	管玉	0006	5.9	19.0	2.5	1.23	淡緑色	緑色凝灰岩
8	管玉	0008	[6.5]	[19.0]	2.8	1.55	淡緑色	緑色凝灰岩
9	管玉	0008	7.5	20.5	2.5	2.12	淡緑色	緑色凝灰岩
10	管玉	0004	7.5	26.0	3.0	2.12	淡緑色	緑色凝灰岩
11	管玉	0002	6.2	22.0	2.1	1.50	淡緑色	緑色凝灰岩

豊穴住居002 (第51図、図版49)

挿図番号	種類	遺物番号	径(mm)	長さ(mm)	孔径(mm)	現存重量(g)	色調	材質
24	丸玉	0002	8.2	7.5	1.0	0.59	明赤褐色	土製

() は復原値、〔 〕は現存値を示す。

第6表 土器観察表
古墳001 (第21回)

地図番号	遺物番号	器 形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
1	29, 31, 32 , 48, 49, 50, 69	杯	(12.5) — [3.9]	上縁部1/5 周、底部1/ 4周。 [3.9]	丸底で体部外側に明瞭な縁を作り、口縁部は外反する。内面から口縁部外側にかけては横方向にへラ削きする。体部外側はへラ削り後軽く磨いて仕上げている。	細砂粒を含む。	普通。	赤色、内外壁 赤色黒色。
2	60	壺	— 6.2 [2.0]	底部。	平底である。内外壁ともへラ削りしている。	細砂粒を多 量に含む。	良好。	赤色。
3	7, 14, 19, 20, 24	壺	— 7.0 [5.0]	底部。	底部は上げ底となる。同一個体と思われる脚部破片があるが直接接合しない。内面はナゲで仕上げ、外側はへラ削りしている。火熱により器面が光れる。	砂粒を含む。	普通、火熱 を受ける。	内面は黄褐色、 外側は赤色。

古墳022 (第21回、図版21・26)

地図番号	遺物番号	器 形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
1	一括	杯	(12.6) — 4.1	1/4周。 — [3.4]	縁部は、丸底を盛したような形態で、立ち上がりとの縫合不明瞭である。体部は緩やかに内壁しながら立ち上がる。口縁部は横ナブをし、内外壁はなでて仕上げる。	細砂粒を含む。	普通。	黄褐色。
2	8	杯	— — — [3.4]	底部。	丸底である。内面はナゲで仕上げ、外側はへラ削りする。外壁に粘土板接合痕が残る。	砂粒を含む。	普通。	黄褐色。
3	10	杯	(12.4) — — 3.9	1/4周。 — [4.2]	丸底で外側中心に縫を作り、口縁部は垂直に立ち上がる。内面から口縁部外側は横方向にへラ削きするが、器面が光れている。外側はへラ削りする。	砂粒の多い砂 粒を含む。	普通、火熱 を受ける。	内面黄褐色、 外側明黄褐色、 内面と口縁部外 側黒褐色。
4	一括	杯	(14.8) — — [4.2]	1/5周。 — [4.2]	丸底で体部外側に縫を作る。口縁部は内傾して立ち上がる。内面から口縁部外側はへラ削きし、体部外側はへラ削りしている。	砂粒を多量 に含む。	良好。	褐色。内外 壁黒褐色。
5	13, 一括	壺	(7.2) (8.5) — [6.2]	口縁部1/2 周、脚上半 部の1/4周。 — [6.2]	最大径は肩部にある。口縁部は横ナブし、内面はなでてある。外側は横方向にへラ削りする。	細砂粒を含む。	良好。	赤色。
6	3, 7	壺	— 6.0 [1.7]	底部の1/3、 底部は上げ底になっている。内面はなでており、外側はへラ削りする。	砂粒を含む。	良好。火熱 を受ける。	内面褐色。外 面黒褐色。	
7	一括	壺	— — — [7.4] [2.0]	底部1/2。	内面はなでており、外側脚部はへラ削りする。裏 部外側には木系痕が残る。	細砂粒を多 量に含む。	普通。	内面黄褐色、 外面黒褐色。

古墳024 (第21回)

地図番号	遺物番号	器 形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
1	1	壺	— — — — [7.4] [2.0]	底部の1/4。底部外側には不規則であるが大葉痕が観察できる。	砂粒を少 量含む。	普通。	内面は黄褐色、 外側はほっけ い黄褐色。	

法量は上から口縁・脚部段・底段・裏部を表す。() は復原値、[] は現存値を示す。

古墳031（第21図、図版21・26）

種別 番号	遺物番号	器 形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
1	11, 16	杵	(13.6) - 4.2	1/3周。	丸底で、口縁部は外傾して立ち上がる。内外面ともヘラ削きして仕上げる。	粒子は細かく混和物が少ない。	良好。	赤色、内外面赤色塗装、一部剥げている。
2	14, 15, 16	杵	- [7.0] [3.8]	底部の2/3。	やや上げ底となる。内面はなでており、外面はヘラ削りする。	細砂粒を多量に含む。	普通。	内面黄褐色、外面赤色。
3	25	高杵	- [8.0] [6.3]	底部の1/3周。	比較的高さのある脚部で、脚部前はハの字状に開く。外面と脚部内面はヘラ削きする。内面はヘラ削り後なでてある。	細砂粒を含む。	良好。	赤色、外面は赤色塗装している。
4	10, 16	杵	(13.4) (16.2) 6.2 15.6	1/3周部は2周。 3周、脚部は1/3周が追加。	最大径が脚部中位よりやや下に位置する下膨れの形態で、脚部はやや上げ底となる。口縁部は強く横ナギし、外面に棱を作る。内面はなでており、外面は鏡面にヘラ削りする。	細砂粒を多量に含む。	良好。	赤褐色。

古墳032（第21図、図版21・26）

種別 番号	遺物番号	器 形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
1	2	須恵器杵 身	12.7 15.0 - 5.6	受部のごく一部を欠く。 ほぼ完形。	受部は横に水平にのびる。口縁部は僅かに内傾する。底部は1/2程を凹軸へラ削りしている。ロクロは右回転。	細砂粒を少量含む。5mm程の小石を含む。	良好。	灰白色。
2	1	杵	13.7 - 5.6	口縁部のごく一部を欠く。 ほぼ完形。	丸底で球形を半載したような体形である。口縁部は短く僅かに内傾し、外面に綺やかな棱を作る。ロクロは横ナギし、内外面ともなでて仕上げる。	細砂粒を多量に含む。	良好。	赤褐色。外側の底部以外を赤色塗装している。
3	3, 4, 5, 6, -五	杵	(10.0) (14.0) - 12.3	口縁部の一部と脚部から底部の1/2周。	丸底で最大径は脚部中位にあり、脚部は横長の橢円形を呈する。口縁部は高さがあり、僅かに外傾して立ち上がる。口縁部は横ナギし、内外面ともなでて仕上げる。	細砂粒を含む。	良好。	赤褐色。外側と口縁部内面を赤色塗装する。

古墳033（第22図、図版21・26）

種別 番号	遺物番号	器 形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
1	3, 5, 9	杵	(13.0) - - [4.5]	口縁部から体部の1/3周。	丸底で体部は内傾しながら立ち上がる。口縁部と体部の境は不明瞭。内面はなでてある。外面もヘラ削り後なでてある。火熱で表面が黒れ、赤色塗装は剥げている。	砂粒を含む。	普通、火熱を受ける。	赤褐色、外側の底部以外を赤色塗装。
2	5, 6, 一括	杵	(14.0) - - 5.4	口縁部の1/2を欠損。	丸底で、口縁部は僅かに内傾して外面に棱を作る。ロクロは横ナギし、内面はなでてある。外面もヘラ削り後なでてある。表面は黒化している。	粒子の粗い砂粒を多量に含む。	良好。	赤色、外側底部を赤色塗装。

古墳038（第22図、図版21・27）

種別 番号	遺物番号	器 形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
1	1	須恵器杵 盤	(15.8) - - 6.1	体部の一部と口縁部の2/3を欠損。	丸い大井部で、口縁部は外側に棱を作り、直立して立ち上がる。大井部の2/3を凹軸へラ削りする。ロクロ右回転。	粗い白色粒子、小石を含む。	良好。よく洗濯柄まつっている。	青灰色。
2	3, 4, 5	杵	11.5 - - 4.7	口縁部の1/4を欠損。底部は穿孔している。	口縁部は、外反して立ち上がる。底部は外側から穿孔している。口縁部は横ナギする。内面はなでており工具痕が残る。外面はヘラ削り後なでてある。	細砂粒を多量に含む。	普通。	赤褐色。

法量は上から口径・脚部幅・底幅・器高を表す。() は復原値、[] は現存値を表す。

古墳039 (第22図、図版21・26)

埋蔵番号	遺物番号	器 形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
1	6.7	杯	12.6	口縁部と体 部の一部を 欠損。底部 穿孔。	丸底で外側に棱を作り、口縁部は僅かに外反して立ち上がる。底部は穿孔している。口縁部は横ナギで、内面はなでてある。外面は横方向にヘラ削りしている。	細砂粒を多 量に含む。	普通。	赤褐色。内側 の体部までと 外面の口縁部 を赤色染付。
2	9.10	杯	11.2	口縁部の1/5 欠損。	丸底で球形を半分にしたような体部である。外面に棱を作り口縁部は内側して立ち上がる。口縁部は横ナギで内面はなでてある。外面の調整は等で粘土粗削合板が明瞭に現れる。	砂粒を含む。	普通。	内面赤色。外 面黒褐色。一部 橙色。
3	1.2	杯	11.4	底部の一部 欠損。	丸底で外面に棱を作り口縁部は内側して立ち上がる。棱は僅かに横に突出する。口縁部は横ナギで内面はなでてある。外面はヘラ削り後などで仕上げる。丁寧に仕上げ表面に光沢がある。	雲母片が混 入する微細 な砂粒を含む。	良好。よく 洗き掉まつ ている。	くすんだ黄褐色。 一部黒褐色。 内外面黒色染付する。
4	4.5	鉢	13.3	口縁部の1/3 欠損。底部 穿孔。	口縁部は外反して立ち上がる。底部は外側から穿孔している。口縁部は横ナギで、内面はなでてある。外面はヘラ削り後軽くなめて仕上げる。	細砂粒を含 む。	良好。	褐色。
			6.4	[4.3]				

古墳050 (第22図)

埋蔵番号	遺物番号	器 形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
1	5	杯	(15.7)	口縁部から 体部の1/4 周。 [4.2]	口縁部から外面に棱を作り、口縁部は外反して立ち上がる。口縁部は横ナギで、体部は内側で立てる。丁寧に仕上げてある。	砂粒を含む。	普通。	赤褐色。内外 面とも赤色染 付する。

古墳051 (第22図、図版27)

埋蔵番号	遺物番号	器 形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
1	7, 8, 10, 40, 137~ 145, 148 ~156	杯	14.5	口縁部の1/2 と側部(底) 部の一部を 欠損。	丸底で、外側に棱を作り、口縁部は横ナギで、体部は内外で立てる。丁寧に仕上げてある。	砂粒を含む。	普通。	赤色、内外面 とも赤色染付 する。
2	18, 21, 23, ~26, 28 ~30, 35, 37, 52他	楕円器皿	—	網下部の丸底である。内面はなでており、外側は平行叩き1/4周。を行う。底部付近の叩き目はなでて擦り消される。	細砂粒を含 む。	良好。	暗青灰色。	

古墳054 (第22図、図版21・26)

埋蔵番号	遺物番号	器 形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
1	10	高杯	—	脚部完存。ハの字状に開く短い瓶である。瓶部は横ナギで、外側は横方向にヘラ削り後横方向になでてある。内面も横方向にヘラ削り後、横方向になでて仕上げる。	細砂粒を多 量に含む。	良好。	赤色、内外面 赤色染付。	

法量は上から口径・網脚径・底径・器高を表す。() は復原値、[] は現存値を示す。

古墳D60 (第23図、岡版21・27)

標示番号	遺物番号	器 形	法蓋(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	新 土	焼 成	色 調
1	29,197	須恵器杯 蓋	— — [2.4]	口縁部欠損。 つまみがある。天井部は回転へ向うする。ロクロ ロは右回転。	白色粒子・ 青母を含む 砂粒を多量 に混入。	普通。	青灰色。	
2	102,200	須恵器杯 蓋	— — [2.1]	口縁部欠損。 つまみがある。天井部は回転へ削りする。ロクロ ロは右回転。	白色粒子・ 青母を含む 砂粒を多量 に混入。	普通。	青灰色。	
3	10,104, 118,133, 135,136, 143,200	須恵器杯 蓋	14.7 — 2.9	口縁部1/8 周欠損。 つまみがある。返りは僅かに突出する。天井部の 1/3を回転へ削りする。ロクロは右回転。	白色粒子・ 青母を含む 砂粒を多量 に混入。	普通。	青灰色。	
4	21,29,35 ,,48,53, 79,81,82 ,,83他	須恵器杯 身	14.0 — 9.0 3.8	口縁部1/3 周欠損。 平底で体部は外方に開いて立ち上がる。器高が低 い。体部下端から底部は回転へ削りする。ロクロ ロ右回転。	青母を含む 砂粒を多量 に混入。	普通。	明青灰色。	
5	49,94, 200	須恵器杯 身	(14.8) — 5.2 3.9	口縁部2/3 周欠損。 平底で体部は外方に開いて立ち上がる。器高が低 い。体部下端から底部は回転へ削りする。ロクロ ロ右回転。	青母を含む 砂粒を多量 に混入。	あまい。 灰色がかった 明黄褐色。		
6	16,36,52 ,,54,55, 69,78,80 ,,85,86他	須恵器杯 身	14.0 — 8.8 3.5	口縁部1/3 周欠損。 平底で体部は外方に開いて立ち上がる。器高が低 い。体部下端から底部は回転へ削りする。ロクロ ロ右回転。	白色粒子・ 青母を含む 砂粒を多量 に混入。	普通。	明青灰色。	
7	12,17,26 ,,30,34, 200	須恵器杯 身	— — 7.6 2.4	口縁部欠損。 平底で体部は外方に開いて立ち上がる。体部下端 から底部は回転へ削りする。ロクロ右回転。	白色粒子・ 青母を含む 砂粒を多量 に混入。	あまい。 白色。	明青灰色。	
8	130,131, 132,146, 147,148, 200	須恵器杯 身	— — 8.4 3.5	I:縁部欠損。 下底で体部は外方に開いて立ち上がる。体部下端 から底部は回転へ削りする。ロクロ右回転。	白色粒子・ 青母を含む 砂粒を多量 に混入。	あまい。 白色。	明青灰色。	
9	103,114, 128,135, 171,200	杯	14.4 — — 3.8	口縁部1/2 周欠損。 平底だが底部と立ち上がりとの境は不明瞭である。 体部は縦やかに内側して立ち上がる。内面はヘラ 磨きし、外面もヘラ削り後へタ磨きして仕上げる。 器面上に光沢がある。	粗砂粒を含む。	良好。	黄褐色。	
10	173,174, 191,196, 200	杯	15.2 — 4.9 3.6	口縁部1/4 周と底部1/4 周欠損。 平底だが底部と立ち上がりとの境は不明瞭である。 体部は縦やかに内側して立ち上がる。内面はヘラ 磨きし、外面もヘラ削り後へタ磨きして仕上げる。 器面上に光沢がある。	粗砂粒を含む。	良好。	黄褐色。	
11	106,113, 200,212	杯	14.6 — — 3.9	口縁部1/2 周欠損。 平底だが底部と立ち上がりとの境は不明瞭である。 体部は縦やかに内側して立ち上がる。内面はヘラ 磨きし、外面もヘラ削り後へタ磨きして仕上げる。 器面上に光沢がある。	粗砂粒を含む。	良好。	黄褐色。	
12	200	杯	(14.8) — — [3.8]	口縁部1/4 周。 平底だが底部と立ち上がりとの境は不明瞭である。 体部は縦やかに内側して立ち上がる。内面はヘラ 磨きし、外面もヘラ削り後へタ磨きして仕上げる。 器面上に光沢がある。	粗砂粒を含む。	良好。	黄褐色。	
13	135,200	杯	13.6 — — [3.8]	I:縁部1/6 周。 平底だが底部と立ち上がりとの境は不明瞭である。 体部は縦やかに内側して立ち上がる。内面はヘラ 磨きし、外面もヘラ削り後へタ磨きして仕上げる。 器面上に光沢がある。	粗砂粒を含む。	良好。	黄褐色。	
14	13,14,38 ,,39,40, 41,62,63 ,,64,220	須恵器 蓋	— (16.5) — [18.2]	縁部1/2周。 丸底で球形の脚部である。外側の一部に灰色がか かれた緑色の釉がかかる。	黒色の微粒 子を含む。	良好。	内輪明青灰色。 外輪黒っぽい 灰色。	
15	18,31,51 ,,56,60, 61,72, 200	須恵器 蓋	11.5 15.7 8.4 23.5	I:縁部のご く一部を欠 損。ほぼ完 形。	黑色微粒 子を含む。	良好。	明青灰色。	

法蓋は上から口径・胴部径・底径・器高を表す。() は保原値、〔 〕は現存値を示す。

編団番号	遺物番号	器 形	法長(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
16	58, 115, 117, 128, 149~153 他	須恵器長 縦置	10.4 15.1 7.8 22.3	口縫部1/3 周と調節の 1/4を欠損。	口縫部は有段で、肩部に明瞭な縫を作る。高台は張り付けている。肩下部と底部は回転ヘラ削りを含む。	黒色微粒子	良好。	明青灰色。輪 がかかる部分 はオリーブ灰 色。
17	59, 135, 144, 154, 290	須恵器長 縦置	[10.8] — [4.3]	口縫部1/3 周。	ラップ状に開き、口縫部は有段となる。口縫部の内面から外型にかけて自然物がかかる。	黒色粒子を 含む。	良好。	内面明青灰色。 外面暗青灰色。
18	6, 79, 155 188, 196 200	須恵器長 縦置	— [16.0] — [8.3]	縫部から削 削の1/3周。	縫部には緩やかな縫を作る。	黒色粒子を 含む。	良好。	明青灰色。
19	1, 4, 7, 25 66, 167, 189, 200	須恵器長 縦置	— — 7.6 [5.7]	肩下部か ら底部の1/ 3周。	底部は中央部が僅かに突出する。高台は張り付けて いる。肩下部と底部は回転ヘラ削りする。ロ クロは右側面。	黒色粒子を 含む。	良好。	内面明青灰色。 外側暗青灰色。 青明青灰色。

豊穴住居002 (第50・51、図版22・28・29)

編団番号	遺物番号	器 形	法長(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
1 20	杯	光形。	11.7 12.0 — 4.6	丸底で体部外側に突出する縫を作り口縫部は外反 する。内面と口縫部外側にかけては横方向のヘラ 磨きで仕上げ、体部外側から底部にかけては横方 向にヘラ削りしている。	粗砂粒を含 む。	良好。良 く燒きしまっ ている。	黒っぽい黄褐 色系調。一部 暗褐色。内外 面黒色処理、 盛存良好。	
2 8	杯	光形。	11.4 11.2 — 4.3	丸底で体部外側に突出する縫を作り口縫部は外反 する。内面と口縫部外側にかけては横方向のヘラ 磨きで仕上げ、体部外側から底部にかけては横方 向にヘラ削りしている。	粗砂粒を含 む。	良好。よく 燒きしまっ ている。	黒褐色。一部 暗褐色。内外 面黒色処理、 盛存良好。	
3 7	杯	[1]縫部の1/ 2.0 4欠損。	12.2 — — 4.4	丸底で体部外側に突出する縫を作り口縫部は内反 する。内面と口縫部外側にかけては横方向のヘラ 磨きで仕上げ、体部外側から底部にかけては横方 向にヘラ削りしている。	砂粒と2~ 3mmの小石 を含む。	良好。よく 燒きしまっ ている。	椎褐色。内外 面黒色処理、 ほとんど剥げて いる。	
4 19	杯	口縫部の1/ 11.6 4欠損。	11.5 — — 4.5	丸底で体部外側に突出する縫を作り口縫部は外反 する。内面と口縫部外側にかけては横方向のヘラ 磨きで仕上げ、体部外側から底部にかけては横方 向にヘラ削りしている。	微細砂粒を 含む。	良好。堅致 である。	椎褐色。一部 黄褐色。内外 面黒色処理、 外面は剥げた。	
5 13	杯	[13.6] — — [3.3]	[口縫部から 体部の1/4]	丸底で体部外側に突出する縫を作り口縫部は外反 する。内面と口縫部外側にかけては横方向のヘラ 磨きで仕上げ、体部外側から底部にかけては横方 向にヘラ削りしている。	砂粒を含む。	良好。	椎褐色。一部 黄褐色。内外 面黒色処理。	
6 23, 24	杯	[14.6] — — [4.3]	[口縫部から 体部の1/3]	丸底で体部外側に突出する縫を作り口縫部は外反 する。内面と口縫部外側にかけては横方向のヘラ 磨きで仕上げ、体部外側から底部にかけては横方 向にヘラ削りしている。	砂粒を多量 に含む。	普通。	暗褐色。一部 黒褐色。内外 面黒色処理。	
7 16	杯	14.3 12.5 — 4.5	[口縫部の一 部欠損。]	丸底で体部外側に縫を作り、口縫部は大きく開いて 立ち上がる。内面と口縫部外側は横方向にヘラ 磨きし、体部外側はヘラ削り後さらに磨いて仕上 げる。一部粘土混入が見れる。	粗砂粒を含 む。	良好。	内面椎褐色、 外面暗褐色、一 部黒褐色。内 外面黒色処理。	
8 15	杯	14.4 12.2 — 4.5	[口縫部の1/ 5欠損。]	丸底で体部外側に縫を作り、口縫部は大きく開いて 立ち上がる。内面と口縫部外側は横方向にヘラ 磨きし、体部外側はヘラ削り後さらに磨いて仕上 げる。	粗砂粒を含 む。	良好。	椎褐色。一部 黒褐色。内外 面黒色処理、 盛存悪い。	
9 11, 12, 24 , 25, 29	杯	14.4 12.6 — 4.4	[口縫部から 体部の1/5 欠損。]	丸底で体部外側に縫を作り口縫部は内側する。 内面と口縫部外側にかけては横方向のヘラ 磨きし、体部外側はヘラ削りする。口縫部に一部 粘土混入が見れる。	砂粒を含む。	良好。	黄褐色。一部 黒褐色。内外 面黒色処理、 盛存悪い。	
10 2-B	杯	11.7 12.5 — 3.7	[口縫部1/3 欠損。]	丸底で体部外側上位に縫を作り口縫部は内側する。 内面と口縫部外側にかけては横方向のヘラ 磨きで仕上げ。体部外側から底部にかけてはヘラ削り後 ナギでいる。	粒子の粗い 砂粒を含む。	良好。	黒褐色。一部 椎褐色。内外 面黒色処理。外 面は剥げた。	

法量は上から口縫・胴部縫・底縫・器高等を表す。() は復原値、〔 〕は現存値を表す。

堅穴住居002

編図番号	遺物番号	器 形	法寸(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
11	17, 18, 28	杯	11.4 12.6 3.7	口縁部1/3 欠損。 内面と口縁部外側にかけては横方向の ヘラ磨きで仕上げ。体部外側から底部にかけては ヘラ削りする。	丸底で体部上位に縁を作り、口縁部は内傾して立 ち上がる。内面と口縁部外側にかけては横方向の ヘラ磨きで仕上げ。体部外側から底部にかけては ヘラ削りする。	砂粒を含む。	良好。	黒褐色、一部 橙色。内外面 黒色処理。
12	18	杯	11.5 13.0 4.0	口縁部から 体部上半部 の1/2欠損。 4.0	丸底で体部上位に縁を作り、口縁部は内傾して立 ち上がる。内面と口縁部外側にかけては横方向の ヘラ磨きで仕上げ。体部外側から底部にかけては ヘラ削りする。器蓋が残る。	砂粒を多量 に含む。	あまり。	黒褐色、一部 橙色。内外面 黒色処理。
13	1	杯	12.8 14.6 4.5	口縁部から 体部の1/3 欠損。	丸底で体部上位に縁を作り、口縁部は内傾して立 ち上がる。内面と口縁部外側にかけては横方向の ヘラ磨きで仕上げ。体部外側から底部にかけては ヘラ削りする。	砂粒を含む。	普通。	黒褐色、内外 面黒色処理。
14	21	鉢	13.2 15.0 6.4 9.3	完形。	平底で、側脚は内傾して立ち上がる。外面に突出 する縁を作り、山線部は内傾して立ち上がる。内 面と口縁部外側は丁寧にヘラ磨きし、光沢がある。 外面はヘラ削りしている。	細砂粒を含 む。小石を 若干含む。	良好。	暗褐色、底部 を除く内外正 黒色処理。
15	10	小型土器	2.2 — 2.8 4.2	完形。	平底で、やや内凹して立ち上がる。口縁部は内傾 している。口縁部から周部は横ナギし、他もな くて仕上げている。	細砂粒を少 量含む。	良好。	暗褐色。
16	8, 24	小型土器	9.0 7.8 2.6	口縁部から 底部の1/3 間。	圓平で体部は切く立た上がる。底部に明顯に木壓 痕が残っている。体部は内外面研くなっている。	細砂粒を含 む。	普通。	褐色、底部外 面は黒褐色。
17	2-A, 28	甌	17.4 22.0 5.8 30.4	胸部の一部 を欠損する。	長胴形で最大径は胸中位にある。口縁部は外傾す る。内面はなでており、工具痕、沿土圧痕がみら れる。外面は火熱による弯曲の荒れが著しいがヘ ラ削りしていると思われる。	粒子の粗い 砂粒を多量 に含む。	あまり。火 熱を受ける。	暗赤褐色。外 面に煤付着。
18	3	甌	14.4 18.5 5.9 26.6	口縁部の1/ 5を欠損。	長胴形で最大径は胸中位にある。口縁部は近く外 反する。口縁部は横ナギ、内底は横方向になる。 沿土圧痕が残る。外表面は腹方向へヘラ削り後丁寧 になっている。	砂粒を含む。	良好。火熱 を受ける。	褐色、外間に 一部煤が付着 する。
19	25, 26, 28	甌	— — (7.2) [5.6]	底部1/2。 内面はなでており、外表面はヘラ削りしている。火 照砂粒を多 量に含む。	火 照砂粒を多 量に含む。	あまり。火 熱を受ける。	明赤褐色。	
20	4	甌	— — (7.0) [5.4]	底部。 内面はなでており、工具痕が残る。外表面はヘラ削 りしている。	砂粒を多量 に含む。	良好。	褐色。	
21	6, 24, 25	甌	— — (7.0) [3.0]	底部2/3。 内面はなでており、外表面はヘラ削りして いる。	砂粒を含む。	普通。火熱 を受ける。	内面黒色。外 面暗赤褐色。 火熱により赤 色している。	
22	5	甌	29.1 — 8.9 21.5	口縁部の一 部を欠損。 口縁部は横ナギし、内部は内外面とも腹方向にヘ ラ削りする。	砂粒を多量 に含む。	良好。火熱 を受ける。	褐色、外間に は黒斑がある。	

堅穴住居003 (第53図、図版22・30)

編図番号	遺物番号	器 形	法寸(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
1	2	須志器杯	10.1 — — 4.6	完形。	受部が横にのび、そこから短い口縁部が内傾して 立ち上がる。底部の2/3を円柱へラ削りしておりロ クロは右回転。底部に縁を2本並べた突起がある。	白色粒子を 含む細砂粒 を含む。	良好。良 く焼きしまっ ている。	暗青灰色。
2	4	須志器杯	9.3 — — 3.9	完形。	受部が斜めにのび、そこから短い口縁部が内傾し て立ち上がる。底部の1/3を円柱へラ削りしてあり ロクロは右回転。	白色粒子 を含む細砂 粒を含む。	良好。良 く焼きしまっ ている。	青灰色。

法寸は上から口径、胸部径、底径、器高を表す。() は復原値、〔 〕は現存値を示す。

件番	遺物番号	器 形	基準(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 士	模 成	色 調
3	3	杯	10.4 — 4.4	完形。 丸底で体部外面に突出した縁を作り、口縁部は内側して立ち上がる。内面から口縁部外面は横力向にへん曲をなし、外側部から底部はへラ削り後軽く盛り出しているようである。	細砂粒を含む。 良好。良くなじまっている。	黒褐色。内外面黒色處理。内面の遺存がよい。		
4	14	小型土器	7.0 — 5.8 3.0	口縁部の一 部欠損。	平底で、体部はほぼまっすぐ立ち上がる。高さがない標準的な器形である。内面はなでており、外側はへラ削りする。	砂粒を含む。 良好。	橙色、内外面赤色塗彩。	
5	15	小型土器	(7.2) — [6.0] 3.5	口縁部から 底部の1/4 周。	平底で、体部はほぼまっすぐ立ち上がる。高さがない標準的な器形である。内面はなでており、外側はへラ削りする。外側に粘土粗底が残る。	砂粒を含む。 普通。	暗赤褐色、内外面赤色塗彩。	
6	7	小型土器	(7.4) — [7.7] 2.8	口縁部から 底部の1/2 周。	平底で、体部はほぼまっすぐ立ち上がる。高さがない標準的な器形である。内面はなでており、外側はへラ削りする。外側に粘土粗底が残る。	砂粒を含む。 普通。	暗色、一部暗赤褐色。	
7	15	小型土器	(6.8) — [6.4] 3.2	口縁部から 底部の1/2 周。	平底で、体部はほぼまっすぐ立ち上がる。高さがない標準的な器形である。内面はなでており、外側はへラ削りする。内面に工具痕、外側には粘土粗底が残る。	砂粒を含む。 普通。	橙色。	
8	15	小型土器	8.6 — 7.3 2.9	口縁部から 底部の1/2 周。	平底で、体部はやや外傾して立ち上がる。高さがない標準的な器形である。内面はなでておらず、外側には粘土の膜が残る。	砂粒を含む。 普通。	褐色。	
9	13	小型土器	8.9 — 7.5 2.8	口縁部のご く一部を欠 損。	平底で、体部はほぼまっすぐ立ち上がる。高さがない標準的な器形である。内面はなでており、外側はへラ削りする。内面に工具痕、外側に粘土粗底が残る。	砂粒を含む。 普通。	橙色。	
10	15	小型土器	(7.6) — [6.0] 2.9	口縁部から 底部の1/3 周。	体部はほぼまっすぐ立ち上がる。内面はなでており、外側はへラ削りする。外側に粘土粗底が残る。	砂粒を含む。 普通。	橙色。	
11	15	小型土器	(5.9) — [3.0]	口縁部から 体部の1/3 周。	体部は内壁気味に立ち上がる。内外面なでて仕上げる。外側に粘土粗底が残る。	砂粒を含む。 普通。	白っぽい褐色。	
12	15	小型土器	(6.0) — [3.0]	口縁部から 体部の1/3 周。	体部は内壁気味に立ち上がる。内外面なでて仕上げる。外側に粘土粗底が残る。	砂粒を含む。 普通。	暗色、一部白っぽい褐色。内外面赤色塗彩。	
13	12	小型土器	6.8 — 6.2 2.8	口縁部の一 部を欠損。	体部は内壁気味に立ち上がる。内面はなでており、外側はへラ削りする。内面は工具痕、外側に粘土粗底が残る。	砂粒を含む。 良好。	褐色。内外面赤色塗彩。	
14	11	小型土器	9.4 — 6.5 3.8	口縁部から 底部の1/2 周。	平底で、体部は外傾して立ち上がる。内外面へラ削りする。外側に一部粘土粗底が残る。	砂粒を多量 に含む。 普通。	内面暗色、外 面には褐色。	
15	7,15	小型土器	(7.8) — [6.2] [4.0]	口縁部から 体部2/3周。	平底で、体部は外傾して立ち上がる。内外面なでて仕上げる。内面の底部付近に工具痕が残る。	砂粒を含む。 普通。	橙色。	
16	5	小型土器	8.4 — 7.0 4.5	口縁部の一 部欠損。	平底で、体部は外傾して立ち上がる。内外面なでて仕上げる。内面の体部下半部から底部は使用のためか剥離が見られる。	砂粒を含む。 良好。	にじむ黄褐色、一部暗褐色。	
17	12	小型土器	8.0 — 5.9 4.9	完形。	平底で、体部は外傾して立ち上がる。内外面なでて仕上げる。外側に粘土粗底が残る。	砂粒を含む。 良好。	褐色、内外面赤色塗彩。	

法値は上から口径・肩部径・底径・高さを表す。() は復原値、[] は現存値を示す。

横田番号	遺物番号	器 形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
18	5, 11	小型上唇	9.0 — 6.0 5.6	口縁部から 体部の1/3 欠損。	平底で、体部は外傾して立ち上がる。内外面にて ては上げる。外面に粘土粗粒が残る。	砂粒を含む。 良好。		藍色、一部暗 褐色。赤色塗 装。
19	10, 15	甕	18.4 18.0 7.0 27.4	口縁部のごく 一部を欠損。	長楕円形で最大径は口縁部にある。口縁部は横ナデ し、内面は横方向になる。外面は横方向にヘラ 削りし、底部の一部はさらに横方向に削って整形 する。	砂粒を多量 に含む。 良好。	火熱 を受ける。 内外面埋色。	
20	1	甕	25.6 — 8.2 26.4	口縁部の2/ 3欠損。	底部は内窓気孔に立ち上がり、口縁部は強く外反 する。口縁部は横ナデし、内面はなじむ。外面は 横方向にヘラ削りし、軽くなめて仕上げている。	砂粒を含む。 良好。	火熱 を受ける。 内外面埋色、 一部火熱によ り黒褐色に変 色する。	

竪穴住居004 (第55・56図、図版23・31・32・33)

横田番号	遺物番号	器 形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
1	5-B	杯	11.2 — 4.6	口縁部のごく一部を欠損。 ほぼ完形。	丸底で体部外面に突出する棱を作り、口縁部は強 く外反する。内面から口縁部外周にかけては横方 向のヘラ磨きで仕上げ、体部外周から底部にかけて は横方向にヘラ削りする。	砂粒を含む。 良好。		暗褐色。内外 面黒褐色處理、 遺存良好。
2	27	杯	12.3 — 5.0	口縁部の一部欠損。	丸底で体部外面に突出する棱を作り、口縁部は強 く外反する。内面から口縁部外周にかけては横方 向のヘラ磨きで仕上げ、体部外周から底部にかけて は横方向にヘラ削りする。	砂粒を含む。 良好。		暗褐色、一部 暗赤褐色。黒 色處理、内面 の遺存良好。
3	5-A	杯	13.4 — 4.8	口縁部のごく一部を欠 損、ほぼ完 形。	丸底で体部外面に突出する棱を作り、口縁部は強 く外反する。内面から1/3縁部外周にかけては横方 向のヘラ磨きで仕上げ、体部外周から底部にかけて は横方向にヘラ削りする。	砂粒を含む。 良好。		黒褐色。内外 面黒褐色處理。
4	2	杯	12.7 — 3.9	口縁部の一部欠損。	丸底で体部外面に突出する棱を作り、口縁部は強 く外反する。内面から口縁部外周にかけては横方 向のヘラ磨きで仕上げ、体部外周から底部にかけて は横方向にヘラ削りする。	砂粒を含む。 良好。		内面黒褐色、 外面黒褐色。 外面黒褐色處 理。
5	24	杯	12.8 — 3.9	1/2遺存。	丸底で体部外面に明瞭な棱を作り、口縁部は外反 する。内面から口縁部外周にかけては横方向のヘ ラ磨きで仕上げ、体部外周から底部にかけては横 方向にヘラ削りする。	普通。		内面黒褐色、 外面くすんだ 褐色。内外面 黒褐色處理。
6	16, 17, 26	杯	13.1 — 4.6	口縁部の1/2と底部の一部を欠 損。	丸底で体部外面に明瞭な棱を作り、口縁部は外反 する。内面から口縁部外周にかけては横方向のヘ ラ磨きで仕上げ、体部外周から底部にかけては横 方向にヘラ削りする。	砂粒を含む。 普通。		暗褐色。内外 面黒褐色處理。
7	4-C	杯	15.6 — 5.0	口縁部のごく一部を欠 損、ほぼ完 形。	丸底で体部外面に明瞭な棱を作り、口縁部は外反 する。内面から口縁部外周にかけては横方向のヘ ラ磨きで仕上げ、体部外周から底部にかけては横 方向にヘラ削りする。	粒子の粗い 砂粒を含む。 良好。		暗赤褐色、内 外面黒褐色處理。
8	33	杯	13.8 — 3.8	口縁部のごく一部を欠 損、ほぼ完 形。	丸底で体部外面に明瞭な棱を作り、口縁部は外反 する。内面から口縁部外周にかけては横方向のヘ ラ磨きで仕上げ、体部外周から底部にかけては横 方向にヘラ削りする。	微細な砂粒 を多量に含む。 良好。		褐色。内外面 赤褐色影、遺 存良好。
9	4-B	杯	13.7 — 4.3	口縁部のごく一部を欠 損、ほぼ完 形。	丸底で体部外面に明瞭な棱を作り、口縁部は外反 する。内面から口縁部外周にかけては横方向のヘ ラ磨きで仕上げ、体部外周から底部にかけては横 方向にヘラ削りする。	砂粒を含む。 普通。		暗赤褐色、内 外面赤褐色影。
10	4-D	杯	14.2 — 4.0	口縁部のごく一部を欠 損、ほぼ完 形。	丸底で体部外面に明瞭な棱を作り、口縁部は外反 する。内面から口縁部外周にかけては横方向のヘ ラ磨きで仕上げ、体部外周から底部にかけては横 方向にヘラ削りし、工具痕が残る。	砂粒を多量 に含む。 普通。		内面黒褐色、 外面赤褐色。 外面黒褐色處 理。
11	4-E	杯	14.3 — 3.7	口縁部のごく一部を欠 損、ほぼ完 形。	丸底で体部外面に明瞭な棱を作り、口縁部は外反 する。内面から口縁部外周にかけては横方向のヘ ラ磨きで仕上げ、体部外周から底部にかけては横 方向にヘラ削りする。	砂粒を含む。 普通。		内面暗赤褐色、 外面黒褐色。 外面黒褐色處 理。

法量は上から口徑・側部径・底径・器高を表す。() は復原値、〔 〕は現存値を示す。

序号	遺物番号	器 形	重量(g)	遺存度	器形・成形・調査等の特徴	新 土	焼 成	色 調
12	30	杯	14.2 — — 3.5	口縁部の1/ 2欠損。	体部外側に明瞭な棱を作り、口縁部は外反する。器底が広く扁平な形態である。内面から口縁部外側にかけては横方向にへら巻きで仕上げ。体部外側は横方向にへら削りする。	砂粒を多量 に含む。	普通。	暗赤褐色、内 外面赤色地。
13	28	杯	13.1 — — 3.4	L口縁部の1/ 2欠損。	体部外側に明瞭な棱を作り、口縁部は外反する。器底が広く扁平な形態である。内面から口縁部外側にかけては横方向にへら巻きで仕上げ。体部外側は横方向にへら削りする。	砂粒を含む。	あまり。	黒褐色、一部 結晶化。内外 面黒色地。
14	4-A	杯	12.4 — — 3.9	丸底の一部 欠損。	丸底で体部外側に明瞭な棱を作り、口縁部は外反する。内面から口縁部外側にかけては横方向のへら巻きで仕上げ。体部外側から底部にかけては横方向にへら削りする。	砂粒を含む。	あまり。	黒褐色。内 外面黒色地。
15	11	杯	11.8 — — 4.6	L口縁部のこ く一部を欠 損、ほぼ完 形。	丸底で体部外側に明瞭な棱を作り、口縁部は外反する。外表面底部以外はへら巻きで仕上げる。底部には金銀を使用したような細い溝状の擦痕がある。	砂粒を含む。	普通。	暗褐色。内 面黒色地。
16	32	杯	11.2 — — 3.8	L口縁部の1/ 4欠損。	丸底で体部外側上辺に明瞭な棱を作り、口縁部は内傾する。内面からL口縁部外側にかけては横方向のへら巻きで仕上げるが単位は不明瞭である。外 面はへら削りする。	砂粒を含む。	良好。よく 焼き残って いる。	赤褐色。外 面赤色地。
17	14, 31	杯	11.1 — — 3.3	L口縁部の一 部欠損。	丸底で体部外側上辺に明瞭な棱を作り、口縁部は内傾する。内面からL口縁部外側にかけては横方向のへら巻きで仕上げるが単位は不明瞭である。外 面はへら削りする。	粒子の無い 砂粒を含む。	あまり。	黒褐色。内 外面黒色地。
18	22	高杯	— — 12.7 3.8	脚部。	ハの字状に聞く脚部で、蓋部は上に反る。外表面 はへら削りし、脚部部は横ナデする。	砂粒を含む。	良好。	内面黒褐色、 外面赤褐色、 外表面黒色地。
19	12	鉢	20.3 19.9 — 7.9	口縁部のこ く一部を欠 損、ほぼ完 形。	丸底で外側に明瞭な棱を作り、口縁部は外反する。内面から口縁部外側にかけてはへら巻きし、脚部 外側は横方向にへら削りする。	砂粒を多量 に含む。	良好。	内面黒色、外 面暗赤褐色。
20	5-C, 30	鉢	16.8 16.1 7.0 9.4	L口縁部のこ く一部を欠 損、ほぼ完 形。	丸底で、脚部は外傾して立ち上がり、口縁部は僅 かに外反する。脚部中位に把手がつく。内面はへ ら巻きし、外表面はへら削りする。	砂粒を含む。	良好。	内面黒褐色 (黒色地)。 外表面褐色。
21	15, 26	鉢	16.2 15.6 6.6 8.9	口縁部1/4 欠損。	平底で、脚部は外傾して立ち上がり、口縁部は僅 かに外反する。口縁部は横ナデし、内面はなでて いる。外表面はへら削りしているが脚部が丸い単位 は不明瞭である。	砂粒を多量 に含む。	あまり。火 熱を受ける。	内面暗褐色、 外面黒色。
22	3, 7	鉢	17.7 — 7.1 6.7	L口縁部欠 損。	平底で脚部は外方に大きく開いて立ち上がる。口 縁部は横ナデし、内面下半部と外表面はへら削りす る。外表面に粘土接着合板が残る。	砂粒を含む。	良好。	暗赤褐色。
23	10	鉢	12.6 14.9 7.4 11.9	口縁部のこ く一部を欠 損。	脚部中位より上に最大径がある。口縁部は外反する。 口縁部は横ナデし、内面はなでてている。ナデが強 い部分は浅く深んでいる。脚部外側と底部はへら 削り後となる。	砂粒(石英 粒)を含む。	良好。	内面赤褐色。
24	8	鉢	15.8 18.5 7.3 17.3	完形。	脚部中位より上に最大径がある。口縁部は外反する。 口縁部は横ナデし、内面は横方向になる。外表面 は輻方向にへら削り後、下半部はさらに横方向にへら 削り後となる。	粒子が無い 砂粒を多量 に含む。	良好。	暗赤褐色。
25	9	壺	16.0 23.5 8.1 26.5	L口縁部の1/ 4欠損。	長胴形で最大径は脚中位にある。口縁部は外反する。 口縁部は横ナデし、内面は横方向になる。工具痕・粘土 擦痕が所々にある。外表面は輻方向にへら削り後、 下半部はさらに斜横方向にへら削りする。	砂粒を多量 に含む。	良好。火熱 を受ける。	椎形。
26	7, 22, 23	壺	17.5 23.9 21.4 22.9	L脚上半部の 4/5周。	長胴形で最大径は脚中位にある。口縁部は横ナデ し、内面はなでる。外表面は輻方向にへら削りし、 下半部はさらに斜横方向にへら削りする。	砂粒を含む。	良好。火熱 を受ける。	暗赤褐色。

法量は上から口縁・脚部径・底径・器高を表す。()は復原値、〔 〕は現存値を示す。

竪穴住居004

序号	遺物番号	器 形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	燒 成	色 調
27	15, 26	甕	— — [15.6]	胴下部の [28.6] 1/4。 —	内面は横方向になでており、外面は縦方向のへラ 削りが軽くなっている。	砂粒を含む。	良好。火熱 を受ける。	暗赤褐色。
28	34	甕	— — 6.2 5.7	底部。	内面はなでてあり、外面はへラ削りする。	砂粒を含む。	良好。	内面赤褐色、 外面暗褐色。
29	13, 14	甕	— — 8.1 2.7	底部。	内面はなでてあり、外蓋はへラ削りする。	砂粒を含む。	良好。	赤褐色。
30	1	甕	25.1 21.1 9.1 24.8	口縁部の一部を欠損。	底部から外縁しながら立ち上がり、口縁部は大き く外反する。口縁部は横ナギし、内面はなでる。 外面は縦方向にへラ削りする。	砂粒を多量 に含む。	良好。	暗褐色、一部 赤褐色。

竪穴住居005 (第57・58図、図版23・33・34・35)

序号	遺物番号	器 形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	燒 成	色 調
1	2, 22	杯	(12.8) — — [3.4]	口縁部から 体部の1/4周。	体部外壁に明瞭な棱を作り、口縁部は強く外反す る。内面から口縁部外壁にかけては横方向にへラ 削きする。体部外壁はへラ削りしている。	砂粒を含む。	良好。	暗赤褐色。内 外面黒色処理。
2	27	杯	(13.8) — — [3.7]	口縁部から 体部の1/5周。	体部外壁に明瞭な棱を作り、口縁部は外反す る。内面から口縁部外壁にかけては横方向にへラ 削きする。体部外壁はへラ削りしている。	粒子の粗い 砂粒を含む。	普通。	暗褐色。内 外面黒色処理、 遺存良好。
3	18	杯	13.2 — — 4.2	口縁部のご く一部を欠 損。	丸底で体部外壁に明瞭な棱を作り、口縁部は外反す る。内面から口縁部外壁にかけては横方向にへラ 削きする。体部外壁はへラ削りしている。	細砂粒を含 む。	普通。	暗赤褐色。内 外面黒色処理、 遺存良好。
4	5	杯	13.5 — 3.4	口縁部から 体部の1/2周。	丸底で体部外壁に明瞭な棱を作り、口縁部は外反す る。内面から口縁部外壁にかけては横方向にへラ 削きする。体部外壁はへラ削りしている。	砂粒を多量 に含む。	良好。	暗褐色。内 外面黒色処理、 遺存良好。
5	2, 5, 21	杯	13.7 — 3.5	口縁部の3/ 5欠損。	丸底で体部外壁に明瞭な棱を作り、口縁部は外反す る。内面から口縁部外壁にかけては横方向にへラ 削きする。体部外壁はへラ削りしている。	砂粒を含む。	普通。	暗褐色。内 外面黒色処理、 遺存良好。
6	5	杯	(13.2) — [3.3]	口縁部から 体部の1/5周。	丸底で体部外壁に明瞭な棱を作り、口縁部は直 立して立ち上がる。内面から口縁部外壁にかけては横 方向にへラ削きする。体部外壁はへラ削りしてい る。器蓋が荒れる。	砂粒を多量 に含む。	あまり。	暗褐色。内 外面黒色処理、 遺存良好。
7	6	杯	11.7 — 3.8	口縁部のご く一部欠損。 ほぼ完形。	丸底で体部外壁上面に棱を作り、口縁部は外反す る。内面と外壁部中位は横方向にへラ削きする。外 面底端附近はへラ削りする。丁寧な作りで全体 に光沢をもつ。	砂粒を多量 に含む。	良好。	暗褐色。内 外面赤色。
8	20	鉢	9.7 11.0 3.5 6.8	口縁部のご く一部欠損。	平底で胴部は内凹して立ち上がり、上位に棱を作 って口縁部は強く外反する。内面から口縁部外壁 はへラ削きするが器蓋が荒れている。胴部外壁は へラ削りしている。	粒子の粗い 砂粒を多量 に含む。	良好。	暗褐色。内 外面赤色。
9	15	鉢	10.3 11.9 5.3 7.5	口縁部の1/ 2欠損。	平底で胴部は内凹して立ち上がり、上位に棱を作 って口縁部は内傾する。内面から口縁部外壁はへ ラ削きする。工具痕が残る。胴部外壁はへラ削り し軽くなっている。	砂粒を多量 に含む。	良好。	暗褐色。内 外面黒色処理、 遺存良好。
10	16	鉢	14.0 14.4 7.0 8.7	口縁部の 一部欠損。	平底で胴部は内凹して立ち上がり、縁やかな棱を作 る。口縁部はまっすぐ立ち上がる。内面から口 縁部外壁はへラ削きし、二重底が残る。胴部外壁 はへラ削りし軽く密く。	細砂粒を含 む。	良好。	内面黒褐色、 外面暗赤褐色、 内面黒色処理。

法量は上から口径、胴部径、底径、高さを表す。() は復原値、〔 〕 は現存値を示す。

聖穴集層005

標目番号	遺物番号	器 形	法量(cm)	遺存度	断形・成形・調整等の特徴	駆 土	焼 成	色 調
11	24, 25, 26	鉢	14.7 — 6.2 10.6	1鍔部の一部欠損。	平底で銚部は内凹して立ち上がり、口縁部は外反する。内面は裏面が荒れ、調整は不明瞭である。外面はへラ削りをする。	細砂粒を含む。	良好。火熱を受ける。	内面黒褐色(黑色近辺)。外皮赤褐色。
12	9	鉢	15.1 15.3 6.4 17.8	銚部の一部欠損。	平底で銚部は内凹して立ち上がり、口縁部は強く外反する。口縁部は横ナゲダする。内面は横方向になんで、工具痕が残る。外面はへラ削りをする。	砂粒を含む。	良好。	褐色。一部黒褐色。
13	23	小型土器	— — — —	底部の一部。	内面はなでている。底部外周に木製板がある。	細砂粒を含む。	普通。	橙色。
14	17, 29, 一 盛	口縁部	16.0 19.8 5.7 29.4	口縁部の1/5と肩部の1/3を欠損。	長脚形で銚部中央位に最大径がある。口縁部は横ナゲダし、内面は横方向になでており工具痕が残る。外面はへラ削り後なでる。火熱により内面は荒れ、外面は付着物が多い。	砂粒を含む。	良好。火熱を受ける。	暗赤褐色。口縁部外周に多量に煤が付着する。
15	19	壺	15.7 18.8 5.3 28.1	銚部の一部を欠損。	長脚形で銚部中央位に最大径がある。口縁部は横ナゲダし、内面は横方向になでており、外面は上から下へラ削りしている。	砂粒を含む。	良好。火熱を受ける。	暗赤褐色。
16	13, 14, 19	壺	(18.8) (22.6) — [23.7]	LJ縫部から銚部の3/4欠損。	長脚形で最大径は中位にある。LJ縫部は横ナゲダし、内面はなでる。外面は敵方向にへラ削りする。	砂粒を多量に含む。	良好。火熱を受ける。	暗赤褐色、下半部は火熱の影響で黒褐色に変色する。
17	1, 21, 22	壺	18.6 20.1 — [20.2]	銚下平欠損。	長脚形で最大径は中位にある。口縁部は横ナゲダし、内面はなでる。外面は縦方向にへラ削りする。	砂粒を含む。	良好。	暗赤褐色。
18	12, 22	壺	(16.0) — [12.4]	銚部の1/2周。	内面はなでており、外面はへラ削りする。	砂粒を多量に含む。	あまり。	暗赤褐色。
19	4, 22	壺	— 23.3 7.4 [17.2]	銚上平部欠損。	内面はなでおり、外面はへラ削りする。	砂粒を多量に含む。	良好。	褐色。一部火熱により増赤褐色に変色する。
20	7, 10, 21, 23	壺	(25.6) (33.6) 7.2 31.7	口縁部から銚部の2/3欠損。	小さな底部から銚部は大きく膨らみ、最大径は中位より上にある。火熱による器面の荒れが著しく調節は不明瞭である。	白色粒子。小石が混入する砂粒を含む。	良好。火熱を受ける。	黄褐色。

野穴住居006（第59・60図、図版24・36・37）

標名 番号	遺物番号	器 形	重量(g)	遺存度	種類・形態・構造等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
1	17	杯	14.4 — — 4.4	充形。	丸底で弧状に向いて立ち上がり、口縁部は厚くな る。口縁部は歪んでいる。内面はヘラ磨きし。外 面はヘラ削りする。器壁が厚くミッタリとした作 りで縮成形である。	砂粒を多量 に含む。	普通。	黒褐色。一部 暗赤褐色。内 外面黒色処理。
2	5	杯	(12.2) — — 3.9	口縁部から 体部上半部 の1/2欠損。	丸底で体部外面に明瞭な棱を作り、口縁部は僅か に外反して立ち上がる。内面から口縁部外面にかけてはヘラ磨きをする。体部外面はヘラ削りする。	砂粒を含む。	普通。	黒褐色。内 外面黒色処理。
3	23,27	杯	(12.8) — — 4.1	口縁部の1/ 4周と体部 から底部の 2/3。	丸底で体部外面に明瞭な棱を作り、口縁部は外反 して立ち上がる。内面から口縁部外面にかけてはヘラ磨きする。体部外面はヘラ削りする。	粒子が粗い。 砂粒と2~3mmの小石 を含む。	良好。	黒褐色。内 外面黒色処理、 遺存良好。
4	22	杯	12.5 — 3.7	口縁部のごく一部を欠 損。ほぼ光 平。	丸底で体部外面下位に明瞭な棱を作り、口縁部は外反して立ち上がる。内面から口縁部外面にかけてはヘラ磨きする。体部外面はヘラ削りする。	粒子が粗い。 砂粒を多量 に含む。	良好。	内金青赤褐色 (黑色処理)。外 面赤色(赤色被膜)。

法量は上から口径・胸郭径・底径・器高を表す、() は健常値、[] は現存値を示す。

標記番号	遺物番号	器 形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調節等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
5	9.20.22	杯	13.1 — — 4.0	口縁部のごく一部を欠損。	丸底で体部外側に明瞭な棱を作り、口縁部は外傾して立ち上がる。内面と口縁部外面はヘラ削きである。体部外側はヘラ削り後研ぐくなる。	細砂粒を含む。	良好。	褐色、一部黒褐色。内外面黒色処理。
6	19	杯	14.1 — — 4.2	口縁部の1/5欠損。	丸底で体部外側に棱を作り、口縁部は大きく開いて立ち上がる。内外面ともヘラ削きで仕上げる。	細砂粒を含む。	良好。	明赤褐色、一部黒褐色。内外面黒色処理。
7	5	杯	12.8 — — 4.3	口縁部の1/5欠損。	丸底で体部外側上位に明瞭な棱を作り、口縁部は外傾して立ち上がる。内面から口縁部外面にかけてはヘラ削きする。体部外側はヘラ削りにする。	砂粒を含む。	良好。	黒褐色、内外面黒色処理。
8	4	杯	11.2 — — 4.2	口縁部の1/5欠損。	丸底で体部外側上位に棱を作り。口縁部は内傾して立ち上がる。内外面ともヘラ削きで仕上げる。	細砂粒を含む。	良好。	明赤褐色、一部黒褐色。内外面黒色処理。
9	13.26	杯	13.5 — — 4.4	口縁部から体部の1/3欠損。	丸底で体部外側上位に棱を作り。口縁部は内傾して立ち上がる。内面から口縁部外側にかけてはヘラ削きする。体部外側はヘラ削りする。	細砂粒を含む。	普通。	暗赤褐色、一部黒褐色。内外面黒色処理。
10	18	鉢	11.6 12.8 5.8 8.3	口縁部の一部を欠損する。	平底で側部は内凹する。口縁部は側から外反して立ち上がり、外側に模様や模様を有する。口縁部は水平ではない。内面はヘラ削きし、口縁部は模様ナゲである。外縁部はヘラ削りする。	砂粒と小石を含む。	良好。良く焼き締まっている。	内面黒褐色。外明赤褐色。
11	21.29	鉢	15.7 — — [9.2]	口縁部から上半部の1/2欠損。	口縁部と底部径に大きな差がない寸胴の形態になるとと思われる。口縁部は横ナゲだし、内面は横方向にならって模様がある。外縁部は横方向にヘラ削りする。	砂粒を含む。	良好。	褐色。
12	24	鉢	12.4 14.7 6.5 12.4	口縁部1/3欠損。	球形の腹部をもち最大径は側部中位にある。口縁部は強く外反する。口縁部は横ナゲだし、内面はナゲ、外縁部はヘラ削りしている。外縁部は横方向に丁寧にヘラ削りする。	砂粒を含む。	良好。良く焼き締まっている。	褐色、底部外側と口縁部から側部の一部に黒斑。
13	16	甕	18.3 21.0 6.0 30.5	口縁部を僅かに欠く。ほぼ完形。	瓶形で最大径は側部中位にある。口縁部は強く外反する。口縁部は横ナゲだし、内面はナゲ、外縁部はヘラ削りしている。	砂粒を多量に含む。	良好。火熱を受ける。	内面褐色、外側上半部褐色、下部部暗赤褐色。
14	10~12. 14.15.20 ~25~27	甕	17.7 22.7 7.4 31.1	口縁部の一部を底部から底部の1/3欠損。	瓶形で最大径は側部中位にある。口縁部は強く外反する。口縁部は横ナゲだし、内面はナゲ、外縁部はヘラ削りしている。	砂粒を多量に含む。	良好。	暗赤褐色。
15	1.26	甕	20.5 21.9 7.7 27.8	口縁部から上半部の1/4欠損。	瓶形で最大径は側部中位にある。口縁部は強く外反する。口縁部は横ナゲだし、内面はナゲ、外縁部はヘラ削りしている。	粒子の粗い砂粒を多量に含む。小石を含む。	良好。	明赤褐色、外側下半部暗赤褐色。外側に黒斑がある。
16	2	甕	26.7 22.8 9.2 22.8	口縁部を欠損する。	底部から大きいくぼみ状に開いて立ち上がり、口縁部はさきに外反する。口縁部横ナゲ、内面はヘラ削り後上半部は横ナゲで、下部はなでる。外縁部はヘラ削りする。	粒子の粗い砂粒を多量に含む。小石を含む。	良好。	褐色、黒斑がある。

堅穴住居007 (第60図、図版38)

標記番号	遺物番号	器 形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調節等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
1	2	杯	13.3 — — 4.9	口縁部のごく一部を欠損、ほぼ完形。	丸底で口縁部と体部の境に棱をもたず弧状に開いて立ち上がる。内面はヘラ削きし、外縁部はヘラ削りする。外縁部に粘土組合が残る。	砂粒を多量に含む。小石を含む。	良好。	褐色。
2	12	杯	13.9 — — 4.5	口縁部のごく一部を欠損、ほぼ完形。	丸底で口縁部と体部の境に棱をもたず弧状に開いて立ち上がる。内面はヘラ削きし、外縁部はヘラ削り後磨いて仕上げる。一部粘土組合が残るが、丁寧に溝整し器面は光沢をもつ。	細砂粒を含む。	良好。	黒褐色、内外面黒色処理。

法量は上から口径・側部径・底径・高さを表す。() は復原値、〔 〕は現存値を示す。

竪穴住居008

遺物番号	器 形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
3 9,008-22	杯	(11.4) — — [3.3]	3/4欠損。	丸底で、口縁部が内側に内傾して立ち上がる。口縁部は横ナデし、内面はなでる。外表面はヘラ削りしている。	砂粒を多量に含む。	普通。	内面暗褐色(黒色處理)、外表面褐色。
4 9	杯	(14.7) — — [4.5]	3/4欠損。	丸底で体部外表面に明顯な縦を作り、口縁部は僅かに外反する。口縁部は横ナデし、内面はなでる。外表面はヘラ削りする。	粒子の粗い砂粒を含む。	あまり。火熱を受けける。	内外面暗褐色、黒色處理。
5 9	杯	(12.8) — — [2.7]	3/4欠損。	丸底で体部外表面に明顯な縦を作り、口縁部は僅かに外反する。内面から口縁部外表面にかけてヘラ磨きする。体部外表面はヘラ削りする。	粒子の粗い砂粒を含む。	あまり。	黒褐色、外表面の一部暗褐色。内外面黒色處理。
6 1	杯	(13.6) — — 3.9	口縁部2/3欠損。	丸底で体部外表面に縦を作り、口縁部は外傾して立ち上がる。口縁部は横ナデし、外表面は横方向にヘラ削りする。	砂粒を多量に含む。	良好。	内面暗褐色(黒色處理)、外表面赤褐色。
7 5,7	鉢	— (16.0) — 6.4 [9.0]	口縁部と胴部の2/3欠損。	平底で胴部は内側しながら立ち上がり、口縁部と胴部の境が不明瞭である。口縁部は横ナデし、内面はなでる。胴部外表面はヘラ削りしている。	砂粒を含む。	良好。	褐色。
8 4,7,9,13 ,14	鉢	15.2 16.0 5.8 15.1	口縁部と口縁部から腹部の1/4欠損。	最大径が胴中位にある複形の胴部である。口縁部は横ナデし、内面はなでる。外表面はヘラ削りしている。内外面とも火熱による着色の跡が著しい。	細砂粒を含む。	あまり。火熱を受けける。	暗赤褐色、一部黒褐色。火熱により変色する。
9 6,8,9	壺	— 20.1 6.2 [24.8]	胴部の1/2周と底面が遺存する。	長胴形で最大径は中位よりやや下に位置する。内面はなでており、外表面は縱方向にヘラ削りする。火熱による着色の跡が著しい。	粒子の粗い砂粒を含む。	あまり。火熱を受けける。	内面暗褐色、外表面暗褐色、一部赤褐色。

竪穴住居008 (第62・63図、図版24・38・39)

遺物番号	器 形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
1 11,12,20 ,22	杯	(12.7) — — [3.5]	口縁部から底部の2/5欠損。	外表面に縦を作り、口縁部は直立する。内面から口縁部外表面はヘラ磨きし、体部外表面はヘラ削りする。口縁部が厚めである。	砂粒を含む。	あまり。	褐色、内面底面は黒褐色。内外面赤褐色。
2 21	杯	(13.7) — — 4.8	1/2周。	外表面に縦を作り、口縁部は外方へ開く。口縁部は横ナデし、内面はナデし、体部外表面はヘラ削りする。	細砂粒を少量含む。	良好。	褐色、内面の底面以外は赤褐色。
3 7	小型土器	2.1 4.6 2.4 4.8	丸形。	口縁部が強く内傾し、外表面に縦を作ることで内面をなでている。	砂粒を含む。	普通。	褐色。外表面赤褐色。
4 21,22	鉢	(10.6) — — [4.5]	口縁部1/2周。	胴部は僅かに内側しながら立ち上がる。口縁部は横ナデし、内面はなでる。外表面はヘラ削りしている。	細砂粒を含む。	普通。	暗赤褐色。
5 11,12,20 ,22	鉢	23.7 — — 8.6	口縁部1/2と胴部の一部欠損。	丸底で外面上位に縦を作ることで内面をなでる。内面と口縁部外表面はヘラ磨きし、体部外表面はヘラ削りする。内面の黒色化の度合は良好。外表面も黒色處理していた可能性がある。	砂粒を含む。	普通。	内面黒褐色(黒色處理)、外表面暗褐色。
6 10,20	壺	— (17.0) — [16.6]	胴部1/4。	球形の割部で胴部最大径は中位にある。口縁部横ナデし、内面はナデ。外表面はヘラ削り後なでてある。	砂粒を含む。	普通。火熱を受ける。	内面暗褐色。外表面は暗赤褐色、火熱により変色。
7 1	壺	16.4 22.2 6.5 27.8	口縁部の一部を欠損。ほぼ完形。	長胴形で、最大径は胴中位にある。口縁部は横ナデし、内面はナデ。外表面はヘラ削りしているが、火熱による付着物多く、部位は不明瞭である。	砂粒を含む。	良好。火熱を受ける。	口縁部は黄褐色、胴部は暗褐色。

法量は上から口縁・胴部後・底面・脚窓を表す。() は復原値、〔 〕は現存値を示す。

組合番号	遺物番号	器 形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
8	3	甕	15.4 19.9 5.8 27.2	完形。	長胴形で、最大径は胴部中位にある。口縁部は横ナギする。内面は横方向にかけており工具痕、粘土粗粒が残る。外壁は横方向にへラ削りした後なでる。火熱により器面が荒れる。	砂粒を多量に含む。	良好。火熱を受ける。	内面暗褐色。外表面色。外面に黒死がある。
9	2	甕	15.8 19.9 5.5 28.5	完形。	長胴形で、最大径は胴部中位にある。口縁部は横ナギする。内面は横方向にかけており工具痕、粘土粗粒が残る。外壁は横方向にへラ削りした後なでる。	砂粒を多量に含む。	良好。火熱を受ける。	内面暗褐色。外表面色。窓が付着して黒褐色。
10	4	甕	26.1 — 9.5 24.7	完形。	底部から外方へ進いだ字状に広がって立ち上がり、砂粒を含む。口縁部は横ナギし、内面はなでる。外壁はヘラ削りする。	砂粒を多量に含む。	良好。よく焼き締まっている。	褐色。
11	11, 12	甕	(23.8) — — [15.8]	口縁部のみ 4と肩部の一部遺存。	口縁部は強く外反する。口縁部は横ナギし、内面 粒子の粗いなでている。外壁部もへラ削り後なでて往上 砂粒を含む。	砂粒を含む。	良好。	内面黄褐色。外表面色。

堅穴住居009 (第63回、図版40)

組合番号	遺物番号	器 形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
1	9, 6	杯	(11.2) — [3.3]	1/3遺存。	体部外面に横を作り口縁部は僅かに外傾して立ち上る。内面はへラ削りする。口縁部外面の調整小石を若干は不明瞭。体部外面は窓が付着している。器身むき厚い。	砂粒を含む。	あまり。	褐色。内外面赤色並影。
2	11	杯	(13.3) — — 3.0	1/4遺存。	体部外面に横を作り口縁部は僅かに外傾して立ち上る。内面から口縁部外面にかけてはへラ削りする。体部外面はへラ削りしている。	細砂粒を含む。	良好。	褐色。内外面赤色並影。
3	21	杯	(11.6) — [3.8]	1/5遺存。	体部外面に横を作り、口縁部は強く内傾する。内面から口縁部外面にかけてはへラ削りする。体部外面はへラ削りしている。へラ削りは丁寧で器間に光沢をもつ。	砂粒を含む。	良好。	褐色。内外面赤色並影。
4	1, 12, 19	高杯	(13.2) — 12.5 9.6 4/5損	脚部部の 部と口縁部 の4/5損。	X字形で、杯部・脚部とも外側に横を作る。杯形内面はへラ削りし、口縁部と脚部は横ナギする。脚部部外面はへラ削りし、脚部内面はなでている。へラ削りは丁寧である。	砂粒を含む。	良好。	黄褐色。一部黒褐色。杯部内面は黒色欠け。
5	15	鉢	12.3 — — 7.5	口縁部のごく一部を欠損。	丸底で外面に横を作り、口縁部は外反する。口縁部は横ナギし、内面はへラ削りする。体部外面はへラ削り後磨いているようであるが不明瞭。へラ削りは丁寧である。	細砂粒を含む。	良好。よく焼き締まっている。	明褐色。内面は赤色並影の可塑性有り。
6	8, 17	鉢	— — 7.9 [5.3]	体部下半部 の1/2と底 部が遺存。	底部側縁部が横方向に突出する。体部内面はなでているが底部は調整していない。外壁は横方向にへラ削りする。	砂粒を多量に含む。	あまり。	暗褐色。
7	4	鉢	15.7 14.6 7.4 14.0	口縁部から 下部の1/3損。	口縁部から下部の1/3損。	底子の悪い砂粒を多量に含む。	あまり。火熱を受ける。	暗褐色。一部赤褐色。
8	21	小型土器	(3.1) — 2.8 [2.6]	1/2遺存。	底子で体部はやや内傾して立ち上がる。内外面とも未調整で、内面には指痕が残る。	砂粒を少量含む。	普通。	褐色。
9	5	甕	20.5 24.9 — [13.3]	口縁部の一部と胴下半部を欠損。	口縁部は横ナギし、内面はなでている。外壁はへラ削りしているが器面が荒れ、単位は不明瞭である。筋・縫合痕が残る。	砂粒を多量に含む。	良好。火熱を受ける。	褐色。一部暗褐色。
10	4, 6, 21	甕	17.3 22.1 6.5 [33.9]	胴上半部から下部の1/3を欠損。	長胴形で、最大径は胴部中位にある。口縁部を横ナギし、内面はなでる。外壁はへラ削りするが火熱により器面が荒れ、単位は不明瞭である。	底子の悪い砂粒を多量に含む。小石を含む。	あまり。火熱を受ける。	赤褐色。青部は火熱で帶状に黒褐色になる。

法量は上から口径・胴部径・底径・高さ・器高を表す。() は復原値、〔 〕は現存値を示す。

豊穴住居009

遺物番号	遺物番号	器 形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
11	3	甕	— — 8.4 [2.8]	底鉢。	内面はアザ、外面はヘラ削りしている。	砂粒を多量に含む。	良好。	赤褐色。
12	2	甕	— — 7.5 [7.0]	胴下半部の1/3と底鉢。	内面はなでており、外面はヘラ削りする。底鉢外側はヘラ削り後磨いている。内面の器画は充てる。	砂粒を多量に含む。	あまり。	内面暗褐色、外面赤褐色。

豊穴住居011 (第64図、図版40)

遺物番号	遺物番号	器 形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
1	13	杯	12.7 — — 3.9	口縁部の一 部欠損。	丸底で外方に開いて立ち上がり、口縁部が僅かに直立する。内面はヘラ磨きする。火熱による表面の荒れが著しく、口縁部は厚耗し、外面の器画はほとんど脱落する。	細砂粒を含む。	普通。火熱を受ける。	内面暗褐色、外 面黒褐色。
2	8, 10	杯	[13.2] — [3.0]	1/4周。	丸底で外面上方に縫を作り、口縁部は直立する。内面から口縁部外側にかけてはヘラ磨きし、外側全体はヘラ削りする。外面に粘土結晶が残る。	細砂粒を含む。	良好。	暗褐色、内外 面黑色処理。
3	12	杯	12.8 — — 3.8	口縁部を欠 損する。	丸底で外面上方に縫を作り、口縁部は外方に広がって立ち上がる。内面から口縁部外側にかけてはヘラ磨きし、外側全体はヘラ削りする。外面に粘土結晶が残る。	細砂粒を含む。	普通。	明赤褐色。
4	1, 3, 8	杯	13.0 — — 3.8	完形。口縁 部は著しく 摩耗する。	丸底で外面上方に明瞭な縫を作る。口縁部は強く内傾して立上る。内面から口縁部外側にかけてはヘラ磨きし、体部外側はヘラ削りする。内面は器画に光沢をもつ。	砂粒を含む。	良好。	明赤褐色。外 面深赤褐色、荒 れがある。
5	5	杯	— — — [2.6]	口縁部欠損。 体部から底 部の1/3が 残存。	外面上位に明瞭な縫を作る。口縁部は強く内傾したと思われる。内面から口縁部外側にかけてはヘラ磨きし、体部外側はヘラ削りする。内面は器画が荒れ剥落する。	砂粒を含む。	普通。	内面赤褐色、外 面黒褐色。内外 面黑色処理。
6	8	甕	(14.0) — [6.5]	口縁部1/4 周。	口縁部は強く外反する。口縁部は横ナギし、内面はなでてある。	砂粒、小石を含む。	良好。	暗褐色。
7	10, 11	甕	— — [8.4] [3.3]	底部の1/2。	内面はなでており、外面はヘラ削りしている。	細砂粒を多量に含む。	あまり。火 熱を受ける。	黒褐色。

豊穴住居012 (第64、65図、図版40・41・42)

遺物番号	遺物番号	器 形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
1	14, 36, 49	杯	13.5 — [4.8]	口縁部から 底鉢の1/3 周を欠損。	丸底で外面上方に縫があり、口縁部は僅かに内傾して立ち上がる。内面から口縁部外側はヘラ磨きし、外側はヘラ削りする。	砂粒を含む。	良好。	暗褐色、内外 面黑色処理。
2	36	杯	(14.7) — [3.3]	口縁部から 体部の1/4 周。	丸底で外面上方に縫があり、口縁部は僅かに内傾して立ち上がる。内面から口縁部外側はヘラ磨きし、外側はヘラ削りする。	砂粒を多量に含む。	普通。	暗褐色。
3	49	杯	(13.8) — [4.0]	口縁部から 体部の1/4 周。	丸底で外面上方に縫があり、口縁部は外反して立ち上がる。内面から口縁部外側はヘラ磨きし、外側はヘラ削りする。	砂粒を多量に含む。	良好。	内面、暗褐色、外 面深赤褐色。内外 面黑色処理。遺存良好。
4	28, 34	杯	14.4 — 3.5	口縁部の1/ 4周欠損。	丸底で外面上方に縫があり、口縁部は直立して立ち上がる。内面から口縁部外側はヘラ磨きし、外側はヘラ削りする。	砂粒を多量に含む。	良好。	暗褐色、内外 面黑色処理。遺存良好。

法量は上から口径、胴部径、底鉢、高さを表す。() は復原値、[] は現存値を示す。

頭筋番号	遺物番号	種 形	法量(cm)	遺存度	器形・模形・調査等の特徴	胎 土	発 成	色 調
5	39	杯	(14.8) — — [4.8]	口縁部から 体部の1/3 周。	丸底で外面に縁があり、口縁部は擦かに内傾して立ち上がる。内面から口縁部外側はへラ削りし、外側はへラ削りする。	砂粒を多量 に含む。	普通。	暗褐色、内外 面黒色処理。
6	16, 35	杯	(15.5) — — 4.6	口縁部1/5 と体部から 底部の2/3。	丸底で外面に縁があり、口縁部は内傾して立ち上がる。内面から口縁部外側はへラ削りし、外側は へラ削りする。	粒子の粗い 砂粒を多量 に含む。	良好。	にぶい暗色、 内外黒色処理。
7	24	杯	(14.6) — — [3.0]	口縁部から 体部の1/4 周。	丸底で外面に縁があり、口縁部は内傾して立ち上 がる。内面から口縁部外側はへラ削りし、外側は へラ削りする。	砂粒を多量 に含む。	良好。	内面にぶい暗 色、外側暗褐色、 外側黒色。
8	40	高杯	(14.6) — — [3.3]	杯部1/2周。	浅い杯部で、外側に縁を作り、口縁部は外反する。 内面から口縁部外側はへラ削りし、体部外側はへ ラ削りする。内底の書きは丁寧で器底に光沢がある。	砂粒を含む。	良好。	内面黒色処理、 遺存良好。外 面には暗色。
9	22, 49	高杯	— — — [10.3]	杯部と脚部 部を欠損。	柱状の脚底で、脚底部は大きく横に広がる。脚底 部は横ナギし、内面は横方向、外側は底にへラ削 りする。内底にシボリ目が残る。	粗砂粒を多 量に含む。	あまり。	内面暗褐色、 外底暗褐色、 赤色像影。
10	6, 10, 11, 23, 43	鉢	20.5 — — 8.5	口縁部から 脚部の1/4 欠損。	丸底で外面に明瞭な縁を作り、口縁部は内傾する。 内面から口縁部外側をへラ削りする。脚部外側も へラ削り後焼いている。	粗砂粒を少 量含む。	良好。	にぶい暗色、 一部黒褐色、 内外黒色処理。
11	9, 15	甕	(18.0) — — [6.5]	口縁部から 肩部の1/4 周。	口縁部は横ナギし、内面はなでる。外側は縱方向 のへラ削りをする。	砂粒を多量 に含む。	良好。	内面明黄褐色、 外側暗褐色。
12	3, 49	甕	(16.4) — — [6.5]	口縁部から 肩部の1/6 周。	口縁部は横ナギし、内面はなでる。外側は縱方向 のへラ削りをする。	砂粒を多量 に含む。	良好。	内面明黄褐色、 外側暗褐色。
13	8	甕	(17.6) — — [4.5]	口縁部の1/ 4周。	口縁部を横ナギする。	砂粒・小石 を含む。	良好。	内面明黄褐色、 外側暗褐色。
14	15, 17, 19, 35, 45, 49	甕	— 28.5 — [14.5]	口縁部と側、肩部が壊っているため球形の胸壁にならざると思われる 下部半を欠く。内面はナギ、外側は横方向にへラ削りする。	砂粒を多量 に含む。	良好。	明黄褐色、外 面の一部黒色。	
15	20, 24, 26, 28, 29, 30, 33, 48, 49	甕	(18.8) (24.3) [26.8]	1/2周。	口縁部は横ナギし、内面はなでる。外側はへラ削 りするが、下部には付着物が多い。	粗砂粒を含 む。	良好。火熱 を受ける。	褐色、一部黒 褐色。外側に 黒斑がある。
16	35	甕	— — 9.4 [13.0]	胸下部の 1/5と底盤。	内面はナギ、外側はへラ削りする。	砂粒を多量 に含む。	普通。火熱 を受ける。	暗褐色。
17	18, 20, 21, 31, 32, 49	甕	— — [9.0] [16.0]	胸下部の 1/3と底盤。	内面はなでた後焼いており、下端部は横方向にへ ラ削りする。外側は横方向にへラ削りする。	粒子の粗い 砂粒を多量 に含む。	良好。	内面褐色、外 面赤褐色。外 面に黒斑があ る。
18	3, 4, 11, 12, 21, 24, 45, 49	甕	(25.4) — [7.2] 20.9	1/3遺存。	内側しながら大きく外方に開いて立ち上がり、口 縁部は強く外反する。内面はナギ、外側はへラ削 りする。	粒子の粗い 砂粒を多量 に含む。	良好。	暗赤褐色、 深黒褐色。

法量は上から口径・胴部深・底径・器高を表す。() は復原値、[] は現存値を示す。

堅穴住居015 (第66・67・68図、図版25・41・42・43)

構造部	遺物番号	容 形	法長(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	洗 成	色 調
1 .66	62,63,65 妻	須恵器杯 — — [3.9]	(11.6) — — [3.9]	1/4周。 — — —	天井部は口縁部へ削りする。クロロ右回転。	白色粒子を 少量含む。	良好。	青灰色。
2 .62,64	49,50,52 身	須恵器杯 身	(10.0) — — [4.0]	10.3 — — —	受部は斜め上に突出し、口縁部は短く内傾する。底部は口縁部へ削りする。クロロ右回転。口縁部が摩耗する。	微細な砂粒 を含む。	普通。	青灰色。
3 62	須恵器杯 身	(10.0) — — [4.0]	1/2周。 — — —	受部は斜め上に突出し、口縁部は短く内傾する。底部は口縁部へ削りする。クロロ右回転。	微細な砂粒 を含む。小 石を少量含 む。	良好。	青灰色。	
4 63	須恵器杯 身	(10.3) — — [3.0]	1/4周。 — — —	受部は斜め上に突出し、口縁部は短く内傾する。底部は口縁部へ削りする。クロロ右回転。	白色粒子を 少量含む。	良好。よく 焼き結まっ ている。	青灰色。	
5 67	須恵器杯 身	(9.8) — — [3.5]	1/5. — — —	受部は斜め上に突出し、口縁部は短く内傾する。	白色粒子を 含む。	良好。	青灰色。	
6 95,178	杯	(13.5) — — 4.1	1/3. — — —	丸底の底部から外方に開いてそのまま立ち上がる。内外壁とも火熱により底かいひがはいり調整は不明である。	細砂粒を多 量に含む。	普通。火熱 を受けた。	暗赤褐色。一 部黒褐色。	
7 5,6,66, 67	杯	12.8 — — 3.6	口縁部の1/ 3と 受部の —部欠損。 — — —	口縁部は直立する。内面から口縁部外壁はへら磨きするが体部外 面は器面が摩耗し調整は不明である。	砂粒を少量 含む。	あまり。	褐色。黑色処 理していると 思われるが過 程感。	
8 8	杯	(12.0) — — [4.5]	1/3周。 — — —	丸底で外側に後を作り、口縁部は直立する。内面 から口縁部外壁はへら磨きし、体部外壁はへら削 りする。口縁部は摩耗する。	砂粒を含む。	あまり。	黒褐色。内外 面黒色処理。	
9 60	杯	(12.2) — — [4.6]	1/3周。 — — —	丸底で外側に後を作り、口縁部はやや内傾する。 内面から口縁部外壁にかけてはへら磨きし、体部外 壁はへら削りしていると思われるが器面が摩耗 し単位は不明瞭である。	微細な砂粒 を含む。	あまり。	内面にぶい青 褐色。外面明 黄褐色。内外 面黒色処理。	
10 62	杯	(10.7) — — [3.0]	1/5周。 — — —	丸底で外側に後を作り、口縁部はやや内傾する。 内面はへら磨きするが、外側は器面が摩耗し調整 は不明瞭である。	細砂粒を含 む。	あまり。	内面黒褐色。 外面暗褐色。 内外面黒色処 理。	
11 53,185	杯	(12.6) — — [4.0]	口縁部から 体部の1/2 周。 — — —	丸底で外側に後を作り、口縁部は直立する。器面 の荒れが著しく調整は不明である。	砂粒を多量 に含む。	普通。火熱 を受けた。	黒褐色。内外 面黒色処理。	
12 140	杯	(13.4) — — [4.0]	1/3周欠。 — — —	丸底で外側に後を作り、口縁部は直立する。内面 から口縁部外壁はへら磨きする。体部外壁はへら 削りするが器面が荒れ単位は不明瞭。	細砂粒を多 量に含む。	普通。火熱 を受けた。	暗褐色。内外 面黒色処理。	
13 63	杯	(15.2) — — [3.9]	1/3遺存。 — — —	丸底で外側に後を作り、口縁部は直立する。内面 から口縁部外壁はへら磨きする。体部外壁はへら 削りする。器面が荒れ単位は不明瞭である。	砂粒を含む。	普通。火熱 を受けた。	黒褐色。内外 面黒色処理。	
14 58,65,91	杯	13.0 — — 4.1	口縁部の1/ 4を欠損。 — — —	丸底で外側に僅かに突出する後を作り、口縁部は 直立する。体部外壁はへら削りするが、他は器面 の荒れが著しく調整は不明である。火熱により変 色する。	粒子の粗い 砂粒を多量 に含む。	普通。火熱 を受けた。	口縁部は暗褐 色。底部は褐色。 内外面黒色処理。	
15 32,62	杯	13.3 — — 3.9	口縁部の1/ 4を欠損。 — — —	丸底で外側に僅かに後を作り、口縁部は直立する。 内面から口縁部外壁はへら磨きする。体部外壁は へら削りしている。	砂粒を多量 に含む。	普通。	黒褐色。内外 面黒色処理。	

法量は上から径・断面径・高さ・壁厚を表す。() は復原値、〔 〕は現存値を示す。

序号 番号	遺物番号	器 形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 滅
16	87	杯	12.5 — — 4.3	口縁部のごく一部を欠損。	丸底で外側に棱を作り、口縁部は直立する。火熱により器底の荒れが著しく調整は不明瞭。	砂粒を多量に含む。	普通、火熱を受ける。	暗赤褐色、内外面黒色處理、窓が悪い。
17	60, 61, 62, 65	杯	(13.5) — — [3.6]	1/3欠損。	丸底で外側に突出する棱を作り、口縁部は直立する。内面から口縁部外側はへラ磨きする。体部外側はヘラ削りする。	細砂粒を含む。	普通。	暗褐色、一部黑色、内外面黒色處理。
18	62	杯	(14.0) — — [3.4]	口縁部から体部の1/4周。	丸底で外側に棱を作り、口縁部は外傾する。内面から口縁部外側はへラ磨きする。体部外側はへラ削りする。	砂粒を多量に含む。	普通。	暗褐色、内外面黒色處理。
19	161	杯	(16.0) — — [4.0]	1/4周。	丸底で外側に棱を作り、口縁部は外反する。火熱により器底の荒れが著しく調整は不明である。口縁部は摩耗している。	砂粒を含む。	あまい。火熱を受ける。	暗褐色、一部黑色、内外面黒色處理、窓が悪い。
20	3, 63, 98	杯	(15.2) — — [4.7]	1/3周。	丸底で外側に棱を作り、口縁部は僅かに外傾する。火熱により器底に縮かいじび割れがはいり、一部は剥落する。調整は不明である。	砂粒を含む。	普通、火熱を受ける。	暗褐色、黒色處理。
21	17	杯	(12.8) — — [4.5]	1/4周。	丸底で外側に棱を作り、口縁部は僅かに外傾する。内面から口縁部外側はへラ磨きし、体部外側はへラ削りする。火熱により器底が著しく荒れる。	砂粒を含む。	普通、火熱を受ける。	暗褐色、内外面黒色處理。
22	172	杯	(11.8) — — [2.6]	1/4周。	丸底で外側に棱を作り、口縁部は外傾する。内面から口縁部外側はへラ磨きし、体部外側はへラ削りする。口縁部は摩耗する。	細砂粒を多量に含む。	あまい。火熱を受ける。	暗褐色、内外面黒色處理。
23	24, 26, 27, 63	杯	14.7 — — 4.1	1/4周欠損。	丸底で外側に棱を作り、口縁部は外傾する。内面から口縁部外側はへラ磨きし、体部外側はへラ削りする。口縁部は摩耗する。	細砂粒を含む。	普通。	暗褐色、内外面黒色處理。
24	42, 62, 89	杯	15.2 — — 4.1	口縁部の1/3と体部の1/3と底部の1/2欠損。	丸底で外側に棱を作り、口縁部は外傾する。内面から口縁部外側はへラ磨きし、体部外側はへラ削りする。	細砂粒を多量に含む。	普通。	暗褐色、内外面黒色處理。
25	23	杯	(15.4) — — [3.9]	1/5周。	丸底で外側に棱を作り、口縁部は外傾する。体部外側はへラ削りするが、他の部分は火熱により器に含む。窓が荒れ調整が不明。	砂粒を多量に含む。	あまい。火熱を受ける。	暗褐色、内外面黒色處理。
26	44, 62	杯	(15.2) — — 3.8	1/2周窓存。	丸底で外側に棱を作り、口縁部は外傾する。内面から口縁部外側はへラ磨きし、体部外側はへラ削りする。	砂粒を多量に含む。	普通。	内面黒褐色、外側黒褐色、内外面黒色處理。
27	61, 62	杯	(14.6) — — [4.1]	口縁部の1/3と体部の1/2と底部の1/2欠存。	丸底で外側に突出する棱を作り、口縁部は外傾する。内面から口縁部外側はへラ磨きし、体部外側はへラ削りする。器底は火熱で荒れる。	砂粒を多量に含む。	普通、火熱で荒れる。	暗褐色、内外面黒色處理。
28	164	杯	(13.8) — — 3.6	1/3遺存。	丸底で外側に棱を作り、口縁部は大きく開いて立ち上がる。内面から口縁部外側はへラ磨きするが、体部外側の調整は不明。口縁部は摩耗している。	粗緻な砂粒を少量含む。	あまい。	暗褐色、内外面黒色處理。
29	62	杯	(13.8)-1/3遺存。 — — 3.9	1/3遺存。	丸底で体部外側の下位に突出した棱を作り口縁部は開いて立ち上がる。底部は丸底だが幅平である。内面から口縁部外側はへラ磨きし、体部外側はへラ削りする。	細砂粒を多量に含む。	普通。	暗褐色、一部黑色、内外面黒色處理。
30	41, 61, 91	杯	(13.4) — — 2.8	口縁部の2/3欠損。	丸底で体部外側の下位に棱を作り口縁部は直立する。底部は偏平である。内面から口縁部外側はへラ磨きし、体部外側はへラ削りする。窓が荒れている。	砂粒を多量に含む。	普通。	暗褐色、内外面黒色處理。

法量は上から口径、胴部径、底径、器高を表す。() は復原値、〔 〕は現存値を示す。

規格番号	遺物番号	器 形	法M(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
31	122	杯	(15.2) — — [3.1]	1/3周。	丸底で体部外側の下位に縁を作り口縁部は直立する。底部は傾下である。内外面へラ磨きをする。	細砂粒を含む。	良好。	黒褐色。内外面黒色処理。
32	63	杯	(12.0) — — [3.5]	1/4周。	丸底で外面に縁を作り口縁部は内傾する。内窓から縁部外側はへラ磨きし、体部外側はへラ削りする。	砂粒を含む。	普通。	黒褐色。内外面黒色処理。
33	8, 16, 20, 63, 187, 212	杯	12.2 — [3.2]	1/3周欠損。	丸底で外面に突出した縁を作り口縁部は内傾する。内窓から縁部外側はへラ磨きし、体部外側はへラ削りする。火熱により器皿が荒れ単位は不明瞭。に縫合部は確認する。	砂粒を含む。	普通。火熱を受ける。	黒褐色。内外面黒色処理。
34	40, 91	杯	(12.2) — — 3.9	1/2周。	丸底で外面に縁を作り口縁部は内傾する。内窓から縁部外側はへラ磨きし、体部外側はへラ削りする。	砂粒を多量に含む。	普通。	暗褐色。一部黒褐色。内外面黒色処理。
35	27, 80, 61	杯	12.6 — — 3.5	口縁部の1/ 4欠損。	丸底で外面に突出した縁を作り口縁部は内傾する。内窓から縁部外側はへラ磨きし、体部外側はへラ削りする。火熱により器皿が荒れ単位は不明瞭。	粒子が細かく嵌入物が少ない。	あまり。	暗色。内外面を黒色処理するが遺存が悪い。
36	67	杯	(13.3) — — [3.3]	1/5遺存。	丸底で外面に縁を作り口縁部は内傾する。内窓から縁部外側はへラ磨きし、体部外側はへラ削りする。火熱により器皿が荒れ単位は不明瞭。	細砂粒を含む。	普通。火熱を受ける。	褐色。
37	29, 62	杯	(12.0) — 3.2	1/2遺存。	丸底で外耳上位に縁を作り口縁部は短く内傾する。内外面ともへラ磨きで仕上げていると思われるが器皿が摩耗し不明瞭である。	砂粒を多量に含む。	普通。	褐色。一部黒褐色。内外面黒色処理。
38	86, 137	杯	(11.6) — [3.7]	1/3欠損。	丸底で外耳上位に縁を作り口縁部は短く内傾する。内窓から縁部外側はへラ磨きし、体部外側はへラ削りする。へラ磨きの単位は不明瞭。口縁部が欠損するが割れ口は古い。	細砂粒を少量含む。	普通。	内面黒褐色。外側橙色。内外面黒色処理。
39	16	小瓶土器	6.8 6.7 5.0 5.1	完形。	体部は直立し、筒状の形態である。内外面ともなで仕上げる。	細砂粒を多量に含む。	良好。	褐色。
40	189	小型土器	5.1 6.0 4.0	口縁部のこく一概を欠損するがほぼ完形。	丸底で口縁部が強く外反する。火熱により器皿表面が強くひび割れ調整は不明瞭である。	細砂粒を含む。	普通。火熱を受ける。	内面暗褐色。外側暗褐色。
41	61	小瓶土器	(5.6) — — 3.1	1/3周遺存。	尖った底部で外方に向いて立ち上がる。火熱により器皿が荒れ、調整は不明である。	細砂粒を多量に含む。	あまり。火熱を受ける。	内面黒褐色(黒色底座)。外側橙色。
42	62	小型土器	— 2.4 — 2.0	1/3周欠損。	尖った底部で内傾して立ち上がる。	砂粒を含む。	普通。	内面橙色。外側暗褐色。
43	18, 57	高杯	— 13.1 11.2 [8.6]	口縁部欠損。	杯部外側には縁がある。脚部はハの字状に開く。口縁部は横ナデし、杯部内面はなでる。外側はへラ削りし、脚部部は横ナデする。脚部内面に粘土被膜が残る。	砂粒を含む。	あまり。火熱を受ける。	褐色。
44	191	鉢	9.0 — 4.7 4.7	口縁部から体部上半部の1/5欠損。	半窓で外側に縁を作り、口縁部は外反する。	細砂粒を多量に含む。	普通。	内面黒褐色(黒色底座)。外側暗褐色(赤色底座)。
45	19, 63	鉢	(10.8) — — 5.7	口縁部の1/4と脚部の1/5欠損。	丸底で外面に縁を作り口縁部は強く外反する。火熱により器皿が著しく荒れ、調整は不明である。	砂粒を多量に含む。	あまり。火熱を受ける。	羽赤褐色。

法領は上から口縁・脚部縫・底縫・器高を表す。() は復原値。〔 〕 は現存値を示す。

標記番号	遺物番号	器 形	法長(cm)	遺存度	断形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
46	47,48,62	鉢	9.6 — 6.4 7.1	口縁部1/3 と底部の一 部を欠損。	平底で口縁部は内傾する。口縁部は横ナゲシ内面 はなでる。全体外面はヘラ削りする。	砂粒を多量 に含む。	普通。	黒褐色、一部 暗褐色。内外 黒褐色処理。
47	121	鉢	12.5 12.8 6.0 12.3	口縁部の1/ 2欠損。	口窓部は中位にある。口縁部は外反す。 口縁部は横ナゲシし、内面はなでる。窓部外面 はヘラ削り後軽くなっている。	砂粒を含む。	良好。よく 焼き揃まっ ている。	黒褐色。黒 斑がある。
48	33,62,91	鉢	(23.0) — [6.9]	1/3遺存。	外底に棱を作り、口縁部は直立する。内面から外 縁部外面はヘラ磨きし、外周脇部はヘラ削りする。	細砂粒を多 量に含む。	普通。	黒褐色。内外 黒褐色処理、 内面の遺存良 好。
49	55	甕	[11.6] — [5.0]	1/6周。	口縁部は横ナゲシし、内面はなでる。外底は細かく ひび割れし、調整は不明である。	砂粒を含む。	普通。	褐色。
50	129,167, 196	甕	12.7 15.6 6.7 18.8	肩下半部の 一部欠損。	最大径は肩中位よりやや下にある。火熱により細 かいひび割れが入り、表面の荒れが著しい。調整 は不明である。	粒子の粗い 砂粒を多量 に含む。	普通。火熱 を受ける。	暗赤褐色。火 熱により変色 する。
51	62	甕	[11.6] — — [5.6]	口縁部の1/ 2周と肩上 半部の一部 欠損。	口縁部は横ナゲシし、内面はなでる。外底はヘラ削 りする。	細砂粒を多 量に含む。	良好。	暗褐色。
52	4	甕	14.7 — [5.8]	肩上半部。	口縁部は横ナゲシし、内面はなでる。火熱により表面 が荒れ、外底の調整は不明である。	砂粒を多量 に含む。	普通。火熱 を受ける。	内面暗褐色、 外底暗褐色。一 筋縞が付着。
53	62,195	甕	(14.2) — [11.0]	肩上半部1/ 3周。	口縁部は横ナゲシし、内面はなでる。火熱により表面 が荒れ、一部器表面が剥離する。外底の調整は 不明である。	粒子の粗い 砂粒を含む。	普通。火熱 を受ける。	褐色。
54	103,124	甕	(17.4) — [5.7]	肩上半部1/ 5周。	口縁部は横ナゲシし、内面はなでる。外底はヘラ削 りする。火熱により器表面が荒れる。	粒子の粗い 砂粒を多量 に含む。	あまり。火 熱を受ける。	内面暗褐色。外 底暗赤褐色。
55	30	甕	(19.2) — — [10.4]	肩上半部1/ 4周。	口縁部は横ナゲシし、内面はなでる。外底は火熱で 器表面が荒れ、調整は不明。	粒子の粗い 砂粒を含む。	普通。火熱 を受ける。	暗褐色、一部 褐色。
56	41,62,63 ,,66,79,9 3,97,102 ~108乾	甕	— 30.8 10.2 [27.7]	口縁部と肩 上半部の1/ 2、底部の 一部欠損。	内面はなでており、外底はヘラ削りする。火熱に より器表面が荒れ、調整は不明である。	粒子の粗い 砂粒を多量 に含む。	普通。火熱 を受ける。	褐色。外底に 黒斑がある。
57	54,55,61 ,,144,150	甕	17.7 20.5 6.2 25.4	肩下半部と 底部の一部 欠損。	火熱により器表面が荒れ、調整は不明である。	粒子の粗い 砂粒を多量 に含む。	普通。火熱 を受ける。	褐色。外底 暗褐色。黑 斑がある。
58	61,62,63	甕	— — [7.4] [5.1]	肩下半部か ら底部の1/ 4周。	火熱により器表面が荒れ、調整は不明である。	砂粒を含む。	あまり。火 熱を受ける。	内面暗褐色、 外底暗褐色。
59	62	甕	— — 7.6 [3.6]	肩下半部1/ 4周と底部。	内面はなでており、外底はヘラ削りする。	砂粒を多量 に含む。	普通。火熱 を受ける。	内面暗褐色、 外底暗褐色。
60	102	甕	— — 9.8 [3.6]	底部。	内面はなでており、外底はヘラ削りする。器表面が 荒れている。	砂粒を含む。	普通。火熱 を受ける。	褐色。黒斑が ある。

法量は上から口径、肩部径、底径、高さを示す。() は復原値、[] は現存値を示す。

縫穴住居015

地図番号	遺物番号	器 形	法寸(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
61	L.21, 115	甕	—	剖面から底部の1/6周。 (28.8) [9.6] 120, 122 124, 133, 183	最大径は中段よりやや上にある。内面はなでており、外側はヘラ削りする。	砂粒を多量に含む。	普通、火熱を受けける。	褐色、一部煤が付着。
62	15	甕	—	底面。 7.0 [2.1]	内面はなでており、外側はヘラ削りする。内面の一部が剥離する。	砂粒を多量に含む。	あまい、火熱を受けける。	褐色。
63	63, 66	甕	—	底部の1/2。 — [6.8] [2.6]	内面はなでており、外側はヘラ削りする。火熱により器面が壊れヘラ削りの単位は不明瞭である。	砂粒を多量に含む。	あまい、火熱を受けける。	内面黒褐色、外側暗赤褐色。
64	2	甕	—	底部の2/3。 — 7.0 [1.6]	火熱により器面が壊れ調整は不明瞭。	粒子の長い砂粒を多量に含む。	あまい、火熱を受けける。	内面黒褐色、外側黄褐色。
65	173	甕	—	底部の2/3。 6.4 [2.9]	火熱により器面が壊れ調整は不明瞭。	砂粒を多量に含む。	あまい、火熱を受けける。	内面黒褐色、外側暗赤褐色。
66	63	甕	—	肩下当部。 — 1/2と底部。 [6.1] [2.4]	内面はなでており、外側はヘラ削りする。	砂粒を多量に含む。	普通。	褐色、外側の一帯黒褐色。
67	62, 72	甕	—	肩下半部の1/4と底部。 [6.1] [4.2]	内面はなでており、外側はヘラ削りする。	細砂粒を含む。	普通。	黒褐色、外側純い褐色。
68	60, 62, 63	甕	—	肩下半部の1/3と底部。 [5.6] [3.6]	器面が壊れ、調整は不明瞭。	2~3mmの長石粒子を多量に含む。	あまい、火熱を受けける。	灰褐色。底部外側は黒褐色。

縫穴住居017 (第69~70図、図版25・44・45・46)

地図番号	遺物番号	器 形	法寸(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
1	56	酒呑器	(16.8)	杯部1/3。 — — [5.3]	外側に縦を作り、口縁部はそのまま開いて立ち上り、黒色の粘液がある。口縁部は横方向につままれる。内外面ともに若干擦入ロクロを利用したナダで仕上げる。	良好、よく磨き締めている。	青灰色。	
2	2	杯	(13.0)	1/8周。 — 4.8	丸底で体部は内側しながら立ち上がり、口縁部は細砂粒を含め立てる。球を半纏したような形態である。内面はへラ削きしているが、外側は器面が壊れ調整が不明瞭である。	あまい。	赤褐色、外側赤色塗彩。	
3	1, 2	杯	(12.2)	口縁部の一部。 — 部と体部から底部の2/3。 [5.3] [3.3]	丸底で器高があり、体部は内側しながら立ち上がり、口縁部は細砂粒を多く含む。口縁部は紙く外反する。器面が壊れ、調整は量に含む。不明瞭である。	あまい。	暗褐色、一部暗赤褐色、外側赤色塗彩。	
4	4, 17	杯	12.6	1/2周遺存。 — [4.6]	丸底で体部は内側ながら立ち上がり、口縁部は細砂粒を多く立てる。器盤が厚くボッタリした作りである。量に含む。内面から口縁部外壁はへラ削きし、外側はヘラ削りする。内面は光沢をもつ。	普通。	褐色、一部黒褐色、内面黒色化粧。	
5	4	杯	(13.2)	1/3周遺存。 — — [4.3]	丸底で口縁部は僅かに直立して立ち上がる。内面、細砂粒を含む。はへラ削きする。外側の調整は器面が壊れ不明瞭であるがへラ削きしていると思われる。	あまい。	暗赤褐色、一部黒褐色。外側黒色化粧。	
6	1, 66	杯	13.6	1/4周欠損。 — — [4.1]	丸底で口縁部は僅かに直立して立ち上がる。内面、細砂粒を含む。はへラ削きしていると思われる。が器面が壊れ調单位は不明瞭である。口縁部は摩耗する。	あまい。	暗赤褐色。外側黒色化粧。	

法寸は上から口径・肩部径・底径・器高を表す。() は復原値、[] は現存値を示す。

標本番号	遺物番号	器 形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	釉 土	焼 成	色 製
7	1.21	杯	(12.1) — [3.7]	口縁部から 体部上半部 の1/3遺存。	丸底で体部は内縮しながら立ち上がる。内面から 口縁部外側はへラ削き、外面体部は器面が荒れ既 に不明瞭である。	微細な砂粒 を多量に含む。	普通。	暗褐色、内外 面黒色處理。
8	1.2.4	杯	(13.0) — [3.5]	1/3周遺存。	丸底で体部は内縮しながら立ち上がる。口縁部は直立する。 内外面へラ削きする。	細砂粒を含む。	良好。	暗赤褐色、内 外黒色處理。
9	1.2	杯	(13.0) — [3.0]	1/3周遺存。	丸底で外側に棱を作り、口縁部は外傾する。底部 粗砂粒を含 み偏平である。内面から口縁部外側はへラ削きす る。体部外側はヘラ削りする。	あまい。		暗褐色、内外 面黒色處理。
10	2.36	杯	(15.6) — [3.0]	1/3周遺存。	丸底で外側に棱を作り、口縁部は外傾する。底部 粗砂粒を多 量に含む。 偏平である。内面から口縁部外側はへラ削きす る。体部外側はへラ削りする。残った部分は器面 に光沢を持つ。	普通。	黒褐色、一部 暗褐色。内外 面黒色處理。	
11	35.51	杯	11.8 — — 3.5	1/3周欠損。	丸底で外側に棱を作り、口縁部は直立する。内面 から口縁部外側はへラ削きする。 既に摩耗し不明瞭である。	粗砂粒を含む。	あまい。	褐色。内外面 黒色處理。
12	1	杯	13.8 — — 3.8	口縁部から 体部の1/4 遺存。	丸底で外側に棱を作り、口縁部は開いて立ち上 がる。内面から口縁部外側はへラ削きし、体部外側 はへラ削りする。口縁部は擦耗が著しい。	砂粒を多量 に含む。	普通。	内面黒褐色 (黒色處理)。 外黒褐色。
13	1.2.38	杯	(12.8) — — 4.7	口縁部の2/ 3欠損。	丸底で内縮しながら立ち上がる。口縁部は確かに 内縮する。口縁部は横ナギし、内面はなでる。外 面はへラ削りする。	細砂粒を含む。	普通。	内面暗褐色、 外黒褐色。内 外黒色處理。
14	1	杯	(10.8) — — [3.7]	1/4遺存。	丸底で外側に棱を作り、口縁部は短く内傾する。 内面から口縁部外側はへラ削きし、外側体部は器面 が摩耗し調整が不正確である。	細砂粒を少 量含む。	普通。	明褐色、一部 黒褐色。内外 面黒色處理。
15	40	杯	12.6 — — 3.6	1/3周欠損。	丸底で外側に棱を作り、口縁部は短く内傾する。 内面から口縁部外側はへラ削きし、体部外側はへ ラ削りする。	砂粒、大粒 の赤色粒子 を含む。	普通。	暗褐色、内外 面黒色處理。
16	3	杯	(11.6) — — 3.2	1/3周遺存。	丸底で外側に棱を作り、口縁部は短く内傾する。 内面から口縁部外側はへラ削きし、体部外側はへ ラ削り後上半部を軽く磨く。	細砂粒を含む。	普通。	暗褐色、内外 面黒色處理。
17	33	高杯	— — [2.9]	杯高の一剖。	丸底で杯底と脚部は間により接合する。内面はな でておらず、外側はへラ削りする。	砂粒を多量 に含む。	普通。	内面暗褐色、 外黒褐色。
18	3.4.63	小型土器	(6.6) — — [6.0]	1/2遺存。	外方に開いて立ち上がる。内外面なでている。	微細砂粒を 含む。	普通。	褐色、一部暗 褐色。
19	43	鉢	13.7 — — 6.9	1/3欠損。	丸底で器高があり、柄部は内傾して立ち上がる。 球を半載した形態である。口縁部は横ナギし、内 面はなでたあと軽く磨いている。外側はへラ削り する。	砂粒を多量 に含む。	普通。	褐色、内面の 一部黒褐色。 内面は赤色塗 装。
20	1.41, 49	鉢	(11.6) (12.4) (3.9) 12.7	口縁部から 明部の1/3。	半底から内側して立ち上がり、口縁部は廣やかに 外反する。口縁部は横ナギし、内面はなでる。外 面は腹方向にへラ削りする。	細砂粒を多 量に含む。	普通、火熱 を受ける。	内面暗褐色、 外黒褐色。 火熱により変 色する。
21	39	壺	— 15.8 6.1 [12.3]	口縁部欠損。	平底から大きく膨らみ立ち上がる。腹部最大径は 中位より僅かに上にある。内面はなでている。外 側はへラ削りし、上下部はさらに軽くなれて仕上 げる。	砂粒を多量に 含む。	普通。	内面淡黄色、 外側暗赤褐色 (赤色塗装)。

法量は上から口徑、底部径、底径、器高を表す。() は復原値、〔 〕 は現存値を示す。

調査 番号	遺物番号	器 形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調節等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
22	42	甕	(13.2) — [9.2]	口縁部から 肩上部の 1/2周。	口縁部は横ナデし、内面はなでる。外面は器面が 摩耗し、底面は不明瞭である。	細砂粒を多 量に含む。	普通:	内面暗褐色、 外面褐色。
23	30	甕	12.9 — [6.5]	口縁部から 肩部。	口縁部は緩やかに外反する。口縁部は横ナデし、 肩部は内外面ともなでる。	細かな砂粒 を含む。	普通:	淡黄色。
24	1, 2, 23, 26, 28, 29 , 32, 53, 54	甕	15.0 21.0 — [16.8]	口縁部と肩 上半部2/3。 — —	口縁部の膨らみは緩やかで、口縁部は強く外反する。 口縁部は横ナデし、内面はなでる。脚部外面はへ ラ削りする。	砂粒・小石 を含む。	良好:	赤褐色。
25	4, 23, 27, 60	甕	— 22.6 8.4 21.6	口縁部と肩 部の一部を 欠損。	口縁部が大きく外方に開き、肩部最大径よりも大 きくなると思われる。肩部最大径は肩中位よりや や上にある。口縁部は横ナデし、内面はなでる。 外面はヘラ削りする。	砂粒を多量 に含む。	普通: 火熱 を受ける。	褐色、一部暗 褐色。黒斑が ある。
26	64	甕	(18.4) (21.6) — [15.3]	上半部の1/ 3周。	肩部は大きく膨らまないため長胴形になると思わ れる。口縁部は横ナデし、内面はなでる。外面は 般方向にへラ削りし、一部横方向にもへラ削りを ねる。	細砂粒を含 む。	普通:	褐色、黒斑が ある。
27	2, 3, 6, 7, 9, 10, 15, 15, 19, 31, 55, 57, 59	甕	17.4 29.7 9.7 [32.5]	口縁部の一 部と肩部の 1/2欠損。	肩部は大きく膨らみ、口縁部は外傾して立ち上がり、口縁部は横ナデし、内面はなでる。外面はへ ラ削りする。	砂粒を多量 に含む。	良好:	内面暗褐色、 外面明黄褐色。
28	1, 4, 24, 25, 26, 29 , 62, 63, 67	甕	(25.6) — — [18.5]	口縁部から 肩上半部の 1/2周。	外方に開いて立ち上がり、口縁部は外反する。口 縁部は横ナデし、内面はなでる。外面はへラ削り するが器蓋が窓れ、単位は小明瞭である。	砂粒を含む。	普通: 火熱 を受ける。	褐色。
29	29	甕	— — — [8.4] [13.2]	肩下半部の 1/3周。	内面はなでる、黏土表面が明瞭に残る。外面は般 方向のへラ削り後、横方向にへラ削りするが単位 は不明瞭である。	砂粒を多量 に含む。	あまり。	赤褐色。
30	1, 3, 4, 9, 10, 12, 13 , 17, 19, 21, 52他	甕	15.7 26.0 9.8 30.9	肩下半部の 1/3欠損。	口縁部は外傾する。口縁部を強くなるため肩部 に棱を作る。最大径は肩中位にある。口縁部は横 ナデし、内面はなでる。外面は般方向にへラ削り する。	砂粒を多量 に含む。	良好:	褐色。黒斑が ある。
31	1, 2	甕	— — 8.6 [3.5]	肩部。	内面はなでており、外面はへラ削りする。	細砂粒を含 む。	普通:	黄褐色、一部 黒褐色。
32	2	須恵器甕	— — — —	口縁部の一 部。	口縁部は有段となる。	白色粒子を 含む。	良好:	青灰色。
33	1, 44, 45, 46, 47, 52	甕	25.9 — 8.7 21.3	口縁部から 肩部の一部 を欠損。	外傾しながら立ち上がり、口縁部は強く外反する。 口縁部がやや歪む。口縁部は横ナデし、内外面は へラ削り強くなっている。	砂粒を多量 に含む。	良好:	褐色。黒斑が ある。
34	32	甕	17.0 — 6.7 13.1	口縁部と肩 下半部の1/ 4欠損。	外傾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。口 縁部は横ナデし、内面はなでる。外面は般方向に へラ削りする。	粒子の粗い 砂粒を多量 に含む。	普通: 火熱 を受ける。	暗赤褐色。

豊穴住居018 (第71・72図、図版46・47・48)

調査 番号	遺物番号	器 形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調節等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
1	1	須恵器甕	(10.6) — [3.9]	1/6周。	外壁に棱を作り、口縁部内面に沈線が残る。内外 面をなでて仕上げる。	黒色粒子を 含む。	良好: よく 焼き締ま っている。	青灰色。

法量は上から口径、肩部径、底径、器高を表す。() は復原値、[] は現存値を示す。

測定番号	遺物番号	器形	法寸(au)	遺存度	器形、底形、調整等の特徴	胎土	焼成	色調
2	33.54	杯	- - - [6.4]	口縁部の一 部と体部下 部が削り残す。	丸底で器高があり、口縁部が僅かに内傾する。火 熱のため器面が著しく焼け、調整は不明。	粒子の粗い 砂粒を多量 に含む。	普通、火熱 を受ける。	褐色。
3	24	杯	11.8 - - 4.4	口縁部から 体部の1/3 欠損。	丸底で口縁部は復元するため、外面に緩やかな傾 きができる。内外面へラ磨きをするが、外側のヘラ磨 きは難でへら削り痕が残る。	砂粒を多量 に含む。	良好。	褐色。
4	2, 6, 15, 29	杯	[14.5] - - [4.7]	1/4周遺存。	丸底で口縁部は僅かに外傾し、外面に緩やかな傾 きができる。内面はへラ磨きをしているが、外壁は火 熱により表面が著しく焼け、調整は不明。	粒子の粗い 砂粒を多量 に含む。	普通、火熱 を受ける。	褐色。
5	4.53	杯	[13.8] - - [3.5]	口縁部から 体部の1/3 欠損。	丸底で口縁部は緩やかに外傾して立ち上がり、外 面に緩やかな傾きができる。内外面へラ磨きする。 体部外瓦にはへら削り痕が残る。	砂粒を多量 に含む。	良好。	にぼい褐色、 一部黒褐色、 内外面黒色化。
6	33	杯	14.2 - - 4.4	口縁部の 部を欠損。	丸底で口縁部は開いて立ち上がり、外面に緩やかな傾 きができる。火熱により器面が荒れ、調整は不 明である。	砂粒を多量 に含む。	あまい。火 熱を受ける。	暗赤褐色、一 部淡褐色、内 外面黒色化。
7	50	杯	13.5 - - 4.2	口縁部の 部を欠損。	丸底で口縁部は開いて立ち上がり、外面に緩やかな傾 きができる。内外面へラ磨きする。	砂粒を多量 に含む。小 石を若干含 む。	普通、	褐色、内 外面黒色化。
8	2, 12, 13	杯	14.3 - 3.7	2/3周。	丸底で外壁に突出した棱を作り、口縁部は外反す る。内外面はへラ磨きする。	細砂粒を含 む。	普通、	黒褐色、内 外面黒色化。
9	1	杯	11.8 - - [4.9]	1/2周遺存。	丸底で外面に棱を作り、口縁部は強く内傾する。 内外面はへラ磨きしていると思われるが、器面が 厚純し、単位は不明瞭である。	赤色粒子を 含む。	普通、	内面黒褐色、 一部黒褐色、 内外面黒色化。
10	39	小型上器	[4.2] [6.1] [4.2] 3.4	1/2周遺存。	平底から直立して立ち上がり、口縁部は内傾気味 に立ち上がる。口縁部は横ナギし、体部はなでて いる。	砂粒を含む。	普通、	暗褐色、一部 赤褐色。
11	38	舟形	- - - [5.2]	脚部。	ハの字次に開く脚部。器面が荒れ調節は不明瞭 である。	砂粒を多量 に含む。	あまい。火 熱を受ける。	内面褐色、外 面黄褐色。
12	4.69	鉢	11.2 - 5.0	完全。	偏平な底部で、体部は緩やかに外傾しながら立ち 上がり。口縁部との境は不明瞭である。口縁部は 横ナギし、体部はへら削りする。	砂粒を多量 に含む。	良好、	暗褐色、一部 褐色。
13	3.55	鉢	12.6 - - [11.0]	脚下部の 1/2を欠 損する。	内傾しながら立ち上がり口縁部は僅かに外反する。 口縁部は横ナギし、内面はなでる。外面は器面が 荒れて剥落し、調節が不明瞭。	細砂粒を含 む。	あまい。	内面暗褐色、 外面黄褐色。
14	1~4, 15, 16, 20, 27 , 63, 66	壺	[17.8] [26.8] - - [27.0] 組	口縁部の中位にある。口縁部は外反する。口 縁部は横ナギし、内面はなでる。脚部外面は瓶 向にへら削りするが、火熱で器面が荒れ単位は不 明である。	大粒の砂粒 を多量に含 む。	普通、火熱 を受ける。	暗赤褐色。	
15	3, 4, 49	壺	- - - [7.2]	肩部から脚 上半部。	内面はなでている。外面は火熱により器面が荒れ、 調節は不明瞭である。	細砂粒を多 量に含む。	普通、火熱 を受ける。	内面暗褐色、 外表面褐色。
16	4, 32, 37, 40, 45, 46 , 56, 57, 59, 63, 72	壺	22.5 - - [16.5]	脚上部の 1/2周。	器底に棱があり、口縁部は横方向に強く外反する。 口縁部は横ナギし、脚部の内外面はなでる。内面 に粘土接合痕が残る。	白色粒子を 含む大粒の 砂粒を多量 に含む。	普通、火熱 を受ける。	明黄褐色、一 部暗褐色。

法寸は上から口径、胴部径、底径、高さを表す。() は復原値、〔 〕は現存値を示す。

經穴住居018

回 番号	被物番号	面 形	基準寸	直存度	質形・成形・調整等の特徴	粒 土	焼 成	色 裸
17	3, 4, 48, 49, 52	臺	(18.8) (25.2) -	口縫部から 側面部中位の 1/3周。 [19.4]	蝶形に膨らんだ倒形で、最大径は中位にある。口 縫部は横ナギナシ、内面はなじむ。外面は縱方向に ヘラ削りし、中位はさらに横方向にヘラ削りする。	砂粒を含む。 普通。	褐色。	
18	1, 4, 34, 35, 36, 37 39, 40, 41, 61, 63	臺	15.2 22.5 -	口縫部から 側面部中位の 下半部と外側縫部は縱方向にヘラ削りするが、器 一部を欠損。面が変形し、部位は不明瞭である。内面縫上半部は [21.2]	最大径は中位にある。口縫部は横ナギナシし、内面縫 一部を欠損。面が変形し、部位は不明瞭である。内面縫上半部は なじむ。	粒子の粗い 砂粒を多量 に含む。	普通。火熱 を受ける。	暗褐色。一 部風化色。火熱 により変色す る。
19	2, 16, 17	臺	- (25.3) (8.1) [28.6]	肩部から底 部の1/6周。 外面はヘラ削りするが器皿が変形してヘラ削りの 部位は不明瞭。	表面が変形し、 最大径は中位にある。内面はなじており、外 面はヘラ削りするが器皿が変形してヘラ削りの 部位は不明瞭。	砂粒を多量 に含む。	あまい。火 熱を受ける。	暗赤褐色。
20	1, 2, 15, 66	臺	- (25.0) (7.8) [26.4]	同部から底 下部の1/3周と、底盤は不規則である。外 面は器皿が剥落す る。	長楕形で最大径は中位にある。火熱により器皿が 下部の1/3周と、底盤は不規則である。外 面は器皿が剥落す る。	粒子の粗い 砂粒を多量 に含む。	あまい。火 熱を受ける。	内面褐色、内 面赤褐色。
21	2	臺	- - 7.5 [6.4]	明下半部の 1/3と底部。	内面はなじており、外面はヘラ削りする。	砂粒を含む。	普通。火熱 を受ける。	内面暗褐色、外 面褐色。
22	67	臺	- - 8.1 [6.3]	底下半部2/3 3。 8.8 [2.9]	底下半部2/3 面が変形調整は不明瞭である。	大粒の砂粒 を含む。	普通。火熱 を受ける。	褐色。
23	1, 21	臺	- - 8.8 [2.9]	明下半部の 1/3と底部。 くびれられており調整は不明である。	内面はなじてている。外 面は火熱により器皿が粗か く、くびれられており調整は不明である。	砂粒を含む。	普通。火熱 を受ける。	内面明赤褐色、外 面赤褐色。
24	2, 9, 10, 14	臺	- (14.7) [13.1]	明下半部の 1/3。	明下半部の火熱により器皿が粗か く、くびれられており調整は不明である。	砂粒・大粒 の白色砂粒 を多量に含 む。	あまい。火 熱を受ける。	内面淡黄色、内 面明黄褐色。

堅穴住居019（第73図、図版48）

法禁は上から口径・羽部極・底径・高さを表す。() は復原値、〔 〕は現存値を示す。

鑿穴住居023（第73図、図版47）

種別 番号	遺物番号	器 形	直径(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
1	51	須恵器杯 身	- - - [3.3]	体部の1/5 周。	受部は横方向に突出し、口縁部は内側する。底部から体部中位まで回転ヘラ削りする。ロクロは左回転。	1~2mmの いわ、黒色 粒子を多量 に含む。	良好。	青灰色。
2	7, 28, 49, 52	杯	13.2 - - 4.0	LJ縁部のこ く一部を次 段、ほぼ完 形。	丸底で口縁部は開いて立ち上がり、外面に腰やか な模様ができる。内部とLJ縁部外延はヘラ磨きする が外面の調整は不明瞭。内外面とも著しく器面が 荒れる。	粗砂粒を少 量含む。	あまり。火 熱を受ける。	明褐色。内外 赤褐色。
3	28, 32, 45, 48	M-	(13.7) - - [3.8]	LJ縁部の一 部と体部の 3/4。 - - [3.8]	丸底で口縁部は開いて立ち上がり、外面に腰を作 る。内部からLJ縁部外延はヘラ磨きするが器面が 利落している。外面は器面が充てん調整が不明瞭で ある。LJ縁部は摩耗する。	粗砂粒を多 量に含む。	普通。火熱 を受ける。	褐色。一部 褐色。
4	28, 40	鉢	16.2 15.8 - [11.8]	銅上部。 銅下部。	銅部は内凹しながら立ち上がり、口縁部は外反す る。LJ縁部は横ナデし、内面はなでる。外面は横 方向にヘラ削りする。	粗砂粒を多 量に含む。	普通。	内面暗褐色。 外面赤褐色。

溝状造構010（第75図、図版48）

種別 番号	遺物番号	器 形	直径(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
1	15	鉢	(11.6) - 6.0 5.5	LJ縁部は一 部か2部か しない。	平底で体部は外傾して立ち上がる。口縁部は腰く んと外反して外面に腰やけを作る。LJ縁部は横ナデし、 内面はなでる。外面は横方向にヘラ削りする。	粗砂粒を多 量に含む。	普通。	黒褐色。一部 褐色。
2	18	須恵器杯 盤	(10.6) - - [3.1]	口縁部から 体部の1/4 周。	天井部から器高の2/3程度までを回転ヘラ削りする。 ロクロ右回転である。	黒色粒子が 混入した粗 砂粒を含む。	良好。	青灰色。
3	22	須恵器 身	10.6 - - 3.6	LJ縁部から 体部の1/4 周を欠損。	焼き込みが著しく、底部の一部は溶れている。底 部から器高の1/2程度までを円軌へラ削りする。ロ クロ右回転である。底部に直線を4本差させた ようなヘラ記号がある。	黒色・白色粒 子が混入した粗 砂粒を多 量に含む。	良好。	明青灰色。
4	14	杯	(9.8) - - [3.0]	LJ縁部から 体部の1/4 周を欠損。	底底でLJ縁部は僅かに内傾して立ち上がり、外面 に腰やけを作る。	粗砂粒を多 量に含む。	あまり。	赤褐色。内外 赤褐色。
5	6	須恵器杯 身	(12.0) - - [3.3]	口縁部から 体部の1/4 周を欠損。	底部から器高の1/2程度までを回転ヘラ削りする。 ロクロ右回転である。	黒色粒子を 多量に含む。	良好。	青灰色。
6	2	鉢	(9.8) - - [3.0]	底底1/2。	内面はなでている。底部外延に木葉痕が観察でき る。	細砂粒を含 む。	普通。	黄褐色。
7	21	高杯	- - - [6.0]	脚部。	縁部は腰やかにハの字状に開く。内面はなでてお り、外面は横方向にヘラ削りする。縁部内面に大 葉痕が観察できる。	粗砂粒を多 量に含む。	普通。	赤褐色。一部 褐色。
8	16, 19	盤	- - 8.0 [5.4]	底部。	火熱により器面が著しく荒れ、調整は不明瞭であ る。	粒子が粗い 砂粒を多量 に含む。	普通。火熱 を受ける。	赤褐色。

溝状造構020（第75図、図版47）

種別 番号	遺物番号	器 形	直径(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
1	3, 5	鉢	(12.7) - - [3.8]	口縁部の 一部と体部の 1/2周。	丸底で、口縁部は強く僅かに内傾する。内面はヘ ラ磨きしているが単位は不明瞭である。外面の調 整は不明である。	粗砂粒を含 む。	普通。	明赤褐色。赤 褐色。

法量は上から口径・脚部径・底径・器高を表す。() は復原値、〔 〕は現存値を示す。

探査番号	遺物番号	器 形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
2	4	高杯	— — [5.6]	脚部。底部 は欠損。	ハの字状に聞く。脚部内面はヘラ削きし、脚部外側は横方向に ヘラ削りする。	砂粒を多量 に含む。	普通。	内面黒褐色 (黒色鉄斑)。 外面明赤褐色 (赤色鉄斑)。
3	2	高杯	— — — [3.5]	脚部。底部 は欠損。	ハの字状に聞く。杯部内面はヘラ削きする。その 他の部分は器底が荒れ調節などは不明である。	砂粒を多量 に含む。	あまり。	赤褐色。杯部 内面の脚部外 面は赤色鉄斑。
4	8	酒器器	— — — —	破片。	同一個体と想われる。内面には青海波文が残く残 り、外表面は平行刃きを行っている。刃き目は板目 に直交するよう彫られている。	白色粒子が 混入する細 砂粒を多量 に含む。	あまり。	にじく黄褐色

遺構外 (第84図、図版47)

探査番号	遺物番号	器 形	法量(cm)	遺存度	器形・成形・調整等の特徴	胎 土	焼 成	色 調
1	オ10-24-1	杯	[11.4] [10.4] — [2.8]	1/5周。	口縁部は僅かに外傾し、外面部位に模を作れる。口 縁部は模ナシで、内面はなでてある。体部外壁はヘラ 削りしている。	細砂粒を多量 に含む。	普通。	明赤褐色。内 面黒色鉄斑。
2	ク12-17	杯	[12.6] — — [3.5]	口縁部1/3、 体部1/2。	口縁部は僅かに外傾し、外面部位に模を作れる。体 部外壁はヘラ削りしている。口縁部から内面にかけ ての調節は不明瞭である。	細砂粒を多量 に含む。	あまり。火 熱を受ける。	黒褐色。内外 面黒色鉄斑。
3	ク12-17	小型土器	[7.3] — [5.6] [3.2]	1/4周。	外表面をなでて仕上げる。底部に木製底が観察で きる。	細砂粒を多量 に含む。	あまり。	くすんだ淡褐色。
4	オ11-9-1	小型土器	— — — [1.8]	底部の1/3。	外表面をなでて仕上げる。底部に木製底が観察で きる。	細砂粒を含 む。	普通。	内面赤褐色。 外表面にぼい様 色鉄斑。
5	ク12-17	高杯	— — — [4.6]	脚部。底部 は欠損。	脚部内面はヘラ削きし、脚部外側はなでてある。脚部 外壁は横方向にヘラ削りする。	細砂粒を多量 に含む。	普通。	杯部と脚部の 内面は黒色鉄 斑し、脚部外 面赤色鉄斑。
6	オ12-8-1	高杯	— — — [5.5]	脚部。底部 は欠損。	脚部内面と脚部外壁はなでており、一部工具痕が 残る。脚部外壁は横方向にヘラ削りする。脚部内 面に木製底が観察できる。	細砂粒を多量 に含む。	普通。	暗赤褐色。
7	オ12-16-1	高杯	— — — [5.3]	脚部1/3。根 部は欠損。	脚部内面はヘラ削きし、脚部外壁はなでてある。脚部 外壁は横方向にヘラ削りする。	砂粒を含む。	あまり。	淡褐色。
8	オ11-9-2 オ12-8-1	鉢	[9.0] — — [3.7]	1/3周。	口縁部は模ナシで、外表面はなでてある。ナシの 工具痕が一部に残る。	細砂粒を多量 に含む。	普通。	赤褐色。一部 黒褐色。
9	051-5. 051-6	酒器杯 身	— — 7.6 [2.5]	底部。	ロクロにより整形している。底部は一方向にヘラ 削りし、底部切り削し技法は不明である。	白雲母微粒 子が混入す る砂粒を含 む。	普通。	灰褐色。
10	ク12-6-1	瓶	[19.4] — — [9.4]	口縁部の1/2と 脚上半 部の1/3。	口縁部は模ナシで、内面はなでてある。外壁はヘ ラ削りしているが器底が荒れ、単位は不明瞭であ る。	細砂粒を含 む。	あまり。火 熱を受ける。	褐色。
11	ク11-6-2	酒器器 瓶底	(4.8) (8.2) (5.1) 18.2	1/2周。	細長い脚部で、脚部には明瞭な棱を作ら。口縁部 は横方向外削りする。脚部に接合痕が認められる。底 部は回転式切りをしており、調節していない。	粒子が粗い 砂粒を多量 に含む。	良好。	青灰色。

法量は上から口径・脚部径・底径・高さを表す。() は復原値、[] は現存値を示す。

第7表 出土土器破片数一覽
古 墓

堅穴住居

遺構番号 基種		002	003	004	005	006	007	008	009	011	012	015	017	018	019	023	合計
硬 片 数	須恵器	0	0	0	0	1	0	5	0	0	0	1	4	0	2	0	13
	杯口縁	15	0	3	10	15	10	44	18	6	4	107	55	24	12	8	331
	杯体部	26	0	2	18	19	1	113	5	15	4	135	99	12	26	17	492
	杯底部	1	0	2	3	0	4	14	0	0	4	23	6	0	0	0	57
	高杯杯部	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2
	高杯脚部	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	3
	小型土器	0	48	1	0	3	0	0	1	0	0	0	6	0	0	0	59
	壺口縁	12	6	6	8	20	15	46	20	21	12	102	118	67	22	8	483
	壺胴部	65	7	62	63	191	83	326	95	91	79	408	776	277	208	63	2794
	壺底部	1	1	3	1	4	9	14	3	3	0	41	35	15	8	0	138
実 測 遺 物	瓶	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	2	0	0	0	5
	支脚	0	0	18	0	0	0	0	17	0	3	10	0	0	1	0	34
	その他	0	3	0	0	0	0	0	0	6	6	1	0	2	0	0	27
	合計	120	65	97	103	254	122	562	160	143	106	831	1103	397	279	96	4438
	須恵器	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	5	2	1	0	1	11
	杯	13	1	17	7	9	6	2	3	5	7	33	15	8	2	2	130
	高杯	0	0	1	0	0	0	0	1	0	2	1	1	1	1	0	8
	小型土器	2	15	0	1	0	0	1	1	0	0	4	1	1	0	0	26
	鉢	1	0	6	5	3	2	2	3	0	1	5	2	2	1	1	34
	壺	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
	壺	5	1	5	7	3	1	5	4	2	6	20	10	11	1	0	81
	瓶	1	1	1	0	1	0	1	0	0	2	0	2	0	1	0	10
	支脚	1	0	1	1	1	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	7
	合計	23	20	31	21	17	10	12	12	7	19	68	34	24	6	4	308
その他		土製丸玉	不明	土製品	1	鐵製刀子	1	土製転用砾石	3	鐵土	製品	11					

第8表 佐倉第三工業団地内遺跡及び関連遺跡の陥し穴

遺 蹤 名	L _x	s	n	W _x	s	n	L/W _x	s	n
早谷津遺跡	2.03	0.59	8	1.25	0.16	8	1.67	0.66	8
立山遺跡	—	—	—	—	—	—	—	—	—
タルカ作遺跡	2.40	0.53	2	1.35	0.26	2	1.78	0.05	2
明代台遺跡	1.74	0.19	5	1.30	0.27	5	1.36	0.19	5
向原遺跡	1.91	0.50	25	0.91	0.41	25	2.82	2.32	25
大作遺跡	2.21	0.56	9	1.46	0.61	9	1.65	0.42	9
栗野I遺跡	1.70	0.35	2	0.90	0.18	2	1.90	0.00	2
松向作遺跡	2.10	0.19	3	1.10	0.41	3	2.01	0.54	3
大林遺跡	2.88	0.72	18	0.83	0.47	18	4.76	3.38	18
空港No10遺跡	2.54	0.51	57	1.28	0.47	57	2.30	1.17	57
空港No 7 遺跡Loc.A	2.33	0.53	16	1.07	0.31	16	2.36	0.90	16
空港No 7 遺跡Loc.B	1.86	0.62	10	1.11	0.46	10	1.82	0.74	10
空港No 7 遺跡Loc.A・B	2.15	0.59	26	1.08	0.36	26	2.16	0.86	26

陥し穴の計測は完形の資料の開口部で行ったが、当然のことながら開口部の形態は原形をとどめていない。

n ≤ 10 の s は補正。

既報告分のみ

空港No 7 遺跡 「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書IV」 千葉、1984

空港No 10 遺跡 「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書V」 千葉、1985

大林遺跡 「佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書1」 千葉、1989

第9表 隠し穴の長幅比分布

L/W × 10	L/W × 10	L/W × 10
15 ·	15 ·	5 ·
15 *	15 *	15 *
裏谷作遺跡 ~ ~ 明代台遺跡 タルカ作遺跡 ~ ~ 大作遺跡		大林遺跡 ~ ~ 空港No10遺跡
7 ·	7 ·	7 ·
7 *	7 *	200 7 * 0
6 ·	6 ·	8 6 ·
6 *	6 *	6 *
5 ·	5 ·	7 5 · 5
5 *	5 *	20 5 * 3
4 ·	4 ·	9 4 ·
4 *	4 *	4 * 000
3 ·	3 ·	3 * 69
3 *	3 *	4432 3 * 033
8 2 ·	2 ·	2 * 6899
2 *	2 *	1 2 * 00111333
765 1 · 6	88 1 · 5579	76 1 · 55555566677778889999
4221 1 * 2334	1 * 124	33 1 * 233444444444
0 ·	0 ·	0 ·
0 *	0 *	0 *
0 *	0 *	0 *
0 ·	0 ·	0 ·
3 1 * 432	1 * 9887666666	1 * 2344
1 · 5	1 · 9	1 · 6699
2 * 0	2 * 4311	2 * 4
2 · 5	6665 2 ·	995 2 ·
3 *	3 *	3 *
3 ·	3 ·	6 3 · 6
4 *	4 *	4 *
4 ·	6 4 ·	4 ·
5 *	5 *	0 5 *
5 ·	5 ·	5 ·
~ ~	~ ~	~ ~
7 *	7 *	7 *
7 ·	7 ·	7 ·
立山遺跡 8 * 松向作遺跡 向原遺跡 0 8 *	興野遺跡 空港No7遺跡Loc.A 8 *	空港No7遺跡Loc.B
8 ·	5 8 ·	8 ·
9 *	9 *	9 *
9 ·	5 9 ·	9 ·

* = 0 ~ 4, * = 5 ~ 9

表の中央の数値は階級を表し、左右の数列はその個数が度数を、さらに個々の数字はデータ値を表す。

第10表 繩文時代中グリッド出土遺物属性（第96・97・98図、図版38・59）

No.	遺物番号	器種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石材	標図番号	備考
1	10-9 -括	石 鋸	(16.4)	(14.1)	2.0	(0.55)	黒曜石	第96図1	仕上げ痕O型
2	10-19 -括	石 鋸	20.1	17.5	4.4	0.97	黒曜石	第96図2	仕上げ痕O型
3	*10-16 -括	石 鋸	16.2	12.2	3.0	0.54	玉 鑿	第96図3	
4	*12-5 1	石 鋸	(27.7)	(22.4)	3.4	(1.70)	安山岩	第96図4	仕上げ痕O型
5	*12-20 2	石 鋸	31.0	(20.0)	3.4	(1.62)	チャート	第96図5	
6	10-10 -括	楔形石斧	(14.5)	(33.5)	(9.8)	(4.84)	黒曜石	第96図6	
7	10-20 -括	打製石斧	68.9	(41.5)	19.8	(82.82)	花崗岩	第96図7	
8	*11-1 -括	打製石斧	(56.1)	32.6	19.9	(53.52)	安山岩	第97図8	発掘時欠損
9	*11-5 -括	打製石斧	78.0	42.5	23.0	114.74	頁岩	第97図9	
10	*11-9 1	原石	50.1	24.7	31.1	55.28	玉 簪	第97図10	
11	10-14 -括	剝片	(26.4)	(26.7)	(7.2)	(3.36)	黒曜石	第97図11	U-1か
12	*10-24 -括	剝片	(27.1)	(22.3)	4.6	(2.72)	チャート	第97図12	U-1か、13と同一母岩、発掘時欠損
13	*11-2 -括	剝片	(24.5)	(34.2)	5.6	(4.13)	チャート	第98図13	12と同一母岩、発掘時欠損
14	005 21	剝片	(28.2)	49.8	10.7	(11.61)	砂岩	第98図14	オ11-13
15	*11-8 -括	剝片	23.8	26.0	7.8	4.74	黒曜石	第98図15	R-1か
16	052 31	碎片	0.8	0.9	0.6	0.40	黒曜石		牛12-11
17	10-7 2	礫	(61.9)	(51.5)	(34.1)	(148.72)	石英斑岩		
18	10-8 -括	礫	(38.0)	(70.4)	(46.5)	(151.18)	石英斑岩		
19	10-9 -括	礫	(58.8)	45.3	15.4	(42.33)	玄武岩？		
20	*10-22 -括	礫	(49.3)	(43.0)	(25.8)	(59.12)	(凝灰質)		
21	*11-1 -括	礫	(38.7)	(34.7)	(21.7)	(49.58)	レキ岩		
22	044 7a	礫	(39.0)	30.4	(16.1)	(15.52)	安山岩		オ11-4
23	004 7b	礫	22.2	17.0	1.0	4.05	チャート		オ11-4
24	044 22	礫	17.3	10.4	11.7	3.81	頁岩		オ11-4
25	005 21	礫	31.9	24.3	20.0	19.52	粘土質頁岩		オ11-13
26	007 9	礫	31.9	22.5	21.4	14.99	流紋岩？		オ11-18
27	008 19	礫	35.4	31.0	19.4	5.96	軽石		浮子か オ11-18
28	*12-14 1	礫	(54.8)	(42.1)	(18.8)	(29.83)	砂岩		
29	*10-21 1a	礫	(53.5)	(34.3)	(15.1)	(27.99)	頁岩		
30	*10-21 1b	礫	15.1	26.7	0.85	3.98	安山岩		
31	*10-21 -括	礫	(26.6)	(60.1)	(35.3)	(64.58)	花崗岩		
32	*11-6 1a	礫	(38.9)	(47.5)	(25.9)	(49.74)	砂岩		
33	*11-6 1b	礫	(41.9)	(34.3)	(28.5)	(48.36)	砂岩		
34	*11-6 1c	礫	(24.8)	(17.3)	(21.5)	(9.42)	砂岩		
35	*11-7 1	礫	(54.6)	(41.5)	(59.0)	(116.51)	安山岩		
36	*11-7 2	礫	(62.5)	(52.4)	(32.3)	(124.36)	流紋岩		
37	018 3	礫	(20.6)	17.4	0.9	5.20	花崗岩		ク12-12

第11表 繩文時代大グリッド出土遺物属性 (第99・100・101・102図、図版59・60)

No	遺物番号	器種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(R)	石材	地図番号	備考
1	001 69	石 鏡	16.2	15.5	8.1	0.52	チャート	第99図1	ヰ9
2	051 80	石 鏡	30.8	11.4	3.5	1.23	安山岩	第99図2	有旨尖頭器の再生品か ヰ13 ノ11
3	031 16	石 鏡	(24.2)	20.5	4.0	(1.27)	黒曜石	第99図3	/11
4	060 200	石 鏡	(22.6)	22.6	5.4	(2.20)	頁岩	第99図4	/14 松向作古墳公園
5	022 15	石 鏡	(25.2)	(15.6)	3.6	(1.14)	黒曜石	第99図5	ヰ10
6	013 1a	石 鏡	21.9	(16.8)	4.5	(1.31)	チャート	第99図6	ヰ10・11
7	013 1b	石 鏡	(17.9)	(15.6)	2.8	(0.79)	安山岩	第100図7	ヰ10・11
8	0 1	U-f 1	(16.4)	19.9	5.3	(1.27)	玉髓	第100図8	表面採集
9	020 1	打製石斧	(59.4)	(38.8)	38.9	(66.42)	砂岩	第100図9	未製品か、ヰ11 ・12、ク11
10	013 1c	磨製石斧	(86.3)	(50.3)	(32.0)	(197.97)	(高度)变成岩類	第100図10	ヰ10・11
11	031 16	磨 石	(89.8)	(46.8)	(54.6)	(152.11)	安山岩	第101図11	/11
12	031 31	磨 石	101.5	70.9	29.2	311.87	砂 岩	第101図12	/11
13	古墳公園 -磨	磨 石	(80.6)	(55.9)	(43.9)	(269.14)	粗粒砂岩	第102図13	スタンプ形石器 か
14	051 173	剥 片	(22.8)	(17.5)	(8.2)	(3.22)	頁 岩	第102図14	R-f か、ヰ13
15	031 16b	剥 片	12.0	20.2	2.2	0.46	粘板岩	第102図15	/11
16	013 1d	剥 片	(20.6)	(23.4)	3.8	(1.73)	頁 岩	第102図16	ヰ10・11
17	039 3	礫	28.3	12.8	10.2	3.04	安山岩		ヰ10
18	031 22	礫	85.7	50.4	28.6	113.82	石英斑岩		/11
19	022 9	礫	66.0	48.5	19.4	65.14	流紋岩		ヰ10

第12表 旧石器時代A地点出土遺物属性（第105・106図、図版57）

No	遺物番号	器種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石材	掲図番号	備考
1	才12-3 10	U-f 1	25.9	22.4	12.2	6.50	黒曜石	第105図1	折断剥片素材
2	才12-4 4	楔形石器	35.1	48.1	15.1	20.59	黒曜石	第105図2	
3	才12-4 6	楔形石器	(9.8)	(12.7)	(5.2)	(0.59)	黒曜石	第105図3	スパール
4	才12-3 9	楔形石器	(11.4)	(16.8)	(3.1)	(0.59)	黒曜石	第105図4	スパール
5	才12-4 1	剥片	(11.0)	(11.0)	(5.1)	(0.57)	黒曜石	第105図5	
6	才12-4 2	剥片	(43.2)	(31.6)	(9.3)	(5.25)	黒曜石	第105図6	
7	才12-4 3	剥片	39.0	(22.2)	4.8	(3.77)	頁岩	第106図7	
8	才12-4 5	剥片	(10.2)	(11.3)	4.1	0.31	黒曜石	第106図8	
9	才12-3 7	剥片	(20.3)	(23.4)	7.0	1.92	黒曜石	第106図9	
10	才12-3 8	剥片	22.0	18.7	7.9	3.81	黒曜石	第106図10	
11	才12-3 11	碎片	(9.8)	7.1	1.6	(0.11)	黒曜石		

第13表 旧石器時代B地点出土遺物属性（第107・108図、図版57）

No	遺物番号	器種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石材	掲図番号	備考
1	才11-8 3	U-f 1	18.7	28.0	10.3	5.05	珪質頁岩	第107図1	
2	才11-9 6	U-f 1	26.7	25.7	4.7	2.13	珪質頁岩	第107図2	
3	才11-9 4	剥片	24.0	21.5	9.1	3.93	珪質頁岩	第107図3	U-f か
4	才11-9 5	剥片	20.1	23.6	5.2	1.54	珪質頁岩	第108図4	
5	才11-9 7	剥片	36.1	35.4	8.5	(7.46)	珪質頁岩	第108図5	
6	才11-9 3	砾	33.1	17.7	15.8	10.72	安山岩質 凝灰岩		

第14表 旧石器時代地点外出土遺物属性（第109図、図版58）

No	遺物番号	器種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石材	掲図番号	備考
1	才10-17 —括	ナイフ形 石器	26.6	9.8	6.6	1.16	玉髓	第109図1	
2	才12-5 2	ナイフ形 石器	(16.2)	(13.0)	(3.0)	(0.67)	頁岩	第109図2	堅穴住居015出土
3	ウ10-2 1	尖頭器	(65.0)	17.0	8.0	(8.41)	安山岩	第109図3	古墳039出土

第15表 佐倉第三工業団地内遺跡群出土尖頭器

探査番号	遺跡名	出土地点	出土層位	探査番号	遺跡名	出土地点	出土層位
112-1	松向作	表面採集	不明	112-9	腰巻	Loc. 1	II~III
112-2	星谷津	第1ユニット	III上	112-10	向原	Loc. 4・No 5 ブロック	III下
112-3	星谷津	第3ユニット	III上	112-11	向原	ブロック外	不明
112-4	星谷津	第5ユニット	III上	112-12	向原	ブロック外	不明
112-5	星谷津	第13ユニット	III上	112-13	向原	ブロック外	不明
112-6	星谷津	ユニット外	I	113-14~16	向原	ブロック外	不明
112-7	内山谷津	表面採集	不明	113-17~22	栗野I	表面採集	不明
112-8	木戸場	表面採集	不明				

第16表 佐倉第三工業団地内遺跡群出土ナイフ形石器

探査番号	遺跡名	出土地点	出土層位	探査番号	遺跡名	出土地点	出土層位
114-1	星谷津	第1ユニット	III上	115-44	向原	Loc. 4・No 4 ブロック	IV~V
114-2~6	星谷津	第5ユニット	III上	115-45~50	向原	Loc. 4・No 5 ブロック	IV~V
114-7	星谷津	第9ユニット	III上	115-51	向原	Loc. 4・No 4~5 ブロック	IV~V
114-8	星谷津	第13ユニット	III上	115-52	向原	Loc. 7・No 19 ブロック	IV~V
114-9~12	星谷津	第14ユニット	III下	115-53	向原	Loc. 11・No 22 ブロック	IV~V
114-13	星谷津	第15ユニット	III下	115-54	向原	Loc. 6・No 16 ブロック	VI
114-14	星谷津	表面採集	不明	115-55~56	向原	Loc. 6・No 17 ブロック	VI
114-15	立山	表面採集	不明	116-57~58	大作	第1ブロック	III
114-16~17	タルカ作	第3ブロック	III	116-59~62	大作	第5ブロック	(III~V) ?
114-18	タルカ作	ブロック外	VIIa	116-63	大作	第6ブロック	(III~V) ?
114-19~24	腰巻	Aブロック	III(VIIa)	116-64~65	大作	第8ブロック	VI~VIIa
114-25~26	腰巻	Bブロック	VII	116-66~70	大作	第11ブロック	VIIa
114-27	腰巻	Eブロック	VII	116-71	大作	第15ブロック	VII~VIII
115-28~29	木戸場	Loc.A・No 4 ユニット	III(V~VIか)	116-72	栗野I	第4ブロック	V~VI
115-30	木戸場	Loc.A・No 7 ユニット	IV(V~VIか)	116-73	栗野I	第5ブロック	V~VI
115-31	木戸場	Loc.B・No 2 ユニット	III~V	116-74	栗野I	第7ブロック	V~VI
115-32	木戸場	Loc.Bユニット外	不明	116-75~77	栗野I	第8ブロック	V~VI
115-33	向原	Loc.1・No 1 ブロック	V F	116-78	栗野I	第9ブロック	V~VI
115-34	向原	Loc.2	不明	116-79~81	栗野II	第18ブロック	V~VI
115-35~43	向原	Loc.3・No 2 ブロック	IV~V	116-82~83	松向作	表面採集	不明

第17表 佐倉第三工業団地内検出古墳（報告書刊行分）

規 模 遺跡名	方 墳					円 墳					他	合計
	5m 以下	10m 以下	15m 以下	20m 以下	25m 以下	5m 以下	10m 以下	15m 以下	20m 以下	25m 以下		
松向作遺跡	1	1	0	1	0	2	7	6	5	0	0	23
星谷津遺跡	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
立山遺跡	8	8	2	0	0	2	5	2	3	2	0	32
タルカ作遺跡	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
向山谷津遺跡	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
明代台遺跡	1	3	0	0	0	1	0	0	0	0	0	5
木戸場遺跡	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
腰巻遺跡	2	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	5
向原遺跡	4	3	0	0	0	1	7	2	4	0	0	21
大作遺跡	4	4	0	0	0	2	23	13	6	1	0	53
栗野Ⅰ遺跡	1	0	0	0	0	0	1	1	1	0	1	5
合計	21	22	2	1	0	11	43	24	20	3	1	148

* 規模は周溝内径をとった。

図 版







遠景



近景



近景



古墳001



古墳001



古墳001



古墳022



古墳032



古墳033



古墳038・039



古墳040



古墳041



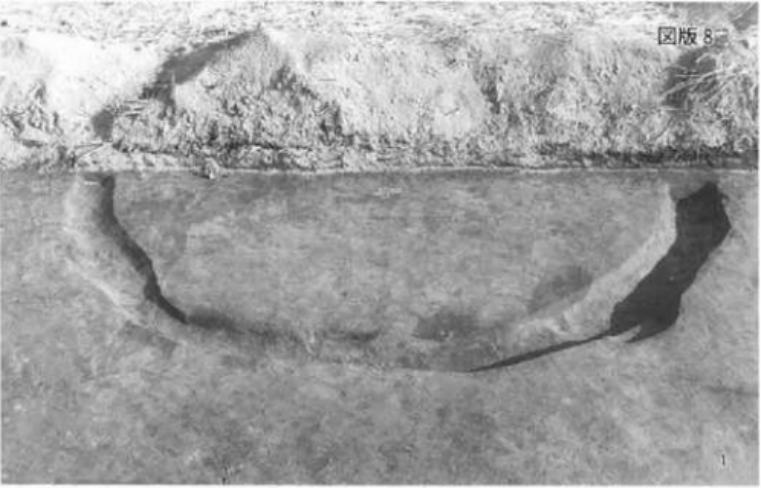
古墳050



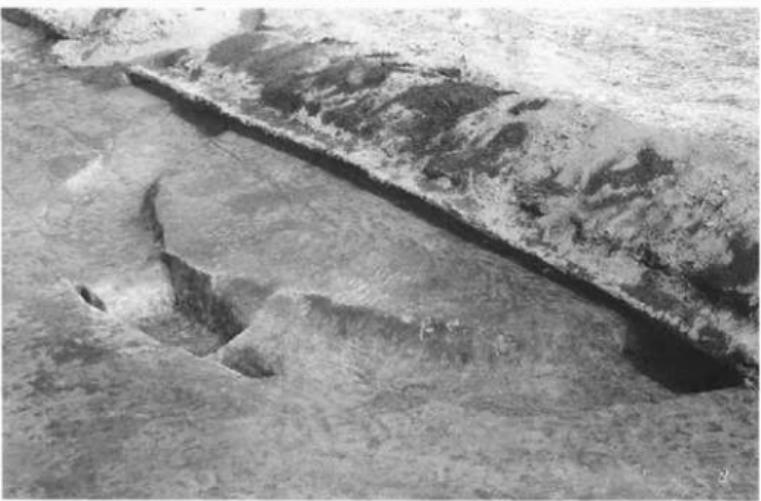
古墳051



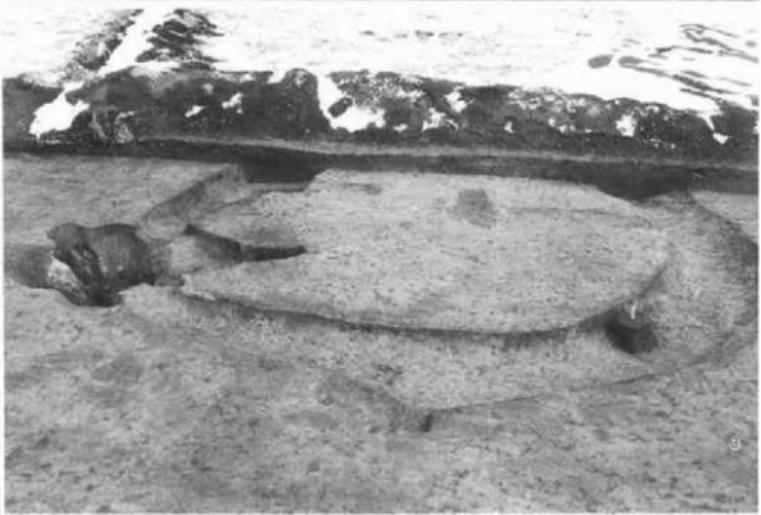
古墳052



古墳054



古墳055



古墳056

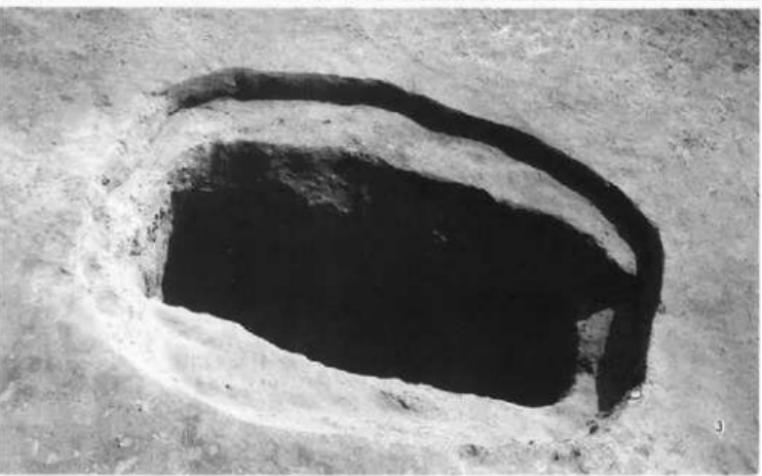




土壤墓035



土壤墓057



土壤墓058



竪穴住居002



竪穴住居002



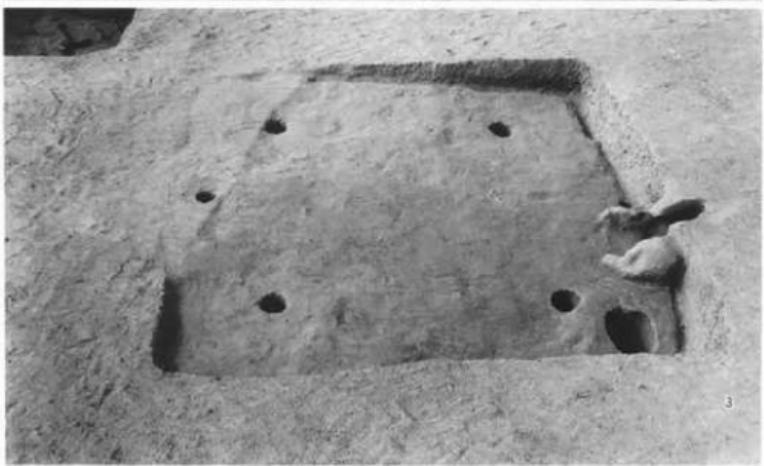
竪穴住居003



竪穴住居004



竪穴住居004



竪穴住居005



竪穴住居006



竪穴住居006



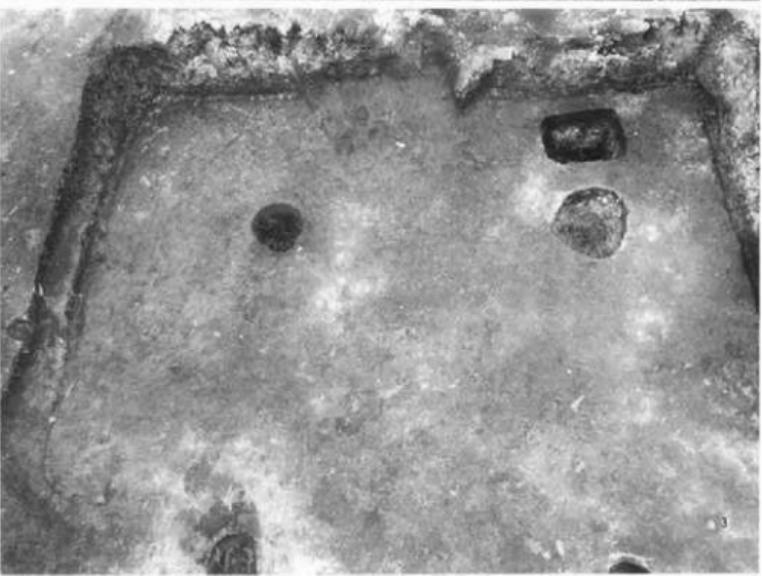
竪穴住居007



竪穴住居008

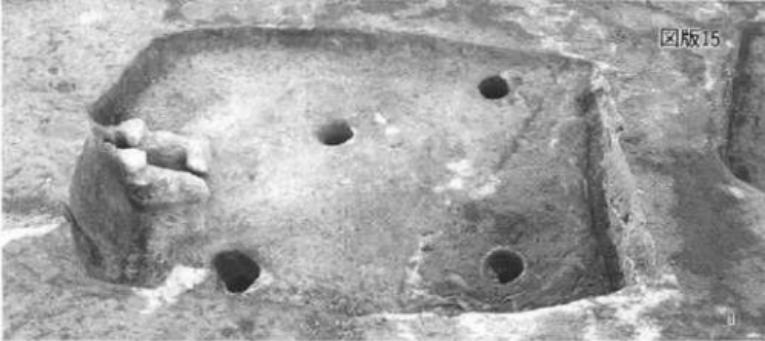


竪穴住居009

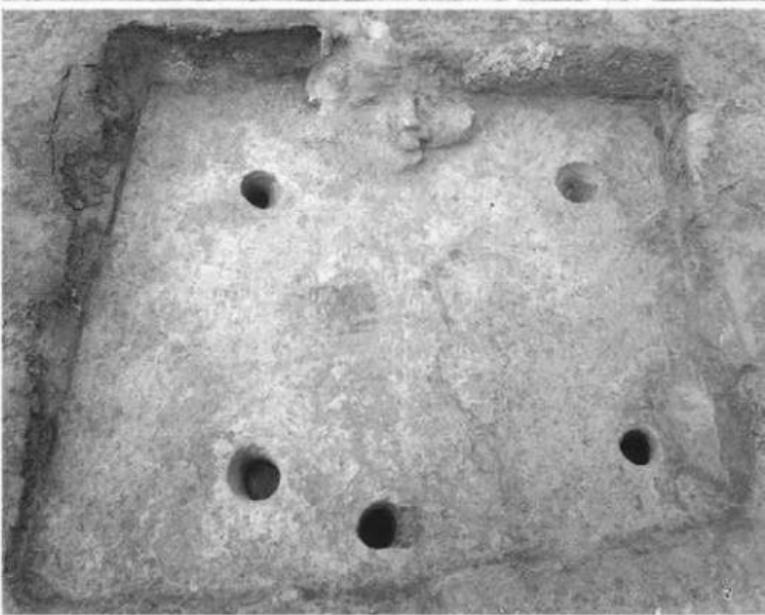


竪穴住居015

竪穴住居011



竪穴住居018

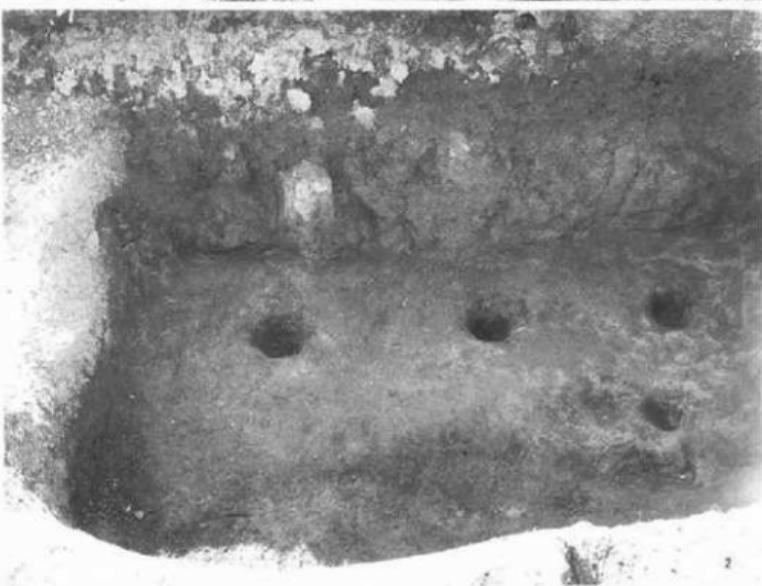


竪穴住居019





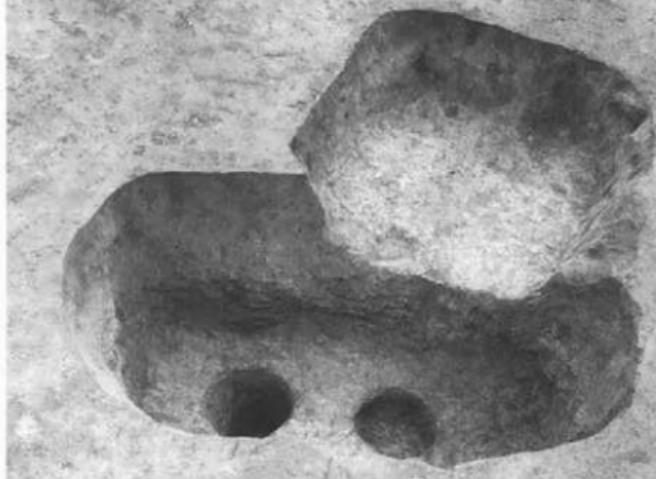
陥し穴016



陥し穴021



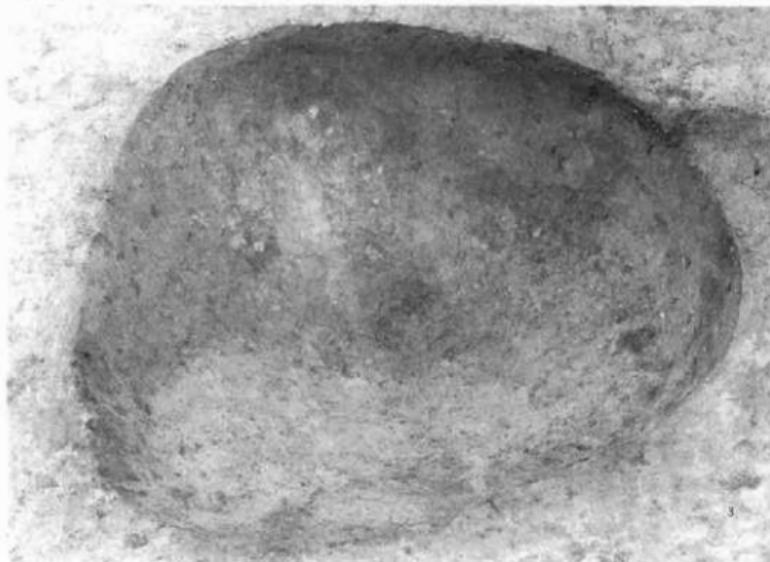
陥し穴043



離し穴044A・土坑044B



炭窯025



土坑026

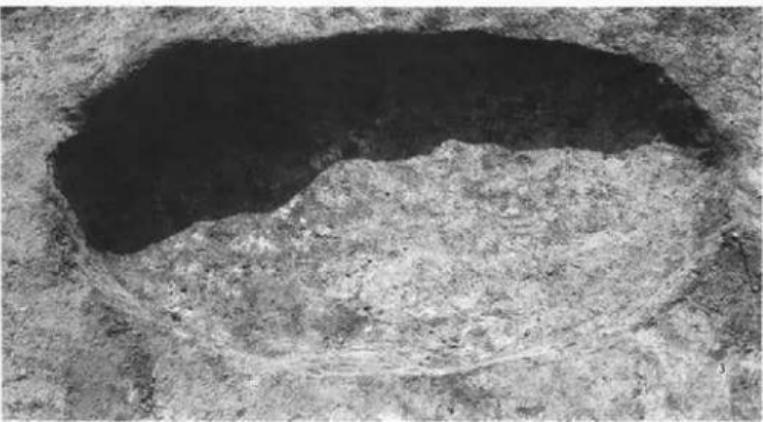
土坑027

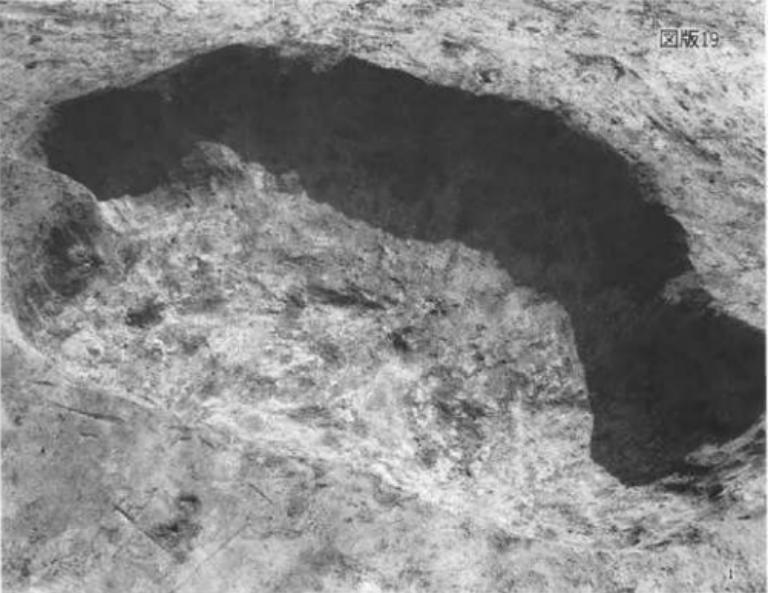


土坑029

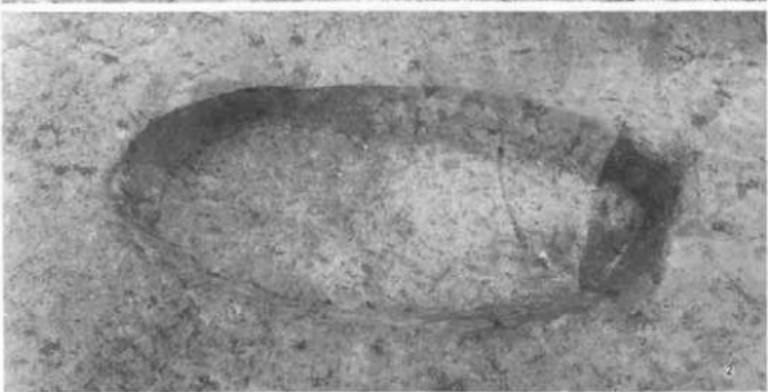


土坑034





土坑036



土坑042



土坑059A・炭窯059B



土坑062



旧石器時代A地点



旧石器時代B地点



1. 古墳出土土器



2. 古墳060出土土器



1. 墓穴住居002出土遗物



2. 墓穴住居003出土遗物



1. 垂穴住居004出土遺物



2. 橫穴住居005出土遺物



1. 坚穴住居006出土遺物



2. 坚穴住居008出土遺物



1. 壺穴住居015出土遺物



2. 壺穴住居017出土遺物



022-5



031-1



032-1



032-2



031-4



032-3



039-1



039-2



033-2



039-3



054-1



039-4



038-1



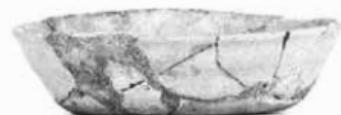
038-2



060-3



051-1



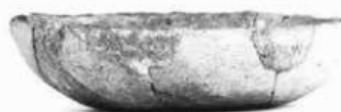
060-4



060-15



060-6



060-9



060-10



060-11



060-16

古墳038・051・060出土土器



1



2



3



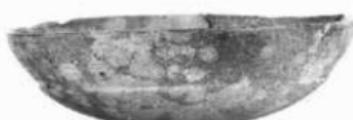
4



17



7



8



9



18



10



11



12



13



14



23



15



16



22



1



4



13



2



8



9



3



14



15



16



17



18



20



1



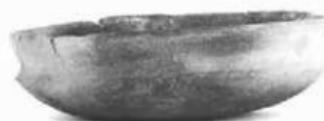
2



3



25



4



6



7



8



23



24



13



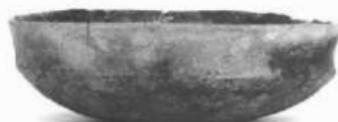
14



15



26



9



20



10



21



11



12



22



004-16



004-19



004-17



004-18



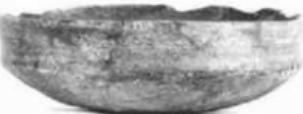
004-30



005-7



005-16



005-3



005-4



005-5

竪穴住居004・005出土土器



17



8



9



19



10



11



12

21



14



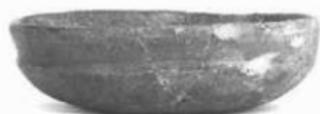
15



20



1



2



4



5



6



7



8



13



14

聚穴住居006出土土器(1)



10

9



11



12

15



16



007-1



007-2



007-6



007-8



007-7



008-1



007-9



008-2



008-3



008-5

堅穴住居007・008出土土器



7

8



10

9



009-4



009-9



009-5



009-10



009-7



011-3



009-10



011-4



012-4



012-10

竪穴住居009-011-012出土土器



012-1



012-9



012-15



012-14



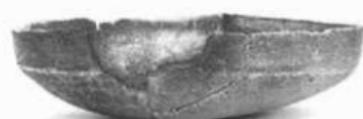
015-7



015-15



015-14



015-23

竪穴住居012・015出土土器(1)



012-18



015-2



015-16



015-48



015-33



015-34



015-57



015-35



015-37

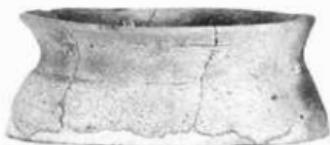


015-38

竪穴住居012・015出土土器(2)



24



52



43



42



50



47



40



39



44



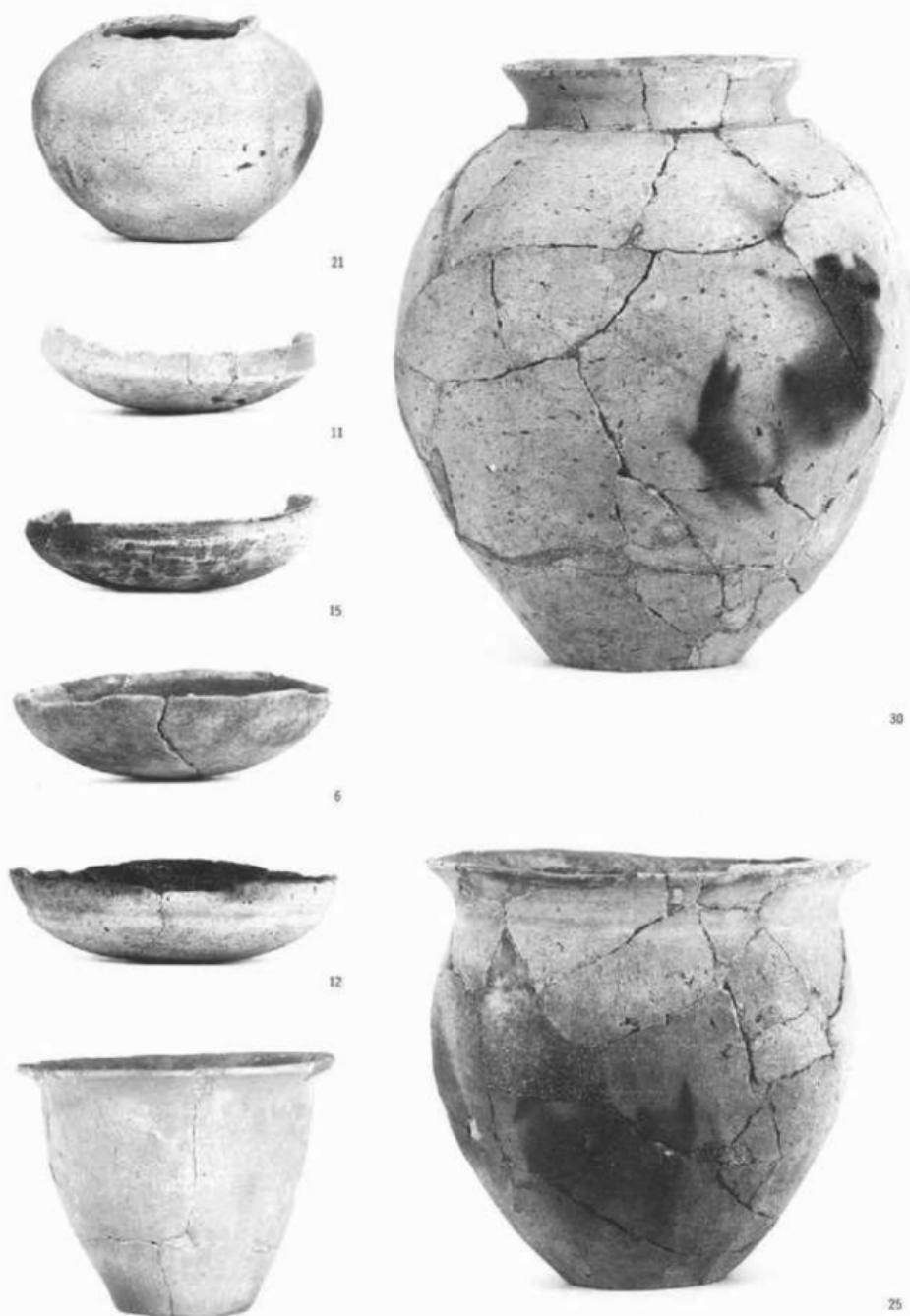
45



46



56





18



19



20



27



22



23



33



017-24



018-6



018-7



017-28



018-8



018-10



018-17



018-12



018-13



018-3



023-2



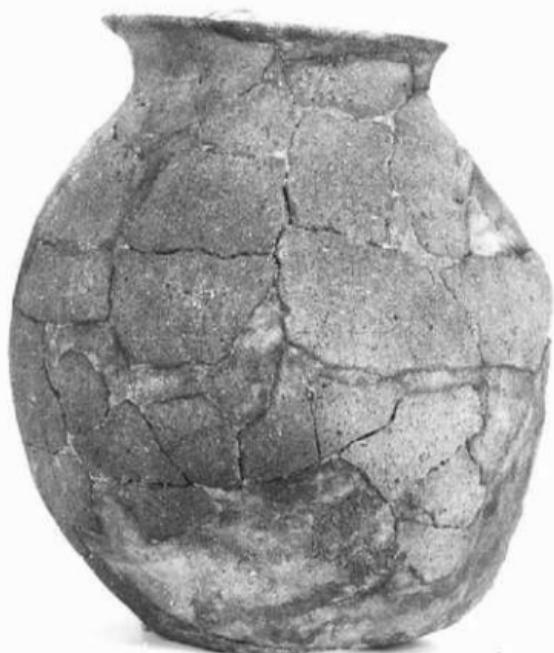
018-16



023-4



遺構外-11



018-14



020-2



竪穴住居018・023、溝状遺構020、遺構外出土土器



018-18



019-5



019-1



019-2



019-6



019-4



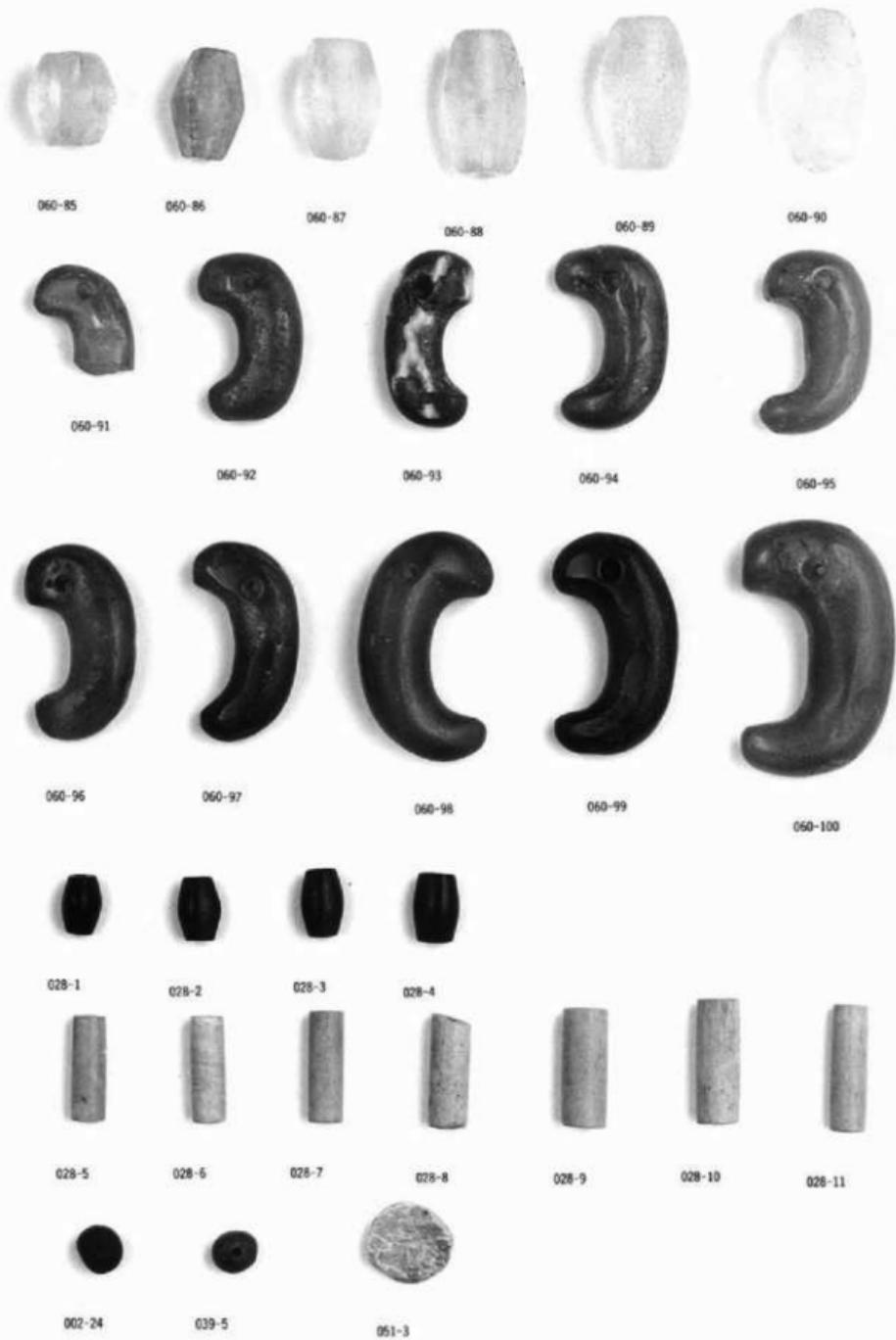
010-1



010-7

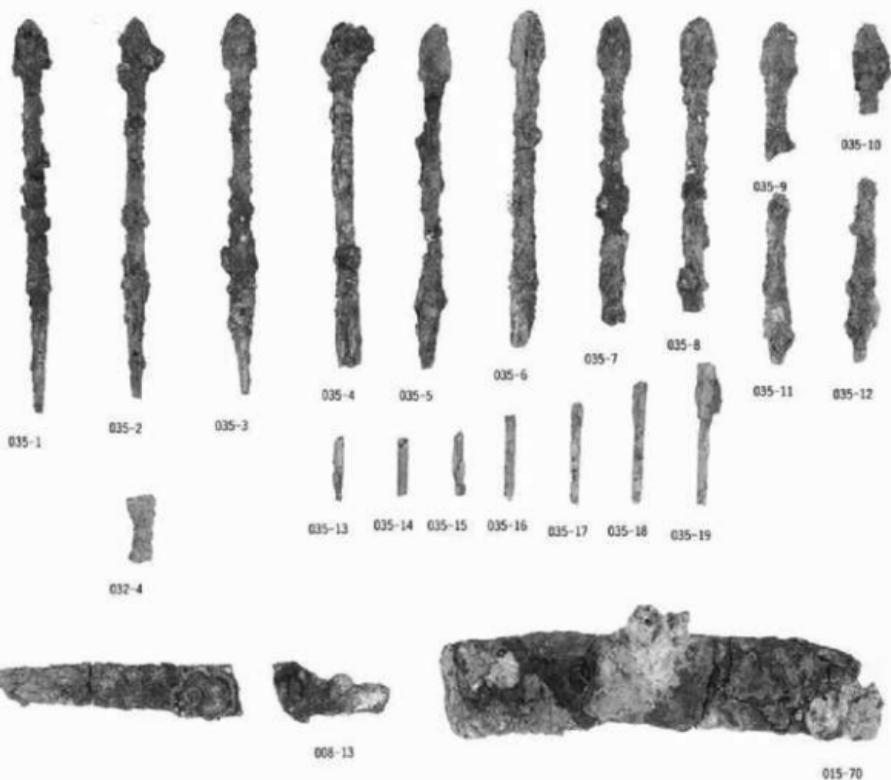


竖穴住居018·019、溝状遺構010出土土器

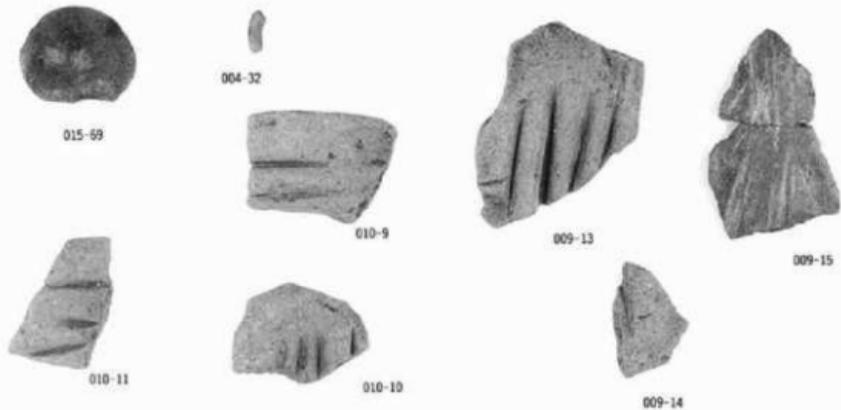


古墳039・060・051、土壤墓028、竪穴住居002出土玉類・石製品

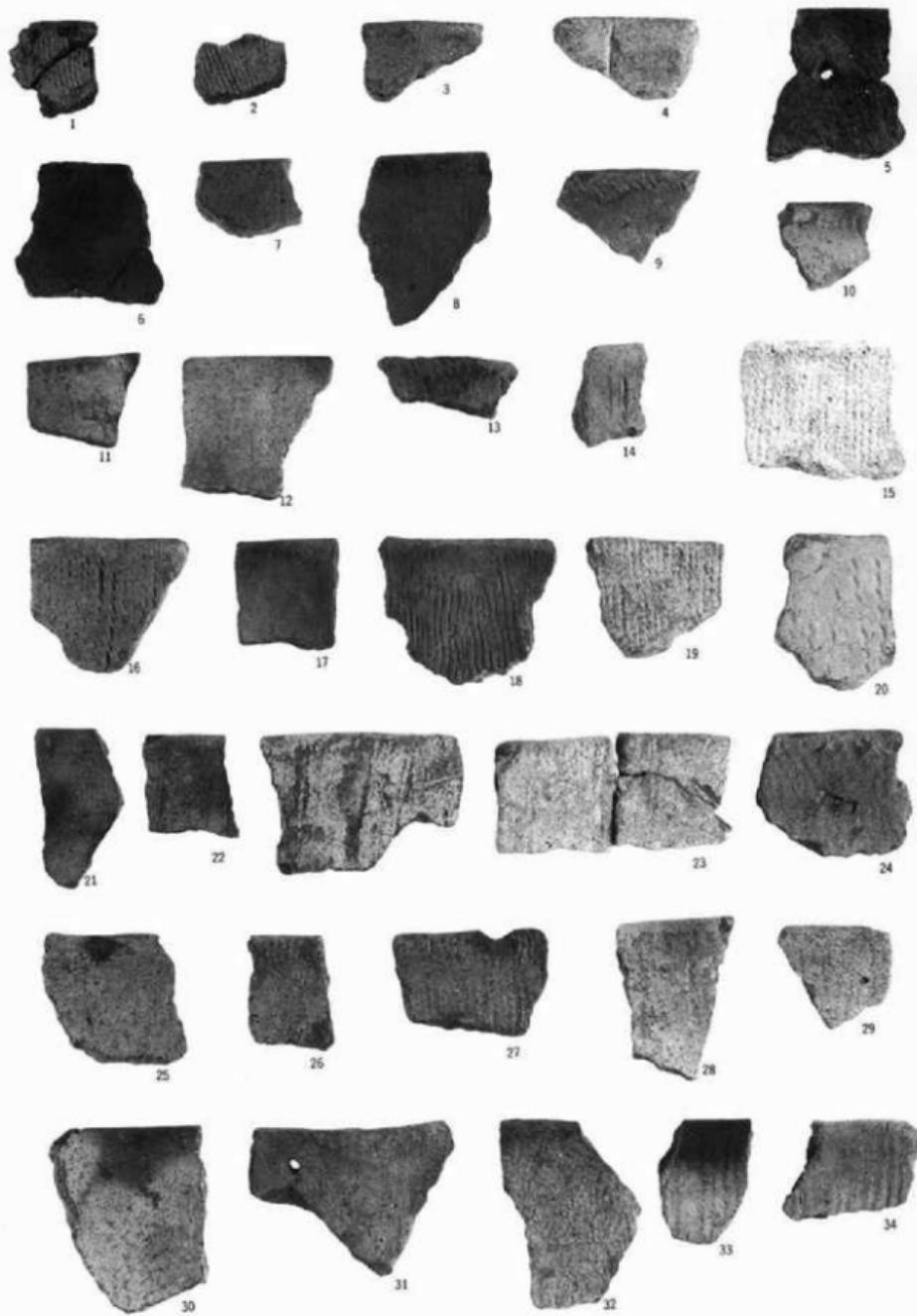


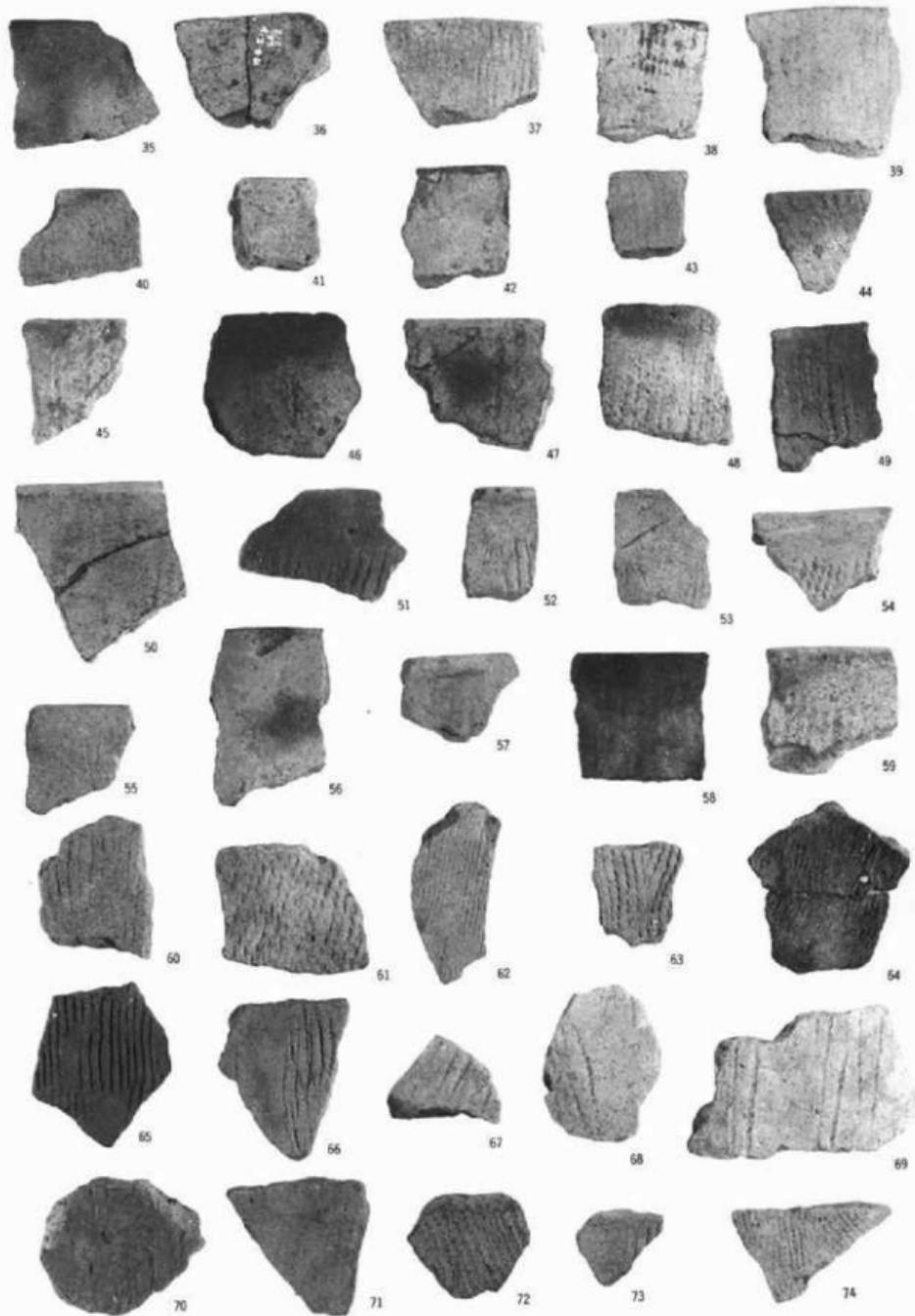


1. 古墳032、土塙墓035、堅穴住居008-015出土鉄製品



2. 堅穴住居004-009-015、溝状遺構010出土土製品類







82



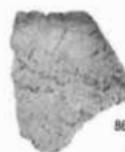
83



84



85



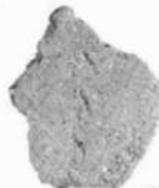
86



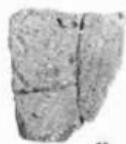
87



88



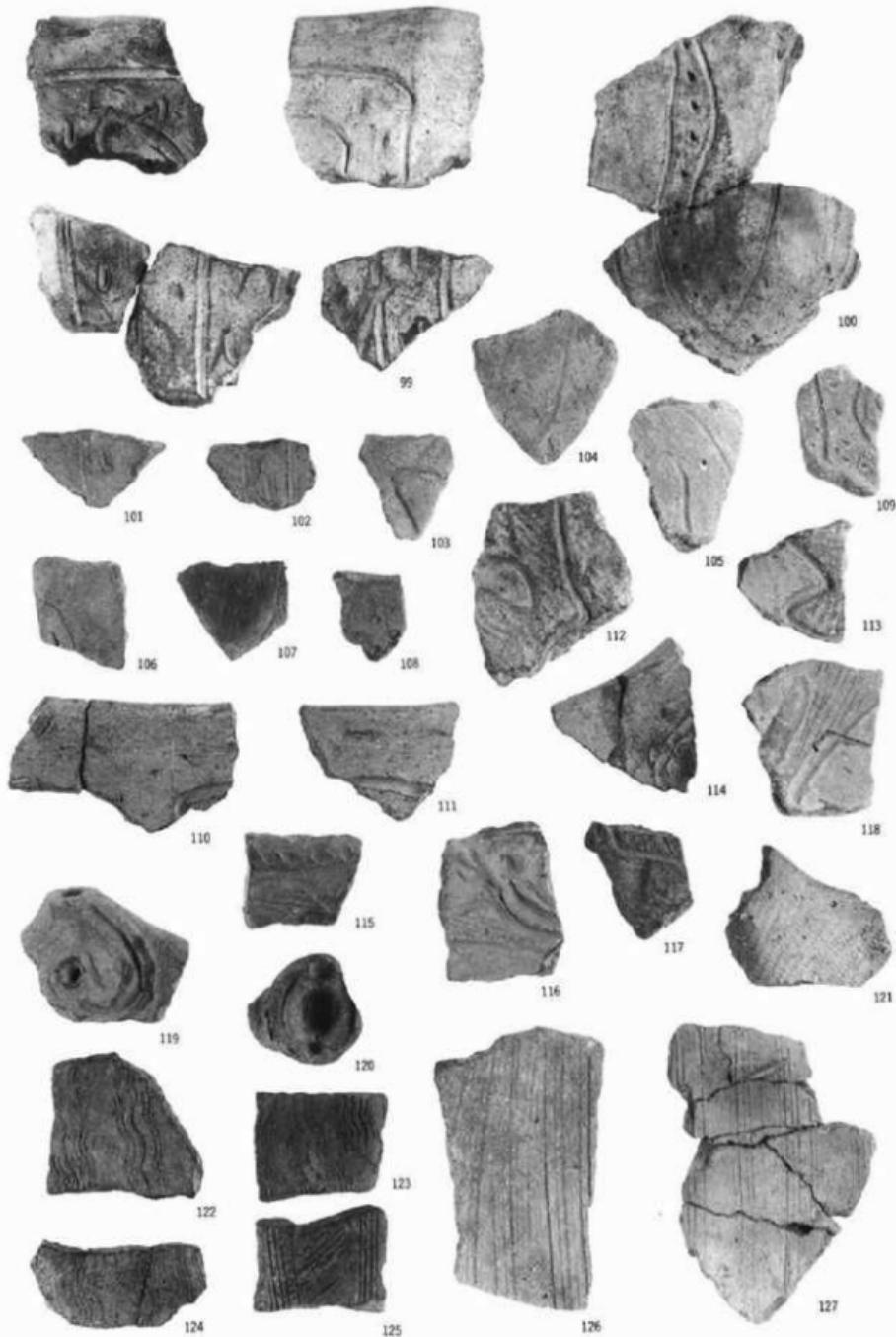
89

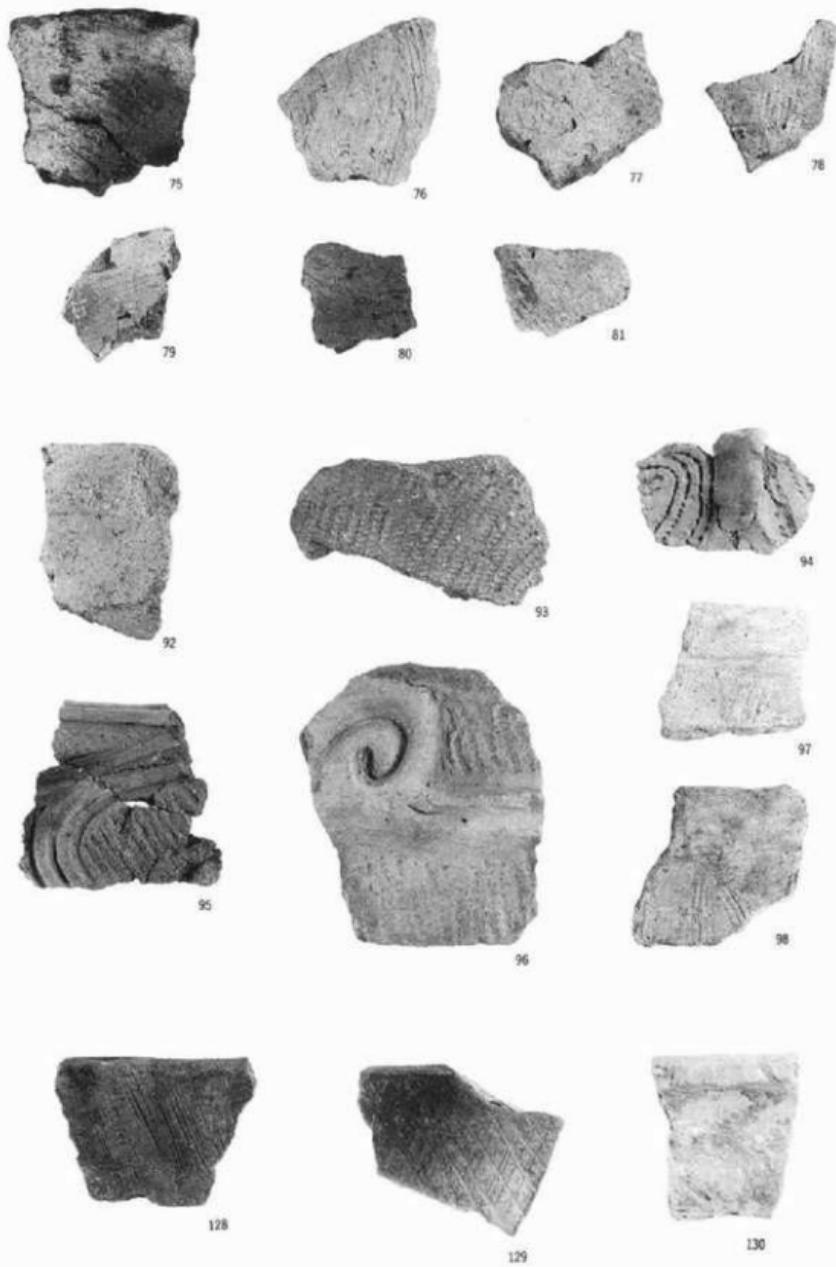


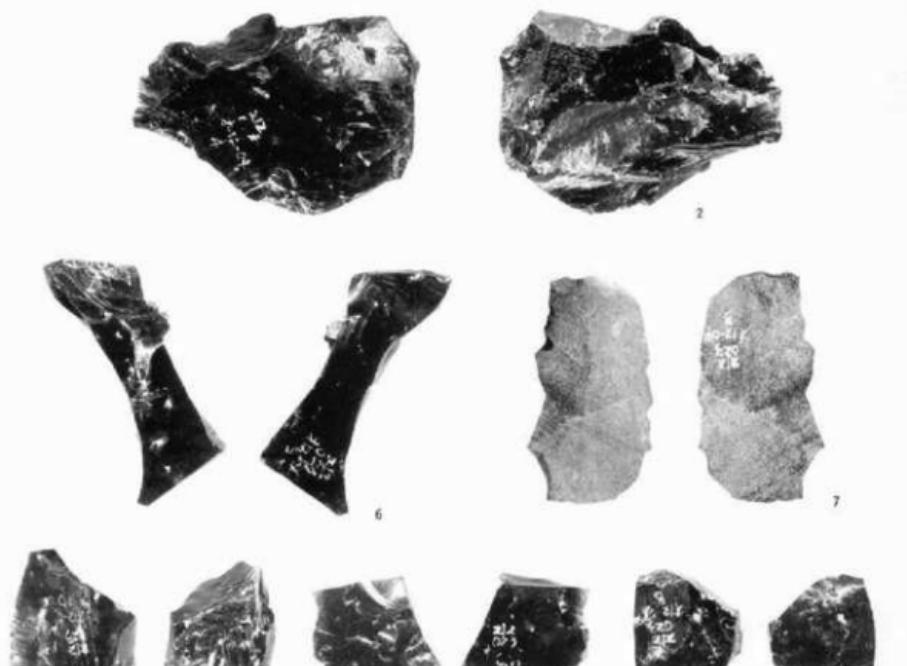
90



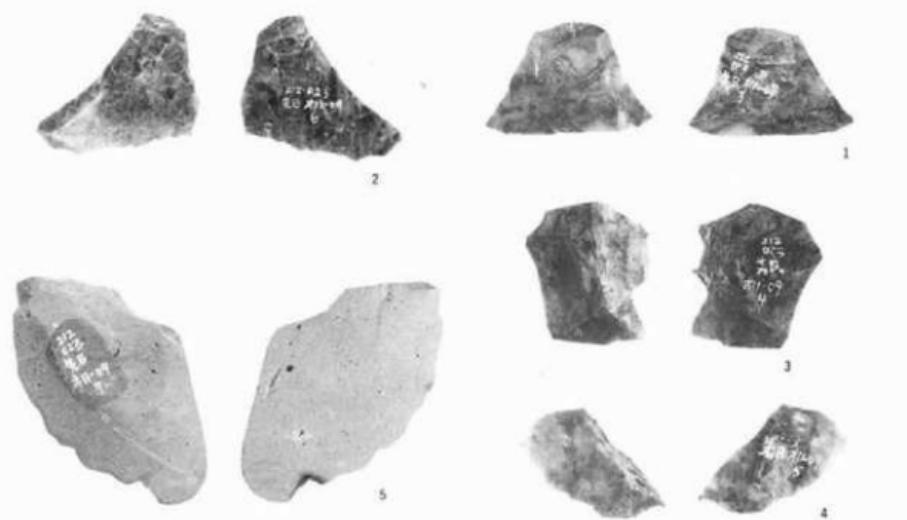
91



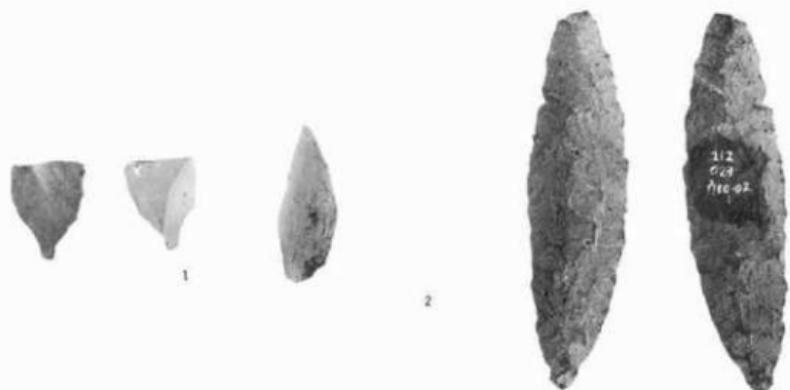




1. 旧石器時代A地点出土遺物



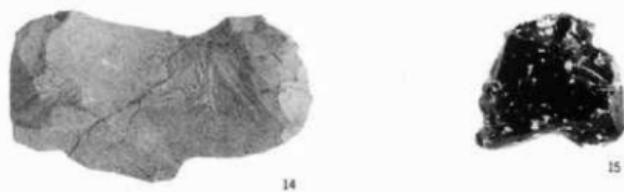
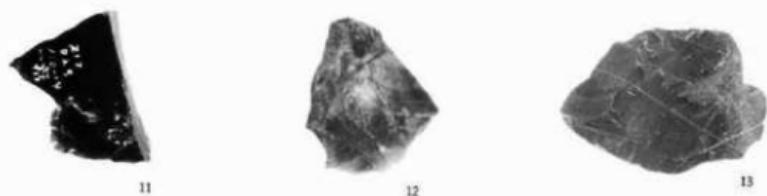
2. 旧石器時代B地点出土遺物



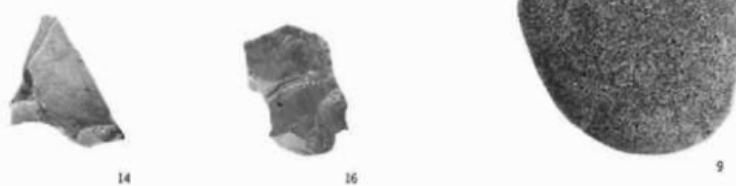
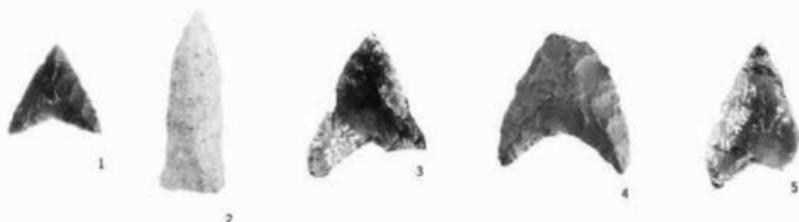
1. 旧石器時代地点外出土遺物



2. 縄文時代中グリッド出土遺物 (1)



1. 縄文時代中グリッド出土遺物 (2)



2. 縄文時代大グリッド出土遺物 (1)



10



11



12



13

千葉県文化財センター調査報告第215集

まつむかいさく
佐倉市松向作遺跡

—佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書IX—

平成4年3月2日 印刷

平成4年3月16日 発行

発行 千葉県土地開発公社
千葉市市場町7-9 ☎0472(22)9106

編集 財團法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡無番地 ☎0434(22)8811

印刷 株式会社 弘文社
市川市市川南2-7-2 ☎0473(24)5977
